
織斑一夏の無限の可能性

赤鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

織斑一夏の無限の可能性

【Nコード】

N5519V

【作者名】

赤鬼

【あらすじ】

※エロ、ハーレム、キャラ崩壊、残念な主人公、思春期特有のノリが苦手という方は回れ右して下さい。当作品は合わないと思います。

主人公は原作同様、織斑一夏。原作よりも若干性能高め。高校入試の際に迷った先でISに触れた事で前世の記憶と経験を継承。

原作よりもエロくをモットーにエロ斑が大活躍……の予定が、最近ヒロイン勢が暴走気味なせいで主人公の立場が脅かされ

る日々。

当初はオリジナル要素を含みつつも原作ベースで話を展開・・・・
・の予定が、こちらもヒロイン勢の暴走によりひどく脱線気味・・・・
・・・まあ、作者の初SSとなりますので暖かい目で見守っていた
だけると幸いです。

※尚、TINAMI様にも重複投稿してます。

prologue (前書き)

インフィニット・ストラトス二次創作ものです。当作品の一夏は前世の記憶と経験を継承し若干チートしてますが最強ものではありません。

prologue

人には生きていく上で人生の分岐点に立たされる事がある。

そう、俺こと織斑一夏にもあったのだ。

2月の中旬、まだ寒さの厳しい季節に行われた高校入試の試験会場
で。

俺は自宅から近い・学力真ん中・そして私立なのに学費が安い私立
藍越学園の試験会場に向かっていた筈だった。

幼い頃に両親はいなくなり、千冬姉と姉妹二人で暮らしていかな
くはならなかった。

姉は当時まだ学生で幼い弟の俺を必死に守り育ててくれた。

周りの人達にも凄くお世話になった。

小学一年から四年まで家が隣でよく晩御飯をご馳走してくれた篠ノ
之家。

剣道の道場でもある篠ノ之神社でよく篠ノ之家次女の箒と一緒に剣
道の鍛錬に励んだ。

そして箒がとある事情で引っ越してから、入れ替わるように知り合
いになった凰鈴音ファンリンイン、そして中学で仲良くなった五反田弾。この二人
は実家が食堂でよく食べに行っていた。

ただ、中学二年になって間もなく鈴は転校してしまったが。

唯一の肉親である千冬姉も仕事が忙しいらしく減多に家には帰ってこない。

ただ稼ぎはいみたいで生活には困っていないが、いつまでも姉の負担にはなりたくなかった。

だから中学卒業後は直ぐにでも就職するつもりだったのだが、それを知った千冬姉に説教（主に腕力による……）に逆らう事も出来ず、受験生となったのだ。

それで早く独り立ちしたかった俺は卒業後の就職率も高い藍越学園の入学試験を受ける事を決めたのだ。

藍越学園の入学試験会場は昨年カンニングが発覚したという事もあり、市の多目的ホールを使う事になっている。

この一年、猛勉強したおかげもあって、模試での判定はA判定であり、苦も無く合格できるくらいの学力はある。だから、試験を受けて、さっさと合格を決めてしまいたかったのだが、会場となった多目的ホールはある建築デザイナーが設計したらしく、流行かどうか分からないが常識を超えた作りになっているのだ。

受付窓口で試験会場は階段を上がった所にあるらしいのだが、その階段が見当たらない……………

散々迷って、漸く見つけた階段を上がり、直ぐ見付けた扉を開く。

「あー、君、受験生だよ。はい、向こうで着替えて。時間押してるから急いでね」

相当、忙しかったのだろう、女性試験管は俺の顔も見ずに、指示だけして出て行った。

着替える？カンニング対策だろうか？

まあ、いいや、と指示のあった通りに着替えて、奥に進むと――奇妙な物体が鎮座していた。

これはテレビで見た事がある。

――ISだ。

ここは藍越学園の入学試験会場じゃないのか？

女性しか動かせないIS。この世の常識である。何で男の俺がここに？会場を間違えたか？

でも、ISには興味があつた。男なんだから、こういうロボ系には興味が惹かれる。ガ○ダム然り。

目の前にISがある。だから、つい興味本位で触れてしまった。

――っ？！

キンツと金属音が頭の中に響いたと思ったら、意識に直接流れ込んでくるおびただしい情報の数々。

IS に関しての情報全てが俺の意識に流れ込んでくるISの情報、操縦、理論全てが理解できてしまった。

そして、最後に記憶が甦る。

もう一つの世界で俺は過ごしていた。

容姿の違う一人の青年が自分である、いや、青年であった事を理解し、その少年の人生が意識の底から引き出されてきたのだ。

剣術に通じていた祖父には剣術を幼少期から叩き込まれ、学生時代に入部した剣道部では負け無し。

しかし、不慮の事故で死んでしまった俺自身の記憶。

何だ、この記憶は?! やけに現実感がある。

俺は織斑一夏。織斑千冬の弟。なのに今の記憶は織斑一夏のものでない... でも、俺の記憶である事が理解できる... 俺が青年だった頃の遠い昔の記憶... そう前世の記憶が...

「え?! どういう事?」

「男がISを起動させた...?」

後ろから入室してきたIS学園関連の女性試験官が数人入ってくる。

でも、そんなのはどうでもよかった。突然の記憶にISの情報、余りに膨大な情報量が頭の中に流れ込んできたのだろう、頭の中でも整理が着かない・・・急に意識が遠くなる。俺はそのまま倒れ込んでしまった。

「へ?・・・き、君っ!大丈夫?!」

そんな声を遠くに聞きながらも・・・俺は意識を手放した・・・

E p i s o d e 1 :: 第二の人生は女難（前書き）

本編第1話です。感想・ご意見待っています。

Episode 1: 第二の人生は女難

【一夏side】

俺はIS学園に入学する事になってしまった。

男性で唯一、ISを動かせる男性として世界中でも報道されてしまったため、一躍時の人となってしまった。

玄関前には報道陣が殺到し、政府のお偉いさん、どっかの研究所の人も訪問してきた。

研究所の人は「解剖させてくれ」と恐ろしい事を言ってきたので、塩を撒いてお帰り願った。

野次馬も増え、監視と護衛が付く生活を送る羽目にはなるわ、中学では注目の的となった。千冬姉も月1、2回しか家に帰らなかったのにあの試験の日から毎週末帰ってくるようになった。

千冬姉には試験会場で経験したあの時の感覚を相談した。ISの事、そしてもう一人の俺の人生。

そしてあの後に分かった事なのだが、その時に経験したもう一人の俺……いや、前世の記憶なのか？前世での経験はそのまま今の俺に引き継がれていた。

つまり、剣術の腕がそのまま今の俺に引き継がれているのだ。

一度千冬姉と剣を手合わせてみたのだが、以前までは全く齒の立たなかった千冬姉を寸でのところまで追い詰めるくらいにまで剣の腕が上がっていたのだ。

もちろん勝てなかったがな。

んで、ISを動かせる俺は当然、IS学園に入学する事になってしまい、今、教室にいるのだが……正直に言って……辛い。

何が辛いって……見渡せば、視界に映るのは女、女、女。

そうISは女しか動かせなかったのが今までの常識だったのだ。

当然、IS操縦者を育成する機関であるIS学園には女性しかいない。当然、教職には男性もいるが、少ない。つまり、女子高と変わらない。

少し前の俺はそんな環境にウキウキしていた。前の人生でも女っ気なかったし、今までもそうだった。だから、女だらけの環境に夢見心地で初めての彼女もできるかもしれないと思っていた時期もありましたよ、ええ。

ただね、正直言って、いざ、そのような環境に置かれると辛いし、おっかない。

周りは女で男一人。気軽に話せる友人は誰もいないし、何がおっかないって、獲物を狙うかのような女生徒の視線が怖い。

まだ話しかけてこないが、ヒソヒソ俺の事を話してるのは分かる。

居心地が悪い……………。

ただ、唯一の救いがあるとすれば、窓辺の奥にるのが篠ノ之箒。

ISを発明した天才（天災？）科学者、篠ノ之束の妹であり、剣道の全国大会で優勝するくらいに強い。

彼女が纏う張り詰めた雰囲気はまさしく古い時代の日ノ本の侍の様な鋭さを放っており、近寄りがたいオーラが6年前より更に強くなっている。

でも、俺には分かるっ！

制服を着てても分かるナイスプロポーション！そして髪型は昔のままだが、可愛くなってたっ！

うむうむ、幼馴染だし、後で声でもかけておくべきだよな。

ただ、視線を向けると、ぷいっと顔を逸らされる始末……………。
俺って嫌われてたっけ……………？

そして暫くすると我が一年一組の担当教諭が教室に入ってきた。

「全員揃ってますねー。じゃあSHR始めますよー」
ショートホームルーム

モニターに”山田真耶”と表示され、にっこりと微笑む女性副担任こと山田真耶先生。生徒達とそう変わらない小柄な体系なのに服と

眼鏡のサイズが合っていないのか『子供が無理して大人の服を着た』か『子供が背伸びしている』といった印象を与えている。

しかし問題はそこではない。そう．．．．．巨乳．．．．．いや爆乳なのだっ!!

童顔でおっぱいデカいって．．．．．初めて俺はIS学園に入学できた事を心の底から喜んでしまった。

いい、実にイイっ!!

あのおっぱいに挟まれない、揉みしごきたい。

「．．．．．くん．．．．．ちかくんっ! ．．．．．織斑一夏くんっ!!」

「へ?! あっ．．．．．はいっ!」

ヤバイ、あまりに爆乳振りにトリップしてしまったようだ。山田先生の呼び声に反応できなかった。

声が裏返ってしまった．．．．．周囲の女子はくすくす笑ってるみたいだし．．．．．正直、恥ずかしい。

「あっ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる? 怒ってるかな? ゴメンね、ゴメンね! でもね、あのね、自

己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑君なんだよね。だからね、ご、ゴメンね？ 自己紹介してくれるかな？ だ、ダメかな？」

生徒の俺にかなりの低姿勢な山田先生。

あまりの小心者振りに、『この人は教師をやっているのだろうか……？』と余計な心配を胸に抱きそうになってしまう。

「いや、あの、そんなに謝らなくても……っていうか自己紹介しますから、先生落ち着いて下さい」

「ほ、本当ですか？ 本当ですね？ や、約束ですよ？ 絶対ですよ！？」

涙目になりながら手を取り熱心に詰め寄る山田先生。

年上なのだが、つい思ってしまう。——可愛いつ！！ お持ち帰りしてみたいっ！！

はっ！ いかんいかん、またトリップしてしまう所だった。

そうだ、自己紹介だっけ？

席を立ち、後ろを向く。俺の席は一番前の真ん中、まるでイジメですか？ と言いたくなるような席なので自己紹介するためには後ろを振り向かなければならない。

で、振り返ると――全女生徒の視線が俺に突き刺さる。

さすがにこの数の視線には耐えられない。早く終わらせてしまおう。

「えー……、えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

周囲の女子は俺に何かを期待するような視線を投げかけてくる。

正直、お腹痛くなってくる。キリキリキリキリ……。これがストレスからくる胃痛というものだろうか……。俺、まだ15なのに。まあ、前世の記憶では20台半ばなので副担任の山田先生とそう変わらないんだけどね。

箒もさっきまでは無視してたのに、今は俺の自己紹介に耳を傾け、視線を俺に向けている。

しかし、この針の筵状態なのは耐えられない。さっさと切り上げるに限る。

「い、以上っ！」

ズコォーッ！ 大半の女生徒がバラエティー番組に出るお笑い芸人のようにずっこける。

おぉーっ、生では初めて見る。と一頻り感心しながら眺めると、

俺の頭が後ろからスパアーンと叩かれる。

叩かれた頭を押さえながら慌てて振り返ると……俺の良く見知った人物がいた。

「げっ、千冬姉——」

そこまで言って、手に持っていた出席簿で再度叩かれる。

「織斑先生だ」

へ？ え？ 織斑先生？

「織斑先生、もう会議は終わられたのですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてしまっすまなかつたな」

俺の時とは違う優しげな声。何で俺には優しくないんだ？

「い、いえっ。副担任ですからこれくらいはしないと……」

千冬姉は俺達生徒の方を向きながら胸に手を当てて発言する。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言う事はよく聞き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠15才を16才までに鍛え抜く事だ。逆らってもいいが、私の言う事は聞け。いいな」

おおー、余りに一方的な物言い。横暴だ。こんな横暴を許してしまっているのだろうか。

しかし、俺のそんな思惑とは裏腹にクラスの女子達が途端に黄色い声を上げ色めき立つではないか。

織斑千冬、俺の唯一の肉親にして唯一人の姉。第一世代IS操縦者の元日本代表で公式戦無敗。しかも第一回ISの世界大会——モンド・グロッソの格闘部門及び総合優勝者なのだ。

つまりは世の女性たちの憧れの的である。

「キャ————！！ 千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！ 北九州から！」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

千冬姉は見慣れ過ぎた光景なのか非常に鬱陶しそうだ。

「……毎年、よくもこれだけの馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？ 私のクラスにだけ馬鹿者を集中させているのか？」

「きゃああああああっ！ お姉様！ もっと叱って！ もっと罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躰をして〜！」

一部、不穏な声が聞こえるが……聞かなかった事にしよう。

「で？挨拶も満足に出来んのか、お前は？」

「いや、千冬姉、俺は……」

スパァーンッ！ 本日三日の出席簿がお見舞いされる。

千冬姉、身内鼯肩しないからってポンポン人の頭を叩いていいもんじゃない。

「織斑先生と呼べ」

「……………はい、織斑先生」

頭を押さえながら席に着く一夏。ここまでのやり取りでさすがに他のクラスメイトも俺と千冬姉が姉弟だというのに気付いたようだ。

「え……………？織斑くんって、あの千冬様の弟……………？」

「親戚とかなのかな……………？ 同じ名字だし、もしかして姉弟だったりして？」

「じゃあ、世界で唯一男で『IS』を使えるって言うのも、それが

関係して？」

「ああっ、いいなあっ。代わって欲しいなあっ」

ひそひそとそんな話が耳に入ってくる。今のやり取りで俺と千冬姉の関係に気付いた子もいるみたいだ。

自分の代わりに成り代わる、絶対に後悔するぞ、あの人は完璧に見えるても……家じゃかなりズボラな人間だからな。

教室の視線の殆どが千冬さんに注がれている中、明らかに俺に向いている視線がある。

軽く気配を探ると一人は箒。そしてあからさまに俺に敵意を向けてくるのが一人いるな。

やれやれ、平穩に学園生活を送りたいだけなのに……。

でも、これから山田先生のあの爆乳が毎日拝める事は幸運なのかな？
テヘッ。

そんな思考を遮るかのように鳴り響くチャイムの音。

「さあ、SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませろ。いいか、いいなら返事をしろよ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

鬼教官宣言に対し湧き上がる歓喜の声。

はあ、取り敢えず二度目の高校生活。気楽に楽しめますかね。

◇◇*◇*◇*◇*◇*

IS学園。ISの操縦者育成を目的とした教育機関であり、運営およびに資金調達には日本国が行う義務がある。だから、この学園には世界中から生徒が集まる。勿論、教師も世界中のIS操縦者が派遣される。

何故、運営およびに資金調達を日本国のみだけが負うのか、それはISを発明・開発したのは篠ノ之束、つまり日本人であり、ISはこれまでの軍事力を凌駕する。

ISが一機あれば、国を滅ぼせる、とまで言われてるのだ。

日本人が作ったISの所為で世界は混乱した。そして一国だけがIS技術を独占するのはおかしい、と他の国々が言及。だから日本で始まった混乱の責任は日本にあり、世界のバランスを崩さない為にもISの技術を他の国にも提供しろって事が条約によって定められた。

こんな横暴ともいえる要求を当時の日本政府はのむしかなかった。この世界の日本政府も物資の輸入、輸出共に他の国に依存していたからであり、これが途絶えれば日本の終わりを意味しているからで

ある。

【簞side】

6年振りに会った幼馴染は私の事を覚えてくれていた。

幼い頃から小学4年までずっと隣にいた男の子、織斑一夏。

実家は剣道の道場でもある篠ノ之神社、私はそこで一夏と一緒に剣道の修業に励んでいた。

元々人付き合いが苦手な事もあって周りのクラスメイトからはよく「男女」とイジメられた。そんな私を庇ってくれたのは一夏だった。

何時から一夏の事を好きになったのかは分からない。でも、この気持ちには嘘ではなかった。

一夏の傍にいれるのが純粹に楽しかったし嬉しかった。

毎晩、一夏の事を考えてよく眠りに就いた。正真正銘、私の初恋だった。

でも、初恋は決して実らない――

篠ノ之束、私の姉であり、ISの生みの親でもある。あの人がISを発明、発表した事で国の要人保護プログラムというのに組み込ま

れ、引っ越しをしなくてはならなくなった。

引っ越しを知った晩、私は声を上げ泣いた。

——好きな人にもう会えない。

まだ小学4年だった私には耐えられなかった。だから一夏と離れ離れになってしまった原因でもある姉とISを憎んだ。

何時しか親とも離れ離れになりながらも、私は一夏との繋がりを無くしたくなかった。だから、一夏が褒めてくれた髪型を変えず、一夏と一緒に鍛錬した剣道をずっとずっと続けてきたのだ。

姉の繋がりが故にIS学園への入学は決定事項であり、大嫌いなISに関わらなければならぬ事実には陰鬱としていた頃、何の気も無しに点けっぱなしになっていたTVから流れてきたニュースを聞いた瞬間、手に持っていたコップを取り落としてしまった。

繰り返し流されているそのニュースの内容がとんでもないものであったからだ、何しろ今まで女性にしか扱うことができなかったISを初めて起動させた男性が出現したという事件だった。

これだけでも十分に大きなニュースだが、しかしその重大ニュースも壊れたスピーカーのように連呼される特徴的すぎる名前と、画面に映し出された適当に切っただけの黒髪と負けん気の強そうな瞳をもった顔を見た瞬間に何処かへ飛んで行ってしまった。

映し出されているのは私、篠ノ之箒の幼馴染にして、初恋の相手、織斑一夏だったからだ。

あれだけ嫌だったIS学園への入学は待ちきれないほどのものにな

ってしまった。

——早く一夏に逢いたい

——早く一夏の声が聞きたい

それだけしか考えられなくなってしまっていたのだ。

IS学園に入学して、教室に行くとき少し振りを見る一夏がいた。視線を外せなかった。直ぐにでも声を掛けたかったのだが、6年という歳月が私を臆病にさせていた。

相手が自分を忘れてるかもしれない、という不安に胸が締め付けられる。

でも、視線は一夏から外せなかった。そして一夏がこちらに気付いたように私に視線を向ける。最初は驚いたような表情をして、ニコッと笑顔を向けてきてくれたっ！

恥ずかしくて顔を背けてしまったが、一夏が私の事を覚えてくれている、その事が純粹に嬉しかった。

うん、次の休み時間にでも勇気を出して声を掛けてみよう。

待ちに待った再会なのだ。

【一夏side】

現在、一時間目のI S基礎理論の授業が終わり、休み時間だ。

正直いくつになっても勉強は苦手だ……でも、そんな事よりも今の現状は朝よりもひどくなっていた。

どうしてこうなった。

この教室だけでも好奇の視線が絶え間なく降り注がれていたのに、それに輪をかけて、廊下にひしめく女生徒の多さに冷や汗が流れる。廊下には他のクラスの娘や2年、3年生が詰めかけている。が遠回りに俺を見てはひそひそと話していて誰も俺に話しかけようとはしない。

逃げ出したくなってきた。

「ちょっといいか？」

見上げると黒髪ポニーテールで盛り上がったおっぱいにどうしても視線を向けてしまう程にナイスバディーに成長した篠ノ之箒がいた。幼い頃から小学4年まで一緒だった幼馴染だ。

「箒………？」

「……………話がある。ついてこい」

そして連れられて着いた場所は校舎屋上。今は俺と箒の二人きり・
・・・まあ、物陰に女生徒が数名隠れてこちらを伺ってるが、放
っておいても害はなさそうだからここは無視しておこう。

問題は俺の前にいる箒。

そして無言。

あるえええ？用があるんじゃないかったのか？

せっかく可愛くなった箒から誘ってくれたからドキドキしてたのに。
この期待を裏切る無言は何だ？

対峙する箒はどこか不機嫌そうだ。口をへの字にし、俺を睨みつけ
ては視線を外し、思考に耽ってる。やっぱり俺、嫌われてるのかな？

うーうーむ、一応、ここは俺から話を切り出すべきか？

休み時間も無限じゃないしな。時間も限られてるし。このまま無言
で休み時間が終わる、とかマジないから。

「そういえば去年、剣道の全国大会、優勝したんだってな。おめで
とう」

「な、なんでそんな事を知ってるんだっ？」

「なんでって新聞で見たし」

「なんで新聞なんか見てるんだ？」

話題を振ったおかげで話は出来たが、箒は何か変な答えを返してきた。まあ、偶然見つけたんだけどな。たまたま知ってる名前を新聞で見付けたら見るだろ、普通。

「あー、後、久し振り。6年振りだけど直ぐに箒って分かったぞ。ほら、髪型、一緒だし」

俺の言葉に頬を赤くして、ポニーテールの先端をいじくり始めていた。

「よくも、覚えているものだな……」

「いやあ、忘れないだろう。幼馴染の事くらい」

俺の言葉に箒は何かを言いかけた所で

——チャイムが鳴る。

「ほら、俺達も戻ろうぜ」

二時間目の授業を告げるチャイムが鳴り響く中、箒の手を取り急かす。

「~~~~っ!!」

かぁっと箒の表情は赤くなっていく。どうしたんだ？風邪でもひいたのだろうか？

◇◇*◇*◇*◇*◇*

【二夏side】

IS。正式名称「インフィニット・ストラトス」。

科学者”篠ノ之束”により開発された宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツ。

当初の制作者の意図とは別に宇宙進出は一向に進まず、「兵器」へと転用されたが、現在は各国の思惑からアラスカ条約が締結され、スポーツへと落ち着いている飛行パワードスーツ。

本来であれば、”女性以外に使用できない”という致命的欠陥を抱えているが、何故か俺は動かしてしまった。

だから、現在、俺はIS学園にいるのだが……

正直、さっぱり理解できない。

入学一週間前に『必読』と書かれた電話帳のような分厚さのISの参考書が送られてきたのだが、最初の3ページくらいで挫折した。

諸君、よく考えてみてくれたまえ。

いくら前世の記憶が甦って精神年齢が20台半ばであろうともが六法全書よりも分厚そうな教本を一週間で読破できるか……
答えは否！断じて否なのであるっ！

人間、諦めも肝心である。

「皆さん、ここまでで分からない所はありましたか？」

山田先生がそのおっきいおっぱいを揺らしながら生徒に聞く。

俺は教科書と睨めっこしながらも表情は青ざめてる。

「織斑君、何か分からない事がありましたか？なんでも質問して下さいね。なにせ、私は先生ですから」

何時の間にか俺の前には山田先生がニコニコしながら立っていた。

「……………先生、ほとんど……………いえ、全然分かりませ
くん……………」

「え？ぜ、全部ですか？　今の所で分からないって人はどれくらい
いますかぁ？」

俺の返答に山田先生はビックリしながらも他にも分からない生徒が
いないか周りを見渡したが、みんな理解しているらしく、反応はな
かった……………」

トホホ……………俺だけですか……………」

「織斑、入学前の参考書は読んだか？」

千冬姉が俺に近付いてくる。あまりにも分厚かったので間違えて捨
ててしまった旨を告げると出席簿で殴られる。

千冬姉の愛が痛い……………」

結局、入学前に届いた参考書は再発行される事となり、さらに一週
間で覚える、と言われてしまった。

Episode 2: 乙女の気持ち

【二夏side】

「ちょっとよろしくて？」

電話帳よりも分厚いISの参考書を一週間で頭に叩き込み、と千冬姉に言われた。正直、勉学は苦手だ。

出来る事ならやりたくもない……が、誰よりも厳しい姉が身近にいる以上、やらなきゃいけない……気が重くなる。

なんて考えてたら、誰かから声を掛けられた。

「えっと……誰？」

「まあ。ご存じないのね、このセリア・オルコットを？ イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！！」

めんどくさそうな奴とエンカウントしちゃった。まあ、顔はかなりの美人である。見れば出るところも出てるし、腰なんかはキュッと引き締まってる。なかなかのナイスプロポーションだ。

「代表候補生って……何？」

俺の言葉に教室内の空気が一変した。何、その知ってて当たり前
の常識をお前は知らないのか、という驚愕の視線は？目の前のセシリ
アも二の句が告げられない感じに呆けてらっしゃる。

「信じられませんわ。日本の男性はこうも知識が乏しいのかしら？
常識ですわよ、常識。国家代表IS操縦者。その候補生から選出
されるエリート的事ですわ。本来なら私のようなエリートとクラス
を同じくするだけでも奇跡。幸運なのですよ。その事実をもう少し
理解していただける？」

腰に手をやり、その見事な胸を反り返らせ俺に詰め寄るセシリア。

今の世の中、ISを操縦できるのは女性だけという事もあって、女
性はかなり優遇されている。

昔の日本では男尊女卑というのは此の世界でも前の世界と同じだっ
たらしいのだが、ISが登場してから世の中の常識は180。変わ
ってしまった。

言うなれば、女尊男卑。

それは普段の生活、学校や会社での立場、果ては政治の世界にまで、
……女性がかなり優遇されるようになったのだ。

そうなれば、当然出てくるのは目の前の女生徒のように男を下に見る輩も多くなる。

IS操縦者ならまだしもISにも操縦できない女性まで『自分は偉い』と勘違いする輩が増えてきている。

中には男を下に見ないまともな女性もいる。というか、まともな女性も多いが男を下に見る女性が多いのは確かだ。

セシリアは残念ながら前者の様だ。

せっかくの美人なのに……しかし、金髪隻眼の美人は絵になるな。前の人生じゃ知り合う機会もなかったからな、新鮮だ。

「そうか、それはラッキーだな。ところでせっかく美人なんだから、そんなに刺々してるのはマイナスだぞ」

「なっ!! な、な、な……」

俺の美人発言に驚いたのか、カーッと頬を朱に染め、後ろにのけぞる。クラスメートの子も「おおー」というような感嘆を上げ、頬を赤くしてる。一人、箒の視線が厳しいが……。

「~~~~っ!! バカにしていますの?!」

「えっ？ バカになんかしてないが……？」

「大体、何も知らないくせによくこの学園に入学できましたわね？
唯一、男でISを操縦できると聞いていましたけれど——期待外れでしたわね」

俺に何かを期待されても困る。何せもともとこの学園に好きで来たわけでもないし。

「まあ、でも私も優秀ですから貴方のような人間でも優しくしてあげますわ。分からない事があれば、泣いて頼まれれば教えて差し上げない事もないですわ。なにせわたくし、入試で唯一、教官を倒したエリート中のエリートですから」

「あれ？俺も倒したぞ。教官。倒したというか、いきなり突っ込んできたのを躲したら壁にぶつかって動かなくなっただけだな」

ははは、今でも覚えてるが、ISを纏った教官が加速してこっちに向かってきたので、ぶつかると寸前に身を躲したら、その教官、躲された事に暫く気付かなかったみたいで、一瞬呆けた表情をした。で、そのまま壁に激突しちゃったってわけだ。

「……わたくしだけと聞きましたが……？」

「女子だけでは、ってオチじゃないのか」

俺の言葉にショックを受けたようでプルプル肩を震わせている。あれ？俺、マズい事言ったか？

「貴方も教官を倒したというのっ?！」

「落ち着けよ、な？」

「これが落ち着いてられ——」

と、オルコットさんが激昂しそうになった所で、チャイムが鳴った。

「——っ！ また後で来ますわ！ 逃げない事ね！ よくって！」

ええええ——、もういいよ——。ここまで目の敵にされると、さすがに聞いているだけでも疲れてくるのに。

【セシリア side】

イギリスの名門貴族オルコット家長女として厳しく育てられてきた。しかし12歳の頃に両親を列車事故で亡くした。わたくしの両親は傍目から見ても仲が良かったとは言えなかった。

わたくしの父親は婿養子という立場の弱さから母親に頭が上がりなかった。母親の方もよく父親の陰口を口にしていた。

そんな両親が事故の時、何故か一緒にいた、という事実は理解できなかったが、今となってはどうでもいい事だった。

わたくし自身、男尊女卑の時代であったころから実家発展に尽力した母親のことは尊敬していたが、婿養子という立場の弱さから母親に対し卑屈になる父親に対しては憤りを覚えていた。

だから、わたくしは男に頼ろうと思った事はこれまで無かった。

勉強を重ねて周囲の大人達から両親の遺産を守ってきた。

ISの適性値も高かった事でIS操縦者となってからも努力に努力を重ね、代表候補生にまで上り詰め、専用ISである「ブルー・テイアーズ」の操縦者にまで選ばれたのだ。

そしてIS学園の入学が決まった頃、これまで女性しか扱えなかったISを男が動かしたという世界的大ニュースを知ったのだ。

興味があった。

女尊男卑の今の時代、男がISを操縦できる。

ISが発明・発表されてからの今までの常識を覆すかのような衝撃的な事実。

しかし、今の時代に強い男なんている筈がない——わたくしは彼に会うまで本気でそう思っていた。

実際、同じクラスになり、話しかけてみて、最初に思った感想は、飄々として掴み所のない、ちょっと顔がいいだけの男としか見えなかった。

『そうか、それはラッキーだな。ところでせっかく美人なんだから、そんなに刺々してるのはマイナスだぞ』

こんな事を平気な顔して言うてくるから、調子が狂いそうになるが、
.....

でも、所詮は男。

栄光あるイギリス代表候補生であるセシリア・オルコットとブルー・ティアーズの敵ではない。

所詮、男は皆、わたくしにひれ伏すしかないのだから——

【二夏side】

学園からの帰り道、俺は後ろを振り返る。

箒やオルコットさんを除くクラスメート女子数十人が後ろから着いてくる。

はぁ~~~~、初日からこれじゃ先が思いやられる。

IS学園は全寮制である。

当然、IS学園に入学した俺は今日から寮暮らしだ。

山田先生から渡された部屋番号を記したメモを見ながら、今日から自分の部屋になる扉の前に立つ。

1025室。

今日からIS学園卒業までの3年間、此处が俺の城になるのだ。

部屋に入り、まず目についたのは大きなベッドが二つだった。取り合えず、備え付けのベットにダイブしてみた。バウンドしました。初体験です。このモフモフ感。

凄いな、IS学園。

普通の高校の学生寮とはレベルが違う。普通にホテルとして金とれるレベルじゃないだろうか、これ。

「誰かいるのか？」

急に後ろの方から聞き慣れた声が聞こえてきた。

えっ？！

シャワールームであろう、ドアを開けながらバスタオル1枚を体に巻いた筈がいた。……。

「こんな格好ですまないな。シャワーを使っていた。私は篠ノ之——」

お互いに顔を見合わせ、硬直してしまった。

バスタオル1枚で巻かれた筈の15歳とは思えない暴力的な体は非常に魅力的だった。

たゆんたゆんなブツにシャワーの熱気で上気した頬に濡れた髪。

水滴が流れ落ちる太ももや、タオルを押さえる手が近いせいか肌に張り付いてその曲線を忠実にトレースしている胸のふくらみとか。

いくら見た目が15歳でも精神年齢的に20代半ばの俺でもその暴力的な魅力に抗える術はなかった。

気が付けば、口の中に鉄の味がする。そう……。鼻血を出し

てしまったのである。

箒はそんな俺を見て肩をプルプル震わせている。

——逃げなきゃいけない——そう俺の直感が告げているのだが、網膜に焼き付けられた箒の肢体から眼が離せないのだっ！

「きやあああああああああつ！！」

悲鳴を上げるや否や箒は持ってきていた竹刀を手に取り、俺に向けて一閃——寸での所で覚醒し、身を翻し躲すとすぐさま、ドアを目指し走った！

追い付かれたら殺される——そんな恐怖を背後から感じ、必死に走った。

ドアの向こう側へと脱出し、ドアを閉める。

「ふう、死ぬかと思っ——」

ズドン！

顔の真横、頬から二ミリも離れてない場所から木刀の切っ先が突き出している。頬からタラリと血が出てるのを感じる。背後からは闇魔も地獄に帰る殺気を感じる。

木刀が一端引っ込められ、今度は俺の体があった所を木刀が突き刺す。寸での所でドアから離れた俺は間一髪助かった。

「おい、箒っ！ 本気で殺す気か？ 今の躲さなかったら死んでたぞ？！」

「……………なにになに？」

「あっ、織斑くんだ」

「えー、あそこって織斑くんの部屋なんだ！ いい情報ゲット」

騒ぎを聞きつけて集まり出した女生徒達。問題があるとしたらその女生徒達の格好だ。肉体的には15歳、思春期真っ盛りの俺には厳しい肌を露出した私服姿。屈まれたら胸の谷間が見える。

ヤバイヤバイ、このままここにいたら俺の性的衝動を抑えつける自信がない！
リビドー

いくらスケベな俺でも入学初日に変態のレッテルを貼られたくない。

「箒、箒さん、部屋に入れて下さい。すぐに。不味い事になるので。どうか謝ります。本当にすみませんでした。どうかお願いします。俺を部屋に入れて下さい」

部屋の中にいるであろう、箒に必死に押し倒す。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

沈黙が続く。返答がない。俺はこのまま野宿するしかないのか？

「・・・・・・・・入れ」

ドアを開けた箒は剣道着を着ていた。急いでいたからだろう、直ぐに着れる服として剣道着を身に着けたのかな。

【箒side】

目の前には同室となった一夏がいる。土下座しながら。

「っ本当にすみませんでしたっ！ わざとじゃないんです！！」

IS学園の学生寮は基本二人部屋となる。だから、当然、私にもルームメイトがいるのは分かっていたのだが、まさか男である一夏だ

とは思わなかったっ！

しかもお風呂上りを思いつ切り見られるし．．．．．

「．．．．．お前が私の同居人だということのか？」

「あ、ああ、そうみたいだな．．．．．」

「どういうつもりだ？男女七歳にして同衾せず。常識だっ」

「いやあ、俺も十五の男女が同居．．．．．いや、同棲するのは問題があると思うのだが．．．．．」

6年振りに会った幼馴染。

初恋の相手でもあり、離れてる間も一時も忘れる事がなかった存在。

「．．．．．でも、同棲はまだ早いだろうーっ！！」

心臓の高鳴りが止まらない。喉が渴いていくのが分かる。

「——お、お、お前から希望したのか？　その、私の部屋にしろと．．．．．」

「そんな馬鹿な――」

ぷち。

そんな幻聴がきこえたような気がした。

気が付けば、竹刀を一夏に振り下ろしていた。寸での所で真剣白羽取りで難を避ける一夏。

くう――、一瞬でも同じ部屋だと知って、少しでもドキドキしてた私が馬鹿みたいじゃないか。

言うに事欠いて、『馬鹿』だとお――。

「――ぬううう――、箒さん、顔が怖いです」

しかし、この状況。竹刀を押し込むために体重をかけている姿勢が他人から見たら押し倒してるように見えたらしい。

「わぁ、篠ノ之さん、大たーん」

「抜け駆けしちゃダメだよー」

ドアから顔を出しているだけでも五人の女子が私達を見ていた。

かあゝゝゝと頬を上気させながらも開いてたドアを閉め、鍵を掛ける。そう、誰にも話を聞かれないようにするためだ。

「一夏っ！」

「はいっ！ 何でしょうかつ？」

「．．．．．いや、その、な、同じ部屋で暮らす以上、線引きが必要だと思うのだが．．．．．」。

ある程度、落ち着いた所で、同棲．．．．．いやいや、いくら幼馴染とはいえ、男女が同じ部屋で暮らす以上は線引きが必要だと思う。

シャワーの使用時間や着替える際の中央の仕切りなど色々決めた。
った。

今日から一夏との同棲．．．．．じゃなくてっ！共同生活が始まる。

うゝゝゝ、6年間想い続けてきた相手が傍にいると思うと緊張してしまう。

私はこの生活に耐えられるのだろうか．．．．．？

しかし、この夜は最悪だった。一夏の部屋の場所が判明した事で女子が殺到したのだ。顔見せという事で自己紹介も兼ねて軽く話してる程度だったが、一年生で8名、二年生で15名、三年生で21名。上級生になる程、一夏と知り合おうと必死になってるのが分かる。

ISに乗れる唯一の男という杞憂な存在なのもあるが、一夏自身、傍目から見てもルックスは整ってる。

あの、その、だな。・・・普通にかっこいい。

久し振りに会った時も一夏だと分かったのは事前にテレビで成長した姿を見たからだ。

子供だった幼馴染の少年は大人の雰囲気を持った青年へと成長していた。同じクラスになれた事も飛び上がりたくなるくらいに嬉しかった。

でも、ここに男は一夏しかない。

しかもクラスメイトからでなく学園内のほとんどの女性が一夏に興味を持っている。

現に今日も何人もの女子が一夏目当てでこの部屋を訪れている。

このままではまずい。一夏が他の女に取られるかもしれない――そんなのは絶対に嫌だ。同じ部屋であるメリットを生かさねば。

しかし、一夏の奴、デレデレしているな。ムカムカしてくる。

私以外の女を見るな。

——私だけを見てほしい。

Episode 3：一夏の実力

【一夏side】

千冬姉が教室に入ってきて、そのまま教壇に立った。

「これより再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める。クラス代表者とはそのままだの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の会議や委員会などへの出席：まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点では大した差はないが競争は向上心を生む。一度決まると何か大事が無い限り一年間変更はないからそのつもりで」

めんどくさそうな役職だが、幸いこのクラスには代表候補生がいる。オルコットさんだっけ？

「はいっ！織斑君を推薦しますっ！」

机にダイブした。

「私もそれがいいと思います」

チクショー、他のクラスメートも賛同の意思を示していく。

「では候補者は織斑一夏……他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」

「待って下さいっ！納得がいきませんわ！」

バン！っと机を叩いて立ち上がり甲高い声で異論を出したのは先ほどのオルコットさんだった。いいぞ、もっと言ってやれ。

「そのような選出は認められません！実力から行けばわたくしが代表に選出されるのは必然ですが、物珍しいという理由で運だけの男が選ばれるなど論外ですわ！ここはサーカス団ではございませんのよ！」

よし、ここで俺からも付け足しておこう。

「はい」

挙手。発言を許可された事を千冬姉の目線で感じ取る。クラスメートの注目の視線が背中に刺さる。

「俺が男だからって物珍しい環境で俺を担ぎ上げたくなる気持ちはいくぶん分かる。でも、よく考えてほしい。このクラスにはせっかく代表候補生っていうエリート中のエリートがいるんだ。対して、俺はISを操縦出来ると言ってもまだ稼働時間も1時間も満たない初心者だ。クラス代表者という、いわばクラスの顔とも取れるポジションはクラスでも一番優秀な奴が務めるのが普通だろう？ だから俺はセシリア・オルコットが適任だと思います」

「でも、織斑君も入試で教官を倒したんでしょ？」

俺の右隣にいる一人の女生徒、確か名前は………相川さんだっけ？

相川さんが放った一言が、オルコットさんの気に障ったらしい。

「——決闘ですわ」

あー、俺は平和に第二の学園生活を満喫したかっただけなのに。

見れば、クラスメイトも俺とオルコットさんのやり取りの行く末を気にしてるみたいで俺とオルコットさんに集中している。

「千冬ね………じゃなかった、織斑先生。辞退は………」

「男が売られた喧嘩を買わずに逃げるのか？」

ふふん、と口端を吊り上げ、千冬姉は俺を挑発してくる。

ダメだ。逃げられないらしい。ああ、めんどくさい。

「分かった、受けるよ」

「ハンデはどれくらい必要かしら？」

「いや、ハンデではいらない」

シューーン。俺の言葉にクラス中が静まり返る。

その後にクラスメイトが全員笑い出す。

「織斑君、それ本気で言ってるの？」

「相手は代表候補生なんだよ。織斑君ってIS初心者なんだよね？
ここはハンデを貰うべきだと思うよ」

確かに相手は代表候補生に選ばれるくらいのエリートなんだろうが、俺も男だ。男として戦う以上はお互い全力を持って戦いたい。手加減されるなんて真っ平ごめんだ。

「代表候補生であるわたくしに対してハンデが必要ないだなんて、日本の男性はジョークセンスがあるのね」

「織斑君、セシリアはイギリス代表候補生なんだよ？ 今からでも遅くはないよ。ハンデをつけてもらった方がいいよお」

俺の後ろの席の子がハンデを付けた方がいい、と助言してきてくれたが、これでも前世では負け無しかったんだ。ここでハンデを付けてもらっては男が廢るというものだ。

「もう一度言うが、ハンデはいらない」

「話はまとまったな。それでは勝負は次の月曜、第三アリーナで行う。織斑とオルコットはそれぞれ準備をしておくように」

俺とオルコットさんの話を千冬姉がまとめる。

「織斑、お前のISだが予備がない。だから学園で専用機を用意す

るそうだ」

専用機を用意する。

その言葉にクラス中が騒然となる。

そりゃそうだろう。世界に現存するISは全部で467機。その中の一つが俺の専用機になるわけだから。

すかさずオルコットさんが俺の前に颯爽と現れる。

「それを聞いて安心しましたわ。クラス代表を決める決定戦、わたくしと貴方では勝負が見えていますけど、さすがにわたくしが専用機、貴方が訓練機ではフェアではありませんものね」

そして俺をビシッ！！と指さしながら自分が負ける事は有り得ないと自信あげなオルコットさんは世界にある467機あるISの中でも専用機を持ってるらしい。

まあ、俺にも専用機というものが用意されるみたいだが。

「本来ならIS専用機は国家、或いは企業に所属する人間にしか与えられない。……が、お前の場合は状況が状況なのでデータ収集をも目的として専用機が用意される」

千冬姉の説明で専用機が用意される事をクラスメイトの子達が羨ましがってる。

「あの、織斑先生？ 篠ノ之さんって篠ノ之東博士の関係者なんでしょうか？」

「そうだ。篠ノ之はあいつの妹だ」

その返答にクラス中が騒然となる。

それもそうだろう、世界の常識を変えたISを開発した人だ。

そんな有名人の関係者が同じクラスにいるんだ。騒ぐのは当然だな。

しかし、東さんか…… 子供の頃は家も近かった事もあったがよく会ってたな。

箒とは違って、破天荒な人でよく実験台にされてたっけ…… ははは、あまり思い出がないや。涙で視界が霞む……

箒の家族が引越してから会う機会はなくなったが、ちょこちょこ東さんから連絡はあった。

普通に、元気してるー？ とかの何気ない日常会話だけだったが。

「――あの人は関係ないっ!!」

箒の一喝で騒いでたクラスメイト達は静まり返る。

箒と束さん、昔からそんなに仲は悪くはなかった筈なんだけど・・・
離れてた6年の間で何かあったんだろうか？

そして昼食休憩、三人の女生徒が俺に話しかけてきた。

「ねえねえ、おりむー。ご飯、まだでしょ？学食に一緒に行こうよ」

「へっ？　おりむー？」

「うん！　織斑君よりあだ名あった方が仲良くなれるでしょ？」

話しかけてきたのは制服を改造して袖をダボダボにしてる癒しオーラ全開の布仏本音、通称のほほんさん。そののほほんさんと仲のいい女生徒二人。

いい！　何がいいって前の高校生活じゃ考えられなかった女生徒と
のご飯っ！！

「ああ、構わないよ。そうだ、一人誘ってもいいかな？」

さっきの一件で箒はクラスで浮きかけてる。昔からそうなんだが、真面目で堅い性格が災いして、俺以外とはあまり仲良くしなかった。束さんも箒に俺や千冬姉以外とは仲良くしてなかったみたいだが、篠ノ之姉妹は人付き合いが下手だ。

せつかく6年振りに会えたんだ。お節介くらい焼いても構わないよな。

「箒。一緒に学食行かないか？」

「――私はいい」

ジト目で睨まれた後、そっぽむく箒。何故か箒は昨晚から機嫌が悪い。

まだお風呂上がりの事を怒っているんだろうか？ でも、あの後、一悶着はあったけど、許してくれたよな？ だったら何で怒ってるんだ？

ただ、さっきの件もある。このままじゃ本当にクラスから孤立しちまうな。無理矢理にでも連れて行こう。

そう思って箒の手を取ったら箒は手を振り払おうとしたみたいだが、
……させなかった。

「――っ！　．．．．．私はいいと言っただろうっ」

「いいじゃないか。せっかく同じクラスになれたんだ。仲良くしようぜ？　な？」

漸く観念したのか、顔を赤面させながらも渋々といった感じだが、学食に行く事を同意してくれた。全く世話が焼ける幼馴染だな。

【箒side】

「いいじゃないか。せっかく同じクラスになれたんだ。仲良くしようぜ？　な？」

一夏に笑顔を向けられ、優しく諭された事もあるって、つい学食に行く事を了承してしまった。

頬が熱くなるのを感じる。

なのに、一夏は平然と何事もなかったかのように学食に誘いに来た三人と私を連れ、学食に向かう。

一夏は私の事をどう想ってるんだろう？

こうして世話を焼いてくれるのは、幼馴染だから？

分からない。

ただ、はっきりとした感情がある。一夏が他の女生徒と仲良くして
るのを見るのは苛々してしまう。

さっきのあの人の事もあるが、一夏が私以外の誰かと仲良くしてる
のを見ると、つい冷たく当たってしまう。

これではいけないって分かってるのに、どうしようもなく変える事
が出来ない私の性格。

はあ、素直になりたい。素直に一夏にこの想い全てをぶつきたい。
でも、拒絶されるかもしれない。もし、一夏に拒絶されたら、私は
きつと立ち直れない。

学食に着いて、三人の女生徒は一夏に興味あるのか色々と質問をし
てる。

そして話題は先程のクラス代表決定戦の事になった。

「織斑君、クラス代表決定戦は大丈夫なの？」

「うーっ、まあなるようにしかならないかなあ」

「ISに乗ったのって、入試の時だけなんだよね？」

「そうだよ」

「相手はイギリスの代表候補生なんだよ。今からでもハンデは付けてもらった方が――」

一夏とクラスメイトが話している最中に上級生と思われる女生徒が一夏に話しかけてきた。

「ねえ、君って噂の子でしょ？」

「多分、そうだと思いますけど？」

「代表候補生の子と勝負するって聞いたけど、君、素人だよね？よかったら私が教えてあげようか？ISについて」

「結構です。私が教える事になっていきますので」

気が付いたら私は口を挟んでいた。

一夏を誰にも取られたくなかった。そう、これは嫉妬だ。でも、こ

の気持ちを止める事は出来ない。

尚も上級生は食い下がろうとしてきたが、私があの人の子だ、と話したら、引き下がってくれた。

あれだけ憎いと思ってたあの人の名前に助けられるのは癪だったが、それよりも一夏をこれ以上、誰かに取られるような真似は見過ごせなかった。

「箒が教えてくれるのか？」

思わぬ誤算だったが、これで放課後は二人っきりだっ！！

放課後、剣道着に防具を付け、一夏と対峙していた。

昔、一夏は強かった。でも、実力はそう離れていなかった。

それに中学では全国優勝もした。自信もあったのだが、その差は縮まるどころか圧倒的に開いていたのだ。

せっかくの二人きりだと思っていたら、昼間の三人以外にも多くの女生徒が見学をしに来ていた。

それに関して残念に思う気持ちがあったのが、気持ちを切り替え、対峙して分かったのだが、一夏は強い。竹刀を構えた姿勢に隙がなかったのだ。何度、打ち込んでもいなされ、返す刀で一本を取られ

る。

「ほわぁー、おりむー、つよい」

「――す、凄い……」

「織斑君って、こんなに強かったの？」

周りの見学者も一夏の強さに驚いてる。

「一夏、それだけ強いなら全国優勝してもおかしくないのに、これまでの試合で一夏の名前を耳にした事はなかった。中学では何部に所属していた？」

「え？ 帰宅部だけ。三年間」

「剣道部には？」

「入部してない」

あれだけ一生懸命に取り組んでいた剣道、一夏も絶対に続けると

信じて疑わなかった。剣の修業自体は怠っていなかったみたいだが、
・・・・・。

剣道とは違う異質な剣筋。

剣道とも千冬さんにもない剣筋。

一体、何なのだ？

【一夏side】

俺の今の剣の腕は前世の記憶によるものだ。

剣道とは違う。前世、つまり俺が織斑一夏じゃなかった時に祖父から習った人殺しの術”御剣一刀流”の技だ。箒が驚くのも無理はない。

俺は前世の記憶を記憶だけじゃなく、経験まで継承してるみたいだ。

でも、さすがは全国大会優勝者でもある。

この記憶の継承がなければ、きっと負けてた。

なにしろ、中学の三年間は千冬姉の世話になりっ放しになるのに気が引けて、剣道部には入部せず、アルバイト三昧だったのだ。

その間、剣道の鍛錬は一切やっていなかったから腕が鈍るのは当た

り前。

本来、ここで膝を付いていたのは俺だったかもしれない。

「しかし、流石に全国大会優勝者だよな」

「——心にもない事を言うなっ」

箒の表情は暗い。

差は縮まつてるところか広がっていた……この事実が箒の表情を暗くさせていた。

箒は昔から思い詰めたら、そのままひきずっちゃう性格だし、要領もよくない。不器用なのだ。

だから、このままにしてはおけない。

「ほら、立てよ。俺の訓練、付き合ってくれるんだろ？」

箒は俺の手を取り、渋々立ち上がるが、未だに表情は暗い。

「剣の腕は今見た通りだけど、ISに関しちゃ素人なんだ。だから、な……俺にISの事いろいろ教えてくれよ」

せっかく再開した幼馴染との絆も深めていきたいしな。

そんな風にかっこよく決めていた俺もいました……

俺の手を取り立ち上がった箒の道着が着崩れていたのだ……！

そう、つまり箒の、あの暴力的なたゆんたゆんな胸の谷間が見えてしまった……ヤバい、視線が外せない。

っていうか、目の前の幼馴染は本当に十五歳なのか？

体つきは本当十五歳とは思えない、ナイスプロポーションなのだ！！

ぐうううううううううう、キツイ。

【箒side】

一夏は強い。

純粹に悔しかった……追いつけたと思った背中はまだ遥かに遠かったのだから。

でも、悔しいと思う反面、一夏という目標が出来た事に嬉しさを覚えたのも事実だった。

「ほら、立てよ。俺の訓練、付き合ってくれるんだろ？」

一夏の手を取り、立ち上がる。

「剣の腕は今見た通りだけど、ISに関しちゃう素人なんだ。だから、な．．．．．俺にISの事いろいろ教えてくれよ」

そうだ、一夏はISに関しては素人なのだ。

今の時代、ISは女性しか扱えないという観点から女性は早いうちからISに触れる機会がある。

IS適性があるかどうか調べたりするために早い段階でカリキュラムが組まれたりもするのだが、男にはそれがない。

だから私が知っているISの知識も一夏は知らない。

「ああ、分かった。これから放課後三時間、ISに関していろいろ教えてやる。その代わり、剣の修業に．．．．．付き合ってもらっても．．．．．構わないだろうか．．．．．？」

想い人でもあり、目標にもなった存在、一夏に剣の鍛錬にも付き合っ
てほしいと告げてみる。

断られたらって思うと怖くて一夏の顔が見れなかったが、一夏は私の提案を受け入れてくれた。

その言葉で俯き加減であった私は顔を上げる。

すると妙に顔を赤くしてる一夏の顔があった。

視線は下を見てる。何だ？何を見ているんだ？とその視線を追っていくと、私のはだけた胸元が視界に入る。

ぶちっ！

ぷるぷるぷる肩が震える。

一夏は確にかっこよくなった。でもっ！！スケベに成り下がっていったっ！！

気が付けば、竹刀を一夏に振るっていた。

「ひやああああ、ごめんなさあー！ーいつ」

「までえええ！！ お前のその腐った根性、私が叩き直してやるっ
！！」

周りで見てた女生徒達も笑い声を上げながらも私達を見ていたが、

今はそんな事よりもスケベな一夏を修正する事で頭がいっぱいだっ
た。

そして鍛錬を終え、解散となって私達はそれぞれ着替えて部屋に戻
る事にした。

ロッカールーム、道着を脱いだ私は自分の胸を見る。

私の胸は家系なのか、母も姉もデカイ。私も中学一年の頃から大き
くなって、今ではかなりの大きさになっている。しかも未だに成長
中だ。

同年代に比べてもかなりあり、私にとってはただのコンプレックス
でしかなかったのだが、一夏は大きいおっぱいの子が好きなのだろ
うか？

やっぱり男は胸なのか？ 一夏も大きいのが好きなのだろうか？

しかも、あの食い入るような視線・・・・・・・・私も女として見てく
れているのだろうか？

———そうだったら、嬉しいな———

はっ!!!

いかんいかん。私は一体、何を考えてるんだ!!

でも、一夏は大きいのが好き．．．．．大きいのが好き．．．．．
・こんな性格の私でも女として見てもらえる。恥ずかしい気持ちもあるのだが、何故か嬉しく思えてしまうのが不思議だ。

初めて胸が大きくて、よかった。

うわああああゝゝゝゝ、私は何を考えてるんだっ。

でも、明日から放課後は二人っきりで特訓だ。

ISの事を私が教え、剣の鍛錬にも付き合ってもらえる。

二人きり．．．．．二人きり．．．．．二人きり．．．．．

ぬああああゝゝゝゝ、さっきから私はどうしたのだ?!

顔が自然と緩んでしまうっ!!

くううううゝゝゝゝ、気を引き締めねば!!

E p i s o d e 4 .. クラス代表決定戦 (前書き)

やっと戦闘です。戦闘描写は何気に難しいですな。尚、白式も若干チートしてしまいました。

Episode 4…クラス代表決定戦

【二夏side】

クラス代表決定戦当日の放課後、後少しで試合が始まる。

アリーナの観客席には既にクラスメイトの面々が、管制室には千冬姉に山田先生が、フィールドでは既にセシリアがISを展開して、俺の登場を待ち構えている。

そして、第三アリーナAピットには俺と箒の二人きり。

俺の専用機の到着を待っていた。

『織斑くん——織斑くん、織斑くん』

Aピットに設置されているスピーカーから管制室にいる山田先生の俺を呼ぶ声が聞こえてきた。

『織斑君、来ましたっ！ 織斑君の専用IS』

『織斑、直ぐに準備しろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。ぶつつけ本番でモノにしろ』

千冬姉も無茶言ってくれる。

ISに乗った時間はまだ一時間にも満たないのに。

重低音な音が響き、ハッチが開く。

視界に映るのは――機体色がほぼ真っ白に染められた俺の専用機。

『これが織斑君の専用IS”びやくしき白式”です』

『直ぐに装着しろ。時間がないから初期化と最適化処理は実戦でやれ』
フォーマット ファイッティング

これが俺の専用IS、白式か……よろしくな相棒。そしてその専用機に手を翳すとあの試験会場で味わったこのISの情報が俺の頭の中に流れ込んでくる。

そしてまた前世での記憶が俺に流れ込んできた。

――目の前にいるのは真剣を構える祖父と対峙する俺。まだ思い出していなかった前世からの記憶と経験が引き継がれる。

『織斑、どうした？時間が無い。早く装着しろ』

呆けていた俺は千冬姉の声で現実に戻される。

大丈夫だ。馴染む。これが何なのか、理解できる。何の為に存在しているのか、分かる。

千冬姉の言葉に従い、白式を装着する。

搭乗者を受け入れるために開いていた装甲が閉まり自分の体に密着していく様子はまるで、ISと自分が融合していくかのような感覚を覚える。

Access, System start

白式に俺の感覚が同調していく。視界に表示される空間投影モニターが無数に表示されては、消えていく。白式が俺を理解していく。

『セシリアさんの機体はブルー・ティアーズ。遠距離射撃型のISです。ISには絶対防御という機能があって、どんな攻撃を受けても最低限、操縦者の命は守られるようになっていきます。ただ、その場合、シールドエネルギーは極端に消耗されます。分かっていますよね?』

ISの試合形式はこのシールドエネルギーの残量をいち早く0にした方の勝ちとなる。

格闘ゲームにあるようなHPゲージのようなものだ。

『織斑、気分はどうだ？ いけるか？』

「大丈夫だ。いけるさ」

千冬姉も俺の言葉の満足したのか、後は何も言ってこなかった。

「箒………いってくる」

「ああ、勝ってこい」

箒の言葉に頷き、俺は白式をカタパルトに乗せ、スラスターを吹かし発進させる。

アリーナ上空まで飛び上がると、セシリアが既に待機していた。

「最後のチャンスを上げますわ」

セシリアは自分の勝利を信じて疑っていないようだ。

本当に女尊男卑を地でいく人の様だ。美人なのに勿体ない。

「そう。このまま戦えば、わたくしが勝つのは自明の理。今ここで謝るというのでしたら、許して差し上げない事もなくってよ」

―警戒、敵 I S 操縦者の左目が射撃モードに移行。セーフティのロック解除を確認―

どうやら敵は言葉とは裏腹にやる気の様だ。それに俺も男だ。このまま言われっぱなしというのも癪に障る。

「御託はいいから、かかってきなよ」

「そう．．．．．残念ですわ。それなら――」

―警告！ 敵 I S、射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填―

前方のセシリアからのロックオンを警戒するかのように警告と表示されるモニターが展開されている。

「お別れですわねっ！！」

セシリアからの宣戦布告ともとれる六七口径特殊レーザーライフル

「へスターライト・mk?」による一瞬の閃光が俺を狙ってくるが、間一髪のところで避ける。

そして、そのまま第二射、第三射とビーム射撃が続く。

実際、まだこの白式は準備が出来ていないのか、俺の感覚に充分についてこれてない。

その為、動作が遅れ、肩部、脚部をビームが掠る。それだけでシールドエネルギーは減少していく。

「さあ、踊りなさい。わたくしセシリア・オルコットとブルー・テ
ィアーズが奏でる円舞曲^{ワルツ}で」

ちいっ!! 流石に丸腰じゃ分が悪い!!

武器はないのか?

モニターに表示されるのは近接用ブレード一本のみ。他に武装はないようだ。まあ、でも唯一の武器がブレードタイプだったのは救いか。

右手に近接用ブレードを展開させる。

「遠距離射撃型のわたくしに近距離格闘型で挑もうなんて、笑止で
すわっ!」

確かに。とうとうシールドエネルギー残量も500を切ってしまった。

「このブルー・ティアーズを前にして初見でここまで耐えたのは貴方が初めてですわね。誉めて差し上げますわ」

「そりゃ、どうも」

【セシリア side】

正直、驚きましたわ。

わたくしとブルー・ティアーズを前にして初見でここまで耐え切れるなんて。

母国イギリスにいた時でもいなかった。初見の場合、最初の数分で勝敗が決するからだ。

それがIS実働時間がまだ一時間にも満たない目の前の男は耐えているのだから。

面白い。世界で唯一の男性IS操縦者といえども初心者。わたくしの敵ではないと思っていましたが、少しばかり見識を改めましょう。

遊びはこれでおしまい。

わたくしのブルー・ティアーズで華麗に散らせてあげますわ。

役目を終えた舞台役者はもう舞台袖にはける時間なのですから。

「では、そろそろファイナーレと参りましょう」

サイド・バインダーに装備している4基の射撃ビットを展開させる。

そう、このBT兵器こそがブルー・ティアーズの真骨頂。思考制御型の遠隔射撃武装レーザービットを四方に展開させ、そのまま四方からレーザー射撃を繰り出す。

視覚からの射撃、IS初心者である彼に躲せる攻撃ではない。これで決まった——私はそう思っていた——しかし、予想は裏切られる。

被弾しながらも直撃を避けているのだ。

4基のレーザービットを戻し、スターライト・mk?で狙いをさだめ射撃をするが、彼は何とブレードの一閃でレーザーを弾く。

ごくっ。息を呑むのが自分でも分かった。

本当に初心者なの?! 彼は——

すると目の前には加速してきた彼が何時の間にか目の前まで迫って

きていた。

上段からの一閃——それを避け、もう一度距離を取るべく離れてから、もう一度4基のレーザービットを展開させ、四方から遠隔操作によるレーザー射撃を行う。

「見切ったぞ、ブルー・ティアーズの弱点!!」

一基のレーザービットが彼の斬撃により両断され、残骸が爆発四散した。

彼は気付いたのだ。わたくしがレーザービットを展開させるのに思考制御に意識が集中してしまい、ライフル射撃が行えない事を……!

【千冬side】

ディスプレイに映る一夏は思考制御型の遠隔射撃武装レーザービットの弱点に気付いたようだ。

思考制御に集中するあまり、それ以外の攻撃が行えない。

B T兵器の実働データをサンプリングすることを目的とした試用機、つまり単一の機体。

イギリス国内でこのブルー・ティアーズの適性値が一番高かったセシリア・オルコットでさえも思考制御によるビット射撃を行う際はそれ以外の行動が制限されてしまう。

それにISに乗って間もない一夏が気付いたのだ。

やはり、奴にも天性の才能があるのかもしれん。

「はあ、凄いですね、織斑君。ISの機動が二回目とは思えません」

真耶も一夏の機動に驚いている。

当然だ。この私の弟なのだからな。しかし……

ウィンドウに映る一夏のIS、白式はまだ初期化も最適化処理も終わっていない。
フォーマット ファイッティング

つまり、一次移行も終わってない状況なのだ。
ファースト・シフト

一夏の反応に白式が反応し切れていないはず。

そんな状態にもかかわらず、専用機持ちの代表候補生を相手にして、ここまでやれたのは正直、驚いた。

剣の才能があるのは入学前に手合せした時点で分かっている。

それでも一夏のI Sの機動をじっくり見たのは今回が初めてだ。

ただ、一夏は専用機を持った事で油断していた。

「あの馬鹿者……うかれているな。さっきから左手を閉じたり開いたりしているだろう？あの癖が出る時は大抵、簡単なミスをする」

「はあ、さすが、ご姉弟ですね」

何となくそう言ったであろう真耶の言葉にハツとする。

「ま、まあ、何だ。あれでも一応私の弟だからな……」

「あー、照れてるんですかー？ 照れてるんですねー？」

……私は無言で真耶の頭を鷲掴み、締め上げていった。

「いたたたたたたたっ!!」

さて、この勝負、十中八九、セシリアの勝利だと思っていたが、分

からなくなってきたな。

【二夏side】

残るレーザービットは3基。

死角から迫るビット射撃を躲し、返す刀で1基のレーザービットを斬り払う。

真っ二つに両断されたレーザービットは爆散し、残り2基のレーザービットを視線で追う。

左右に別れたレーザービットを確認し、先ずは左のレーザービットを斬りおとし、そのまま右に展開されたレーザービットも斬りおとす。

これでレーザービットによる射撃は出来なくなった。

後は近付いて、セシリアを落とすだけ。そのまま加速し、セシリアに一気に迫る。

「かかりましたわ」

不敵に笑うセシリア。そして

「4基だけじゃありませんわ。ブルー・ティアーズは6基ありましてよ!!」

腰に備えてあった二つの円筒状パーツから一発ずつ、計二発のミサイルが放たれた。

「——っ!! しまったっ」

油断していた。油断大敵。

俺は初めての自分専用機にうかれていたのかもしれない。前世では祖父ちゃんにあれだけ「勝負の際には決して油断するな」と厳しく言われていたのに……!!

迫る2基のミサイルビットは追尾型弾道ミサイルの形で距離を離そうとしても軌道を変え、俺を狙ってくる。

「——それならっ!!」

ミサイルを叩き斬るだけ。

離れた先で構えようとするが、白式の反応が遅れた。

最適化処理が未だ終わっていない白式が俺の反応に付いてこれてな

フィッティング

かったのだ。

迫るミサイル。

直撃。そのまま爆発に包み込まれる。

「一夏っ!!」

モニターに映る一夏を包み込む爆発。

箒は一夏の無事を祈るような気持ちでモニターを見詰め続けた。

「ふん、機体に救われたな。馬鹿者めが」

千冬は分かっていた。一夏のISがやっと一夏の専用機になった事を。

煙が晴れる。そこには一夏とファースト・シフト一次移行を終え、姿を変えた白式が映っていた。

各部装甲は全体的にスリムな形状となり、両腕並びに脚部の装甲にはブレード状の突起が付いている。

そして、特徴的なのが白式の背中にある二機の大型ウィングスラスター。スラスターには大型の噴射口が一つと、補助と思われる小型

の噴射口が一つ。計四つの噴射口。

ここで初めて白式が本当の姿を見せたのだ。

その変化した姿にセシリアが、箒が、そして管制室にいた真耶、アリーナ客席で試合を観戦していたクラスメイトが驚きの声を上げる。

一夏の空間投影モニターには初期化も最適化処理終了のメッセージが表示される。

試しにブレードを一閃させる。

ふむ、やっと反応が追い付くようになったようだ。これならいけるかな。

「まさか、一次移行！？^{ファースト・シフト} 今まで貴方、初期設定だけの機体で戦っていたというの？」

セシリアは驚いてる。

初期設定の機体で戦った奴なんて、IS史上、俺が初めてだったりして。

基本的に世界に存在する全てのISは一次移行^{ファースト・シフト}を終わらせた上で運用されている。

初期設定の機体で戦う奴なんて、そうそういないよな。

まあ、これでコイツは今ここで初めて俺の専用機になった。

——さて、いきますか。白式。

先程まで名称の無かった近接型ブレードは雪片式型ゆきひらにのかたと表示されており、その刃は形を変え、蒼白いレーザー出力によるブレードを展開していた。

ウィンドウに表示される白式的能力。

——ワンオフ・アビリティー 単一仕様能力、れいらくびやくや 零落白夜、発動。

今まで俺の反応に付いてこれていなかった白式と完全なまでに感覚シンクロが同調しているのが分かる。

試験会場で初めてISに触れた俺の人生を変えた日、入試試験でISに乗った日、そしてさっきまでの時よりも遥かに比べ物にならないくらいの感覚。

機体から脳内に膨大な情報が流れ込んでくるのも不快には感じず、あくまで自然に感じる。

人間が空を飛ぶ——本来なら有り得ない行動であるにも関わらず、それがあくまで自然なものであるかのように。

左手を軽く開き、また閉じる。脳から伝達された動作情報を正確に左手に送る。誤差もなく装甲に包まれた俺の指先は正確に駆動する。

右手に持っている近接特化ブレード、雪片式型は先程までとは形が異なり、ビームサーベルのようにレーザーにより刀の形にかたどら

れており、その大きな刀身にも拘らず、重量を全く感じさせない。

雪片式型。あの千冬姉がモンド・グロッソで使っていた唯一の武器、雪片。その後継とも言うべき刀。

今までは守られてきたばかりだった。でも、これからは違う。俺には白式がある。

そして、前世の記憶にある御剣一刀流の技がある。

「守られているだけの人生は今日で終わりだ。これからは俺が――俺が千冬姉を、家族を、守ってみせるっ！」

「はぁ？ 貴方、何を言って――」

「取り合えず、千冬姉の名前を守る。あの千冬姉の弟が出来ないから格好付かないからな」

「~~~~っ!! もう! 面倒ですわっ」

セシリアは腰に備えてあった二つの円筒状パーツから今度は二発。計四発のミサイルを放つ。

悪いが同じ手はそう何度も喰らわない。

計四発のミサイルを切り払い、雪片式型を正面に構え、セシリアとの距離を詰めるべく、加速させる。

「――っ!!」

正面上空に見えるセシリアは六七口径特殊レーザーライフルヘスターライト・mk?をカメ直す、その射撃がもう当たる事はない。雪片式型を正面に構え、セシリアを視界に捉える。

「おおおおおおお――っ!!」

一気に加速し、セシリアの上段を取る。そのまま上段からの袈裟斬りと下段からの斬り返し。

上段からの袈裟斬りでライフルの銃身を斬り、セシリアは攻撃の手段を無くし愕然としている。

そのまま返す刀で斬り上げる。

その太刀はセシリアのシールドエネルギー全てを斬り取った。

――『試合終了。勝者――織斑一夏』

セシリアのシールドエネルギーが0になった事でブザーとアナウンスが会場内に鳴り響く。

一瞬の静寂。

そして、湧き上がるクラスメイト。

「すごーーい」

「代表候補生に勝っちゃった」

「織斑くーーん」

ふう。残りシールドエネルギーも50を切ってる。

ワンオフ・アビリティれいらくびやくや
単一仕様能力、零落白夜、どうやらこの能力は自身のシールドエネルギーを攻撃力へと変化させるものなのか。

危うく自滅するところだった。

視線をセシリアの方に向ける――

『――織斑っ!!』

管制室から俺の名前を叫ぶ千冬姉の声にハッと、セシリアの方に視線を向けると、セシリアのISはシールドエネルギーが0になった事でISが解除されていたのだ。

どうやらセシリアはさっきの斬撃の衝撃で気を失っているらしい。

その状態でISが解除されている――つまり、空の上で生身なのだ。

人間は空を飛べない。

ISを装備していないという事は落ちるだけ――落下するセシリアを救えるのは現状ISを装備している俺しかない。

いくら絶対防御があるといってもこの高さから落下すれば、命が危ない。

落下するセシリアを直ぐに追いかける。

観戦していたクラスメイトも現状に気付いたらしく、歓声から悲鳴へと声を上げている。

くそっ、間に合え、間に合え、間に合ええええええー！ー！ー！ー！！

「セシリアアアアアアアアア」

頼む、白式。最後にもう一度だけ俺に力を貸してくれっ！！

そんな俺の願いを聞き入れてくれたのか……ウインドウに
ワンオフ・アビリティれいじんらいこうは単一仕様能力、零迅雷光と表示されている。

これが何なのか、気になったが、今の俺は形振り構ってられなかった。

直ぐに確認ボタンを押すと、肩部、腕部、脚部、胸部、スラスターの各装甲が展開し、露出した内部装甲が赤く発光し出す。

そして加速のスピードが更に上がった。

セシリアが地面に激突——する寸前で何とか間に合い、セシリアの体を抱き抱える。

寸での所で最悪の結末を避ける事が出来た事に安堵する。

抱き抱えたセシリアの柔らかい感触。あれだけツンツンしていてもやはり女の子。女の子って柔らかいんだなあ……、って、いかにかん。

「——んっ……織……斑……一夏……」

セシリアも一瞬、意識が覚醒したようで顔をそちらに向けるが、また気絶したみたいだ。

ふう、やれやれ。危うく大惨事になる所だった。

E p i s o d e 4 .. クラス代表決定戦（後書き）

取り合えず、書き溜めていたものはここで終了です。次話もなるべく早めに更新するつもりです。

Episode 5: 織斑一夏様はわたくしの旦那様 (前書き)

セシリアがデレるんですが、こんなのもアリでしょうか？

Episode 5: 織斑一夏様はわたくしの旦那様

【??.? side】

いくつも展開されているウィンドウの中、映し出しているのはIS学園。

先程まで一夏とセシリアがクラス代表を決める為に争っていた第三アリーナでの様子である。

落下するセシリアを追いかけるように急降下する一夏の白式。

ただ、本来であれば間に合う筈がなかった――

それくらいの距離が一夏とセシリアの間にはあった。

ISのシールドエネルギーが底をつき、後は地面に激突するだけ――

あのアリーナにいる誰もがその悲惨な結末を予想していただろう。

ウィンドウを眺める人物もまた然り。イギリスの代表候補生は重傷を負う、最悪は命の危険までもあった。

しかし、予想は裏切られる。

一夏に、世界で唯一の男のIS操縦者というイレギュラーな存在、織斑一夏に。

「むむむー、最後のあの百式の動き。あれは零落白夜じゃない。面白い、面白いよー♪さすが、いっくん♪」

モニターに映し出されるのは単一仕様能力ワンオフ・アビリティー、零迅雷光れいじんらいこうを発動させた白式。

肩部、腕部、脚部、胸部、スラスターの各装甲が展開し、露出した内部装甲が赤く発光しているのだ。これには白式の設計を手掛けた本人も驚くしかなかった。

セカンド・シフト
二次移行ではなく単一仕様能力の進化。

ISというものはIS操縦者に合わせて進化する。

しかし、白騎士から始まる一連のISで単一仕様能力を発動させる事自体が稀なのだ。その稀な事をISに乗って間もない一夏が発動させた事だけでも驚く事なのに、さらに単一仕様能力を進化させるなど前代未聞にも程がある。

「これはいっくんに会いに行くしかないなー。ちーちゃんや箒ちゃんにも会いたいし。その前にもう少し情報も欲しいから……」

そして手はそのまま忙しくなくキーボードを叩き続ける。

【セシリア side】

窓から流れる風が気持ちいい。

「・・・・・・・・ん」

「気が付いたか？」

瞼をゆっくり開けると、自分はベッドに寝かされ、ベッド脇には織斑先生がいた。

自分は何で寝かされているのだろうか？　——記憶を探る——そうだ、私は負けたのだ。あれだけ卑下していた男に、いえ、織斑一夏という存在に。

「取り合えず、今日はゆっくり休め。さっきまでお前を心配して、織斑や他の生徒もいたのだが、邪魔になるから部屋に帰した」

「———そうですか・・・・・・・・」

織斑先生はまだ仕事が残ってるらしく、私が気付いたという事で保

健室を出て行った。

——織斑一夏。

思い出すのは今日、初めて自分の専用ISに乗って、わたくしと戦った男のIS操縦者。

実践の中で初期化と最適化処理を済ませるという常識から逸脱した行為を行った。
フォーマット ファッティング

その上で実力でわたくしをねじ伏せた。

彼は勝負の最中に言った。

「守られているだけの人生は今日で終わりだ。これからは俺が——俺が千冬姉を、家族を、守ってみせるっ！」

彼は強い意志の宿った瞳でわたくしを射抜いた。

他社に媚びる事のない眼差し。それは自分の父親を逆連想させる。

父は母の顔色ばかりを窺うような人だった。……。

名家に婿入りした父は母に多くの引け目を感じていたのだろう。幼少の頃からそんな父親を見ていた所為で、『将来、情けない男とは結婚しない』という想いを幼いながらに抱かずにはいられなかった。

ISが発表されてからの父の態度は益々弱いものになり、母はそん

な父の態度がどこか鬱陶しそうで、父との会話自体を拒んでるかのよう to 思えた。

母は女尊男卑社会以前から女でありながらもいくつもの会社を経営し、成功を収めた人だった。厳しい人だったが、憧れの人だった。

そう、『だった』。つまり過去形。両親はもうこの世にいない。三年前に事故で他界した。

いつも別々に過ごしていた両親が、その日に限ってどうして一緒にいたのか、今ではその真相も分からない。

死傷者百人を超える大規模な鉄道横転事故。陰謀説も囁かれたが、事故の状況があつさりとそれを否定していた。

両親が帰らぬ人になって、それからのはあつという間だった。

手元には莫大な遺産。金の亡者がわたくしに近寄ってきた。わたくしはそんな金の亡者から遺産を守るために寝る間を惜しんで勉強し、自分を鍛え上げた。

その一環で受けたIS適性テストでA+が出た。政府から国籍保持の為に様々な好条件が出され、わたくしは両親の遺産を守る為、即断した。

第三世代装備ブルー・ティアーズの第一次運用試験者に選抜され、稼働データと戦闘経験値を得る為に日本に着た。そして―――出会ってしまったのだ。織斑一夏と。理想の、強い決意を秘めた瞳を持つ男と。

彼を想うと胸が熱くなる。

意識すると胸をいっぱいにする、熱いのにかく、切ないのに嬉しい気持ち。

——彼をもっと知りたい。

——織斑一夏をもっと知りたい。

【一夏side】

「では、1年1組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでもいい感じですね！」

山田先生は嬉々として喋っている。そしてクラスの女子も大いに盛り上がってる。

しまったあああ————っ!!

つい、勝負だからって熱くなってしまっていたが、勝者がクラス代表になる事を忘れてたあああ————っ!!

後悔しても後の祭り。クラス代表はもう俺に決まったのだから。

クラス代表、簡単に言ってしまうえば委員長。よく考えてみてくれ。普通の学生ならこんなめんどくさいポジションに自分からなろうと

は思わないだろう？ 俺自身そうだった。なのに、なのに……

視線を上げると嬉しそうにニコニコしてる山田先生。

ただ、初めての自分の専用ISというだけでなく、過去数回程度のISへの搭乗の中で一番、自分の感覚と同調したのもセシリア戦が初めての体験だった。

胸の中で沸き起こる高揚感、そして最後に発動した零迅雷光という白式的能力。最後の零迅雷光は白式が俺の為に力を貸してくれたような感じがした。

何もかもが初めての体験だったから、すっかり忘れてたんだ。勝者がクラス代表になるって事を。

「胸を張って下さい。一夏様はイギリス代表候補生であるわたくしセシリア・オルコットに勝った唯一の男性なのですから」

——ん？ 一夏”様”？ あれ？ 今、俺のこと名前で呼んだ？

「やはりIS操縦には実戦が何よりの糧。クラス代表ともなれば戦いには事欠きません。わたくしの”旦那様”になるお方にはやはりもっと自身を磨いていただきたいと思ひまして——」

——ん？ 今度は”旦那様”？ 俺の耳がおかしいのかな？

どうやら聞き間違いではなかったみたいで、セシリアのいきなりの
旦那様発言にクラスメイト達の黄色い怒号が教室中に響き渡る。

「きやああああーっ！ いきなりプロポーズ？」

「セシリア、抜け駆けはダメだよ」

「待ってっ！ 織斑くんは私のなの」

いやいや、俺は誰のものでもないし……。そもそもセシリアの”旦那様”になった記憶もない。

そもそも俺ってセシリアにはよく思われてなかったような……。
・？

「コホン、一夏様はわたくしのように優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクトな女性の伴侶にこそ相応しいのですっ！ 今後はわたくしが一夏様にIS操縦を教えて差し上げれば、それはもうみるみるうちに成長を遂げ——」

セシリアはクラスメイトの声を遮るかのように軽く咳払いをして、話を切り返そうとしたのだが、机を叩き、立ち上がった筈が異を唱えた。

「ふ、ふ、ふざけるなっ！　一夏はお前の旦那なんかじゃないっ」

うん、その通りだ。もっと言ってやれ。

「私のだっ！」

机にダイブした。うん、俺がね。

「ええええっ！　篠ノ之さんも？」

「うっそー。篠ノ之さんってもっと堅い人だと思ってたー」

うん、俺もそう思ってた。箒の方を見ると耳まで真っ赤にしてるが。しかも今の状況って……俺、二人の女の子から告白されてる？　嘘、この俺が？

「そもそも、一夏の教官は事足りている。私が、この私が、一夏に直接頼まれたのだからな」

な、何だ何だ？　『私が』を特別強調した箒は真っ赤になりながら

も殺気立った瞳でセシリアを睨んでる。

しかし、セシリアは箒の視線に動じる事もなく、正面から受け止め、視線を返している。しかもちよつと誇らしげに。

「あら、貴方はISランクCの篠ノ之さん。Aのわたくしに何か御用かしら？」

「ラ、ランクは関係ない！ 頼まれたのは私だ。い、一夏がどうしても懇願するからだ」

懇願？ してねえー

「でも、箒ってランクCなのか……」

「だからランクは関係ないと言っている！ 関係ない奴は黙っておけ」

怒鳴られた。しかもこれって俺が話題なんだよな？ え？ 関係ないのか？

ちなみに俺のランクはBらしいが、これって確か訓練機で出した最初の格付けだから、千冬姉はあんまり意味がないと言っていたような。

「座れ、馬鹿ども」

セシリア、箒の頭を出席簿でばしんと叩いて、ヒートアップしていた二人を座らせる。

さすがは元日本代表にして第一回世界大会の覇者、凄味が違う。

「お前達のランクなどゴミだ。私からしたらどれも平等にひよっこだ。まだ殻も破れていない段階で優劣を付けようとするな」

さすがのセシリアも第一回世界大会の覇者である千冬姉に言われては反論の余地もないらしい。何か言いたそうな顔をするも結局、言葉を飲み込んだ。

「代表候補生でも一から勉強してもらおうと言っただろう。くだらん揉め事は十代の特権だが、生憎今は私の管轄時間だ。自重しろ」

家での千冬姉しか知らない俺からしたら今の千冬姉は何か新鮮だ。いつも家では下着姿でウロウロするわ、酒ばっかり呑んでるわ、俺が作ったおつまみの味に難癖を付けるわ、で傍若無人極まりないのにな。

そういえば、千冬姉は一年の寮長も務めている。宿直室のような所

で寝泊まりしているんだろうけど、部屋の片付けとかどうしてんだろ？

ご飯は学食があるからまだいいが、掃除洗濯を、あの千冬姉が出来るのか？　——うん、無理だな。凄い事になってそうだ。もう24歳にもなる立派な社会人なのに——と、思考に耽っていると頭を叩かれた。

「……お前、今何か無礼な事を考えていただろう？」

「そんな事は全く思っておりません」

席を立ち、敬礼してキツパリと言い放ったのに、また頭を叩かれた。

「——すみませんでした」

あまりにも理不尽。善良な一市民は暴力に屈するしかないのかっ！！

ギロツ！！

睨まれた。

「クラス代表は織斑一夏。異存はないな」

はいとクラス全員が一丸となって返事をした。勿論、俺以外な。

◇◇*◇*◇*◇*◇*

「では、これよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑、オルコット。試しに飛んでみせろ」

所かわって現在は他のクラスメイトにとってISの基本機動を見せる授業。

しかし周りは全員女子。しかも全員がボディーラインがハッキリと分かるISスーツを着ている。

基本、ISスーツは操縦者の動きをダイレクトに各部位へと伝達するためにボディーラインにフィットするように作られている為、スタイルが丸分かりになる。

胸が大きい子はどうダイレクトにつー！！

胸が小さい子は小さくてもその少し膨らんだ胸が………
っ！！

もうね、正直、目のやり場に困る。

箒の胸は破滅的に大きいし、セシリアも改めて見るとスタイルがい
いらしく、胸は箒ほどではないが、充分な大きさがある。

しかも他のクラスメイトの中でもダークホースだったのが、のほほんさんだ。

デ、デケェー。箒より少し小さいくらいか？

普段あんなにのほほんとしてるのに、胸が大きいなんて反則じゃないですか？！

精神年齢20代半ばでも体はまだ10代。込み上げる性的衝動^{リビドー}を抑え込むのも一苦勞だわ！

「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

ハッ！！

千冬姉の言葉に我に返る。いかんいかん、煩惱退散煩惱退散っ！！

ISは一度、最適化^{フィッティング}処理したら、操縦者の体にアクセサリーの形状で待機している。セシリアは左耳のイヤークラス。俺は右腕のガンレット……これって、アクセサリーじゃないよね？ ガントレットって防具だよな？

セシリアはさすがイギリスの代表候補生といったところか、気付けば、ISを既に装着している。俺との対戦で損傷した箇所も既に修復されているようだ。

さて、早く装着しないと千冬姉に怒られる。

精神年齢は俺が上の筈なのに、どうも逆らえない。

頭を叩かれる前にさっさと済ませてしまおう。ISが展開されるイメージを頭に浮かべながら……右腕を突き出し、ガントレットを左手で掴む。

——来い、白式

頭の中で呟く。刹那、右手首から全身に薄い膜が広がっていく。体から光の粒子が解放されるように溢れ、再集結するようにまとまり、IS本体として形成される。

「よし、飛べ」

言われて、即座にセシリアは急上昇し、遙か頭上で静止する。

まだ飛ぶ感覚というのに慣れない。その所為でセシリアの上昇速度に比べるとかなり遅い。

「何をやっている。スペック上では白式の方が出力は上なんだぞ」

そうは言っても、ISに乗ったのなんて、まだ片手で数えるくらいしかないからなく。一応、先日の授業で急上昇、急下降は習ったばかりだ。『自分の前方に角錐を展開させるイメージ』と言われても、どうにも掴めない。

剣の事なら感覚でも分かるんだけどな。ISになると、そうもいかない。

「一夏様、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索する方が建設的でしてよ」

「……あ、あの、セシリアさん？　その、一夏様って……？」

「一夏様。わたくしの名前は呼び捨てでお願いします」

「は、はあ……」

先日のクラス代表決定戦が終わってからというものセシリアの様子がガラッと変わった。

俺に対する接し方が凄く柔らかくなっているのだ。

初日にあれだけツンツンされたから、いまいち違和感があるのだが。

「ところで一夏様。ISに慣れていないのでしたら、わたくしが放課後に指導して差し上げますわ。ISは稼働時間が物を言いますし、何より一夏様は専用ISを用意されたばかり。ここはIS操縦に慣

れている代表候補生であるわたくしの指導が必要だと思ひますの」

「それもそうだな。じゃあ、セシリア。頼めるかな？」

「はいっ！よろこんで——」

『一夏っ！　いつまでそんなところにいる！　早く降りて来い！』

いきなり通信回線から怒鳴り声が響く。見ると、遠くの地上では山田先生がインカムを箒に奪われておたおたしていた。

遙か上空から遠く離れた地上を確認する事が出来るのもISのハイパーセンサーによる補正だ。

『織斑、オルコット。急降下と完全停止をやって見せろ。目標は地表から10センチだ』

「了解です。では一夏様、お先に」

千冬姉の指示に従い、すぐさまセシリアは地上に向かう。そして地表寸前で身を翻し、ピタリと地表から10センチ近く離れたところで完全停止する。

さすがに代表候補生なだけあるな。——じゃあ、俺も行くか。

意識を集中させ、背中の翼状の突起からロケットファイアーが噴出するイメージを頭に浮かべ、姿勢を地上に向け、一気に下降する。そして——

ズドオオオ——ンッ！！！！

——墜落しました。

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った。グラウンドに穴を開けてどうする」

「……すみません」

うーん、かつこわりい。しかし、あれだけ遠く離れた上空から地上に激突しても一切怪我をしていない。さすがISの絶対防御といったところか。

「情けないぞ、一夏。昨日、私が教えてやっただろう」

箒さん？ 昨日教えたというのは、

『ぐっ、とする感じだ』

『どんっ、という感覚だ』

『ずかーん、という具合だ』

という擬音だらけの全く訳分らない I S 講座の事を言っているの
だろうか？

「何か失礼な事を考えているだろう」

顔に出てたかな、俺。

「少しはかつこよくなったかと思えば、んんん！ 大体だな、一夏。
お前という奴は——」

これから箒の小言が始まるかと思いきや、箒を突き飛ばして、セシ
リアが俺に近付いてくる。

「大丈夫ですか、一夏様？ お怪我はなくて？」

「あ、ああ。怪我はないかな。うん、大丈夫……あはは」

か、顔が近いっ！ 目と鼻の先まで近づくセシリア。やっぱりセシリアって美人だよなんて考えてたらセシリアの後ろに阿修羅がいました。

ドス黒いオーラを惜しげもなく撒き散らしながら、箒の長い黒髪でゆらゆらと揺れている。

こ、怖い………

「……………ISを装備していて怪我などするわけがないだろう……………」

「あら、篠ノ之さん。他人を気遣うのは当然の事。それがISを装備していても、ですわよ？ 常識ですわ」

「お前が言うか。猫かぶりめ」

「鬼の皮をかぶっているよりマシですわ」

バチバチッ。二人の視線がぶつかって火花が散っている。周りを見ればクラスメイトのほとんどはそんな二人に脅えている。

「おい、馬鹿者ども。邪魔だ。端っここでやっている」

千冬姉の一喝に二人は黙り込んでしまった。さすが鬼教官。

「織斑。お前はグラウンドに穴を開けた罰だ。片付けをしておけよ」

とほほ………やっぱりこの姉には俺も逆らえそうにないみたいだ。

E p i s o d e 6 : : セカンド幼馴染襲来（前書き）

第6話です。

なかなか話が進まない．．．．．。

本当はもっと早めにUPしたかったのですが、更新が遅くなって申し訳ないです。

Episode 6..セカンド幼馴染襲来

【??? side】

「ふうーん、ここがそうなんだ．．．．．」

時刻にすれば夜。IS学園の正面ゲート前に、小柄な体に不釣り合いなボストンバッグを持った少女が立っていた。

夜風になびく髪は、左右それぞれを高い位置で結び、金色の留め金がよく似合う艶やかな黒色をしていた。

「えーと、受付ってどこにあるんだっけ？」

上着のポケットに乱雑に突っ込まれていたくしゃくしゃのメモ用紙には校舎の案内図みたいのが書かれていたのだが、いかんせん大雑把すぎて、受付が何処にあるのか分からなかった。

「本校舎一階総合事務受付．．．．．って、どこにあんのよ」

文句を言っても解決する事ではないし、校門前でじっとしていても事態は変わらない。結局、その少女は自分で探す事にした。

考えるよりも行動する。よく言えば『実践主義』、悪く言えば『何も考えていない』

入学の時期を外して転入となった経緯は少女に原因があった。

そもそも、その少女は中国代表候補生で、中学2年の時までは日本にいたのだが、ある事情により中国に帰る羽目になってしまった。

その少女は日本で大好きな幼馴染がいたのだが、事情があったために国に帰らなければならず、離れ離れになってしまった。

当然、離れてから暫くは塞ぎ込んだ。

今まで当然だった日常がもう送れないのだから。仲良くなった友人とも、大好きな幼馴染にも会えなくなってしまったのだから。14歳だった少女はそんな日常が無くなった現実に耐えられなかった。

しかし、ひよんな事から少女の運命は劇的に変わる。

ISの適性値も高かった事でIS操縦者として選ばれ、軍の施設でIS操縦者としての訓練を積んだ。

元々の運動神経がよかったのもあり、瞬く間に成績を伸ばし、代表候補生にまでのぼりつめ、専用ISまで与えられるようにまでなった。

そして政府から中学卒業後はIS学園に入学するように言われるが、その少女は首を縦に振らなかった。

——そう、テレビに映る大好きな幼馴染の顔を見るまでは。

世界的にも大ニュースであった。連日のように大好きな幼馴染の名前が、顔が映し出されていた。

凰鈴音にとっても初めて好きになった、初恋の相手、織斑一夏がテレビの向こう側に映し出されていたのだ。

この世界、基本的にIS適性のある者はIS学園に入学する。勿論、強制ではないが。凰鈴音も最初はIS学園に入学するつもりはなかった。しかし、一夏がそこにいるなら話は変わる。

直ぐに政府の高官を呼びつけ、IS学園転入の手続きをさせた。

もう入学手続きを締め切っていた為、転入という手段を取らざるをえなかったが。

これで漸く彼に会える。

離れていた期間は一年間。

一夏を想わなかった日はなかった。

何度、会いたいと思ったか、数えきれない。

寂しさに枕を濡らす事だってあった。

でも、IS学園に行けば、大好きな一夏に会える。

凰鈴音は『男というだけで偉そうにしている腕力だけの子供』が嫌いだった。

苛められた事もあった。そんな辛い時、いつも傍にいてくれたのは一夏だった。

——元気かな？ アイツ

そんな事を考えている時だった。

「だから……でだな……」

声が聞こえてきた。視線を向けると、女子がIS訓練施設から出てくるようだった。どこの国でもIS関係の私設は似たような形をしているから、直ぐにそうだと分かる。

ちょうど受付が分からなくて困っていたところだ。受付の場所を聞こうと、小走りに声の聞こえた先、アリーナ・ゲートまで向かう。

「あのな、そのイメージが全く分からないんだが……」

不意を突かれた。

そう、聞き覚えのある声。

今一番聞きたかった声。

絶対にアイツだ！ 予期しなかった再会ではあるが、再び会えると

いう気持ちが鳳鈴音の鼓動を早くさせる。

一年振りとはいえ、久し振りに会う幼馴染。

——あたしって分かるかな？ 分かるよね？

逸る気持ちをどうにか抑えつけ、その先にいるであろう彼を目指す。

「いち——」

思わず声が裏返ってしまう。それだけこの再会が嬉しかったのだが。

「箒の説明の仕方って独特過ぎて分かりにくいんだよ。大体、『く
いって感じ』って言われても理解出来ん」

親しそうに話をする男女。ISの訓練と一緒にしていたのは誰の目
から見ても分かる。男の方は織斑一夏。大好きな幼馴染なのは直ぐ
に分かった。ただ、問題は一緒にいる女の子である。

——誰？ あの女の子。何で親しそうなの？ っていうか何で名前
で呼んでんの？

先程までの胸の高鳴りが嘘のように消え、ひどく冷たい感情と苛立
ちが雪崩れ込んでくる。

総合事務受付を見付けたのはそれから直ぐであった。

アリーナの後ろにあるのが、本校舎だったからだ。灯りが付いていたので目的の場所だと直ぐに分かった。

「ええと、それじゃ手続きは以上で終わりです。IS学園にようこそ。凰鈴音さん」

事務員の愛想のいい言葉も今の凰鈴音には届かない。

「織斑一夏って何組ですか？」

「ああ、噂の子？ 一組よ。凰さんは二組だから、お隣ね。そうそう、あの子、一組のクラス代表になったんですって。やっぱり織斑先生の弟さんだけあるわね」

噂好きは女の性を地で行くような中年の女性事務員を冷ややかに見ながら、鈴音は質問を続ける。

「二組のクラス代表って、もう決まってますか？」

「この時期だもの。もう全クラス、決まってるわよ」

「名前は？」

「え？ えーと．．．．．聞いてどうするの？」

鈴音の態度に少し戸惑いながら、女性事務員は質問の意図を聞く。

「お願いをしようかと思って。代表、あたしに譲って、って——」

鈴音はにっこり笑顔を浮かべているが、口端はひくひく吊り上っており、青筋を浮かべていた。

【一夏side】

「というわけでっ！ 織斑くんクラス代表おめでとう！」

「おめでとう！」

ぱん、ぱんぱーん。クラッカーが鳴り響き、たくさんの女子が俺をお祝いしてくれている。

場所は寮の食堂、ちらりと見た壁には『織斑一夏クラス代表就任パーティー』とデカデカと書かれた紙が掛けられている。

一組のメンバーは全員いるのは、まあいいとして、よく見ると他のクラスメイトらしき女子や首のリボンの色が違う上級生までもいる。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

さっきから相槌を打っている女子は二組だった気がするんだが……

まあ、俺のクラス代表就任を肴に騒いでるだけだと思っただが、純粹に祝ってくれるのは嬉しい

……そう思わなきゃ、やってられんっ！

「人気者だな、一夏」

俺の隣には箒。何故かムスツとした顔をしているのは気のせいかな？

「はいはい、新聞部です。話題の新生、織斑一夏君に特別インタビューをしました！」

『新聞部副部長 黛薫子』と書かれた名刺を渡される。へー、IS学園にも新聞部なんてあるんだななんて思いながら手渡された名刺を見る。

「ではではぜひ織斑君！ クラス代表になった感想を、どうぞ！」

ボイスレコーダーをずっと俺に向け、無邪気な子供の用に瞳を輝かせてる。こういうのは機を利かせて面白い事でも言った方がいいんだろうか？

「えーと……まあ、なんというか、頑張ります」

こういうのは苦手だ。所詮、典型的日本人なんだ、俺は。

「えー、世界で初めての男性IS操縦者なんだから、もっといいコメントちょうだいよ。世界中の女は俺の雌奴隷にしてやる、とか！」

テーブルにダイブした。しかも勢い良かったせいで頭がヒリヒリする。．．．．．

「えっ?! 雌奴隷．．．．．」

俺の右隣に陣取っていたセシリアが”雌奴隷”という言葉に頬を赤め、ウツトリとしてらっしやる。

いやいや、ないから。ないから。

「まあ、今のは冗談だから勝手に面白おかしく捏造しておくね」

よくない。それはよくないから。こうやって情報発信者の独断と偏見が世の中に浸透していくのか。恐ろしい。

右隣のセシリアは「冗談．．．．．なんですか．．．．．でも、一夏様なら、わたくし．．．．．」とか肩を落としながらも、また妄想に走ってらっしやる。

ちらちらとこちらを伺う眼がまるで獲物を見付けたかのように見えるのは気のせいだろうか．．．．．うん、気のせいだ。そうしよう。

「セシリアちゃん？ セシリアちゃん」

「・・・・・・・・・・はっ！は、はい。何でしょうか？」

「よかったらイギリスの代表候補生でもあるセシリアちゃんのコメントもちょうだい」

「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが、仕方ないですわね」

満更でもないんだろうな。いつもよりも髪の手入れとかに気合が入ってるような気もするし。

セシリアはコホンと咳払いをし、姿勢を正す。

「では先ず、イギリス代表候補生でもあるわたくしがどうしてクラス代表を辞退したかというところ——」

「ああ、ごめん。長くなりそうだからいいや。理由は織斑君に惚れたからってことにしよう」

「なっ、な、ななっ・・・・・・・・・・！？・・・・・・・・・・まあ、一夏様は旦那様になってもらう予定ですが・・・・・・・・・・」

耳まで真っ赤にしながらセシリアがテンパってる。最後にぼそぼそっと聞こえた言葉はどうやら隣にいた俺しか聞こえなかったらしく、ここは敢えてスルーしておこう。うん、それがいい。

「取り合えず、写真を撮りたいから、クラス代表の織斑君とイギリス代表候補生のセシリアちゃん、二人で並んでもらえる？」

「えっ？」

「注目の専用機持ちだからねー。ツーショットもらうよ。あ、握手とかしてくれるといいかもね。何なら肩でも組んでもらってもいいからさ」

「それはダメですっ！」

バン！っと机を立ち上がり、箒は抗議の声を上げる。

「そうだ、そうだー」

「織斑君はクラスの財産だから独り占めはダメー」

他のクラスメイトも抗議する。しかし、クラスの財産って……
・ただの男子学生なんですが……………。

そんなクラスメイトの反応にセシリアはむーっと頬を膨らませてる。
しかし、この娘もなかなか面白い反応するよな。最初はあんなに
ツンツンしてたのに。何でこんなに態度が柔らかくなったんだろう？

「はいはい、じゃあ、握手でいいから。さっさと並ぶ。時間もない
からねー」

で、俺が右手を出すと、セシリアは俺の右手を両手で包んで、自分
の胸まで持っていく。え？え？

「……………ダメですか？」

「いえ、OKです」

そりゃ、見目麗しい女の子に瞳を潤ませ見詰められたら、OKする
しかないだろう。分かるだろ？この俺の気持ち。

はい、そこ。リア充言うな。

一夏もげろ、とかいらないから。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

箒が眉を顰め、じろじろ俺を睨んでくる。

・・・・・・・・
恐いんだが。

「それじゃあ撮るよー。 $35 \times 51 \div 24$ は？」

「はい？」

「正解は 74.375 でしたー」

意味不明な掛け声と共にパシャッとデジカメのシャッターが切られる。

気が付けば、箒以下クラスメイト、果ては違うクラス、上級生に至るまで俺らの周りにいた。

「もう何やってるのよー」

「セシリアだけに抜け駆けはさせません！」

「これもクラスの思い出という事で」

口々にクラスメイト達はセシリアを丸め込むような事を言ってる。
セシリアはセシリアで苦虫をかみつぶしたかのような顔をしてるし、
箒はふんっ！と顔を背けてる。

結局、この『織斑一夏クラス代表就任パーティー』は夜10時過ぎ
まで続いた。

しかし今更ながらに思うが、10代女子のパワーは凄まじい。

前世の記憶があるお蔭で現在の俺は精神年齢は20代だ。夕方から
始まって夜のこの時間まで騒げる女子のエネルギーに充てられ、妙
に疲れた。

前世も含めて、この学園に来るまで、これだけの女の子に囲まれる
事なんてなかったからな。

【箒side】

夜10時過ぎまで続いたパーティーを終え、部屋に戻ると一夏はベ
ットにその身を投げていた。

全くだらしない。

しかし、一夏の奴、デレデレしてたな。

「今日は楽しかっただろう。よかったな」

どうしても自分の感情が抑えきれない。”嫉妬”、そう私ではない他の女を見る一夏を見るのが妙に腹立たしたかった。

「まあ、俺の為に開いてくれたパーティーだからな。楽しかったって言ったら楽しかった……のかな」

むっ。パーティーでは一夏に迫る女性は少なくなかった。クラスメイトだけではなく他のクラスや上級生まで一夏を狙ってるみたいで何度も一夏に話しかけていた。

しかし侮れないのがセシリア・オルコット。

一夏を自分の旦那様とまで呼ぶセシリアに危機感を抱いていたのかもしれない。

このままでは一夏が他の女に取られてしまう、と。

だから私もアプローチをしなければ。

一夏がクラス代表に就任すると山田先生に言われた時に、セシリアの”旦那様宣言”に充てられ、勢い余って告白めいた事を言っ

まった気がするが、現状何か変わったか、たとえば、何も変わっていない。

私に魅力がないのだろうか？

不安になる。

でも、一夏と再会後、初めて手合せした際にはだけた胸元を凝視していたりもするから、全く無いというわけではないだろうが……

「今から寝間着に着替える。向こうを向いていてくれ」

「なあ、箒。前も言ったが、着替えは俺がない時に——」

唐変木は一夏に枕を投げつける。

「分かった分かった。向こう向いてるから、終わったら言ってくれ」

制服を脱ぎ、下着姿になり、自分の大きい胸を見る。

前までは邪魔なものとしか思えなかったものも、今では一夏に私を女として認識させられる武器になる。

この姿で迫れば——

無理だ、無理っ！　今の私にそこまでの度胸はないっ！

熱くなった頭を冷ますようにブンブンと首を振る。

「い、いいぞ」

「あれ？　帯変えたんだな」

帯を変えた事に気付いてくれた、それだけで嬉しい気持ちが込み上げてくる。

好きな相手には些細な変化でも気付いてほしい。

帯を変えた事に気付いたという事は毎日、私を気に掛けていてくれるからではないのか。

そんな何気ない一言で私の態度も急反転する。現金な女かもしれない。でも、それでも好きな相手に些細な変化でも気付いてもらえた事は嬉しい。

「よし！　では眠るとしよう」

この日の夢は一夏と一緒に過ごした昔の事を思い出していた。

【二夏side】

「織斑くん、おっはよー。ねえ、転校生の噂、聞いた？」

朝。席に着いた瞬間にクラスメイトから声を掛けられた。

「転校生？　こんな時期に？」

4月のこの時期。入学じゃなく転入。しかもここはIS学園。誰でも入学できる場所ではない。

「なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

何時の間にか傍まで来ていたセシリア。

「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？　騒ぐほどの事でもあるまい」

窓際の自分の席に行ったはずの筈まで俺の傍にいた。

でも、中国の代表候補生かぁー。強いのかな？

5月にはクラス対抗戦がある。いずれ戦う事になるのかな。

「一夏様。クラス対抗戦に向けて、より実践的な訓練をしましょう。相手はこのわたくし、セシリア・オルコットが務めさせていただきますわ。なにせ、専用機を持っているのはこのクラスでわたくしと一夏様だけなのですから」

『だけ』という部分をかなり強調された。……まあ、実際そうなんだけどね。訓練機は数に限りがある為、申請して直ぐに使えるわけではない。手っ取り早く模擬戦するならセシリアに頼んだ方が早い。

それにただ鍛錬するよりもより実戦形式な模擬戦の方が感覚も早く取り戻せるはずだ。

なにせ、前世の記憶と経験があると言っても、今の体は過去に鍛えた体ではない。

しかも、中学三年間は帰宅部で全く鍛錬もしていなかったからな。前世の記憶と経験を継承してからは勘と感覚を取り戻すためにひたすら一人で鍛錬もした。

でも、やはり相手がいるというのはいい。一人ではできなかった事もできる。

特に前回のクラス代表決定戦のおかげで随分、勘と感覚は取り戻せてきている。

「織斑くん、頑張ってるね！」

「フリーパスの為にもね！」

そう、やる気を出させるためか、一位のクラスには優勝賞品として学食デザートの半年フリーパスが配られる。

俺は甘いものはそんなに好きじゃないけど、女子はやはり甘いものが好きなようだ。燃えている。

「今のところ、専用機を持ってるクラスの代表って一組と四組だけだから余裕だよ」

「——その情報、古いよ」

ん？教室の入り口の方からふと声が聞こえ、視線を向けると——

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単に優勝できないから」

「鈴………？　もしかして、鈴………なのか？」

「そうよ。中国代表候補生、ファン・リンイン風鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

中学二年の時に家庭の事情で転校していった鈴が何故か目の前にいた。

Episode 6. 5.: セシリアの華麗なる妄想（前書き）

第6話をUPした後に思い付いた話で、衝動的に書いたものなのでいつもに比べ、かなり短いです。

ちなみに今回の話を読まなくても本編には関わらないので読み飛ばしてもらってもOKです。

あくまで番外編なので。

セシリアが暴走して変なキャラになっていますが、本編ではちゃんと見せ場を作る予定なので安心してください。

Episode 6. 5. セシリアの華麗なる妄想

『織斑一夏クラス代表就任パーティー』の後、セシリアは学生寮の自室へと戻っていた。

彼女はじっと写真を眺めていた——そう、『織斑一夏クラス代表就任パーティー』の際に一夏とツーショットで撮った写真である。

一夏の右手を両手を添え、抱え込むように自身の胸にまで持っており、身を寄せ合っている写真。

実は写真撮影の際にクラスメイトに邪魔をされたのだが、黛先輩に必死に頼み込み、一夏をこっそり呼び出し、皆に隠れて写真を撮っていたのだ。

デジカメでの撮影だったのでプリントアウトするだけで写真は現像される。

パーティーが終わった後、黛先輩が部屋にまで来て、プリントアウトした一夏との写真を渡してくれたのだ。

黛先輩には感謝してもしきれない。

まあ、一夏は世界でも唯一無二の男性IS操縦者なので話題には事欠かない。

今後、何かあった時に直ぐに黛先輩に知らせる——という条件で写真の件を了承してくれたのだ。

未だに忘れられない——クラス代表決定戦の時の一夏の言葉。

『守られているだけの人生は今日で終わりだ。これからは俺が——俺が千冬姉を、家族を、守ってみせるっ！』

わたくしも一夏様に守られたい——そして、わたくしも一夏様を守りたい——

その想いは日を追う毎に強くなっている。

彼を想わない日はなかった。

まだ知り合って一ヶ月も経っていないが、恋をするのに時間は関係ない。

そして、インタビューの際の黛先輩が言っていた言葉を思い出す。

『えー、世界で初めての男性I S操縦者なんだから、もっといいコメントちょうだいよ。世界中の女は俺の雌奴隷にしてやる、とか！』

——世界中の女は俺の雌奴隷にしてやる。

もしも、こんな台詞をクラス代表決定戦の時のような強い眼差しで言われたら……

◇◇*◇*◇*◇*◇*

※以下、セシリアの妄想です。

『セシリア、お前を俺の雌奴隷にしてやる』

『あ．．．．．あ、あ、そんな．．．．．』

『お前を俺色に染め上げてやる』

『．．．．．あ．．．．．あ、はい．．．．．。わたくしを
一夏様の色に染め上げて下さいまし』

目の前には一夏様が。あの強い眼差しでわたくしの心を射抜いてくる。

そして、一夏様の手でわたくしの首に首輪を付ける。

ああ、これでわたくしは一夏様の所有物。

一夏様こそ、わたくしの全て．．．．．。

『さあ、跪け。そしてこの俺に奉仕しろ。出来るな？ 俺の愛おしいセシリア』

『はい、今から一夏様にご奉仕致します』

そして、わたくしは一夏様の体の至る所を口と舌を使って、愛撫する。

『もっと丁寧なやれ』

『はい、一夏様………』

大事な宝物を愛できるように優しく、そして丁寧に、——そして世界で一番愛おしい一夏様の唇に舌を這わせ、舌で舐め、吸い付くようにわたくしは口づける。

そして一夏様はその逞しいお体を惜しげもなく晒し、わたくしも制服を脱ぎ、下着姿だけになる。

そして燃え上がる二人は——

※以上、自主規制が入りました。

※これ以上は危ない描写になるので控えさせていただきます。

◇◇*◇*◇*◇*◇*

はぁ、いいっ、いいですわ。このシチュエーションっ!!

現実でこんな事をされてしまったら……わたくし……
・わたくしっ!

「おい、セシリア?　　っていうかセシリアさん?　早く現実に戻
ってきてー」

その日の夜はルームメイトの呼びかけも空しく響き渡るだけで妄想
の世界へと意識を落としたセシリアには現実の声はまるでその耳に
届いていなかった。

頬を赤らめ、ぼーっとしているかと思えば、いやんいやんというか
のように身をよじる。

この娘は頭がおかしくなったんではないだろうか?　と、本気で心
配してしまうルームメイトであった。

Episode 6. 5.: セシリアの華麗なる妄想（後書き）

うーーん、やってしまった感がある。

次はちゃんと本編の続きを書くんで見捨てずに見てやって下さい。

E p i s o d e 7 : 鈴の決意（前書き）

セシリアが暴走するおかげで話が一向に進みません。

Episode 7：鈴の決意

【二夏side】

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単に優勝できないから」

「鈴………？　もしかして、鈴………なのか？」

「そうよ。中国代表候補生、ファン・リンイン鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

中学二年の時に家庭の事情で転校していった鈴が何故か目の前にいた。

まあ、昔から知ってるからだろうが、小さく笑みを浮かべ、ふふんという顔で格好付けてるその様が——似合わない。

「鈴、何格好付けてるんだ？　すごい似合っていないぞ」

「！！　な、なんて事言うのよ、アンタはっ！」

「まあ、その何だ。一年振りだな。会いたかったぞ、鈴」

「え!?!? 本当——」

さっきまで気取ってたような表情をしていた鈴が、喜色を含んだ声を上げそうになった瞬間、鈴の背後に鬼が現れた。

バシンッ! 教室の出入り口を塞いでた鈴の後頭部に痛烈な出席簿アタックが炸裂する。

「いたっ! 誰よ! って、ち、千冬さん?」

「織斑先生と呼べ。入り口を塞ぐな。邪魔だ。凰鈴音、もうSHRショートホームルームの時間だから自分の教室に戻れ」

「す、すみません.」

鈴は昔から千冬姉の事が苦手だった。何故かは知らんが。

「また後で来るからね! 逃げないでよ、一夏!」

鈴はどうやら隣のクラスらしく自分の教室まで猛ダッシュで退散していった。

相変わらず騒がしい奴だな。でも、一年前と変わってない。

引越す寸前の頃の鈴はどこか寂しげな表情をしていたからな。やっぱり、あいつはあれくらい元気なくらいがいい。

まあ、本当、体型とかも昔のまんまなんだけどな。

胸くらいもう少し大きくなってもいいようなもんだが……もしや、もう成長限界値なのかっ?!

でも、小さいのでも俺は好きだけどな。なにせ、俺はおっぱい男爵

――

ゴツンっ!

千冬姉のげんこつが容赦なく俺の頭に振り下ろされた。

「織斑、私の前で考え事とは余裕だな。それだけ余裕があるなら日が暮れるまでグラウンドを走り続けるか?」

「すみませんでした……」

この人には逆らえません……。

しかし、先ほどからやたら視線を感じる。周りの女子からの視線が。特に箒とセシリアの刺さるような視線が痛いくらいに突き刺さる。

◇◇*◇*◇*◇*◇*

この日の午前は休憩時間の度に箒やセシリア、それに他のクラスメイトから先程の鈴との関係を質問された。

昔の幼馴染で一年振りに再会したんだ、と説明して、やっと事なきを得たが……。

「取り合えずお昼になったし学食行こうぜ」

何時も通り、箒やセシリア、それにクラスメイト数名も付いてきて、学食に向かい、券売機でメニューを決め、券を買う。

「待ってたわよ！ 一夏」

俺達の前に立ち塞がったのは今朝一年振りに再会したばかりの幼馴染、鈴だった。

「取り合えず、そこにいられると食券出せないから、どいてくれ」

「う、うるさいわね。分かってるわよ！」

鈴が持つお盆の上にはラーメンが鎮座している。

「のびるぞ？」

「わ、分かってるわよ！ 大体、アンタが遅いのがいけないんでしようが！」

親切で忠告したのに逆切れされたよ。さすが、鈴。昔からその横暴な性格は変わっていないらしい。

取り合えず、食券を学食のおばちゃんに渡す。

「それにしても久し振りだよな。ちょうど丸一年になるのか。元気にしてたか？」

「げ、元気にしてたわよ。そ、それで、あの………」

ん？ いつもハキハキしてる鈴が何か言い淀んでる。何かしたっけ、俺？

「今朝の．．．．．会いたかった．．．．．って、本当？」

「当たり前だろ。鈴が転校してきてからずっと一緒にいたんだ。会いたいと思うのは当然だろ？」

「うん！ うん！ あたしも会いたかった！」

何か背後からドス黒い空気が流れてくるのは気のせいだろうか？

「一夏あ！！！」

「へあ？ は、はい！ な、何でしょうか？」

箒のあまりにもドス黒い気に充てられ、声が裏返ってしまう。

「一夏様？ 注文の品、出来ていましてよ？」

セシリアは笑顔なんだが、その笑顔が恐い．．．．．

今日の日替わり定食は鯖の塩焼き定食の様だ。おお、視線を向けられ

ば、ちょうど空いてるテーブルが目についた。ここは戦略的撤退を
する必要がある。

このまま、ここにいたら、箒とセシリアに何をされるか分かったも
んじゃない。

で、俺が座るテーブルには鈴が。隣のテーブルには箒にセシリア、
それにクラスメイトで席に座る。

「ところで鈴はいつ日本に帰ってきたんだ？ おばさんは元気か？
いつ代表候補生になったんだ？」

「質問ばっかしないでよ。アンタこそ、なにIS使ってるよ。ニュ
ースで見た時びっくりしたじゃない」

久しぶりに会った幼馴染との会話は尽きない。お互いの空白期間が
気になるのも当然の事だ。箒の時もそうだったしな。

バンっ！ 視線を向けると、目の前には俺達の会話を中断させるか
のようにテーブルを叩いた悪魔もとい箒とセシリアがいた。

「一夏、そろそろどういう関係なのか説明してほしいのだが」

「そうですわ、一夏様。まさか……とは思いますが浮気で
すか？」

他のクラスメイトも興味津々の様でこちらに視線を向けてる。

「な、何？ 一夏”様”？ っていうか、浮気って……一夏っ！ まさか、アンタ、この外国人と付き合ってるんじゃないんでしょうね?!」

何か話がとんでもなくめんどくさい方向へと転がり始めた。泣きたくなる……

「取り合えず、説明すると、コイツはただの幼馴染。んで、こっちの黒髪の子が前にも説明したと思うが小学校からの幼馴染で、俺の通ってた剣術道場の娘」

「……………」

何故か鈴が睨んできたが、無視しておこう。関わると余計にめんどくさくなる予感がする。

「幼馴染？」

「ああ、そうか。箒が知らないのも無理ないよな。箒が引越した

のが小四の終わりだったろ？ 鈴が転校してきたのが小五の初めの頃で中二の終わりに国に帰ったから、会うのは一年ちょっと振りなんだ」

箒と鈴。どちらも幼馴染だが、入れ替わりだったからお互いに面識ないんだよな。

ふうーん、と鈴はじろじろと箒を見る。箒は箒で負けじと鈴を見返していた。

「初めまして。これからよろしくね」

「ああ、こちらこそ」

握手を交わす二人。しかし二人の間では火花が散ったように見えた。何だ？ 今のは？ 幻覚が見えるなんて、俺疲れてるのかな？

「で、そっちの金髪の娘とはどういう関係なの？」

さっきの一夏様宣言の事を気にしているのだろう。

「えっと、この娘はイギリスの代表候補生でセシリア・オルコットクラスメイトだ」

「一夏様。それは違います。あなたの妻になる者です」

だあああー！、さらにややこしくするなあああー！！

最近、セシリアのアプローチが日に日に積極的になってきているのは気のせいだろうか？

「それは違うっ！！」

セシリアの暴走を箒が遮断する。いいぞ。この暴走を止めるのは箒しかない。

「はあ、何かアンタもいろいろ苦労してるのね……」

鈴は鈴で俺に同情の視線を向けてきている。あはは、もう笑うしかねえ……

「ところで一夏。アンタ、クラス代表なんだって？」

「ああ、気が付いたらクラス代表になってた」

「ふうーん、そうなんだ……」

鈴はスープだけになった丼を持って、ごくごくとスープを飲む。基本的に鈴は女の子なのに『女々しい行為はイヤ』という性格で……まあ、何とか豪快だ。

でも、こういう性格だから何の気兼ねもなく友達付き合いが出来るわけだが。

「あ、あのさあ。ISの操縦にはまだ慣れてないでしょ？　よかつたらあたしが見てあげてもいいけど？」

頬を赤らめ、視線だけこっちに向けてくる。鈴にしては齒切れの悪い言い方だな。どうしたんだろう？

「本当か？　そりゃ助か——」

ダンッ！！　二匹の悪魔がテーブルを叩いた！！

「それは結構だ。既に一夏には私が付いている」

「あなたは二組でしょう？　敵の施しは受けませんわ」

おお、びっくりした。箒とセシリアは鬼気迫るような顔をしてる。それだけクラス対抗戦に燃えているという事なんだな。ここは俺も見習おう。

「あたしは一夏に言ってんの。部外者は引っ込んでてよ」

「私は関係者だっ！」

「わたくしは一夏様の妻ですっ！」

「「お前は黙ってろっ！」」

おお、箒と鈴、二人の幼馴染の息が今ピッタリと合った。セシリアはむうーっと頬を膨らませてるが。

「と、取り敢えず、一夏様は一組の代表です。ですから、一組の間が教えるのが当然ですわ。あなたこそ後から出てきて何を図々しい事を」

「後からじゃないしね。あたしの方が付き合いは長いんだし」

「そ、それを言うなら私の方が早いぞ！ それに一夏は何度もうちで食事している間柄だ。付き合いはそれなりに深い」

「うちで食事？ それならあたしもそうだけど？」

鈴の家は中華料理屋だったからな、千冬姉が家にいる時は食事を作ってたんだが、IS操縦者になってからはあまり家に戻ってこなかったから、作る事はしなくなった。

鈴の家の中華料理屋は安くて量も多く、しかも美味しかった。だから週に4、5回は通ったな。

「いつ、一夏っ！ どういう事だ！？ 聞いていないぞ、私は！」

「わたくしもですわ！ 一夏様、納得のいく説明を要求します！」

「説明も何も……幼馴染で、よく鈴の実家の中華料理屋に行ってた関係だ」

嘘偽りなく事実を筭とセシリアに説明すると二人は安堵した表情を浮かべ、今度は逆に鈴がむすうーっと膨れっ面を晒してる。

「そういえば、親父さんは元気にしてるか？ 久し振りに会いたいな」

「あ………。うん、元気——だと思っ」

ん？ 急に鈴の表情に陰りが差して、妙な違和感を感じた。

「そ、それよりさ、今日の放課後って時間ある？ あるよね。久し振りに会ったんだし、どこか行こうよ」

「生憎だが、一夏は私とI Sの特訓をするのだ。既に放課後は埋まっている」

「そうですわ。クラス対抗戦に向けて、特訓が必要ですよ。特にわたくしは専用機持ちですから？ ええ、公私共に一夏様にはわたくしの存在は必要不可欠なものなのですわ」

セシリアの暴走はもうおいておこう。つつこむのも疲れるぜ。

「じゃあ、それが終わったら行くから。空けといてね。じゃあね、一夏！」

俺の了解も無しにラーメンのスープを飲み干して、鈴は片付けに行ってしまう。そして、そのまま学食を出て行った。

箒もそうだが、誰も俺の都合なんて考慮してくれないんだな。

そんな俺を不憫に思ったのか、隣のテーブルで話を聞いてたのほほんさんが俺の肩にぽんと手を置いて

「おりむー。私はいつでもおりむーの味方だからねー♪」

のほんさんは、ええ娘やあゝ

【鈴
side】

予想はしていた。

一夏はあれでもモテる方だ。中学時代、あたしが知ってるだけでも一夏を好きな娘は何人かいた。

でも、まだ常識の範疇だ。

それが此処 I S 学園では多くの女子が一夏を狙っている。

箒やセシリアはもう丸分かりだったが、一緒に同席していた一組のクラスメイトもそうだし、何よりあの学食の中で一夏を遠目で見ている女子の多さにびっくりした。というか、ほぼ全員が見ていたかもしれない。

二組でも一夏の話題は出るし、どうやってお近づきになるか作戦を立てている女子までいた。

今の世の中、ISに乗れるというのは一種のステータスだ。

ISに乗れるのは女性だけ。

だからこそ、女尊男卑という風潮が世の中には当然のように広まっている。

そんな世の中で唯一ISに乗れる男性、そう織斑一夏は世界中から注目を集める。

もともと一夏は顔は悪くない。寧ろ、その、あの……あ、あたしのタイプだったりする。しかもど真ん中ストライクゾーン……

知り合った当初は仲は良くなかった。

というよりも陰悪だったと言ってもいい。

あたし自身、物怖じしない性格というのもあって、クラスの男子とは意見が事ある毎にぶつかっていた。

気が付けば、転校初日から数日たっても友達は出来なかった。

そしてある日、いつものようにあたしをからかってくる男子達を止めたのが一夏だったのだ。

その時からだろう、一夏の事を視線で追いかけるようになったのは。

好きと自覚したのがいつからなのかは覚えてない。

気が付いたら、好きになってた。

それからあたし達は常に一緒に行動してた。

週に4〜5回はうちの食堂にご飯も食べに来てたから、一緒にいない時間の方が少なかったんじゃないかと思えるくらいに。

中学に入ってから、弾や数馬とも仲良くなり、4人で行動する事も多くなった。

でも、ある事情であたしは中国に帰国する事になった。

そしてやっと再会できたのだ。久し振りに見た一夏は男らしく成長していた。

——やっと逢えた。

しかし、此処に来てから思ったのは常に一夏の周りには他の女がいる。

IS学園で初の男のIS操縦者だ。モテるのは仕方ない。でも、常識を超えたモテ方をしてるなんて……油断してたわっ！

今日からはアタックあるのみ！

何か変な外国人が奥さん気取りなのが気に食わないけど、最後に笑うのはこのあたしなんだからっ！

Episode 8: 主人公という立場が怪しくなってきた一夏君（前書き）

なんか、もうね．．．．．

すいませんっしたー！

Episode 8：主人公という立場が怪しくなってきた一夏君

【一夏side】

前から思ってたんだが、ISって装着すると、おっぱい強調されるよな。

放課後の第三アリーナ。箒が訓練用IS『打鉄』を装着、展開していた。

実際これまでもセシリアがブルー・ティアーズを装着している時もおっぱいが強調されていたのだが、日を追う毎に何とか我慢する事が出来るようになった。

でもな、何というかおっぱいの大きさには定評がある箒さんがISを装着すれば、どうなるか分かるよな？

実際、目の前にしてみ？

この俺のように獯猛リビドーな性的衝動が溢れんばかりに暴走するから。

そうです。さっきから俺は箒を直視できません。直視したら大変な事になるのが分かってるから。

タスケテ、千冬姉。

「……………か……………ちか……………一夏っ!!」

「へあ？　は、はい！　何でしょうか？」

「ん？　何で敬語なのだ？　取り合えず今日から私もISで訓練に付き合うからな」

「．．．．．せつかくISにおいてはわたくしと一夏様だけの模擬戦が出来たのに．．．．．」

「一夏だって、近接格闘戦の訓練もしておきたいだろう。だからこそ、私の出番というわけだ」

まあ、確かにセシリアは遠距離型だから近距離格闘戦の訓練は出来ない。

ありがたいと言えば、ありがたいのだが．．．．．強調されたおっぱいに視線が向いてしまう。

「では一夏、はじめよう。刀を抜け」

いかんいかん。取り合えず邪念は振り払って、今は訓練に集中するでしょう。

御剣一刀流の技と勘が現在の俺の体にどれくらい馴染んでるか試しておく必要もあるしな。

「お待ちなさい！ 一夏様のお相手は妻であるこのわたくしの務め！ セシリア・オルコットをおいて他にいなくてよ！？」

ここでもまたセシリアの暴走はとどまる事を知りません。正直、泣きたくなってきた。

「ええい、貴様はいつもいつもっ！ ここではつきりさせてやるっ！ 一夏のお嫁さんになるのは、この私だっ！」

あるええええー！？ 箒さんまでも暴走してらっしゃる？！

もうね、最近思うんだよね。

君達の暴走がひどすぎて、正直俺の設定（前世の記憶と経験を継承）が薄れてきちゃってるような気がするんだよね。

あれ？ 主人公って俺だよね？

セシリアじゃないよね？

箒でもないよね？

そんな俺を放置して、模擬戦を始める箒とセシリア。

正直ね、置いていかれてる気がするんだ。

このままじゃ主人公としての立場が危うい気がする．．．．．
つの間にかタイトルが『セシリアの華麗なる妄想』とか『箒の放課
後ツンデレタイム』とかになりそうな気がする．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．

ふざけるなあー！ー！！

「主人公はこの俺だあああー！ーっ！！」

意味不明な咆哮を上げながら俺は覚えたてのイグニッション・ブースト瞬時加速を使い、箒と
セシリアに一気に迫る。

「なっ！ 一夏っ?!」

「一夏様!?!」

結局、二対一になってしまったが、関係ない。

ここで黙って見ていては男が廃るっ！

嘘です。主人公という立場を剥奪されないためにも俺は必死になる
しかないんですっ！！

「うわああーっ！ この立場は誰にも渡さぬっ！ 渡さぬ
ぞおおーっ！！」

「言ってる事は全く意味が分からんが．．．．． 凄い気迫だっ！
さすがだな、一夏」

「それでこそ未来のオルコット家を支える次期当主にふさわしいお
方ですわ」

◇◇*◇*◇*◇*◇*

「はあはあ．．．．．で、では．．．．． 今日はこちらで．．
．．．終わるとし、しよう．．．．．」

ぜえぜえと息が切れ、片膝を付く筈に、倒れ伏してるセシリア。

結局、最後まで立っていたのは俺だけでした。

主人公の面目躍如といったところでしょうか。

男には負けられない戦いがあるっ！

「ふう．．．．．」

展開解除。と同時にISの補助がなくなるので、疲れが一気に体のしかかってくる。

でも、こういう疲労感はなかなか心地いいものである。

「取り合えず、二人とも立てるか？」

左手をセシリアに、右手を箒に差し伸べ、二人を優しく立ち上げさせる。

二人は俺とは違う反対側のピットなので、そこまで付き添ってから、自分のピットへと戻る。

しかし、今日の箒の強調されたおっぱいは危険だった。

というか、IS操縦者って女性しかないから、男の俺には本当に大変だ。

IS装着で強調されるおっぱいを見てて負けました、とか恥ずかしすぎる。慣れないとなぁ。

ピットに戻って、汗をタオルで拭っていると、バッシュとスライドドアが開いて鈴が現れた。

「おつかれ。はい、飲み物はこれでいいんだよね？」

手渡されるのはスポーツドリンク。しかも俺の事をちゃんと理解しているかのように冷えていないドリンクだ。運動後の熱を持った体に冷たい飲み物は体に毒だからな。さすが幼馴染。ちゃんと分かっている。

「変わってないよね、一夏って。若いくせに体の事ばかり気にしているところ」

「そりゃそうだろう。何をするにしても体が資本だ。若いうちから不摂生したらいかんのだぞ」

「ジジくさいよ」

「うっせ」

うん、何かこういう雰囲気は落ち着く。お互い気心知れた仲だからな。

「ね、ねえ、一夏。やっぱあたしがいないと寂しかった？」

「そりゃ、遊び相手が減るのは大なり小なり寂しいだろ」

「そういうじゃなくってさあ」

今日の鈴はかなり上機嫌のようでさっきから笑顔を絶やさず、話を続ける。何かいい事でもあったんだろうか？

「あっ、そうだ。今日は俺が最初にシャワー使ってもいい事になってたんだ。早めに部屋に戻らないと」

いつもは箒が先にシャワーを使う事になっているんだが、今日はまだ動けそうにないという事でさっき箒とセシリアを送り届けた後、箒から先にシャワーを使ってもいいと言われてたんだっけ。

「えっ？ 一夏って一人だけの男子生徒だよね？ 誰かと同室なの？」

さっきまでの上機嫌はどこへやら一転して不機嫌面になる。

な、何だ？

「あ、ああ、お前も会っただろ？　今、箒と同じ部屋なんだよ」

「・・・・・・・・・・は？」

「い、いやな、俺の入学ってかなり特殊な事だったから別の部屋を用意できなかったみたいでさ。まいっちゃうよな・・・・・・・・・・はは・・・・・・・・・・」

目の前には引きつった笑みを浮かべる鈴——もとい鬼がいました。

「ねえ、それってあの子と寝食を共にしてるって事？」

「・・・・・・・・・・ははは・・・・・・・・・・ま、まあ、そうなりますよね。で、でも見ず知らずの相手よりも幼馴染の箒でよかったよ。これで見ず知らずの他人だったら寝不足になっちゃうからな・・・・・・・・・・ははは・・・・・・・・・・」

正直、目の前の鬼を直視する事が出来ません。

「・・・・・・・・・・ったら、いいわけね」

「え？ えっと？」

俯き加減の鈴が何と言ったのか聞き取れず、思わず聞き返してしまった。

「だから！ 幼馴染だったらいわけな！？」

いきなりの鈴の方向にたまらず驚いて身を引く。

「分かった、分かったわ。ええ、ええ、よく分かりましたとも」

急に一人で納得し始めた鈴は何度も何度も頷いてる。え？ え？
何が分かったんだ？

「一夏っ！」

「はいっ！ 何でありましょうか？」

「幼馴染は二人いるって事、覚えておきなさいよ」

そう言って鈴は足早にピットを立ち去って行った。何なんだ、一体……？

【side】

時刻は夜の八時過ぎ。夕食も終わりとつろぐムードの中でいた私と一夏の前に一夏の幼馴染、凰鈴音が現れた。

「というわけだから、部屋代わって」

しかも意味不明な事を言ってくる。

「ふ、ふざけるなっ！ 何故、私がそのような事をしなくてはならない!?」

「いやあ、篠ノ之さんも男と同室なんて嫌でしょ？ 気を遣うし。のんびりできないし。その辺、あたしは平気だから変わってあげようかなって思ってたさ」

何度も何度も会話が堂々巡りしている。さっきから一向に会話が進

まない。

でも、私も負けるわけにはいかないのだ！

幼馴染という立場はこの目の前にいる凰鈴音が来てしまった所為で利点が薄くなってきている。

恋敵ライバルが日を追う毎に増加している今、ここで同室という利点までも手放すわけにはいかないっ！

「別に嫌とは言っていない！ 寧ろ全然余裕だ！」

一夏は一夏でこの場の雰囲気気圧されてるのか、冷や汗をたらしている。

くっ！ 少しは私の味方になってもいいものをっ！

「と・に・か・くっ！ 今日からあたしもここで暮らすから」

「ふ、ふざけるなっ！ 出ていけ！ ここは私の部屋だ！」

ヤバイ、この恋敵ライバルは手ごわいっ！

「『一夏の部屋』でもあるでしょ？ じゃあ、問題ないじゃん」

そう言って、一夏の同意を得ようとする目の前の恋敵^{ライバル}。このまま、一夏がこの恋敵^{ライバル}の味方をしたら、私に勝ち目がなくなる。

幸い、一夏はオロオロしてるだけだが。

ここで反撃だ！

「とにかく！ 部屋は代わらない！ 出て行くのはそちらだ！ 自分の部屋に戻れ！」

「ところでさ、一夏。約束覚えてる？」

「無視するな！ ええい、こうなったら力づくで……」

そのまま立てかけてあった竹刀を手に取り振り下ろそうとした瞬間

――
「箒。それはやり過ぎだ。」

竹刀は振り下ろされる事はなかった。竹刀の先を一夏が掴んでいたからだ。

「す、すまない……」

しまった。困惑していたのが自分でも分かる。これは自分の失態だ。
基本的に武器を人に向けていいものではない。

【二夏side】

気まずい。ええ、非常に気まずいですとも。

箒は箒でさっきの失態を引きずって無言だし、鈴は鈴でふふんとした顔で俺の返答を待っている。

えっと、約束覚えてる？とかだったよな。

「鈴、約束っていうのは」

「う、うん。覚えてる……よね？」

鈴は顔を伏せ、ちらちらと上目遣いで俺を見ってくる。心なしか恥ずかしそうにしているが……思い出せるのはあの時の約束の

事か？

「えーと、あれか？ 鈴の料理の腕が上がったら毎日酢豚を——」

「そ、そうっ。それ！」

よし、あつてた！

「食べさせてあげるって。毎日俺にメシをご馳走してくれるって約束だろ？」

「・・・・・・・・はい？」

あれ？ 急に体感温度が下がったような気がする。

パンツ！

「・・・・・・・・へ？」

いきなり頬をひっぱたかれた。いきなりの事で何が何だかよく分からない。

ゆっくりと視線を戻すと、鈴は肩を小刻みに震わせ、怒りに満ちた眼差しで俺を睨んでいる。しかもその瞳はうっすらと涙が浮かんでいて、下唇を噛みしめていた。

「最っっっ低！ 女の子との約束をちゃんと覚えていないなんて、男の風上にも置けないヤツツ！ 犬に噛まれて死ね！」

鈴はそのまま足早に部屋を出て行った。

「……………まずい。怒らせちゃった」

今回の件は俺が悪い……………んだよな……………鈴、泣いてたな。俺が泣かせちゃったのか……………。

「一夏」

「な、何だ？ 箒」

「馬に蹴られて死ね」

ぐはぁっ！ グサツとききましたよ。

今日はもう何を言っても聞いてくれないだろう。

今度ちゃんと謝ろう。

ごめんな、鈴。

——翌日、生徒玄関前廊下に大きく張り出された紙があった。表題は『クラス対抗戦日程表』

俺の一回戦の相手は二組——凰鈴音だった。

Episode 8: 主人公という立場が怪しくなってきた一夏君（後書き）

取り合えず、次回はクラス対抗戦。

少しは真面目な展開になると思いますよ。

E p i s o d e 9 .. クラス対抗戦 (前書き)

今回、ギャグ成分は少なめです。

。 本当はこのSS、こんな話にするはずじゃなかったのに。

Episode 9..クラス対抗戦

【一夏side】

主人公としての立場が危うくなり始めてから数週間経ちました。

五月。IS学園に入学したばかりで主人公の立場がたった数週間で脅かされる主人公をどう思いますか？

話が逸れました。

あまりの展開についてポロツと本音が.....。

ちなみに前回の部屋での騒動の件以来、鈴の機嫌は直らない。

あの後、翌日になって二組まで謝りにも行ったのだが、鈴は会ってくれなかった。

俺に会いに来る事はまずないし、たまに廊下や学食であっても露骨に避けられる。

「一夏、来週からいよいよクラス対抗戦が始まるぞ。アリーナは試合用の設定に調整されるから実質特訓は今日で最後だな」

いつもの面子、俺に筈、セシリアの三人で第三アリーナに向かう。

「しかし流石だな。剣の腕だけでなくIS操縦でもこれだけ差がつけられるとは……」

「何言ってるんだよ？ 箒はISに乗ったのもつい最近だろ。それでこれだけ動けるようになってるんだ。剣もそうだったが、箒は筋がいい。もっと自分に自信を持て」

「そ、そうか？」

「こほん！ 一夏様も流石ですわ。一夏様のIS操縦技術も日増しに上がってきております。まあ、代表候補生であるわたくしが、このわたくしが特訓に付き合っているんですもの」

やけに『わたくしが』を強調してくるセシリア。

まあ、セシリアは流石、代表候補生というところか、IS操縦は他の同級生に比べても格段に上だ。

IS操縦に関しては素人な俺の特訓に付き合ってもらってるのは正直、感謝してる。

アプローチの仕方も日増しに上がってきているけどな……
それにつられる形で最近も……

ハッ！！

いかんいかん、話がまた逸れてしまう所だった!!

そして今日の特訓を終え、第三アリーナのAピットに戻る。バッシュと音を立てスライドドアが開くと鈴がいた。

「待ってたわよ、一夏!」

腕組みをして、ふふんと不敵な笑みを浮かべているが、どうにもこういう格好が似合わない。

それに昨日までは怒り心頭で俺の事をずっと無視していたのに、何でここにいるんだ?

「貴様、どうやってここに?!」

「ここは関係者以外立ち入り禁止ですわよ!」

箒とセシリアはお約束の如く、鈴に食って掛かるが、鈴はまるで気にもしていないという感じで二人を無視する。

「はん! あたしは関係者よ。一夏関係者。だから問題なんてないわ」

「ほほう、どういう関係かじっくり聞きたいものだな．．．．．」

「盗人猛々しいとはまさにこの事ですわね！」

火花を散らす三人。このままでは俺に飛び火してしまうんじゃないだろうか？ よし、ここは戦略的撤退だ。

三人に気付かれないように．．．．．

正面を向いたまま、後ろへ下がろうとした瞬間――

「一夏！ まだ話は終わってないわよ！」

鈴に見付かりました。

まあ、鈴がここにいるというのはいい機会だ。この前の事、謝っておくべきだろう。

「まあ、その、なんだ」

「なによ？」

「この前の事は俺が悪かった！ すまん！」

パンと手を合わせ、鈴に向けて頭を下げる。やはり女の子は泣かせるのはよくない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

鈴は何も言わない。恐る恐る視線を上にあげてみると、鈴は何故かモジモジしてた。

「ま、まあ、この前は私も引っぱたいちゃったし・・・・・・・・これでお相子って事にしてもいいわよ？」

「そ、そうか！ 本当にこの前はごめんな！」

何とか鈴の機嫌は直ってくれたようで一安心——やっぱり気心の知れた幼馴染とはいつまでも喧嘩したままではいたくないしな。

「と、ところでさ。あの約束の意味、ちゃんと理解できた？」

「え？ だから毎日俺にご飯おごってくれる——」

「馬鹿っ!!」

また罵倒されてしまった。しかも箒は呆れ顔だし、事情を知らないセシリアはセシリアで「何の事ですか?」と事態についていけない。

「この馬鹿! アホ! 間抜け! ここまで朴念仁だとは思わなかったわ! いいわ! 来週のクラス対抗戦でコテンパンにしてやるんだからっ!!」

——ヤバイ、またしても俺は何かやらかしてしまったらしい。

「ちょっとは手加減してあげようかと思ったけど、どうやら死にたいらしいわね……。いいわよ、希望通りにしてあげる。——全力で、叩きのめしてあげる」

言うだけ言うと、そのまま鈴は走り去って行った。

◇◇*◇*◇*◇*◇*

試合当日、第二アリーナ第一試合。

組み合わせは世界で唯一無二の男性IS操縦者『織斑一夏』と中国の代表候補生『凰鈴音』という噂の新人生同士の戦いとあって、アリーナは全席満員。

会場入り出来なかった生徒や関係屋は、リアルタイムモニターで鑑賞する事にまできている。

そして日本国総理大臣を始めとした各国の要人もこの試合に注目していた。

——さて、そろそろか。

既に俺の視線の先には鈴がIS『シエンロン甲龍』を展開・装着し、試合開始のときを静かに待っている。

セシリア戦以来の模擬戦じゃないIS戦だ。心が湧き踊る。血が騒ぐ。

——そして俺が主人公という事を全員に分からせてやるっ！

そんな決意を胸に秘め、鈴と対峙する。

『それでは両者、既定の位置まで移動して下さい』

アナウンスに促され、俺と鈴は空中で向かい合う。距離にして五メートル。俺と鈴は開放回線オープン・チャンネルで言葉を交わす。

「一夏、後悔させてあげるから。このあたしに本気を出させた事を」

「はは、構わない。全力で来てもらわなきゃな」

「一応言っておくけどISの絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる」

これはセシリアに教わった事だが、噂ではIS操縦者に直接ダメージを与える”ためだけ”の装備もあるらしい。もちろん、競技規定違反だし、何より人命に危険が及ぶ。

——殺さない程度にいたぶる事が出来る——

この現実是不変ならない。代表候補生クラスともなれば、それも可能なんだろう。

対峙する鈴の目は俺を痛め付け、こらしめてやると語っているかのように見える。

しかし、俺も負けるわけにはいかない。

——御剣一刀流の名において………というよりも最近怪し

くなってきた立ち位置を確立するためにも……俺は負けな
い！

『それでは両者、試合を開始して下さい』

ブザーが鳴り響くのと同時に鈴は動いた。

鈴はその手に両端に刃を備えた異形の青竜刀〈双天牙月〉を手にすると、一瞬のうちに俺との距離を詰め、斬りかかってくる。

瞬時に展開した雪片式型で鈴の斬撃をはじき返し、セシリアに習ったクロス・グリッド・ターン三次元躍動旋回を使い、鈴を正面に捉えた。

「へえ。初撃を防ぐなんてやるじゃない。けど——」

鈴は手にした異形の青竜刀〈双天牙月〉をバトンでも扱うかのように回し、両端に付いた刃を交互に縦横斜めと角度を変えながら斬り込んでくるが、俺はただ冷静にその斬撃を捌く。

しかしその変幻自在な斬撃にこちらが斬り込むチャンスがなかなか見付けられない。

「それならっ！——」

鈴はそのまま手にしていた双天牙月をブーメランのように投擲してきた――しかし、真正面から投擲された武器など簡単に捌けるものだ。狙いは別にある筈。

雪片式型で双天牙月をはじき返すと、鈴はさっきまでいた場所にはいなかった。

「もらったっ！」

俺の死角となる後方から甲龍の肩アーマーがスライドして開き、中心の球体が光った瞬間、目に見えない衝撃が襲ってきたのだ。

直感的に危険を感じた俺は雪片式型を正面に構えたが、その衝撃は殺しきれるものではなかった。

「まだまだあっ！」

そして何度も目に見えない衝撃が俺を痛めつけるように襲ってくる。

◇◇*◇*◇*◇*◇*

「何だ、今の攻撃は？」

ピットからリアルタイムモニターを眺めていた箒は思わず、そう呟いてしまった。

「『衝撃砲』ですわね。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して撃ち出す——わたくしのブル―・ティアーズと同じ第三世代型兵器ですわ」

しかしモニターに映る一夏は苦戦しているようだが、その表情には余裕があるのか笑みを浮かべている。

箒もセシリアも一夏の強さは理解している。

そして信じている。

一夏はIS技術に関しては素人に毛が生えた程度だ。

しかし、それを補って余りある剣の技術がある。

だから、一夏が負ける筈はない——と。

【鈴side】

正直、私は一夏がここまでやれるとは思ってもなかった。

ISを操縦できると言っても、一夏はISに関しては初心者の筈だ。特に女子には早くからIS講習が始まるのに対して、男子はISに触れる機会はない。

それもそうだろう。これまでの常識では、ISは女性しか操縦出来ないものだったからだ。

一夏が本格的にISを操縦したのもこのIS学園に来てから。

対する自分はその一年も前からISの操縦訓練をこなしてきた。

ISというのは稼働時間によって強さが変わるとも言われるものだ。

IS学園に来てからISの操縦を本格的に始めた一夏に負ける筈がないと信じていた。

しかし目の前で対峙する彼は衝撃砲〈龍砲〉を初撃で喰らいはしたものの、既に対応し始めたのか躲しているのだ。目に見えない兵器を初見でここまで躲せる者はいない。

よくて掠るだけなのだ。

——IS初心者の筈の一夏が初見の兵器に対応する。

その予測もしなかった事態に次第にあたしは焦ってしまう。

「~~~~っ！ このっ！ このおっ！ いい加減、当たりなさいよ

ねっ！」

「ははは、無茶言うな」

しかも目の前の一夏に余裕があるのがやけに腹立たしい。

あたしは中国の代表候補生だ。

相手は実質、ISを操縦し始めて一ヶ月経つか経たないかの素人同然。

いくら専用機が用意されたからといって、IS初心者に変わりはないのだ。

【一夏side】

正直、あの武器は厄介だ。砲身が見えない以上、近付けない。

実際、躲す事が出来るようになってきたが、あくまで空間の歪みを視界に捉え、迫る音を聞き分け、躲しているだけだ。

反応が遅れば、当たりはしなくても掠ってしまう。正直、シールド・エネルギーも徐々に減ってきている。このまま、持久戦に持ち込まれれば、最悪負けてしまう事も予想される。

もしもここで負けてしまえば、最近、暴走してきた箒やセシリアに俺の立場を奪われかねん。

男としてそんな最悪な結末、黙って見過ごすわけないだろう！

ただ、俺の白式には武器といっても近接特化ブレード〈雪片式型〉しかない。

IS操縦技術だけを見れば、現状俺よりも鈴が上だ。

思い出すのは――セシリアとのクラス代表決定戦後の千冬姉との会話。

「――『バリアー無効化攻撃』？」

聞き返すと、千冬姉は小さく頷く。

「雪片の特殊能力が、それだ。相手のバリアー残量に関係なく、それを切り裂いて本体に直接ダメージを与える事が出来る。つまり相手のISの『絶対防御』が発動して、大量にシールド・エネルギーを削ぐ事が出来る――私がかつて世界一の座にいたのも、その雪片の特殊能力によるところが大きい……だが」

そこまで言いかけて言葉を濁す千冬姉。何かまずい事でもあったんだらうか？

「あのIS戦をモニターしていた奴がいてな。最後にお前がオルコットを救助する際に発動した能力についてなんだが、元々備えていた単一仕様能力、零落白夜が進化したものだそうだ」
ワンオフ・アビリティー
れいらくびやくや

「進化？」

「そうだ。最後に装甲が展開したのは覚えているか？」

「いや、あの時はセシリアを助ける事で頭がいっぱいで……」

「

「ふむ。最後に発動した能力——零迅雷光——零落白夜とは違い、雪片式型だけではなく白式自体の出力を上げるものらしい。その分、自身のシールド・エネルギーも大幅に消費する事になるが、零落白夜とは比べ物にならない攻撃力と能力向上を果たすらしい」

あれって進化したって事だったのか？ 無我夢中だったから気にもしてなかったんだが。

確かに零迅雷光が発動した瞬間、加速能力が格段に跳ね上がったの

は実感できた。

「しかし、二次移行セカンド・シフトではなく、単一仕様能力の進化など聞いた事もない」

聞けば、単一仕様能力自体、発動する事が稀で、発動できたとしても基本は二次移行してからだ、という。

鈴は強い。しかし、俺には白式がある。御剣一刀流の技がある。そして零迅雷光という切り札もある。

それにIS技術では負けているが、近接戦で負ける気はしない。

対峙する鈴を真剣に見つめる。

「鈴、本気で行くぞ」

「な、なによ。そんな事、あ、当たり前じゃない……。とっ、とにかくっ、格の違いってものを分かせてあげるわよ!」

いつの間にか手にしていた両刃青竜刀をバトンのように一回転させて構え直す。

対する俺も雪片式型を正面に構える。

息を吸う。

吐く。

吸う。

吐く。

勝負は一瞬――

零迅雷光による瞬時加速イグニッション・ブーストからの斬撃。これで決めるっ！

そして加速態勢に入った瞬間だった。

俺の視界に映る空間投影モニターに警告が表示される。

一瞬の出来事だった。

一筋の閃光が俺を襲った。

Episode 10 :: アンノウン襲撃 ― 前編 ― (前書き)

1話で終わらせるつもりが前後編に分かれてしまいました。

あまりにも長くなりすぎてしまって・・・。

Episode 10：アンノウン襲撃―前編―

◇◇*◇*◇*◇*◇*

誰もが目の前で起こった惨状を理解出来なかった。

世界で唯一無二の男性IS操縦者『織斑一夏』がいた場所に一筋の閃光が走り、爆発――

管制室で試合を見守っていた織斑千冬に山田麻耶、IS学園生徒の篠ノ之箒にセシリア・オルコットはいきなり起こった惨状に言葉を発する事さえ忘れてしまったかのように。

アリーナ会場にいたIS学園生徒や各国のIS関係者、そして一部を除いた各国要人の誰もが今起きた惨状に頭の理解が追い付かなかったのだ。

先程まで『織斑一夏』と対峙していた『凰鈴音』も例外ではない。

――外部からの攻撃。

そう、有り得ない事が現実、目の前で起こったのだ。

試合会場となった第二アリーナはIS戦において、観客に被害が出ないようにアリーナ全体をISと同じ遮断シールドで覆っている。

つまり間違ってもIS戦における攻撃が観客に被害が及ばないようにするための当然の処置であり、また外部からの余計な干渉も遮断

する事が可能なのである。

この遮断シールドを貫通させるほどの攻撃が『織斑一夏』に振り下ろされたのだ。

IS学園の遮断シールドを貫通させるほどの攻撃。

つまりISのシールドを貫通できる攻撃を『織斑一夏』は受けてしまったのだ。

誰もが予想できなかった一瞬の出来事に反応する事が出来なかった。

それは『織斑一夏』の姉でもある千冬すら、あまりの出来事に思考が止まってしまう程に。

目の前で起こった惨状よりも何よりも唯一の肉親である弟の事を想って、千冬は表情をしかめた。しかし、千冬は直ぐに我に返り、管制室にいる教員や生徒に向け、緊急臨時態勢を取るように指示する。

その言葉に全員が我に返り、直ぐに被害状況などを調べ始める。

「一夏っ?!」

「一夏様!」

箒にセシリアは目の前の惨状を信じられなかった。自分達の愛する男に突然降り注がれた凶器。遮断シールドを貫通させたという事は

IS 操縦者に直接のダメージを与える。つまり”死”という言葉が二人の頭に浮かぶ。

「うろたえるなっ！ 馬鹿者ども！ 一夏は無事だっ！ あれくらいで死ぬような弟ではないっ！」

最悪のシナリオを誰も予想していないわけではない。寧ろ予想してしまえる程の惨状が目の前で起こったのだ。

千冬自身、箒とセシリアに向けた言葉は自身にも向けている言葉であつた。

——唯一の肉親、織斑千冬の弟、一夏は無事だ、と。

【鈴side】

理解できなかった。

さっきまで一夏がいた場所に一筋の閃光が降り注がれた。そして爆発。今は煙で一夏が無事かどうか分からない。

——無事だ、絶対に無事だ、無事じゃなきゃ許さない。

一夏の無事を信じたい自分があるが目の前の惨状がそれを認めてく

れない。胸に沸き起こる不安に胸が締め付けられそうになる。

いっそ考える事を放棄できたら、どれだけ楽だろう。

「一夏………」

「一夏………」

「一夏あああああーっ！」

声を張り上げる。一夏に声が届くように。まだ無事かどうかの確認が取れない一夏の無事をこの眼で、耳で確認するまでは――

「――そんなに声を張り上げなくても聞こえてる」

「一夏っ?!」

煙が晴れると、そこには肩部、腕部、脚部、胸部、スラスターの各装甲が展開し、露出した内部装甲が赤く発光しており、先程まで一夏の手にしている雪片式型の蒼白かったエネルギー状の刃が赤白いエネルギー状の刃へと色を変えている。

あたしの目に映るウィンドウには白式の単一仕様能力、ワンオフ・アビリティー零迅雷光と

表示されている。

あたしですらまだ発動できていない単一仕様能力をIS初心者の一夏が発動させているという事態に困惑してしまった。

「ぼうつとするなっ！ 鈴！ 来るぞ！」

一夏の声にハッと我に返るが、今度は自分がロックされている事に気付いた。

しかし、気付くのが遅かった。

あたしをロックするISからの攻撃が放たれる。

一夏はあたしの方へと加速してきているが、間に合わないだろう。

戦いの場で気を抜いたあたしが悪い。あたしはここまでだ。

最後の瞬間を感じ、目を閉じる。

次に襲う衝撃に体は縮こまったが、予想された衝撃があたしを襲う事はなかった。

逆に体を何かに抱き抱えられてる感触を感じる。

一年前までいつも傍に感じていた匂いに体を包まれている感じがする。

「ふう、何とか間に合った……」

閉じた瞼を開けると、目の前に一夏の顔があった。

「なっ！ な、な……」

余りの事態に思考処理速度が追いつかなかった。そう、あたしは現在、一夏に『お姫様だっこ』されてる状態だ。

「ちょ、ちょ、ちょっと！ 離しなさいよ、この馬鹿っ！」

「わ、わ、わ、暴れるな。——っ！ 来るぞ！」

煙が立ち込める先から正体不明の敵から煙を晴らすかのようにビームの連射が放たれる。

一夏はあたしを抱えたまま、器用にビームの連射を躲し距離を取った。

【一夏side】

咄嗟に零迅雷光を発動した雪片式型で相手のビーム攻撃を無効化・消滅させなければ、危なかった。

そして何故か気を抜いてしまった鈴を助ける為、零迅雷光で相手のビーム攻撃が直撃するまでに救助できたのが、シールドエネルギーの残量も心許ない状況だ。

目の前のウィンドウには警告表示が常にされている。

——ステージ中央に熱源。所属不明のISと断定。ロックされています。

煙の立ち込める先を見ると、ISを装着してるらしき敵が俺達に対して、ビームの連射を放ってくる。

そして煙が晴れた先に姿を現した異形な敵。

深い灰色をしたそのISは手が異常に長く、つま先よりも下まで伸びている。そして何より特異なのが、『全身装甲^{フルスキン}』だった。

通常、ISは部分的にしか装甲を形成しない。そう、全身装甲にする必要がない。

それは何故か——防御はほとんどがシールドエネルギーによって行われているから全身装甲にする必要がないのだ。

もちろん防御強化型ISで物理シールドを搭載しているものもあるが、肌が1ミリも露出しないISというのは聞いた事がない。

腕を入れると2メートルを超える巨体は姿勢を維持する為なのか全身にスラスタークが見て取れる。頭部には剥き出しのセンサーレンズが不規則に並び、腕には先程のビーム砲口が左右合計4つあった。一端、ここで零迅雷光を止める。発動中はリアルタイムでシールドエネルギーが減っていく。シールドエネルギーの残量も心許ない状況では常時発動してられない。

「お前は一体何者だ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺の質問に一切答えない所属不明の敵IS。まあ、当然と言えば当然の反応なのか。謎の乱入者はこちらの呼びかけに応じる事もなく、ビームの連射を続けている。

『織斑くん！ 凰さん！ 今すぐアリーナから脱出して下さい！
すぐに先生たちがISで制圧しに行きます！』

突然割り込んできたのは山田先生の声。いつものようにオドオドした感じではなく、威厳ささえ感じる。

脱出——か、しかし、目の前にいる敵は遮断シールドを貫通させられる武器を所持している。

ここで俺達が脱出してしまえば、試合を観戦していた生徒達に害が及ぶ可能性がある。それに先程から俺を執拗に狙ってくる謎の敵。

「敵の狙いは俺かもしれません。此処は俺達で食い止めます！」

”俺達” って言っちゃったけど、当然鈴の同意も得ずに言ってしまった事なので改めて鈴の方に顔を向け、確認を取ってみる。

「…………… って事になったけど、いいか？ 鈴」

「そういうのは最初に聞きなさいよ！ って、それより早く降ろしてってば！ 動けないじゃない！」

「ああ、そうだった。悪い」

抱き抱えてる鈴があまりにも軽かったから、抱き抱えてる事自体、自然なものだと錯覚してしまった。

しかも咄嗟の事だったのでお姫様抱っこしてたんだよね。鈴はその外見から予想されるように軽かった。そしていい匂いがした。ふむ、鈴も女の子なんだなあ。

『織斑くん！？　だ、ダメですよ！　生徒さんにもしもの事があったら――』

山田先生との通信中だったのだが、敵がすかさず突進を仕掛けてきたので途中までしか聞けなかった。

振り下ろされる右腕を俺と鈴は左右に別れ、避ける。やはり敵の狙いは俺の様だ。今度は俺に向かって突進を仕掛けてくる。

俺を狙うビーム射撃を難なく躲し、擦れ違いざまに横薙ぎの一閃で斬り付ける。手応えを感じるが、どうにも斬り付けた感触がおかしい。何だ？

「~~~~っ！　このおーっ！」

鈴は敵ISと距離を取りながら衝撃砲〈龍砲〉での連続射撃を放つが、敵ISはその奇怪な動きで難なく躲していく。

【千冬side】

『織斑君くん？！　織斑くん聞いてます！？　聞いてます！？』

真耶は焦っているようだ。ISの個人間秘匿通信は声に出す必要は全くないのだが、目の前で起こってる現状に混乱しているためか、その事すらも失念していた。

しかし、このような事態で生徒、しかも今年入学してきた生徒に任せるのはいささか心許ない状況ではある。

焦る気持ちちは分かる。

現にこの私も現状ではIS学園教諭の介入もしくはIS学園最強の生徒会の介入を打診しなければならないのだが、今この場にはいい。

生徒会長の更識楯無は別件で今ここにはいないし、IS学園教諭を介入させようにも遮断シールドが4に設定され、扉が全て封鎖されているのだ。

まるで外部からの介入を阻むかのように。目の前で起きている事なのに何も出来ない――この歯がゆさに唇を噛む。

現状、あの敵ISに対応できるのは一夏と嵐だけなのだ。

落ち着け、落ち着くんだ。織斑千冬。

真耶だけではない、試合を管制室でモニターしていた篠ノ之にオルコットも目の前で起こった現状に混乱していた。

「先生！ わたくしにIS使用許可を！ 直ぐに出撃できますわ！」

「そうしたいところだがな、——これを見ろ」

ブック型端末の画面を数回叩き、第二アリーナの現状を示すステータスチェック画面を見せる。

「遮断シールドがレベル4に設定……？ しかも、扉も全てロックされて——まさか、あのISの仕業ですよ！？」

「そのようだ。これでは避難する事も救援に向かう事も出来ない」

生徒の手前、何とか冷静を保とうとするが、弟が危険な目に合っているのに何も出来ない、この苛立ちはどうにも抑えつける事ができない。

「で、でしたら！ 緊急事態として政府に助勢を——」

「そんな事は最初にやっている。現在も三年の精鋭がシステムチェックを実行中だ。遮断シールドを解除できれば、すぐに部隊を突入させる」

いかん、苛立ちが募り、オルコットにあたってしまいそうになる。しかし、この現場の責任者は私だ。冷静に物事を判断しなければな

らない。

気持ちを落ち着かせるため、深呼吸をする。

弟の一夏には私だけしか知らないが前世の記憶と経験を継承している。

大丈夫だ。一夏は強い。だから、大丈夫だ。と何度も何度も、自身を納得させるように、不安に駆られそうになる自身の心を落ち着かせるように。

ふと違和感を感じ、ドアの方に視線を向けると、篠ノ之が管制室から出て行こうとするところだった。

「篠ノ之。何処へ行くつもりだ？」

「――っ！」

私の言葉に篠ノ之はその体をビクッと反応させる。そして振り向いたその顔は今にも泣き出してしまいそうな表情をしていた。

「……………篠ノ之……………お前は今、どこへ行こうとした？」

「……………」

篠ノ之は私の問いかけに答えない。

「大方、一夏に発破をかけようとアリーナまで行くつもりじゃなかったのか？」

「お、織斑教諭……わ、私は……」

「——この馬鹿者がっ!!」

突然の私の怒声に管制室にいた全員が私と篠ノ之に視線を向ける。しかし私にとってそんな事は知った事ではない。丸腰の生徒が戦場に向かう事で今、戦っている敵が丸腰の生徒を襲う事になるかもしれない。

それだけで敵と戦っている一夏と凰に隙が生まれ、危険が及ぶ可能性があるし、何よりも丸腰で戦場に立つという事は敵に”殺して下さい”とお願いをしているようなものだ。

「今、お前があそこへ行って、どうする？ 状況が好転するのか？ お前が一夏に発破を掛けた所で状況は変わるのか？ 丸腰のお前があそこへ行くという事はお前だけじゃない、あそこで敵と戦っている一夏と凰に危険が及ぶかもしれないという事をちゃんと考えた上での行動なのか？」

「――っ!!」

私の言葉に自分がしようとした愚行に今更ながらに気付いたようだ。唇を噛み締め、自分の不甲斐なさを嘆いているように顔を俯かせる。

「冷たい事を言うが、現状、お前に出来る事は何もない。まだお前は弱い、守られる立場である事を理解しろ」

「……………は、はい……………」

目には涙を浮かべ、肩を震わせている。しかし、ここは理解させねばならない事である。

このような緊急事態時に現状の自分の力量すらもはかれない者はただの足手纏いにしかない。

「悔しいか？ 悔しいだろう？ 自分の力の無さが。しかし、焦るな。今お前に出来るのはここで一夏の勝利を信じる事だけだ。お前はあの一夏が負けるとでも思っているのか？ 仮にもこの私の弟なんだぞ？」

「．．．．．いえ．．．．．一夏は絶対に勝ってくれる．．．
．．．そう、信じてます．．．．．」

「分かってくれればいい」

そして私はアリーナ会場を移すモニターに視線を向けた。

Episode 10: アンノウン襲撃―前編―（後書き）

※アンノウン襲撃―後編―は8月18日までに更新予定です。

Episode 11: アンノウン襲撃―後編― (前書き)

大変、待たせてしまいました！

申し訳ないです。

Episode 11..アンノウン襲撃―後編―

【一夏side】

鈴が衝撃砲〈龍砲〉を連続射撃するが敵ISは難なく避ける。しかし動きが奇怪なのだ。

普通の人間ならば有り得ない関節をしているといえる。関節が曲がらない方向へ体を振じて避けたりもする。さらに敵ISは全身に付けたスラスターの出力が尋常ではないらしく、零距离から離脱するのに一秒もかからない。

そして鈴の牽制の合間に俺が斬撃を試みるが、必ず反応して回避行動を取る。

さて、どうするか？

ワンオフ・アビリティれいじんらいこう、零迅雷光は発動できたとしてもシールドエネルギーの残量から見ても後一回が限界だ。

さらに敵ISは回避行動を取った後、全身に付けたスラスターにより遠距離から一気に距離を詰める事が出来る。

しかも敵ISの攻撃手段はビーム射撃、もしくは殴りつけるくらいの攻撃方法しかないみたいなんだが、腕部にもスラスターが取り付けられている事で攻撃に入るまでの予備動作に掛かる時間はほとんど無い。

デカイ図体からは想像もできないくらいの俊敏な動作にこちらも避ける事で精一杯になってしまう。

このままではこちらがジリ貧だ。

「ああ、もうっ！ 何なのよ、コイツ！」

「鈴っ、俺が仕掛ける。俺が敵を止めてる間に斬り込めるか？」

「当然でしょ！」

俺はそのまま敵I S目掛けて、イグニッション・ブースト瞬時加速で距離を詰め、左下段に構えた雪片式型で逆袈裟切りを仕掛ける。

敵の方も回避行動は間に合わなかったのか、右腕で俺の斬撃を防ぐ。しかし、一度防がれたからと言って止まる必要はない――

「はあああああああっ！！！」

そのまま息をもつかせぬような斬撃による連撃を繰り返す。八方向からの斬撃に突きを織り交ぜながら。

致命打は与えられないものの敵の体を少しずつ、そう少しずつであ

るが切り刻んでいく。

御剣一刀流の技が、昔の勘が、少しずつ現在の俺の体に馴染んでいくのが分かる。そう、少しずつであるが今この時でも過去の俺の技量を取り戻そうとしている。

【鈴side】

———凄い。

そうただ一言だけだ。

まさかここまでとは思わなかった。もしあのまま一夏と戦っていたなら負けたのは自分ではないのか———そんな風に思えてしまうくらいに一夏の戦い方に見惚れてしまっていた。

って、違う違う。今は惚けてる場合じゃない。

頬を両手で叩き、気を入れなおす。

今、戦っているのは一夏だけじゃない。今の一夏の傍にはあたしが、凰鈴音がいるんだ。

両刃の青竜刀〈双天牙月〉を手に、敵の背目掛け、一気に加速する。

これで終わらせる———！！

一瞬で敵の背に回り、双天牙月による斬撃で終わらせるはずだった。しかし、敵は首だけを180°後ろに回し、あたしを見てきたのだ。

「――なっ!？」

そして普通では有り得ない動きをして、あたしを近付かせなかった。左腕だけを後ろにいるあたし目掛けて牽制のビーム射撃を行ってきたのだ。本当に無茶苦茶だ。

「何なのよ、コイツはあああっ?!」

一夏も今の敵の動きに驚いたのか、一瞬の隙が出来てしまう。敵は右腕を一夏を振り払うように横薙ぎに振りぬく。

咄嗟に一夏も雪片式型でガードし、衝撃を抑えるがそれでも敵に距離を取らされてしまった。

すかさず、敵のビーム射撃。この敵――おかしい。

「鈴。なんつーか……あの敵、機械じみてないか？」

「ISは機械よ」

「そう言うんじゃないくてさ。なんていうのかな、人間と戦ってる気がしない——」

「は？」

「……あれって本当に人が乗ってるのか？」

一夏の疑問。

あたしも感じていた違和感。

——でもISは人が乗らないと絶対に動かない。無人機なんて有り得ない。常識だ。

じゃあ、そうすると敵のあの動きはどう説明する？

有り得ない動き。人間では考えられない関節の動き。どうしたら背後から迫ったあたしを体の向きを変えずに首だけを回し真正面に見据える事が出来る？

「——まさか」

「仮に、そう仮にだ。無人機だったらどうだ？」

「なに？ 無人機なら勝てるっていうの？」

「ああ。人が乗ってないなら容赦なく全力で攻撃しても大丈夫だしな」

一夏には切り札がある。――単一仕様能力、零迅雷光――まだ一回しか使っていない。

「さっきのアレを発動させるわけ？」

「ああ。あれで止めを刺す」

【一夏side】

零迅雷光で決着を付ける。

残ったエネルギーを考えると、使えて後一回――後一回しか使えない。でも、一回は使える。

「鈴つ！」

「分かってるっ！」

両腕を下げ、肩を押し出すような格好で衝撃砲を構える鈴。最大出力砲撃を行うため、補佐用の力場展開翼が後部に広がった。

敵の隙を一瞬でも作ってくれればいい。

「いくぞ、鈴」

「しくんじるんじゃないわよ、一夏」

エネルギーを収束させ、狙いを敵ISに定める。

「い
つ
け
え
え
え
え
え
え
え」

高エネルギーによる鈴の衝撃砲の射撃が敵に襲い掛かる。響く轟音を合図に俺は零迅雷光を発動させる。

———
單一仕様能力、零迅雷光、発動。

肩部、腕部、脚部、胸部、スラストーの各装甲が展開し、露出した

内部装甲が赤く発光し、雪片式型のエネルギー状の刃もその色を赤く変える。

そして俺は加速した。

白式が俺に応えてくれる。急激に研ぎ澄まされる俺の五感。集中力が数十倍にも跳ね上がったかのような高解像度の意識。なによりも全身から湧き立つような力を感じる。

横薙ぎの一閃は、敵ISの右腕を切り落とす。

「まだまだあーっ！っ！」

敵ISの右腕を切り落とし、そのまま敵の背後にまわる。

「これで——終わらせるっ！」

そのまま上段からの一閃を敵に振り下ろした。

俺の斬撃によって切り伏せられる敵IS。手応えはあった。敵は斬撃の衝撃から、そのまま仰向けに倒れた。

「やったわね、一夏」

「ああ。何にしてもこれで終わ——」

俺の言葉を遮るかのように目の前に展開されたウィンドウに突如、警告が表示される。

——敵ISの再起動を確認！ 警告！ ロックされています！

「!?!」

片方だけ残った左腕。それをさらに最大出力形態バースト・モードに変形させたISが地上から俺を狙っていた。

次の瞬間、迫り来るビーム。

考えてる暇なんてなかった。そのまま零迅雷光を発動させたまま、赤い刃を形成する雪片式型を突き出し、ためらいなく光の中へと飛び込む。

真っ白な視界の中、意識が刈り取られそうになる瞬間、刃が敵ISの装甲を貫く手応えを感じた——。

◇◇*◇*◇*◇*◇*

「う……………」

全身を襲う痛みに意識が覚醒する。見慣れない天井が視界に映る。

なんだか状況が分からず周囲を見回すと、ここが何処であるのか理解できた。

どうやら保健室のベッドに寝かされていたらしい。

カーテンで仕切られた空間は狭い故に息苦しさや安堵の両方を感じる。矛盾したようなそんな感覚を俺はまだ覚醒しきれていない、ぼんやりとした意識で感じながら情報の整理を始めた。

敵はどうなった？ 鈴は？ 他の皆は無事なのか？

最後のあの瞬間、手応えは感じた。雪片式型での突きで敵を貫いた手応えを。

「気が付いたか？」

シャツとカーテンが引かれ、姿を見せたのは千冬姉だった。

「体に致命的な損傷はないが、全身に軽い打撲がある。数日は地獄だが、まあ慣れろ」

「ああ……」

まだぼーっとする。全身を襲う痛みと疲労感に身を委ね、視線を窓の外に向けると既に空は茜色に染まっていた。どうやら今は放課後の時間らしい。

「まあ、何にせよ無事で本当に良かった。家族に死なれては寝覚めが悪い」

千冬姉の表情はいつもより柔らかいものだった。世界で二人だけの家族。その俺にしか見せない表情だった。

「千冬姉」

「うん？　なんだ？」

「あ、いや、その……心配かけて、ごめん」

俺の言葉が予期してないものだったのか、一瞬きよとした後、千冬姉は小さく笑みを浮かべながら右手で俺の頭を安心させるかのように優しく撫でてくれる。

「心配などしていない。お前はそう簡単に死なない。なにせ、私の

弟なんだからな」

さすがは世界最強の姉。変な信頼の仕方だな、とおかしくなってしまう。でも、これが千冬姉の照れ隠しの一種だというのも分かっている。

「では、私は後片付けがあるので仕事に戻る。お前も少し休んだら部屋に戻るんだぞ」

千冬姉はそれだけ言い残し、保健室を出て行った。何にせよ、あの世界最強の姉を心配させてしまった。仕事に真面目な姉が俺に付き添ってくれていたのだ。

それだけ心配させてしまったのだろう。もっと強くならなきゃな。

千冬姉が安心できるように。

「・・・・・・・・一夏？」

千冬姉と入れ違いで入ってきたのは箒だった。いつもの凜とした態度ではなく、どこかオドオドしたような態度。何かあったんだろうか？

俺のベッドの脇に置いてあった椅子に箒は座るものの、その表情は暗い。

「どうしたんだ？ 箒。いつものお前らしくないぞ？」

「あ、ああ……」

やはり何かあったんだな。その表情は暗いままだ。

「そういえばさ、試合ってどうなったんだ？ やっぱり無効試合か？」

「あ、ああ。さすがにあんな事が起きてはな」

「……箒」

「ん……どうした？」

「何かあったのか？」

俺の言葉に箒は身を竦める。どうやら何かあったみたいだな。本当にこの幼馴染は分かりやすい。

「実はな．．．．．今日、あの敵が現れてお前が戦っているのを見たら、いてもたってもいられず、お前に発破を掛けようと管制室を出ようとしたんだ．．．．．それを千冬さ、いや織斑教諭に叱責されてな．．．．．」

なんつう無茶苦茶な事を。つまりアレか。丸腰の状態で敵もいる場所に来ようとしていたのか。

箒は昔から周りが見えなくなり一人で突出してしまう節がある。まあ、それだけ心配させてしまったって事なのかもしれないが。

「心配させてしまったんだな」

俺は左手を箒の手に添える。

「．．．．．あ」

頬を赤くさせ、こちらを見てくる箒に俺は優しく言葉を紡ぐ。安心させるように。心配させてしまった幼馴染に。

「心配かけて、ごめんな」

「あ、あ、あ、謝るな。それに幼馴染なんだ。心配するのは、と、

当然だろう」

「それでも。箒を心配させないくらい強くなってみせるさ」

「……………それではいつまで経ってもお前の傍に立つことが出来
ないじゃないか……………」

箒はボソボソと呟くが、あまりに声が小さかったので何を言ったのか聞き取れなかった。

箒が保健室を出て行った後、疲労の所為か、急激な眠気が俺を襲ってきた。そのまま強い眠気に意識を引き摺られるように眠りに落ちていく。

……………

……………

……………

……………

ん？ 人の気配を感じる。しかも、なんだか異様に近い。顔の間近に感じる。誰だ？ というか、俺はどのくらい寝てたんだ？ 今何時？

って、顔の間近に感じてた気配が近付いてきた。何なんだ？

閉じてた瞼をゆっくり開けると、鈴の顔が間近にあった。

「ふえ？」

「……………鈴？」

鼻先三センチ。俺の視界を全て埋め尽くすかのように鈴の顔がそこにはあった。

「えっと……………何してんの、お前」

「おっ、おっ、おっ、起きてたの！？」

「ん？ 今起きたんだが。で、お前は何でこんな近くまで寄ってきてるんだ？」

「べ、べ、べ、別になんでもないっ」

ひどく狼狽しているように見えるが。しかも「ちっ、後もう少し起きるのが遅かったら．．．．．」とブツブツ何かを呟いているが、気にしないでおこう。

「まあ、いつか。そういえば試合、無効試合なんだってな」

「あれだけの事があったんだもの、そりゃそうなるでしょうね．．．．．」

言いながらベッド脇の椅子に腰かける鈴。

「．．．．．」

無言。いや、何か言えよ。

ああ、でも、いい機会かもしれない。約束の事。勘違いしてるっぽいし、俺。ちゃんと謝らなきゃな。

「鈴」

「なによ」

「いや、そのな。約束．．．．．何か勘違いしてたみたいだったしき、俺。ごめんな」

「もうその件は前にも謝ってもらってるし．．．．．いいわよ、もう」

どうやら今度こそ完全に許してもらえたかな。鈴は大事な幼馴染だ。鈴との繋がりを失わずにすんで本当によかった。

ふと、脳裏によぎるのはあの時の光景。

小6の時、場所は教室。今日と同じような茜色に染まる、ある日の放課後、俺と鈴は教室に二人でいたのだ。

「ああ、そういえば、今ふと思い出した。場所は違うけど、約束したあの日も二人きりでこんな夕暮れ時だったよな、確か。あの時の約束って正確には『料理が上達したら、毎日あたしの酢豚を食べてくれる?』だっけ。で、どうよ? 上達したか?」

「え、あ、う．．．．．」

何故かしどろもどろになって、鈴は左右へ視線を彷徨させた後、うつむいた。心なしか顔が赤いようだが。

「あの約束って、毎日俺にご飯おごってくれるって意味じゃないんだよな？　って事は——」

「も、もう、い、いいの！　ね？　ほら、よく言うじゃない。だ、誰かに食べてもらったら料理って上達するって。だから、ね、そ、そう！　そういう事だから！」

いきなりまくし立ててくるものだから、その勢いに俺もさすがに気圧される。

「へ？　そう、なのか？　いや、もしかしたら『毎日、みそ汁を』とかの話かと思ったんだが、違うのか？　まあ、違うならいいが」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「えっと、鈴・・・・・・・・？」

急に黙る鈴に俺は焦ってしまふ。え？　正解？

「え、ええ、そうよ！　そういう意味なのよ！　悪いっ？！」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

ええええー――――――――――つ?!

「え、えっと……………それって……………」

「なによっ!」

しかも何故か鈴に逆切れされるし。

当時、小学生の俺にその思考はなかった。だから勘違いしてしまった。まさか、プロポーズされてたなんてえええーっ!

「まあ、返事は直ぐじゃなくてもいいし。絶対に振り向かせてやるから覚悟しなさいよね」

人差し指で俺を指さし、そう宣告する鈴。顔は赤いままだが。

でも、なんでだろう？

何故か強気に宣告する鈴が可愛く見えてしまうのは。

顔が上気するのが分かる。今が夕暮れ時じゃなかったら顔が赤くな
ってしまってるのも一目瞭然だ。よかった、今が夕暮れ時で。

「そ、そういえばさ、こっちに戻ってきたって事は、またお店やる
のか？ 鈴の親父さんの料理、うまいもんな。また食べたいな」

「あ．．．．．その、お店は．．．．．しないんだ」

「え？」

「あたしの両親、離婚しちゃったからさ．．．．．」

それから鈴は何で国に帰る事になったのか、説明してくれた。

鈴の両親は傍目から見ても仲睦まじい夫婦だった。でも、些細なケ
ンカで意見が衝突し、そのまま離婚――鈴は親権を持つ母方の方
へ身を寄せる事になったため、中国に帰る事になってしまったらし

い。

昔ならば、経済力のある父親が親権を持つ事もあるだろうが、今の世は女の方が立場や待遇も上だ。当然、このようなケースの場合、母方に引き取られる事が多い。

「父さんとは一年会ってないの。多分、元気だとは思うけど」

声のトーンが沈む。当然だ、両親の離婚が悲しくない子供なんていない。

前世では両親は交通事故死で他界、その後は祖父に引き取られるも、高校を卒業した際にその祖父も他界。俺はそれから一人になった。

この世界では両親は物心つく頃にはいなかった。まあ、千冬姉がいてくれたから、千冬姉が俺を守り養ってくれたから、寂しさは感じてたけど、一人にならずにはすんだ。

でも、だからこそ家族という繋がりが大事なものであるのは分かる。

当然であった両親の存在がある日、片方だけでも欠ける——というのは14の鈴には辛いものだっただろう。

転校する前、鈴の表情がどこか寂しげだったのは覚えてる。当時はその理由が何だったのか分からなかったが。

「家族って、難しいよね」

「なあ、鈴」

「ん、何？」

「今度どっか遊びに行くか？」

「え！？ それって、その、デー——」

「一夏様 あああー——っ！！」

バーンッ！ 保健室のドアが開け放たれたその先にはセシリアがいた。

「一夏様がやっと目覚めたと聞いて、わたくし、わたくし……..
いてもたってもいられず……..
」

ベッド脇の椅子に腰かける鈴の存在に気付く事もなく、一心不乱に俺のもとまでやってきて、瞳を潤ませ、俺の手を両手をギュッと強く握りながら、安堵の声を上げる。

俺を本当に心配していたのだろう。この子にも随分、心配させてし

まっただみだいな。

本当、俺って幸せ者だな。こんなに俺の事を気に掛けてくれる子達が周りにいる。

箒も、鈴も、セシリアも、俺の大事な存在だ。今度から心配させないように、もっともっと強くならなきゃな。

「あら？ どうしてあなたが……？ 一夏様はわたくしの旦那様。関係ない方は退室していただけませんか？」

「はあ、何言ってるの、あんた。一夏があんたの旦那って認めたわけじゃないし、既にあたしは、その……、プ、プ、プロポーズまでしてるんだからっ」

「な、な、な、なんですってえええーっ！」

その後、俺は放置され、鈴とセシリアの口論が始まった。それは保険医が戻ってくるまで続けられ、暫くした後戻ってきた保険医に俺達三人はこっそりお灸を据えられた。

「これだから品のないお方は嫌ですわ。一夏様の妻となるのは、この優雅にして華麗、パーフェクトな存在であるこのわたくしを置いて他にはいませんわ」

「馬鹿も休み休み言いなさいよね。一夏にはあたしが必要なの。ア
ンタはただのクラスメイトでしょうが」

「なっ!？　　ば、馬鹿ですってえええーっ!」

「ふん!　　本当の事でしょうがっ!」

部屋に戻ろうとする道でも平然とケンカしてる二人。ぎゃあぎゃあ
と言ひ合いを続ける二人の間に、溜息しか残らなかった。

E p i s o d e 1 2 : 箒の宣戦布告（前書き）

箒と一夏がやらかしてしまった．．．．．

Episode 12.. 第の宣戦布告

【千冬side】

学園の地下五十メートル。そこにはレベル4権限を持つ関係者しか入れない、隠された空間。

目の前にあるのは機能停止したIS。一夏と凰の試合に乱入した敵ISである。

既に此処に運び込まれてから二時間、既に解析の方もある程度進んでいる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

室内は薄暗く、無言で敵ISと一夏と凰の戦闘記録を映すディスプレイを眺めていると、割り込みでウィンドウが開いた。

ドアに備え付けられたカメラから送られてきた画面からは、どうやら解析が済んだらしいのか、真耶がブック型端末を持って、ドアの開放を待っていた。

「どうぞ」

ドアの開放スイッチを押し、室内に真耶を招き入れる。

「あのISの解析結果が出ましたよ」

「ああ。どうだった？」

「はい。あれは——無人機です」

無人機。世界中で開発が進むISに関して、まだ完成していない技術。リモート・コントロール・スタンダード・アローン遠隔操作と独立稼働。そのどちらか、もしくは両方の技術がある謎のISに使われている。その事実には、学園関係者全員にすぐさま箱口令が敷かれる程の極秘情報。

「どのような方法で動いていたかは不明です。織斑くんの最後の攻撃で機能中枢が焼き切れていました。修復も、おそらく無理かと」

「コアはどうだった？」

「……………それが登録されていないコアでした」

やはり。こんなものが作れるのはアイツしかない。アイツがこの件に絡んでるのか？

「何か心当たりがあるんですか？」

私の表情を見て、真耶は私が何かを知っているのではないか、と思ったらしい。

「いや、ない。そう、今はまだ……な」

【箒 side】

「遅いぞ、一夏」

やっと一夏が部屋に戻ってきたが、心なしかゲッソリとしているのは気のせいだろうか？

「箒。ただいま」

「~~~~っ。う、うむ。おかえり」

うーー、いいっ！ このシチュエーションはいいっ！

まるで新婚で夫が仕事から帰ってくるのを新妻が迎えてるような気分が味わえる。

同室だからこその特権だな。よかった。あの時、鈴が部屋に割り込んでこなくて。あのまま、鈴が部屋に割り込んできてたら、この二人っきりの気分を味わえなくなる所だったんだからな。

それにクラス代表決定戦の後もセシリアが部屋に突撃してきた事があった。

鈴と同じように、一夏と同室になるように迫ってきていたが、あの時は何とか撃退する事ができた。その後は頻繁に部屋に遊びに来るようになったが。本当にお邪魔虫な存在だ、セシリアは。

それにしても私が保健室を出て行ったから、数時間は経っている。まあ、時間を掛けてくれたお蔭で一夏のためにアレを用意する事が出来た。

一夏は朝食べて以来、何も食べていない筈だ。何かの本やテレビで”男を落としたい場合は胃を満足させろ”と見た記憶がある。

私だって女だ。料理は昔、母親に少し習った事がある。見た目はよくできたと自負するが、味はどうだろうか？

一夏、美味しいって言うてくれるといいな。

「ところで箒はもう飯は済ませたのか？」

キターーーーーー！

この発言を待っていたのだ、私はっ！

「いや、まだだが。当然だろう？ お前を待っていたのだから」

「待ってた、って——え？ 箸もまだ晩飯は食ってないのか？」

ふふふ、驚いているな。まあ、それも当然だろう。あの戦闘から数えたら随分、時間も経っているんだからな。

「じゃあ、すぐにも食堂に行くか。時間もギリギリだしさ」

「あっ、その、な。き、今日は、その……………」

落ち着け、落ち着くんのだ、私。

せっかく一夏の為に用意したんだ。一夏に私の手料理を食べてもらうんだ。

「あれ？ あのテーブルに置いてあるのは？」

一夏も気付いたようだ。私が一夏の為に用意したアレが。さあ、言え、言うんだ、篠ノ之箒。ここで臆していたら何も始まらないのだっ！

「わ、私がだな．．．．．つ、作った」

「え？　そうなのか？」

やはり一夏は驚いているようだ。テーブルの上に置いてあるアレ。そう、この私が作ったチャーハン。しかし、目の前の一夏は本当に驚いているようだ。全く私を剣道しかない女と思っているんじゃないだろうか？

「わ、私だって、その、料理くらいできる。だから．．．．．一夏。た、食べてくれるか？」

「あ、ああ、もちろんだとも」

私は一夏に手を洗う事とうがいをしてくる事を勧め、食事の準備をする。

ヤバイ、顔が赤くなっているのが自分でも分かる。一夏は気付いているのだろうか？　でも、今日は一夏に手料理をご馳走して、少し

でも私を意識してもらうんだ。

これからはセシリアだけじゃない、鈴という強力な恋敵ライバルも出てきた。しかも私と同じ幼馴染。つまり私だけのアドバンテージだった”幼馴染”という立場が鈴の登場で薄れてきてしまっている。

うかうかしてたら一夏を他の女に取られてしまう。それだけは嫌だ。一夏の傍にずっといたい。

だから今までのように待っているだけではなく、責めていかなくは。

暫くすると一夏が戻ってきたので椅子に座るように促す。

「じゃあ、いただきます」

「うむ。遠慮なく食べるがいい」

そして一夏はレンゲを持って、チャーハンをすくい、一口目をその口に運んでいく。

もぐもぐもぐ。・・・。

「・・・・・・」

どうなんだろう？ 美味いんだろうか？ もしかして口に合わないとかそんな事はないだろうか？

どきどきどき．．．．．。

胸の鼓動が早くなる。目の前の一夏は何も言わない。そして一言．．．

「．．．．．味がしない」

「なっ!？」

そんな馬鹿な！ 調理法は間違ってた筈!! 一夏にレンゲを渡してもらい、私も一口食べてみる。あれ、これって関節キス．．．．．？

顔が熱くなるのを感じながらも、口に入れたチャーハンを租借してみると．．．．．確かに味がしない。思い返してみると、確かに料理してる際に調味料を入れた記憶がない．．．．．。

「．．．．．」

「な？ 言った通りだろ？」

「ええい、私が食べればいいのだろう、食べれば！」

「そうは言ってないだろ。ほら、貸せよ」

ムキになる私の手からレンゲを奪って、一夏はその味がしないチャーハンを頬張る。

味がしないであろう、私の作ったチャーハンをむさぼるように食べる一夏。

「ごちそうさま」

食べ終わったのか、合掌して一礼。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ど、どうした？」

くうく、味見くらいしておくべきだった。一夏に初めて手料理を振る舞う事で頭がいっぱいで失念していた。後悔先に立たず、とはよく言ったものだ。

「か、勘違いするなよ！ 今日、その……偶然、稀に、低確率で、失敗しただけだ。いつもは成功する」

悔しさのあまり、つい弁解してしまう……。

「そうか？　じゃあ、次は期待してもいいのか？」

「っ！！　あ、ああ、次こそはお前を満足させてみせるっ」

「ははは、楽しみにしてる」

また次があるっ！

それが嬉しかった。今日の無念を次で晴らしてみせる。

うかうかしていたら鈴も手料理で一夏に迫ってくるだろう。女の戦いに油断は禁物なのだ。

そして開いた皿を片付けようとして、食後の茶を飲む一夏の傍に行く。

しかし、このまま、就寝しては何も進まない。まだなのだ。今、一夏は傍にいる。しかし、この時は悠久ではない。同じ部屋なのもあくまで部屋を用意できるまでの緊急措置だという事もいずれは終わりが来る。

勇気を出せ、箒。このまま引き下がってでは他の恋敵ライバルに付け入る隙を作ってしまう事になるのだ。

料理は、まあ、その、なんだ。失敗はしてしまったが、今のこの部屋には二人きりなわけで、雰囲気も悪くない。寧ろ良好といってもいい。

「一夏……」

「ん？ どうした？」

【一夏side】

箒の作ってくれたチャーハンをきれいに平らげ、食後のお茶を楽しんでいたら、食器を取り下げようとした箒が傍にいた。

そのまま俺の左手を箒は両手で掴んで、自分の胸に持っていく。

ほわあああ、柔らかい。柔らかいよ、箒のおっぱい！　っていうか、えっ？　何？　この状況？

「ほ、ほ、ほ、箒さん？」

「一夏。やっと会えたというのに、お前には次から次へと女が寄ってくるな」

ぎりぎりぎり。俺の手を掴む両手の握力が強くなってくる。

「いたっ！　いたたたたたた！　い、痛いよ、箒」

そんな俺がおかしかったのか、箒は小さく笑みを浮かべ、俺の手を掴む両手の握力を弱め言葉を続ける。

「ふふ。でもな、そんなお前でも私は傍にいたいと思う。傍にいさせてほしい」

「・・・・・・・・箒？」

「一夏。私は、な。その・・・・・・・・。離れてる間、お前を忘れた事なんて一度もなかった」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

箒の言葉に俺は返事を返す事も出来なかった。

最初に出来た俺の初めての幼馴染。

小4で別れるまで、ずっと一緒にいた幼馴染。

その幼馴染の表情がひどく辛そうに歪められるのを見るのはキツイ。仕方なかったとはいえ、寂しい思いをさせてしまった。

「だから、これからは私の傍に、ずっといてほしい」

そして近付く箒の顔。少しずつ俺の視界を埋めるように近付いてくる。

「一夏。私はお前の事が、す——」

唇と唇が後少しで触れ合いそうになる瞬間——気の抜けたようなノックに遮られた。

「あのー、篠ノ之さんと織斑くん、いますかー？」

このとぼけた声は山田先生だ。がちやりとドアを開けて本人が入ってくる。あの、先生。俺、まだ返事をしていない筈なんですが……。

そして山田先生の目には、箒の胸の上に手を置きながら、後少しで唇と唇が触れ合いそうになる瞬間の俺と箒が映った。

◇◇*◇*◇*◇*◇*

学生寮自室。正座させられる俺と箒。目の前には顔を赤くして怒る山田先生がいた。

「全く、あなたたちはなにをしているんですか?!」

「「はい、すみません。……。」」

「いいですか？ まだあなたたちは学生なんですよ。学生という身分を弁えて——」

ガミガミと説教を続ける山田先生。

しかし、あそこで山田先生が来なかったら、俺……箒と……ヤベっ、胸のドキドキが収まらない。顔が赤くなってる

のが自分でも分かる。

ちらっと箒の方を見ると俺と同じように顔を赤くしてる。

しかし、箒のおっぱい、柔らかかったなあ。触れるだけだったけど、あのダイナマイトおっぱいの弾力は凄まじかった。ほわあああ。~~~~。

「聞いているんですかっ?! 織斑くんっ!」

「は、はいーっ!」

「全く。私だって.....まだなのに.....男の人とキス.....羨ましい.....」

「え? 山田先生、何か言いました?」

ボソボソツと呟く山田先生の声が聞きとれなかったので聞き返してみたら、「なんでもありません!」と顔を赤くして怒られた。

「で、なんでここに来たんですか?」

箒の言葉に、何かを思い出したように山田先生は返事をする。

「あ、そうでした。お引越しです。お引越しするのは篠ノ之さんです。部屋の調整が付いたので、今すぐお引越しをしましょうね」

「へ？　今すぐ？」

「そうですよ。いくら未然に防いだからといっても、このまま同室にしているのは危険だと判断しましたので。それじゃあ、私もお手伝いしますから、すぐにやっちゃいましょう」

「ま、ま、待って下さい。今すぐですか？」

箒は動揺しているらしく、何とか引越しをしないように食い下がろうとしたが、山田先生はその意見をぴしゃりと断つ。

「当たり前ですよ。このまま二人にしたら問題が出るでしょうし」

先程の光景を思い浮かべているのか、山田先生も箒も顔を赤くしている。

箒はちらっと俺を見ってくるが、さすがにあの状況を見られているのだから、手助けできそうもない。すまん、箒。

◇◇*◇*◇*◇*◇*

そのまま荷物をまとめ、箒は山田先生に連れられ、出て行った。

うーん、急に同居人がいなくなり、部屋の面積が二倍に増えたような錯覚を覚えてしまう。なんだかんだで人がいなくなるというものは寂しいものだ。

しかも、最後に箒は何かを言おうとしていたな．．．．．。

ただ、惜しむらくはあのダイナマイトおっぱいを揉めなかった事だ。山田先生が来るのがもう少し遅かったら、あの箒のおっぱいを．．．えへへへ。

って、何を考えてるんだ、俺はああー！！

仮にも主人公だぞ、主人公！

でも、おっぱいの魅力には勝てん！クソーー！

「もういいや．．．．．。寝よう」

シャワーを済ませ、歯磨きを終わらせ、寝る準備を整える。ベッド

に入って目を閉じると、頭に浮かぶのは箒の真っ赤な表情に、箒の胸の感触・・・・・・・・

胸の鼓動が早くなるのを感じる。

どきどきどきどき。

寝れない。

何度か寝返りを打つが、眠れないものは眠れない。今日は一日いろいろありすぎた。

コンコン。

そんな眠れないもどかしさにうーん、うーんとベッドで唸っていると、ノックが響いた。

誰だ？　こんな時間に。

ドンドンドンドン！

なかなかベッドから出ないでいたら、ドアをノックする音が拳で殴りつけてるかのような音に変わる。俺は慌ててベッドから飛び起き、ドアに向かった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ドアを開けたら、引っ越しをしたばかりの箒がいた。

「なんだ？ 忘れ物か？」

箒は答えない。何か思い詰めてるかのよう、その表情は強張っている。

えーと………？

「………？ どうかしたのか？ まあ、取り合えず部屋入れよ」

「いや、ここでいい」

「で、どうしたんだ？ 何か用があつて、ここに来たんじゃないのか？」

「………」

そしてまた無言。本当にどうしたんだ？

「一夏っ！」

「お、おう．．．．．」

いきなり大声を出すものだから、一瞬たじろいでしまう。というか廊下でそんな大声を出したら怒られるぞ。鬼寮長に。

「ら、来月の、学年別個人トーナメントだが．．．．．」

六月末に予定されているクラス対抗戦とは違う完全自主参加の個人戦の事で何かあるみたいだ。学年別に区切られているが専用機持ちが有利である事には変わらない。

「わ、私が優勝したら――」

もともと赤くさせてた頬をさらに紅潮させ、箒は言葉が続ける。

「だ、抱いてもらっ!」

「．．．．．はい?」

抱いてもらう? 抱いてもらう．．．．．? は? 抱いてもらう?
う?

誰が誰に？ え、もしかして状況から察するに俺が箒を？ 抱く？

・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・

なんですとおおおおおおーーーーっ！！

Episode 12：第の宣戦布告（後書き）

初投稿してからこれまで、感想を出してくれた方やお気に入り登録をされた方、評価してくれた方々、本当に嬉しく思っています。

まだまだ未熟な作品ですが感想や意見をもらえるのは嬉しいです。

今後も感想やご意見お待ちしております。

Episode 13: 一夏を狙う年下の女、その名も五反田蘭（前書き）

五反田兄妹、やっと登場。

当然、兄は弱体化。妹は強化。（笑）

Episode 13：一夏を狙う年下の女、その名も五反田蘭

【Side】

現在の時刻は早朝鍛錬の時間である。いつもであれば、私は剣道着に着替え、鍛錬をしている時間だ。

しかし今日の私はまだベッドの中にいた。目は覚めているのだが、昨日の事が頭の中をぐるぐる回り、鍛錬どころではなかった。

昨日、遂に私は一夏との同棲生活が解消されてしまった。

山田教諭にあのような状況を見られてしまった所為で直ぐにでも引っ越しをしなければならなくなったのは、自業自得とも言われるかもしれないが……。

引っ越しを済ませた後、いてもたってもいられず、一夏のいる部屋を訪ね、私は一夏に自分の想いの丈をぶつけられた……と思う。

『わ、私が優勝したら——だ、抱いてもらおうっ!』

ん？ んん？ 思い返してみると、告白の言葉がおかしい？

抱いてもらう？

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

あああああああああああああつ！

もしかして、私はとんでもない事を口走ってしまったのではないのか？

なんて事だっ！！ 篠ノ之箒、一世一代の告白だったのにっ！！

その事を自覚すると、胸の動悸は早くなり、顔が早くなるのを感じた。

でも、済んでしまった事は仕方がない。うん、仕方がないのだっ。そもそも私の^{バイジン}処女は一夏以外に捧げるつもりもないっ！

処女を捧げる、つまり一夏と添い遂げる事っ！ うむ、間違いない

っ！

そうと決まれば、学年別個人トーナメントまでの時間、私は自分自身を鍛えなければならぬ。優勝というのは、今の私の実力から考えて、かなり難しい。

同学年にはセシリアや鈴といった代表候補生にまで選ばれる程の実力を有する恋敵ライバルがいる。そして何よりも一番の強敵となるのは――
――私の想い人でもある一夏である。

正直、千冬さんにも言われている。私はまだ弱い。

だからこそ、強くなる為に自分自身を鍛える必要があるのだ。

――優勝するために。

――いつまでも恋敵ライバルの背中を見ているだけでなく、対等な存在となるために。」

――想い人である一夏の傍にいられる女になるために。

私は強くなるしかないのだ。

よし、そうと決まれば、いつまでも寝てられない。今日が日曜日だからこそ、鍛錬する時間は十分にあるのだ。

そう決意した私は直ぐに剣道着に着替え、竹刀を持って部屋を出た。

学年別トーナメントは今月だ。残された時間は一分一秒でも惜しいのだから。私は今よりも強くなる必要があるのだから。

◇◇*◇*◇*◇*◇*

【一夏side】

六月頭、日曜日。俺は久々に五反田の家に遊びに来ていた。

中学からの親友、五反田弾。中学時代は鈴に弾、それに御手洗数馬と一緒によく遊んでいた。IS学園入学以来、寮暮らしとなったため、なかなか会えなかった事もあり、今日は休みを利用して遊びに来たのだ。

今でも頻繁にメールのやり取りはしていたが、こうして会うのは本当に久しぶりだ。

何より女だらけの学園とは違って、男の友人というのは何の気兼ねもなく付き合えるのもいい。

んで、今は弾と一緒に発売日だけでも百万本セールスを記録した超名作である対戦ゲーム『IS／VS』インフィニット・ストラトス／ヴァースト・スカイ』をやっていた。

「で？」

「で？ って何がだよ？」

おいおい、対戦中に話しかけるな。うわっ、いきなり奥義を使うとは、こしゃくな！

「だから、女の園の話だよ。いい思いしてるんだろ？」

弾も見た目は15の俺も絶賛、思春期真っ只中の少年であれば、当然女の話にもなる。彼女を作って付き合う、果ては童貞喪失を夢見るのは当然の事だろう。

しかし、周りが女だらけの状況は本当に辛い。あの状況になるまでは俺もワクワクしていた。ところが現実問題、周りに女しかない状況は本当にキツイ。

「お前……あの状況に男一人にされてみる？ いい思いどころじゃないぞ」

「嘘をつくな、嘘を。お前のメール見てるだけでも軽く殺意を覚えるんだが。何その天国^{ヘブン}。招待券ねえの？ ないなら俺に女紹介してくれ」

「つうか、アレだ。鈴が転校してきてくれて本当に助かったよ。気軽に話せる話し相手も少なかったしな」

まあ、クラス対抗戦の後にプロポーズみたいな事を言われたが。それに鈴だけじゃない、セシリアは俺の妻と言って憚らないし、箒に至っては先日、「抱いてほしい」宣言までされる始末だ。

あれ？　これ混沌^{カオス}じゃね？

「ん？　お前、学園で何かあったのか？」

「んなっ！　い、い、いや何もないぞ」

「動揺してるのが怪しんだが……」

くっ、さすが親友。俺の表情で勘付いたみたいだ。しかし、あんな事があったって知られると絶対にからかわれそうだ。いや、からかわれるよりも殺されそうだ。……うん、黙ってよう。

「しかし鈴か、鈴ねえ。お前さ、鈴のこと——」

弾が鈴のことで何かを聞こうとした言葉は、ドアをどかんと蹴り開

け入ってきた突然の訪問者に遮られた。

「お兄！ さっきからお昼出来たって言ってんじゃん！ さっさと食べに——」

突然の訪問者の正体は弾の妹、五反田蘭。歳は一個下で今は中三。有名私立女子高に通う、弾とは全く正反対な優等生でもある。

「あ、久し振り。蘭」

「いつ、一夏……さん!？」

やはり女の子というのは自宅ではラフな格好をするものなんだな。前世の記憶があるため、精神年齢が20代半ばの俺から見ると、まだあどけなさを残すものの、成長途中の未熟な果実も言えはいいのだろうか。

傍目から見ても蘭は”可愛い”部類に入る。ほどよくしまった肢体に成長途中とも言える、その膨らんだ胸がまたイイっ！ まだまだ発展途上。つまり、もう少し待てば、熟成された立派なおっぱいに成長するわけだ。

既に現時点で鈴は抜いているが。

「おい、一夏。お前は人の妹をどんな目で見てるんだ？」

「はははははは」

「笑って誤魔化すな」

「だって可愛いから仕方ないだろ？」

前世の俺だったら犯罪レベルだが、今の俺は15歳。蘭は一個下。
何の問題もないじゃないか！

ビバ！ 転生！

「ふえ?! か、か、可愛い? わ、私が、ですか? . . . ?」

「うん、蘭は可愛いと思うぞ」

「や、そんな. えへへ。可愛い. 私が可愛い.
.」

【蘭side】

目の前には憧れの人、織斑一夏さんがいる。

いつからこの人を好きになったのか覚えてない——気が付いたら私の視線はこの人を追っていた。そう、私の初恋の相手であり、お兄と同級生で、今では『世界で唯一ISを動かせる男性』として、とても有名な人だ。

今年の春、IS学園に入学するまではよくウチに遊びに来ていた。だから、常に顔を見る事が出来ただけけれど、今は全寮制のIS学園に入学してしまったため、会う機会がめっきり減ってしまった。

——初恋は実らない。

よくそんな事が言われてるが、私はそんな言葉でこの初恋を諦めるつもりはない。

初恋は実らない？ それなら私はこの初恋を実らせてやるんだ。だから絶対に諦めない。

今、通ってる有名私立女子高は大学卒業までエスカレーター式だけど、一夏さんを追いかける為、実は来年の春からIS学園に入学しようとしていた。画策していたりもする。

何せ、この前のIS適性診断で『A』が出たのだ。

つまり、私はIS学園に入学できるカードを手に入れたのだ。好きな人がそこにいるからこそ、私はIS学園入学を目指す。そして、

この恋を成就させてみせるっ！

「蘭、お前なあ、ノックくらいしろよ。恥知らずな女だと思われ――」

ギンッ！　今まで視界の外にいたお兄が余計な事を口走りそうだったので、取り合えず視線で殺す。

オ　マ　エ　ハ　ダ　マ　ッ　テ　ロ

そんな私の心の声が聞こえたのか、お兄は壊れたオモチヤのようにただただ首を縦に振るだけだった。

しかし、この馬鹿兄。一夏さんがウチに来る時はあれほど私に言え、と言っていたのに、今日、一夏さんがウチに来る事を私は知らなかった。

おかげで現在の私の格好は髪を後ろでクリップに挟んだだけの状態で服装もショートパンツにタンクトップという機能性だけしか重視していない服装なのである。しかもノーブラ・・・・・・・・。

おかげで私は一夏さんにあまり今の格好を見られなくなかった。

この馬鹿兄は後でシメるしかない。うん、シメよう。

そんな想いを込め、馬鹿兄に視線を送る。私の想いを感じ取ったの

だろう、馬鹿兄は顔面蒼白となっているが、シメる事は決定事項なので逃がさない。

それよりも、今は一夏さんだ。ラフな格好をしている今の私を「可愛い」と言ってくれたのだ。こんなに幸せな事はない。さすが、馬鹿兄とは違う。

「あ、あの、よかったら一夏さんもお昼どうぞ。まだ、ですよね？」

「あー、うん。いただくよ。ありがとう」

「い、いえ……」

よし！ 今日のお昼は一夏さんも一緒だ！ おめかししなきゃ。つと、その前に私は兄を手招きして呼び出す。

「ど、どうした？ 蘭」

そのまま一夏さんを部屋に残し、一度ドアを閉める。そして部屋から少し離れた場所まで馬鹿兄を呼び出す。

「うふふ、私が何を言いたいか、分かってるよね？ お兄」

表情は笑顔。でも、目が笑っていない私の表情。

「い、い、い、いや、今日突然来る事になってさ。蘭に、教える余裕がなくて……………」

「……………言い訳？」

「ひいっ！」

私の雰囲気のにまれたのか小さい悲鳴を上げる馬鹿兄の鳩尾にコークスクリューブローを炸裂させる。

「ぐえっ！」

「……………次はないから」

「う、うう……………は、はい……………」

【二夏side】

蘭に呼び出されてから部屋を出ていた弾が戻ってきたので、一緒に一階の食堂に降りる。その際、何故か弾は顔面蒼白でお腹をおさえていたが、何かあったのだろうか？

弾の家は一階が定食屋で二階が住居となっている。一階に下りると弾の祖父である厳さんが調理場に立って、料理していた。

五反田食堂の大将にして一家の頂点でもある厳さんは長袖の調理服を肩までまくり上げ、剥き出しになっている腕は筋肉隆々。中華鍋を一度に二つ振るその豪腕は、熱気に焼けて年中浅黒い。

この厳さん、見た目はその名が示す通り、かなり厳ついのだが、蘭には何故か激甘である。

食卓にはメチャクチャ甘い事で定評のあるカボチャ煮定食が三人前用意されており、着替えてきたのか、先ほどと全く格好の違う蘭が食卓にいた。

さっきまでのラフな格好ではない、簡単にクリップ一つでまとめ上げられていた髪はしゅるりと下され、ロングストレートがきれいなキューティクルを放っている。

服装も機能的重視のショートパンツにタンクトップと言う格好ではなく、六月ということもあり半袖のワンピースにフリルのついた黒いニーソックスを履いている。

「あれ、蘭さあ、着替えたの？ どっか出かける予定？」

「あっ、いえ、これは、その、ですねっ」

ん？ 出かけるからオシャレしたんじゃないのか？

「もしかして……デート？」

蘭がデート相手か。相手の男が羨ましいな。蘭、可愛いし。

「違いますっ！」

ダンッ！ テーブルを強く叩かれ即時否定された。食卓に並べられたお椀がその衝撃に揺れる。ヤベッ、これ溢したら厳さんに叱られる。

「え、ごめん」

「あ、いえ……その、とにかく違いますからね」

「違うっつか、寧ろ兄としては違ってほしくもないんだがな。何せお前がそんなに気合の入れたオシャレをするのは数ヶ月に一回――」

――」

弾は最後まで言葉を紡げなかった。その言葉は蘭のアイアンクロウ
というかゴッド・フィンガー？ に阻まれたからだ。

「私のこの手が光って唸る。勝利を掴めと轟き叫ぶ……」

「――っ！　――っ！」

そのままヒートエンドしちゃうかもしれないという殺意を込められ
たゴッド・フィンガー？ に弾はただただ許しを請うかのような何
度も何度も頷いていた。

本当、この兄妹は面白いな。

「食わねえなら下げるぞ。ガキども」

「く、食います食います」

おっと厳さんに叱られる前にここは大人しく食事でありつくとしよ
う。厳さんの作る料理は本当に美味しいからな。中学時代はかなり
お世話になった。

「「いただきます」」

「でよう、一夏。鈴と、えーと、誰だっけ？ ファースト幼馴染だっけか？ ファースト幼馴染の子とも再会したって？」

「ああ、箒な」

「ホウキ．．．．．？ 誰ですか？」

幼馴染という言葉にピクンと反応した蘭が俺に質問してくる。

「ん？ 俺のファースト幼馴染。ちなみにセカンドは鈴な」

「ああ、あの．．．．．」

ん？ どうしたんだ？ 蘭は鈴の話題になると、いつも表情が硬くなる。何か鈴とあったのだろうか？ 俺の知る限りでは何もなかった筈だが．．．．．。

「そうそう、それでさ。その箒と同じ部屋だったんだよ。まあ、今は――」

ガタンッ！ と椅子を蹴るように立ち上がり、俺の目の前に蘭が迫ってきた。

「お、同じ部屋！？」

「へ？ うん、まあ、その……今は違うけど……入学して一ヶ月間くらい……」

蘭の鬼気迫った表情に気圧されながらも、質問に答える。……
・ どうしたんだ？ 蘭の表情がさっきよりも強張ってるような気がするの、気のせいだろうか？

「蘭？ どうした？ 取り合えず落ち着け」

「そうだぞ、蘭。いい年した女がみつともない——」

オ マ エ ハ ダ マ ッ テ ロ 。 コ ロ ス ゾ

そう物語ってるような蘭の強い視線を受け、弾は萎縮する。

ははは、本当に弾は蘭に弱いよな。

「あ、あの、い、一夏、さん？ 同じ部屋っていうのは、つまり、寝食を共に……………」

「ああ、まあ、そうなるかな。でも、それも先月までの話で、今は別々の部屋になってるよ」

「い、一ヶ月半以上も同せ——同居してたんですか?!」

「ん、まあ、そうなるかな」

俺の返答を聞いて、目眩でも起こしたのか、頭を押さえフラフラしてる。

どうしたんだろ？ 具合でも悪いのか？

「……………お兄。後で話し合いましょう……………」

その言葉はあまりにも冷たく、その言葉を聞いた弾は冷や汗をダラダラ流してた。

えっと、今の俺の今の受け答えのどこか間違っていたんだろうか？

でも、これだけは間違いなく言える。今日、弾の寿命は縮んだ、と――。

「お、俺、このあと一夏と出かけるから……。は、ははは、……」

何とか蘭との話し合いを避けたのか、弾は俺をダシに逃げようと試みるも、「では夜に」という蘭の有無を言わせぬ口調に、ただただ首を縦に振るしかなかった。

確か蘭って、お嬢様校の中等部生徒会長をやってたっけ。この年にして妙に鋭い雰囲気を持ち合わせている。怠け者の弾とは大違いだ。

「ところで、その、一夏さん」

「どうした？」

「私、来年I S学園を受験します」

え？ I S学園を受験する？ 確か蘭の通ってる学校はエスカレーター式で大学まで出れる超有名私立女子校だ。

わざわざI S学園に入学しなくてもいいくらいなのに。

しかもIS学園に入学する為には、IS起動試験でISを起動させなきゃならない。つまり適性がなければ、入学する事は叶わない。

「え？　蘭？　IS学園に入学するにはISを動かさなきゃダメだぞ」

蘭は無言でポケットからなにやら紙を取り出し、俺の前に差し出してきた。

「うえっ！　IS簡易適性試験……判定A……」

「筆記は元から問題ないですし、ISも動かせます。問題は既に解決済みです」

IS簡易適性試験。政府がIS操縦者を募集する一環行われている簡単なIS適性試験で、希望さえ出せば、女性なら誰でも受けられるらしい。

「そ、それで、い、一夏さんには是非、先輩としてご指導を……」

そっか、来年には蘭が後輩になるかもしれないのか。

「ああ、いいよ。受かったら、ISの操縦を見ても」

「や、約束しましたよ!?! 絶対に絶対ですからね!」

蘭の勢いに押され、俺はこくこくと二回頷く。確かにこの有無を言わせぬ迫力は凄いな。弾の気持ちもちよっただけ分かる。

そのまま「約束ですからね」と指切りまでさせられた。

◇◇*◇*◇*◇*◇*

食事を済ませた後は蘭は自室に戻り、俺と弾は外に遊びに行った。っていつても金の無い、彼女もない男二人、行くところといっても限られてくる。

二人でゲームセンターで一頻り遊んだ後、俺は寮に、弾は家に帰った。

もうそろそろ日も沈む時間、寮に帰るまでの家路、今日の出来事を思い返しながら俺は一人で歩いてた。

弾も蘭も変わらない。本当に見ていて飽きない兄妹だ。

まあ、IS学園に入学して、まだそんなに時間が経ってるわけじゃないからな。変わってたら逆に驚くが。今度は鈴も連れて行こう。アイツも久し振りに日本に帰ってきたんだし、一年振りに弾や数馬に鈴、そして蘭と遊びに行くのもいいかもしれないな。

——そんな事を考えてた時だった——

背後から俺を狙う、ドス黒い殺気を感じたのは。

直ぐに背後に視線をまわす。しかし、そこには誰もいない。気配も感じなかった。

一瞬の出来事だった。

まるで今すぐにでも俺を殺したい、というような殺気。あれだけの強い殺気を勘違いする筈がない。

誰だ？

周囲を警戒するが、人の気配さえ感じない。

一体、何だったんだ？ 今のは……………。

結局、その日、俺に殺気に向けたのが誰なのかを知る事は出来なかった——。

E p i s o d e 1 4 :: 二人の転校生（前書き）

更新が遅くなりました。

やっとあの二人の登場です。

Episode 14: 二人の転校生

◇◇*◇*◇*◇*◇*

箒の「抱いてほしい」宣言から日曜日を挟んで、翌週の月曜日。

その日、一年一組の教室は騒然としていた。今月行われる学年別個人トーナメント優勝者にはある特典があると――。

箒が告白した場所は寮内であり、しかも恥ずかしさを押し隠すため、声が大きくなった。当然、寮内には他の学生もいる。聞かれない方がおかしいのだ。

箒と一夏の会話を盗み聞きしていた布仏本音（通称…のほほんさん）を含めた仲良し三人組がクラスメイトに話を広めてしまったのだ。

――学年別個人トーナメントを優勝すれば、織斑一夏との処女喪失を含めた交際が出来る――

滅茶苦茶であるが、彼女達にとって初めての相手が誰でもいいわけではない。

しかし、織斑一夏はその初めてを捧げる相手として適任でもあるのだ。

姉は世界一にも輝いた事のあるIS操縦者で、本人自身も世界で初めてのIS操縦者として、この世界で最も有名人でもある。

事実、箒、セシリア、鈴といったように表だって行動し、一夏を狙う者もいるが、大半は陰で見ている憧れの存在として見ている女生徒がほとんどを占める。

そんな彼女達にも遂にチャンスが訪れたのだ。

騒がない方がおかしいだろう。

「ねえ、聞いた？」

「聞いた聞いた！」

「え？ 何の話？」

「だから、あの織斑君の話よ」

「いい？ 絶対に女子にしか教えちゃダメよ？ 女の子だけの話なんだから。今月の学年別トーナメントで——」

思春期女子で埋め尽くされた教室内は騒然としていた。箒自身も何故、この話が広まっているのか分からないといった具合で頭を抱え

ており、セシリアに関しては、クラスメイト全員が何をそんなに騒いでいるのか、気になっていた。

【二夏side】

「おはよー」

気怠い声を出しながら、俺は教室のドアを開けると、いきなりクラスメイト達がじっとこちらを見てきた。

へ？ 俺、何かしたっけ？

「織斑君っ！ 織斑君っ！」

「ねえねえ、あの噂ってほんと——もがっ！」

静まり返った教室で俺の存在に一早く気付いた女子の集団が雪崩れ込んできた。その内の一人の女子が俺に何かの噂の真偽を聞いただそうとしたところで、他の女子が取り押さえた。

うん？ あの噂ってなんだ？

「い、いや、なんでもないの。なんでもないのよ。あはははは．．．」

さっき噂（？）の真偽を聞き出そうとした子と俺の間を何人かの女子が通せんぼするように立ちはだかった。

「——バカ！ 秘密って言ったでしょうが！」

「いや、でも本人だし．．．．．」

奥の方から何やらボソボソと会話が聞こえてくる。

「なあ、ちよつといいか」

「な、なにかな？ 織斑くん」

通せんぼしている女子の中の一人、えっと相川さんだよな？ その子も事情を知ってるみたいな感じだったので質問を投げかけてみる。

「いやな、噂って？」

「ひうつ！　う、噂？　そ、そんなものないよ、ね？」

相川さんは他の女子に同意を求め、何事もないかのように振る舞うつもりらしいが、かなり動揺してるんだろう。明らかに挙動不審だ。

「何か隠してない？」

「隠してない隠してない隠してない」

おおー、全員息ピッタリだ。そのまま女子集団は何事もなかったかのようにそそくさと退散していった。

「何だったんだ、一体………？」

女子が退散していった後、セシリアが俺のところへ駆け寄ってきた。

「おはようございます、一夏様。ところでこの騒ぎは一体何ですか？」

「さあ？」

まあ、何を噂しているか知らないが、何となく俺絡みの噂なんだろう。セシリアは知らないらしいが、俺にも心当たりがない。

そして自分の机に向かう最中、箒と視線が合ってしまった。

「お、おはよ、箒」

「う、うむ。……おはよう」

あの「抱いてもらう」宣言以来の顔合わせだ。お互い恥ずかしいのか、思わず歯切れも悪くなってしまう。セシリアは「？」って感じで首を傾げてるようだが。

そんな事していると、予鈴が鳴ったので、各自、自分の席へと戻っていく。

「諸君、おはよう」

「お、おはようございます！」

それまでざわざわしていた教室の空気が一瞬で引き締まる。そう、我が姉でもあり、鬼教官としても名高い織斑千冬先生の登場だ。

おっ、ちゃんと俺の出したスーツを着てくれる。

昨日家に帰った際に、夏用のスーツを出しておいたんだが、早速着てくれてるようだ。この姉は学園ではピシッとしてるくせに家ではかなりのズボラだ。

「織斑？ 何か失礼な事考えていたろう？」

「いえ！ 全くもってそんな事は考えていないでありますっ！」

俺が考え事をしていると、不意に千冬姉は眼光鋭くその視線で俺を射抜く。

全く俺の考えてる事を読めるなんて――アンタはエスパーかつ？

「では、山田先生。ホームルームを」

「は、はいっ」

千冬姉に促され、教壇に立つ山田先生。しかし、この学園に入学して一ヶ月は経つが、未だに山田先生は先生らしくなかったりする。まあ、そのおかげもあるのか、生徒からは慕われているようだ。

しかし、山田先生を侮れないのが、そのおっばいだ。今日もたゆん

たゆん絶好調に揺れている。そう、揺れているっ！

俺のおっぱいスカウター（脳内変換仕様）をもってして、その乳闘力は宇宙規模。まさにビッグバンおっぱいだ！

次点で千冬姉。大きさは山田先生に叶わずとも形・張り共に良しのまさに究極おっぱい。
アルティメット

箒は言わずもがな核弾頭級おっぱいであるし、セシリアもさすが英国淑女といった、まさに美麗おっぱいだ。
ダイナマイト
エレガント

さらにダークホース的存在でもあるのほほんさんに至っては、その隠れた魅力、まさに規格外おっぱいの持ち主でもある。
ファンタジスタ

鈴は………まあ、その、そっとしておいて………。

ふはははははははは、今日も俺のおっぱいスカウターは絶好——

スパア————ンッ！

「お前はホームルーム中に何を考えている？」

おおお………、頭に出席簿が突き刺さるううう………。

しかし何故この姉は俺の考えてる事をこうも読み取れるんだ？ エスパークか？ 本当にエスパークなのか！？

「全くお前というやつは………はあ………」

千冬姉は頭を押さえ、溜息を吐く。しかし、顔を上げると、いつものように凜とした表情で、山田先生の方に向き直り、ホームルームの再開を促す。

「ははは……え、えーつとですね、今日はなんと転校生を紹介します！　しかも二名です！」

「ええええええええええつ！？」

いきなりの転校生紹介にクラス中が一気にざわつく。

しかし、二人まとめて同じクラス？ 普通こういうものは分散させるものじゃないのか？

山田先生は教室のドアの方を向き、教室の外にいらるであろう転校生二人に入室の旨を促す。

「失礼します」

教室に入ってきた二人の転校生を見て、ざわめきがぴたりと止まる。理由はその一人が女子の制服じゃなく男子の制服を着ていた事が原因だろう。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れな事も多いかと思いますが、皆さんよろしくお願いします」

男子の制服を着ていた転校生の一人、シャルルはにこやかな顔でそう告げて一礼する。

しかし、男？ その割には可愛い顔をしてる。って、俺はそっち系じゃないからな。健全な女性に興味を持つお年頃の男子だからな。

「お、男……？」

誰かがそう呟いた。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を――」

人懐っこそうな笑顔。礼儀の正しい立ち居振る舞いと中世的な整った顔立ち、しかも金髪でその長い後ろ髪は首の後ろで丁寧に束ねられている。体つきは華奢で無駄な肉もなくスマートで、しゅっと伸

びた脚が格好いい。

「ぎゃ・・・・・・・・」

「はい？」

「きゃあああああーっっっっっっっ！」

耳をつんざくかのような女子の嬉しい悲鳴（？）が教室内をこだま
する。

「男子！ 二人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！ しかも守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれて良かった〜〜！」

騒然となる女子を千冬姉は面倒臭そうに一喝する。まあ、大人の千
冬姉から見れば、このような女子の反応が鬱陶しいんだろう。

「み、皆さん、お静かに。まだ自己紹介が終わっていませんから！」

涙目の山田先生。大変なんだろうな、教員職って。お疲れ様です。後、今日もナイスおっばい。

しかし、さっきから俺を見ているのだろう。もう一人の転校生から俺に向けて敵意が感じられる。はて、俺、何かしたっけ？

昨日は昨日で殺気を飛ばされるし、今日は今日で転校生の一人から敵意を剥き出しにされてるかのように睨まれてる。

そのもう一人の転校生は輝くような銀髪を腰近くまで下しており、左目に黒い眼帯。しかもその漂う雰囲気は一般のものではなく、軍人みたいな印象を感じる。

身長はシャルルと比べて明らかに小さいが、その全身から放つ冷たく鋭い気配がまるで同じ背丈であるかのように見るものを感じさせていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

当の本人は未だに口を開かず、腕組みをした状態で教室の女子達を下らなそうに一瞥し、その視線は千冬姉だけを見ていた。

「・・・・・・・・挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

山田先生の紹介では無言を貫き通していたもう一人の転校生は、千冬姉の指示にだけは忠実なようで、佇まいを直して素直に返事をした。

「ここではそう呼ぶな。それにもう私は教官ではないし、ここでもお前も一般生徒だ。私の事は織斑先生と呼べ」

「了解いたしました」

そう答えるラウラはピシッと伸ばした手を体の真横につけ、足を踵で合わせて背筋を伸ばす。――どう見ても軍人、もしくは軍事施設関係者にしか見えない。しかも千冬姉を『教官』と呼んでいるので、間違いなくドイツ関係者だ。

俺の過去の誘拐事件で俺の居場所を特定してくれたのがドイツだ。それに恩義を感じた千冬姉は一年ほどドイツで軍隊教官として働いていた事がある。その時の教え子なのだろうか？

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

無言。名前だけの自己紹介。クラスメイト達は、続く言葉を待っているのだが、名前だけを口にしたら、また口を閉ざしてしまった。

「あ、あの、以上・・・・・・・・ですか？」

「以上だ」

いたたまれない空気を感じた山田先生が出来る限りの笑顔でラウラに訊くが、返ってきたのは無慈悲な返答だった。おいおい、先生を苛めるなよ。あー、泣きそうになってる。しかし、本当にこの先生は年上なのか疑いたくなるな・・・・・・・・ぶるんぶるんなおっぱいは宇宙規模^{ビッグバン}だけどな。

そんな事を感じていたら前方から敵意を感じる。

「！ 貴様が――」

振り下ろされる平手打ちを俺は軽く右手を挙げて防ぐ。

「っ！」

「……………随分なご挨拶だな」

目の前のラウラは俺が平手打ちを防ぐとは思ってなかったのだろう、一瞬だけが驚いた表情を出したが、直ぐに冷静さを取り戻したのか、表情を直す。

そして俺に向けられる剥き出しの敵意。昨日は昨日で肌がざらつくようなドス黒い殺意を感じて、今日は今日で俺の存在を拒絶するかのような敵意を向けられるなんて——俺って何気に嫌われ者？

今の出来事にクラス中の皆がこっちを見ている。箒やセシリアも驚きに声が出ない様子だし、もう一人の転校生のシャルルなんて目を丸くしてる。

しかし、ラウラの次の言葉が教室内の空気を変える。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか。貴様の存在を私は認めない」

俺が文句を言おうと口を開こうとした瞬間——机を叩く音が聞こえた。

「黙りなさい！ ラウラ・ボーデヴィツヒ！」

声を上げたのはセシリアだった。

【セシリア side】

気が付いたら、わたくしは声を上げていた。

今日、転校してきたドイツからの転校生、ラウラ・ボーデヴィツヒはわたくしの愛する一夏様の存在を否定した。愛する存在を否定される——こんな事を静観できる筈がない。

「誰だ？ 貴様」

「わたくしはイギリスの代表候補生、セシリア・オルコットですわ」

「古いだけしか取り柄の無い国の代表候補生如きが私に何の用だ？」

ぶちっ——！！

わたくしの中で何かが切れる音がした。国の誇りまで穢されたのだ。

「ふ、ふふふ。あなたは余程スクラップになるのがお望みのようですわね………」

「…………お、おい、セシリア……………」

「一夏様。わたくし、国の誇りを穢されたばかりか愛する者まで否定されて黙ってられる程、気は長くありませんの。少し黙っていただけますか？」

「…………は、はい」

目の前のラウラ・ボーデヴィツヒはつまらなそうにわたくしを見にくる。「お前に何が出来る？」と言わんばかりの視線を向けているのだ。一々、癪に障る女ですわね。

わたくしの愛と誇りを土足で踏みにじったあなたには相応の罰を与えなければ、気が済みそうもないですわね。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ……………」

「ふん、何だ？」

「あなたに決闘を申し込みますわ」

「ほう？」

しんと静まり返る教室。一夏様も箒さんも他のクラスメイトもあまりの展開に誰も口を開く者はいない。今この場で言葉を交わしているのは、わたくしと目の前のラウラ・ボーデヴィツヒのみ。

「・・・・・・・・織斑先生。宜しいでしょうか？」

クラス担任でもある織斑先生に決闘の許可を願い出る。

「オルコット・・・・・・・・今月開催される学年別個人トーナメントまで待てないのか？」

「ここまで侮辱されて待っていられるほど、悠長な事は言っていないわ」

「ふむ」と顎に手を置き、軽く考えているようで少しの間、静寂が訪れる。学年別個人トーナメントまで待っていられませんわ。なにせ、トーナメントですもの。確実に対戦するとは限らない。

「山田先生。今週金曜日の放課後に第三アリーナの使用許可を取っておいてもらえるだろうか？」

「え、え？ 決闘を、み、認めるんですか？」

「仕方ないだろう。ここまできては、こうでもしないと収まりがつかん。そうだろう、オルコット？」

「当然ですわ」

「ラウラもそれでいいな？」

「構いません」

こうして、わたくしとラウラ・ボーデヴィツヒの決闘は今週の金曜日の放課後に行われる事が決定したのだ。

Episode 15 :: 山田真耶は強い!?(前書き)

休日なので連続更新。

Episode 15.. 山田真耶は強い!?

【一夏side】

俺に敵意を剥き出しにしていたラウラの暴言に、セシリアがキレて、決闘を申し込んだ。俺のために怒ってくれた——それが純粹に嬉しかった。

クラスメイトは事態が飲み込めず、ぼかんと口を開けていたりもするが。箒は箒で「出遅れた.....」とかブツブツ言っていたりしてるが。

セシリアも箒も、それに鈴も、純粹に俺に想いを寄せてくれている。女の子から好きと言われて、嬉しくない奴なんていないだろ。いつかは答えを出さなきゃいけない。

しかし前世の頃から今の今まで、俺は誰とも付き合った記憶がない。一人だけならまだしも現状で三人.....三人には三人のいいところがある。

うむう、童貞には酷な問題だ.....。

「あ.....ゴホンゴホン! ではホームルームを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散!」

既にラウラとセシリアの件は片付いたというかのように、ぱんぱんと手を叩いて千冬姉が行動を促す。

さて、次の授業はI S実習か。このまま女性と一緒に教室で着替える事を頭の中では良しと判断するが、常識的に考えればアウトである。さて、急いで更衣室に行かないとな。

「おい、織斑。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう」

元からそのつもりだ。I S学園で初めてできた男子のクラスメイトなんだからな。

「君が織斑君？ 初めまして。僕は――」

「ああ、自己紹介は後にしよう。とにかく移動が先だ。俺達がいちや女子も着替えられないだろうしな」

説明すると同時に行動に移す。転校してきたばかりで勝手も分からないであろう、シャルルの手を取り、そのまま教室を出た。

「取り合えず男子は開いているアリーナ更衣室で着替える事になる。これから実習の度にこの移動だから、早めに慣れてくれ」

「う、うん……」

何だ？ 妙に顔が赤い気がするが気のせいだろうか？

取り合えず階段を下って一階へ。急がなければならない。何故か？
ここはIS学園。俺以外、女子しかない学園。そう女の園である。

その中にシャルルのような存在が投げ入れられたようなものだ。例えるなら、ライオンの檻の中に餌を放り投げた状態？

「ああーっ！ 転校生発見！」

「しかも織斑君と一緒に！」

しまった、見付かったっ！

ホームルームが終わった。つまり噂の転校生の情報を得ようと各クラスから情報先取のための尖兵が駆け出しているのだ。あの波に飲み込まれたら最後、質問攻めの挙句、授業に遅刻——鬼教官の特別カリキュラムが待っているのだ。あの姉は例え弟だろうが容赦しない。

「いたっ！ こっちよ！」

「者ども出会え出会えい！」

次から次へと集まってくる女生徒の数に冷や汗しか出ない。思春期女子のこの行動力には本当に恐れ入る。

「織斑君の黒髪もいいけど、金髪っていうのもいいわね」

「しかも瞳はエメラルド！」

「きゃああっ！ 見て見て！ ふたり！ 手！ 手繋いでる！」

「え？ って事は、織斑君がタチでデュノア君がウケ？」

本当にとんでもない事を口走ってるな……。俺は女にしか興味のない至ってノーマルで健全な男子であるのだ！

「な、なに？ 何でみんな騒いでるの？」

状況が分からないといった感じでシャルルが訊いてくる。

「そりゃ男子が俺達だけだからだろ？」

「・・・・・・？」

まだ状況が飲み込めていないシャルルは困惑顔のままだ。

「いや、普通に珍しいだろ。ISを操縦できる男って、今のところ俺達しかいないんだし」

「あっ！　——ああ、うん。そうだね」

「それにこの学園の女子は男子と極端に接触が少ないから注目を集めやすいしな」

「ああ、なるほど」

漸く事態を飲み込めたシャルル。さて、この包囲網を突破するためには——そこで視界を左右にまわし、脱出口を探す。

おっ、一つ先の廊下が極端に数が薄いな。あそこならイケルっ！

「新聞部副部長、黛薫子、只今参上っ！ さあ、噂の転校生君。インタビューさせてもらうわよ」

しまったっ！ 最も見付かりたくないであろう人に見付かってしまったっ！

「・・・・・・・・全くセシリアちゃんもつと早く情報をよこしてくれば・・・・・・・・」

どうやら黛先輩に情報をリークしたのはセシリアのようだ。全く俺を庇ってくれた事は純粋に嬉しかったのに。これは後で説教してやらねば。

まあ、先ずは状況の打開が優先。

「いくぞ？」

「あ、う、うん」

シャルルの返答を確認してから、一つ先の廊下目掛けてダッシュする。そしてそのまま、追いつかれないようにさらにさらに急ぐ。

「ああーっ！ 逃げられたーっ！」

「待ってーっ！」

後ろから女子の声が聞こえるが、取り合えず振り切らねば。

「しかし、まあ助かったよ」

「え？ 何が？」

「いや、やっぱ学園に男一人はつらいからなあ。何かと気を遣うし。一人でも男がいてくれるっていうのは心強いもんだ」

「そうなの？」

そうなのって…… シャルルは女子ばかりの集団に慣れているんだろうか？

「ま、これからよろしくな。俺は織斑一夏。一夏って呼んでくれ」

「うん、よろしく一夏。僕の事もシャルルでいいよ」

さて、群衆に捕まる前に脱出する事には成功した模様だ。そのまま更衣室にたどり着いたのはいいが、時間はぎりぎりだった。

「うわ！ 時間ヤバいな！ 直ぐに着替えちまおうぜ」

そのまま俺は制服のボタンを外し、Tシャツまで脱ぎ捨て上半身、裸になった。

「わあっ！」

いきなり着替え始めた俺を見て、シャルルが素っ頓狂な声を上げる。えっと、俺の体って何かおかしかったっけ？ 何気に鍛えてるから引き締まってると思うんだが。

「どうした？ っていうか、なんで着替えないんだ？ 早く着替えないと次の授業に遅れるぞ。シャルルは知らないかもしれないが、うちの担任はそりゃあ時間にうるさい人で——」

「う、うんっ？ き、着替えるよ？ でも、その、あの、あっち向いてて……ね？」

「?..?.. いや、まあ別に着替えをジロジロ見る気はないが..
」

そう、俺は女体にしか興味ないからな。男の着替えなんて見てもつまらないだけだ。

「..... って、シャルルはジロジロ見てるな」

不意に視線を閃いたので、視線を感じる方へ目を向けると、シャルルはぼーっと俺の裸を見ていた。頬を赤く染めながら。えっと..
..?

「み、見てない! 別に見てないよ!..?」

まあ、気にしないでおう。うん、気にしたらダメだ。

んで、着替えを再開させたわけだが、また視線を感じる.....
。気になって視線を向けると、シャルルはこっちに向けてた視線を慌てて壁の方にやって、ISスーツを着終わっていた。

「..... 着替えるの超早いな。なんかコツでもあるのか?」

「い、いや、別に..... って一夏はまだ着てないの?」

「これさ、着る時に裸ってというのが着づらいんだよなあ。引っかって」

ふふん、俺のムスコはビッグなんだ♪ まあ、まだ使った事ありませんけどねー。 悲しくなってくる

「ひ、引っかって?」

「おう」

シャルルは何故か顔をカァーッと赤くしている。シャルルもだろう?
変な奴だな。

「ところでそのスーツ、なんか着やすそうだな。どこのやつ?」

「あ、うん。デュノア社製のオリジナルだよ。ベースはふあらんくすだけど、ほとんどフルオーダー品」

「デュノア? デュノアって」

「うん。僕の家だよ。父がね、会社の社長をしてるんだ。一応フランスで一番大きいIS関係の企業だと思う」

「へえ！　じゃあ、シャルルは社長の息子なんだな。道理でなあ、シャルルって気品っていうか、いいところの育ち！　って感じがするし、納得だわ」

「いいところ・・・ね」

シャルルが視線を逸らす。表情にも陰りがあるように思える。何か触れられたくないところだったんだろうか。

「それより一夏の方が凄いよ。あの織斑千冬さんの弟だなんて」

「・・・まあ、第三者から見たらそうなのかなあ」

学園や外にいる時の千冬姉しか知らない人間はそう思うだろうが、家では脱いだ服もそのままに下着姿で酒ばっかり飲んでるわ、かなりズボラな姉だ。どうしても素直に凄いと認められない。まあ、凄いいとは思うが。

「どうしたの、一夏？」

「？」といった感じに首を傾げるシャルル。

「まあ、世の中には知らない事実もあるという事だよ、シャルル君」

「？ 変な一夏」

そんな事をしていたら当然――

「遅い！」

ですよねー。

第二グラウンドに到着したのは俺とシャルルが一番最後だったらしい。

ははは、千冬姉が腕を組んで佇む様は、まるで鬼が金棒を持って待ち構えているかのような、そんな錯覚が見えてくるから不思議だ。

さて、IS実習の授業は本当に男にとっては酷なものがある。だって、ボディーラインがくつきり分かるISスーツを着ている女の子は、その、まあ何だ。エロス。

さらに今日は二組の子も合同で一緒なため、破壊力は倍増だ。

さて、いつまでも俺達のせいで授業を遅らせるわけにはいかないからな。俺とシャルルは一組が整列している一番端に加わる。

「随分ゆっくりでしたわね」

隣にいたのはセシリアだった。俺のためにラウラに決闘を申し込んだのだ。

「いや、まあ、更衣室にたどり着くまでが大変だな……」

そう、普通に更衣室に向かっていれば、何の問題もなかった。他のクラスの女子に囲まれさえしなければ、な。

「それよりも本当にラウラと決闘するつもりなのか？」

「当然ですわ」

「あんた、転校生に叩かれそうになったんだってね？」

ふと後ろを見ると鈴がいた。

「あんたの事だから何かやったんじゃないの？」

「何もやってない」

「――織斑、オルコット、凰。お前等、私の授業で無駄話とは度胸があるな」

小声で話してた筈なんだが……千冬姉にはばっちり聞こえてたらしい。まさにデビルイヤー。

バシーンッ！

◇◇*◇*◇*◇*◇*

「では、本日から格闘および射撃の実戦訓練を開始する」

「はい！」

ズキズキと痛む頭をさする三人。俺にセシリアに鈴だ。無駄話をしていた俺達に容赦なく出席簿アタックが炸裂したのである。

「さて、今日は戦闘を実演してもらおう。授業に遅れたのと無駄話をしていた活力があふれんばかりの——織斑！」

「お、俺!？」

まだIS操縦を始めて間もない俺がやるのか？　ここには専用機持ちが俺以外にもいるのに？

「頑張ってくださいまし、一夏様」

「一夏、骨は拾ってあげるわ」

一人、不用意な発言をしてるが無視しておこう。

「ちふ——織斑先生？　何で俺なんですか？　俺よりIS操縦に長けた専用機持ちが他にいますよね？」

「いやな、これまでの戦闘で大分、昔の勘が取り戻せてきているんだらう？　現時点でお前の実力がどれほどのものか確認しておきた

い」

昔の勘——つまり、前世の頃の事だな。いくら経験と記憶を継承していても、器であるこの体は未成熟な十代の身体。御剣一刀流の技も再現するにはまだ身体がついてこれていない現状だ。

最近では模擬戦の甲斐もあって、前よりも大分勘は戻ってきている。それでもまだ前世の頃に比べれば、半分くらいなんだが。

「それで相手は？」

「対戦相手か、対戦相手はだな——」

キィィイン・・・・・・・・。

空気を切り裂くような音が聞こえる。嫌な予感がするな・・・・・・・・。

「ああああ——っ！ ど、どいてくださいっ！」

嫌な予感の中かよおおっ！

ドカーーン！

声の方を向くが時すでに遅し。謎の飛行物体の突進を受け、俺は数メートル吹っ飛ばされた後、ゴロゴロと地面を転がった。

危ない危ない。百式の展開が間に合ったおかげで大事に至らなかった。しかし、何が起き――

むにゅ。

「ん．．．．．」

むにゅむにゅ。

「ひゃんっ」

むにゅむにゅむにゅ。

「あ、はあ．．．．．あ、あのう、織斑くん．．．．．あんっ！」

え、えーっと．．．．．。恐る恐る俺は自分の手の先に視線をや

る。

「そ、その、ですね。困ります……。こんな場所で……。いえ！ 場所だけじゃなくてですね！ 私と織斑くんは仮にも教師と生徒で、ですね！ ああ、でもこのまま行けば織斑先生がお義姉さんって事で、それはとても魅力的な——」

俺が手に掴んでいたのは、なんと山田先生の宇宙規模おっぱいだっ
た。この感触、この感度、まさに天国^{ヘブン}っ！

許されるのであれば、ずっと揉んでいたい。しかし今は授業中であり、つまり今の俺のこの状態はクラスメイトの視線の的になる。

しかも姿勢がマズイっ！ 何がマズイって、さっき吹き飛ばされた時にゴロゴロと一緒に転がった結果、俺が山田先生を押し倒しているような状態なのである。

しかも俺の右手は山田先生の宇宙規模^{ビッグバン}おっぱいを鷺掴みである。うん、そろそろ離さないと俺の命に関わる問題になると思うんだ。それは分かってる。でも、よく考えてみる。

おっぱいを揉む事は童貞男からすれば、至高の夢である。その夢が思いもかけぬ状況で叶ったのだ。

一刻も早く手をどけなければいけないのに、俺の思考に反して、俺の体は反応してくれない。

——ハッ!?

身の危険を感じて、即座に俺は体を離す。そして恐る恐る後ろを振り返ると四匹の悪魔がいた。

身の毛もよだつほどの黒いオーラをその身に包んだ千冬姉、箒、セシリア、鈴だ。

あっ、死んだ——

◇◇*◇*◇*◇*◇*

【真耶side】

あううう、嫁入り前なのに男性に胸を揉まれてしまいました。まだ男性には揉まれた事がなかったのに。

チラッと視線を向けると、ボロ雑巾のようにされた織斑くんの屍が地面に転がってました。

しかも織斑くんをボロ雑巾のようにした四人からの視線が私を突き刺すように睨んでる。ひいいいっつ。あれは事故、事故なんですから。勘弁してください。

でも、織斑くん、大丈夫かな？　ここは副担任として彼をちゃんと介護してあげなくちゃ、うん。

「織斑っ！　いつまで寝ている。時間が惜しいっ。早く起きろっ！」

私の尊敬する織斑先生の凜とした声がグラウンドに響き渡る。気のせいのだろうか、その声には怒りも含まれてるように感じるのは。

「は、はいいいーっ！」

あっ、復活した。

よかった。大した怪我がなくて。

「さて、今から織斑と山田先生には模擬戦を行ってもらおう。山田先生はああ見えて元代表候補生だから。強いぞ」

「む、昔の事ですよ。それに候補生止まりでしたし……」

代表候補生の頃は目標であつた織斑先生に少しでも追い付きたくて、必死に必死に頑張った。おかげで代表候補生にまではなる事ができたが、それまでだった。

でも、あの頃の努力が無駄になった、とは思ってない。

あの頃の努力があったから、私はこうしてIS学園で先生をやっているんだし、私が培った知識や技術を教え子に教える事が何よりも楽しい。

それに目の前で対峙する織斑くんにはセンスがある。

自身の専用IS初出撃時に初期化と最適化処理を実戦で行い、単一
フォーマット フイッティング
フ・アビリティ 仕様能力の発動どころか進化までさせたのだ。

正直、私が知るIS操縦者でこんな事をしたのは彼以外にはいない。

いつかはあのブリュンヒルデすらをも凌ぐIS操縦者に育つ可能性があるのが織斑くんだ。

だから油断はしない。全力を持ってぶつかる。それが私の今の役目だ。

【一夏side】

山田先生の雰囲気が変わった。臨戦態勢に入ったようだ。

とても入学試験の時に勝手に突っ込んで動かなくなった人と同一人物には見えない。

もちろん、今の山田先生の雰囲気^{雰囲気}に驚きを感じているのは俺だけじゃないみたいだ。箒もセシリアも鈴も、それに他のクラスメイトも啞然としたままだ。

——面白。

山田先生は現時点でセシリアや鈴よりも実力は上のようなのだ。

強い人と戦うのは血が滾るといふのだろうか、胸から湧き出る高揚感が抑えられない。

今の俺がどれほど通用するか分からないが全力でぶつかなければ、あつという間に俺が負けるだろう。

気を引き締めなきゃな。今、目の前にいるのはいつもの朗らかな山田先生じゃない。IS操縦者、山田真耶だ。

「織斑、この試合。^{れいじんらいこう}零迅雷光の使用は禁ずる。お前の実力だけで戦ってみろ」

「——分かった」

山田先生の駆るISは第二世代最後期の量産型機体『ラファール・リヴァイヴ』。量産型とはいえ、そのスペックは初期第三世代型にも劣らないものだ。

雪片式型を正面に構える。山田先生も武器をコールし、構える。それを確認した千冬姉が戦闘開始の合図を告げる。

「では、はじめ！」

俺の戦闘スタイルは武装が近接特化ブレードである雪片式型しかないので、相手に近付かない事には何も始まらない。対する山田先生の『ラファール・リヴァイヴ』は装備によって、格闘・射撃・防御といった全タイプに切り替え可能な万能型だ。

取り合えず、考えてもやる事は変わらない。勝つためには近付くしかない。

イグニッション・ブースト
瞬時加速で突撃を仕掛ける——もちろん、これは読まれてるよう
で山田先生はショットガンの照準を俺に狙いを定める。

もちろん、俺も馬鹿正直に突撃するだけじゃない。加速中にもかかわらず、スラスターを左に吹かし、右に避ける。

うおっ、さすがにGが凄い。さらにスラスターを全開にし、山田先生に迫る。

「っ！ 二段加速っ!？」

そのまま横薙ぎの一閃——山田先生のショットガンを切り裂く。

「まだまだあつ！」

勢いをそのままに上段からの袈裟斬りで斬りかかるも即座に展開されたシールドにその斬撃は阻まれる。

「簡単にはやらせませんよ」

そのまま体勢を直しながら距離を取り、二丁の機関銃が俺を狙ってくる。銃撃を掻い潜るように回避行動に移るが――さすが山田先生、射撃の腕は相当なものだ。的確に俺が避けるであろう先を読んで、銃弾をばら撒く。

ははは、冗談抜きで本当に強い。

――その後も何度か隙を伺い、攻撃を仕掛けていくが悉く防御される。そのまま正確無比な銃撃が少しずつ俺のシールド・エネルギーを奪っていく。

なら、相手の虚をつき、迅速な攻撃を持って斬る。雪片式型を鞘に収めるような形で左後方で構え、そのまま突撃を仕掛ける。

「っ！」

ここまで接近を許してしまった事に対してなのか——山田先生の表情が強張る。このスピードと迅速な斬撃をもってすれば、——勝てる！

「そこまでだ！」

千冬姉の静止の声を合図に、俺も山田先生も動きを止める。俺の太刀は山田先生の首筋に、山田先生の銃口は真正面から俺を捉えていた。

うわぁ、絶対に勝てると思った斬撃はよくて相打ち程度のものだった。

「流石ですね、山田先生。絶対に勝てると思ったのに……」

「あ、あはは。運が良かっただけですってえ」

運も実力の内というが、咄嗟の判断で虚をついた筈の俺の斬撃に対処してくるんだ。これが山田先生の実力か。いつもの朗らかな雰囲気からは想像もできないくらいの強さだ。

「よかったらまた仕合ってもらえますか？」

「時間がある時は、いいですよ」

強い人とやるのは、勉強になるし、前世の勘を取り戻すにも最適な練習になる。

「……………放課後、二人きりで……………いゃん、そんな……………」

「何か言いました?」

「ひゃうっ!? な、な、な、何でもありません!」

頬を赤らめ、ぶつぶつ言ってたかと思うと身をよじらせた山田先生が気になって、訊いてみるが、首をブンブン横に激しく振って、何でもない事を強調された。しかし、戦闘中はあれだけキリッとしているのに、今はいつもの山田先生だ。普段もあれだけ凜としてれば、生徒から尊敬されるかもしれないに……………無理だろうなあ。

「さて、これで諸君にもIS学園教員の実力がどれほどのものなのか理解できただろう。以後は敬意をもって接するように」

まあ、今回の模擬戦は山田先生の実力を生徒に理解してもらおう事も

目的だったらしい。多くの生徒は山田先生の事を尊敬の眼差しで見つめている。

箒やセシリアに鈴は、信じられないものを見たかのように目を丸くしてるが。

そりゃ普段の山田先生の行動を知ってれば、戦闘時の山田先生は想像もつかないからな。

E p i s o d e 1 6 : ラウラの闇（前書き）

全編シリーズに書きません。

どうしてもギャグに走ってしまう．．．．．

Episode 16.. ラウラの闇

【ラウラ side】

目の前で行われた模擬戦に言葉を無くしてしまった。

——想定外。ここの教師が弱くない事は理解した。しかし奴の強さは予想していたものとは違った。

どういう事だ？ あれだけの強さを有しながら、むざむざ誘拐され、教官の二度目の優勝を邪魔したというのか、奴は？ 分からない。理解できない。

しかし勝てない相手ではない。

そう怖れる必要などどこにもないのだ、今の私の力に及ばない。

ラウラ・ボーデヴィツヒ。それが私の名前であり、識別上の記号。一番最初につけられた記号は——遺伝子強化試験体C-0037。

人工合成された遺伝子から作られ、鉄の子宮から生まれた。

物心つく頃には武器を手を取っていた。

幼少時に与えられたオモチャは人を殺すための銃火器。

平和な国で子供が習う教育というものは、私にとっては如何にして

人体を攻撃するかという知識、敵軍に打撃を如何に効果的な打撃を与えるかという戦略というものでしか教えてもらえなかった。

それが日常であり、普通だと信じて疑わなかった。格闘を覚え、銃火器の扱いを習い、各種兵器の操縦方法を体得した。

私は優秀だった。性能面において、最高レベルを記録し続けた。

そんな私に転換期が訪れる。——そう、世界最強の兵器『IS』が現れた事で世界へ一変したのだ。

現存する兵器を無効化する程の力を持つIS。そのISは当初、私を拒絶した。

適性向上のために行われた処置『ヴォーダン・オージェ』によって異変が生まれてしまったのだ。

疑似ハイパーセンサーとも呼ぶべきもの——『ヴォーダン・オージェ』は、脳への視覚信号伝達の爆発的な速度向上と、超高速戦闘状況下における動体反射の強化を目的とした、肉眼へのナノマシン移植処理の事を指す。そしてまた、その処置を施した目の事を『ヴォーダン・オージェ越界の瞳』と呼ぶ。

危険性もなく、理論上では不適合も起きる筈がなかった。しかし、この処置で私の左目は金色へと変質し、常に稼働状態のままカットできない制御不能へと陥った。

そして、この事で私は部隊の中でもIS訓練においても後れを取る事になってしまった。

トップの座から転落した私を待っていたのは、部隊員からの嘲笑と侮蔑、そして『出来損ない』の烙印だった。

そう私は深い闇の底へと転がり落ちていった。そんな私を救い出してくれたのが、教官——織斑千冬だったのだ。私にとって深い闇の底で初めて目にした光。

『ここ最近の成績は振るわないようだが、なに心配するな。一ヶ月で部隊内最強の地位へと戻れるだろう。なにせ、私が教えるのだからな』

その言葉の通り、私は一ヶ月で部隊内最強の地位へと返り咲いた。私だけに特別訓練を課したわけではない。教官が言われた事を、一語一句違わずに忠実に実行しただけ。

もう自分を疎んでいた部隊員も気になる事はなかった。それよりもずっと、強烈に、深く、あの人に——憧れた。

それから私は教官が帰国するまでの半年間、時間を見付けては話しに行った。話しに行った、というのはただの口実だったかもしれない。

ただ、純粹にあの人の傍にいたかった。あの人を傍で見えていたかった。

そんなあの人の強さを純粹に知りたいという衝動から、ある日訊いてみた。——何故、教官はそこまで強いのですか？——と。

その時、あの鬼のように厳しくも凛々しい表情が僅かに優しげな表情に変わったのは。

『私には弟がいる。あいつを見ると、分かる時がある。強さは、どういうものなのか、その先に何があるのかをな』

この日初めて、あの人が言った事が理解できなかった。

『そうだな。いつか日本に来る事があるなら会ってみるといい、．．．あぁ、だが一つ忠告しておくぞ。あいつに——』

初めて見る、あの人の優しい笑み、気恥ずかしそうな表情。でも、それは違う。あなたは強く、凛々しく、堂々としているのが、あなただ。

だから——許せない。教官にそんな表情をさせる存在が。

そんな風に教官を変えてしまう弟、それを認められない。認めるわけにはいかない。

私は——織斑一夏存在を認めない。

◇◇*◇*◇*◇*◇*

【一夏side】

「一夏って．．．．．本当にIS初心者？」

今の山田先生との模擬戦を見て、俺が初心者だというのが疑わしくなったらしいシャルルが俺に訊いてきた。

「ああ、本格的にISを始めたのは、この学園に入学してからだぞ」

「本当に？」

「本当ですわよ。一夏様はこの学園に入学してから、本格的にIS操縦を始めましたの。もちろん、放課後はイギリス代表候補生である、このわたくしが、IS操縦の訓練を行っておりますが」

うん、いつも通り、『わたくしが』を強調してくるな。

「ふ、ふざけるなっ！ この私だって、訓練に付き合っているっ。それに一夏に教えてくれと頼まれたのはこの私だっ！」

「何言ってるのよっ！ 一夏が成長している要因は同じ近接格闘型の、このあたしが、訓練に付き合ってるからでしょっ！」

「あははは．．．．．そ、そうなんだ．．．．．」

箒に、鈴まで、登場。そのまま、三人で睨み合う。まさに三国志のような状況だな．．．．．さしずめ、魏のセシリア、蜀の箒、呉の鈴っていった所か？ ほら、見ろ、シャルルが三人の勢いに押され、引きつった笑いをしているじゃないか。

バシーンッ！ バシーンッ！ バシーンッ！

「うるさいぞ、お前達。授業の進行の妨げをするな」

千冬姉———呂布の登場です。

ギロリッ！

「な、な、な、何も変な事は考えていませんっ！」

背筋を正し、身の潔白を訴えるも、無情にも俺に出席簿アタックは炸裂したのであった———。

「専用機持ちは織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、凰だな。では八人グループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやる事。いいな？　では分かれろ」

ぱんぱんと手を叩いて、千冬姉がみんなの意識を切り替え、指示を出すや否や、俺とシャルルに一気に二クラス分の女子が詰め寄ってくる。

「織斑君、一緒に頑張ろう！」

「わかんないところ教えて」

「デュノア君の操縦技術を見たいなあ」

「ね、ね、私もいいよね？　同じグループに入れて！」

その状況を見かねたのか、あるいは自らの浅慮に嫌気が差したのか、千冬姉は面倒くさそうに額を指で押さえながら低い声で新しい指示を告げる。

「この馬鹿者共が……」。出席番号順に一人ずつ各グループ

に入れ！ 順番はさっき言った通りだ。次にもたつくようなら今日はISを背負ってグラウンド100周させるからな！」

呂布再来——その圧倒的なまでの覇気にのまれたのか、女子は無駄口を出す事無く、即座に各グループへと分かれていった。

「えーと、いいですか、みなさん。これから訓練機を一班一体取りに来て下さい。数は『打鉄』が三機、『リヴァイヴ』が二機です。好きな方を班で決めて下さいね。あ、早い者勝ちですよ！」

さて、俺の班は『打鉄』か。俺の班には箒もいるし、使い慣れた機体の方がいいだろう。

「織斑君、ISの操縦教えてっ」

「ああーん、このIS重ーい。私、箒よりも重いもの持った事ない」

「実戦訓練の基本はツーマンセルよね。じゃあ、織斑君、組みましよう」

「ねえねえ、専用機ってやっぱいい感じ？ いいなー、羨ましいなー」

十代女子の行動力や恐るべし！ あっという間に取り囲まれてしまいました。箒は箒でぶすつとした顔で睨みつけてくるし。

しかし、I S スーツを着た女子の集団に迫られるのは、目のやり場に困ったりする。だって、ボディーラインがこんなにはっきりと出てるんだ。いくら見慣れてきたとはいえ、集団はキツイものがある。

鎮まれ！ 俺の性的衝動^{リビドー}っ！

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「箒？ どうした？」

無言で俺の傍に来る箒。

ギュウウウウウ！

「いってえっ！ って、ほ、箒さん？」

思い切り足を踏まれた。しかも踵で。

「何を鼻の下を伸ばしている？」

「い、いや、そんな事はないぞ？」

箒とはあの件以来、お互い恥ずかしくて、今の今までまともに会話を交わしてなかった。

「．．．．．全くさっきの模擬戦の時はあんなにかっこよかったのに．．．．．」

「え？」

「な、なんでもないっ！ それよりも早く実習を始めるぞ」

「あ、ああ．．．．．」

顔を赤らめながら箒はそっぽを向いて、スタスタ歩いていく。それにしても、箒の件もそうだし、セシリアや鈴も以前よりもずっと意識するようになった。

前までは幼馴染としてしか思っていなかった相手を異性として感じる。まあ、取り合えず授業に集中集中。モタモタしてたら千冬姉の出席簿アタックが炸裂しかねん。

「それじゃあ、出席番号順にISの装着と起動、その後歩行までやろう。一番目は――」

【清香side】

キタ！ 私の出番、やっとキターー！

もうモブとは言わせない。私の名前は相川清香。憧れの織斑君にアタックする絶好のチャンス、見逃す筈がないっ！

「はいはいはいっ！」

織斑君はIS学園の中でも希少な男という存在。デュノア君という男の子が転校してきたけど、やっぱり私のタイプは織斑君なのだ。

「出席番号一番！ 相川清香！ ハンドボール部！ 趣味はスポーツ観戦とジョギングだよ！」

「お、おう。ていうか何故、自己紹介を……？」

織斑君を狙ってるのは篠ノ之さんやオルコットさんだけじゃないって事は分かってもらわなくちゃ。

若干、引きつった顔をしてる気もするけど、気にしない気にしない。

「よろしくお願いしますっ!」

そのまま深く礼をし右手を差し出す。さあ、織斑君。私の手を取って。今すぐに取りってっ。

「えっと・・・?」

「ああ、ずるい!」

「私も!」

「第一印象から決めました!」

織斑君が一瞬戸惑ったの隙を狙って、同じ班の女子一同が私に続け、とばかりに深く礼をし右手を差し出していく。

ちいっ! このハイエナ共め!

しかし、だがしかーし！　こういうのは一番最初に行動を起こした方が相手に深く印象付けられる。二番煎じなど所詮、二番煎じでしかないのだっ。

「あ、あのな？　　どういう状況がよく分からないんだが――」

織斑君は未だに困惑気味だ。

「「「お願いします」」」

別の班であるデュノア君の班からも私達と同じような状況なのか、デュノア君に向けて深く礼をし右手を差し出している女子達が視界に映る。

スパーン！

「「「いったあっつ！」」」

見事なハモリ悲鳴が聞こえ、チラツとデュノア君の班を見ると、鬼の形相をした織斑先生がいた。そのまま、その班は織斑先生が指導する形になったみたいだ。

さて、と。

実習に真面目に取り組むとしよう。うん、そうしよう。

でも、今ので少しは私という存在を織斑君に主張できた筈っ！

女の園に希少な男っ！ この私のスクールライフをバラ色に染め上げる為にも私は絶対に織斑君を犯．．．．．じゃなくて、落としてみせるっ！

【一夏side】

ゾクゾクゾクッ！

な、なんだ、このプレッシャーはっ！

背筋から襲うプレッシャーにキョロキョロと辺りを見回してみると、ハンターの目をした数匹の女生徒がいた。

しかもその視線の先は．．．．．俺だ．．．．．は、ははは。

しかしこのままモタモタしてたら、千冬姉の雷が落ちる事だろう。と、取り合えず実習を始めなきゃ．．．．．。

「そ、それじゃあ、出席番号順にISの装着と起動、歩行までやろう。えっと、あ、相川さん？ ISには何回か乗ったよな？」

ふう、あまりのプレッシャーにどもってしまった。かつこ悪い．．．

「いゃん、相川さんなんて呼び方は嫌。き・よ・か・で」

「え、で、でも．．．．．」

「きよか」

有無をも言わせぬプレッシャーに思わず、笑顔が引き攣ってしまう。箒さん箒さん、その人を殺しかねない視線は止めて下さい。今回、俺は何もしていない。む、無実だ．．．．．。

「じゃ、じゃあ、清香さん。は、始めようか」

「ぶーー。さん付けはいらないんだけどなあ、まあ、今回はこれで許してあげる」

「は、は、ははは．．．．．」

もう渴いた笑いしか出てこない……恐くて箒の方にも視線を向けられない……。

◇◇*◇*◇*◇*◇*

そして、相川さんは慣れない操縦でISを装着し歩行している。

「そうそう、上手い上手い。じゃあ、止まってみて」

「はぁーい。よ、っと……」

「よし、じゃあ、次の人に交代だ」

「ふう、緊張したあ」

IS学園に通う生徒でも専用機持ちでない限り、訓練機の数に限りがある為、全員が全員、IS操縦に慣れているわけじゃない。

しかも一年のこの時期だ。クラスの女子達はまだISに乗り始めたばかり、車の運転とかバイクの運転とか慣れないうちは緊張するも

の。それはISでも同じだ。

「次は誰？」

「・・・・・・私だ」

殺意の波動に身を包んだ筈が現れた。今なら一瞬のうちに滅殺されるかもしれないほどの雰囲気思わず、たじろいでしまう。

取り合えず、さっさと難を逃れたいがために早く終わらせてしまおう、と考えてる時に問題は起こった。

相川さん、じゃなかった清香さんのISを装着解除した時に気付かなかった俺も悪かったのだが――

「これじゃあ、コクピットに届かないんだが・・・・・・」

そう、自分が専用機持ちだからすっかり忘れていたのだが、訓練機を使う場合は装着解除時に絶対にしゃがまないといけないのだ。立ったままISの装着解除をすると、当たり前だがISは立ったままの状態になる。

「あー、コクピットが高い位置で固定されてしまった状態ですね。それじゃあ仕方がないので織斑君が乗せてあげてください」

途方に暮れてると、山田先生が助言してくれた。

「・・・・・・・・え？」

「な、なに？」

「「ええええーっ！」」

俺、箒、そして同じ班の女子全員が山田先生の言った事に驚く。

「だって、それが一番楽ですし。織斑君、白式を出してください」

「わ、わかりました」

取り合えず、山田先生の指示に従い、白式を展開、装着する。

「じゃあ、篠ノ之さんを抱えてコクピットまで運んであげてください」

「はい？」

「は、運ぶ．．．．．のか？ 私を．．．．．」

「「ええええーっ！」「」

さっきまでの殺意の波動が鳴りを潜め、今度は顔を赤面させる筈。

「ISは飛べますから、安全にコクピットまで人を運ぶのに向いています」

いや、でも、さすがに俺は男だ。授業中に女子を抱っこするのはまづいんじゃないか？ そもそも、ナイスプロポーションな筈を抱っこ？

や、ヤバいぞ。俺．．．．．健全な男子である俺にそれはさすがにキツイ．．．．．。

対する山田先生はニコニコ笑顔で生徒に助言できた事を嬉しく思っているのだろう。その笑顔は反論を許さないといった感じだ。

くっ！ 仕方ない！ このまま授業の進行を遅らせるわけにはいかんっ。

我が煩惱よ去れ！ 織斑一夏、お前は今から賢者になるのだっ！

よしっ！

「じゃ、じゃあ、箒。ずれ落ちないように気を付けろ」

「ふわ、あ．．．．．」

「「「あああーっ！」」」

そう告げてから箒の身体を抱っこする。瞬間、甘い香りが俺の鼻腔をくすぐる。心臓が破裂しそうな程にドキドキする。体温も上がってきてるんじゃないか、俺。

しかも俺を想ってくれてる相手だ。意識しないわけがない。

くっ！ 我が煩惱よ去れ！

俺は賢者、俺は賢者、俺は賢者、俺は賢者、俺は賢者。

腕の中の箒は幸せそうな笑顔をしており、一瞬ドキッとしてしまった。

くそ、可愛いじゃないか．．．．．。

誤魔化すように視線を巡らせてみると、セシリアと鈴の色を無くした、レイプ目というやつか、その目で俺達を見ていた。しかもブツ

ブツ何か言ってるようだ……。

……見なかった事にしよう。

そのまま打鉄のコクピットまで箒を運ぶ。そして箒は俺の手から離れ、打鉄にさっと乗り込む。

「一夏」

「なんだ？」

「そ、その、だな。今日の昼は予定があったりするのか？」

平静を装ってはいるが、その声は何時もより僅かに高く、どこかしら不安を含んでいるように感じられた。

「いや、特にはないぞ」

「そ、そうか！」

俺が昼に何も予定がなかったのが嬉しかったのか、その表情がばあ

つと華やぐ。そして、コホンと咳払いをし、表情を戻す。

「で、では、たまには昼食と一緒に取らないか？」

「ん？ ああ、いいぜ」

俺の言葉がそんなに嬉しかったのか、箒は「そうか、そうか」とウン頷きながら幸せそうな表情をした。その様子がどうにも子供っぽくて、いつもの凜とした箒とは違った魅力が感じられる。

箒も女の子なんだな。

◇◇*◇*◇*◇*◇*

「聞こえたわね？」

「聞こえましたわ」

ISのコアはそれぞれが相互情報交換のためのデータ通信ネットワークを持っている。専用機を持つ一夏の声はコア・ネットワークを通して、鈴とセシリアにも箒との会話が聞かれてしまっていた。

「ふふふ、箒さん。抜け駆けはさせませんわよ」

「取り合えず、抱っこの件は別として、箒だけにいい思いはさせないわよ」

セシリア、鈴共に黒いオーラを放つその様に同じ班のクラスメイトは誰も近付けなかったという……

Episode 17: ランチ・パニック (前書き)

最近、プレイヤーが忙しく、更新速度が遅くなってきてしまった。

Episode 17..ランチ・パニック

【清香 side】

脱!! モブキャラ宣言!!

私の名前は相川清香。出席番号一番、ハンドボール部所属、趣味はスポーツ観戦とジョギング、絶賛処女の相川清香でーっす!

午前のIS実習で、遂に.....遂に.....一夏君と名前前で呼び合う仲につ!

まあ、未だに『さん』付けなのが納得できないでいるんだけど.....でもでも、篠ノ之さんやセシリア、後、のほほんさんに次いで、一夏君を名前で呼べるまでにまで仲を進展させられたの。

私的観測で言わせてもらえば、篠ノ之さんやセシリア、それに二組の凰さんには一歩リードされてる感はあるけど、他のクラスメイト達よりは一歩先に進んでる.....筈っ!

今はお昼休み.....そう、ランチタイムである。

ここで学食に誘って、二人仲良くランチを楽しむ。

そしてそしてっ! 徐々に二人の関係は、唯のクラスメイトから、気になる存在へ。

そのまま彼氏彼女の関係にまで発展させる事が目標なのだっ！

ふふふ．．．．．そんな事を考えてると、ついつい顔がニヤついてしまう。

彼氏彼女の関係になったら、織斑先生がお義姉さんになるわけかあゝ。

世界最強のブリュンヒルデの称号を持つお義姉さんに、世界でただ一人だけの男性IS操縦者である一夏君が彼氏に、なんてなったら．．．．．うふふふふ。

さて、今までは篠ノ之さんやセシリア、凰さんが常に一夏君に張り付いているような状況だったから、即行動に映らなきゃ先を越されちゃう！

思い立ったら即行動っ！

それが私、相川清香のモットーなのだ。

さてさて、一夏君はどこかなあゝ、とキョロキョロと辺りを見回すが、見当たらない。

あれれ？

ちょっと待って．．．．．。

嫌な予感がするんだけど．．．．．。

「きよっちー。誰か探してるの？」

声を掛けてきたのは布仏本音。我が一組のマスコットの存在であり、ダボダボの袖付き制服の下には凶器なおっぱいを隠す、通称のほほんさんだ。

「あっ、のほほんさん」

「で、さっきからキョロキョロしてたけど、誰か探してたの？」

「うん、織む——、一夏君を、ね……」

此処で恋敵^{ライバル}になりそうな子に、私の優位性を主張すべく、名前で目的の人物を口にした。

何気にこののほほんさん、ニコニコ笑顔だけど、常に一夏君の事を視線で追ってるのは調査済みっ！

篠ノ之さんやセシリアに凰さんも侮れないけど、何気に目の前ののほほんさんも侮れなかったりする。

その独特な雰囲気で、いつの間にか他人を自分の世界へと引き込んでいるのだ。会話していると、のほほんさんのペースにさせられる事なんてあるくらいだ。

油断できない存在——それが布仏本音だ。

私はこの瞬間、篠ノ之さん、セシリア、凰さんも強敵ではあるが、私の最後の敵になるであろう存在は布仏本音である事を本能で理解したっ！

無敵の龍である私、相川清香と最強の虎、布仏本音、相対す——

我が生涯の恋敵^{ライバル}として不足無しっ！

でも、最後に一夏君の傍に立つのは無敵の龍、相川清香なのだ。

「きよっちー？」

はっ！ ついつい、トリップしちゃった。今はそんな事よりも一夏君の行方を知る事が重要だ。

「あはは。それで一夏君って、さっきまで教室にいたよね？」

「おりむー？ うん、いたけど——もう出て行っちゃったよ」

「——え？」

お、お、遅かったあああ——！！

ずーん！ といった感じでしゃがみこむ私に他のクラスメイト達から追い打ちがかかる。

「ああ、織斑君ならシャルル君を連れて、ご飯行っちゃったみたいだよ」

「シャルル君と一緒にご飯食べたかったあー」

「ねえー。でも今日がダメでも明日があるし」

シャルル・デュノア、本日転校してきたばかりの二人目の男性IS操縦者。

まさか、思わぬ伏兵に一夏君を持って行かれるとは思わなかった。・
・
・

【箒side】

どうしてこうなった！？

お昼休み、学園の屋上には私と一夏だけの筈が、今日転校してきたばかりのシャルル・デュノアにセシリア、鈴までもがいた。

私は今日ひっそりと作っておいた一夏用と自分のお弁当二つを持って、意気揚々と屋上へと足を向けた。

屋上の階段を一段ずつ上がるたび、二人きりの昼食の時間に想いを馳せ、幸せを噛み締めていた。

そして屋上へと続く扉を開いた瞬間――待っていたのは一夏だけでなく、申し訳なさそうに佇むシャルル・デュノアがいたのだ。

「いやな、シャルルは転校してきたばかりだし、右も左も分からないだろう？　んで、転校初日に異性に囲まれて食事するのも気を遣うだろうし。……何より千冬姉にも頼まれてるしな」

「う、むう、確かにそれはそうだが……」

「は、ははは……何かごめんね」

確かにシャルルは転校してきたばかりだし、同性である一夏が気を遣うのも当然だ。そこまでは納得……まあ、しかねるが、無理矢理にでも納得しよう……だがっ！

「どうして、こいつらまでいるっ!？」

「まあ。こいつらとは随分失礼な物言いではなくて？」

「そうよそうよ」

私が指を指す方向――そう、何故か呼んでもいないセシリアに鈴までいるのだ！

「いやあ………なんでだろ………ははは………」

いーちーかあー！

怨みを込めた視線を一夏に向ける。すると、一夏は青い顔をしながら何度も何度も謝ってきた。

「そ、それよりもさ、あんまりノンビリしてたら、お昼休み終わっちゃうよ？」

シャルルがたどたどしくも雰囲気を変えようと進言してくる。

まあ、確かに。時間は無限ではない。ここで話だけしては埒が明かない。

「一夏。はい、これ」

鈴が二重になっている弁当箱を一夏に渡す。

しまったっ！ 出遅れたっ！

「時間なかったから急いで作ったものだけどさ」

「そっか、鈴。ありがとな」

「べ、べ、別にあたしのを作るついでに作ったものだから。あくまでつ・い・で・なんだから」

鈴は自分の弁当を作るついでに作った事を強調しているが、顔を赤くしながら言われても説得力がない。

「へえ、さすが鈴。酢豚だけじゃないんだな」

受け取った弁当を開いた一夏が鈴の料理の出来を褒める。

「あ、当たり前でしょ！・・・・・・約束の事もあったし、その為に料理の特訓を毎日してたしね・・・・・・」

一夏には最後の鈴の声が聞こえてないみたいで鈴の弁当の出来に感心しているようだ。

鈴の弁当は一段目が区分けされており、酢豚を始め、海老のチリソース、焼売といった感じに敷き詰められており、二段目が白飯だ。いわゆる中華弁当というやつだ。

くっ、確か鈴の実家は定食屋だったな。思わぬ強敵の登場に戦慄を覚える。

「本当に美味しそうだね」

シャルルも鈴の弁当の出来に驚いているようだ。だが、しかし、味はどうなのだ？

いくら見た目が良くても大事なものは味なのだ。

「じゃあ、さっそく」

両手を合わせ「いただきます」と一礼してから、一夏は酢豚を口に運ぶ。

鈴は鈴で一夏の感想が気になるのだろう、じっと一夏を凝視している。

もぐもぐもぐ．．．．．

「美味いっ！　さすが鈴。これならいつ嫁にいつでも大丈夫だな」

「は、はあ！？　と、と、と、当然でしょ！」

鈴は動揺しているらしく、その口調もはつきりとしなない。

むうー。ー。ー。ー。

いかん、いかんぞ。この状況は。

「ほら、シャルルも食べてみろよ」

一夏は酢豚を箸でつまんで、そのままシャルルの口へ運ぼうとしていた。

「ふえ？　い、一夏っ！？」

一夏は鈴の料理の美味しさを純粹にシャルルにも教えたかったのだ

ろう。しかし、シャルルは顔を赤くして、しどろもどろになっている。

「ほら」

「あ、あーん」

ぱく。もぐもぐもぐ。……。

「う、うん。美味しいね」

「だろ？」

なんだ？ この状況は？

相手はシャルル。一夏と同じ男の筈なのに本能がヤバいと告げてる。

しかもシャルルはシャルルで顔を赤くしているし。

「うぬぬぬぬ」

「むぐうーー」

セシリアや鈴も私と同じような事を感じているのだろう、目の前の珍事に何故か嫉妬を覚える。男同士の筈なのに、そう男同士の筈なのに、女の直感が危機感を告げてきているのだっ。

「コホンコホン。一夏様、本妻である、このわたくしも、このようなものを用意してみましたの。よろしければお一つどうぞ」

「本妻って何よ?! セシリアッ!!」

一夏の本妻である事を強調してくるセシリアに食って掛かる鈴。ここで負けるわけにはいかないっ!

「何度も言うが、一夏のお嫁さんは、この私だっ!」

女の戦いに後退の二文字はないのだっ。

「お、落ち着けて・・・と、取り合えず、次はセシリアのサンドイッチをもらおうかな」

「はいっ! どうぞ」

セシリアのバスケットの中には色とりどりのサンドイッチがきれいに並んでいた。

その内の一つを手にとって、一夏は口に運ぶ。

ぱくっ。もぐもぐもぐ。……………。

「ゴォッ！ グェッ！ キ……………！ グッ……………！
グェッ！ ……………」

ひっ！ 一夏がセシリアのサンドイッチを口にした瞬間、奇声を上げた。

しかも脂汗をダラダラ流しながら……………。

あれはサンドイッチという名の化学兵器なのだろうか……………。
何とか吐き出す事もなくブツを飲み込んだ一夏。しかし脂汗は止まる事無くダラダラ流れていたが。

「如何でしたでしょうか？ 一夏様」

こいつにはさっきの一夏の奇声が聞こえなかったのだろうか？

「い……いや、まあ、独特な味がして、いいと、思うぞ……」

一夏め、正直に言えればいいようなものの。

一夏の感想がよほど嬉しかったのか、セシリアは、ぱあっと顔を綻ばせ、「それではこちらもどうぞ」と新しいサンドイッチを一夏の口へと運ぼうとしていた。

いかん、このまま静観しては一夏がセシリアの毒料理に殺されてしまう。

それだけは阻止せねばっ！

「待つのだ、セシリア。まだ私の弁当を食べてもらってない」

私の言葉に一夏は心の底から安堵しているような表情を向けてくる。

ふふふ、私の助け舟が相当嬉しかったのだろう。うむうむ。

そして一夏に私の手作りの弁当を手渡す。

「箒、ありがとな」

「今度は自信作だ」

「へえ、これは凄いな。どれも手が込んでそうだ」

一夏に渡した弁当には、栄養バランスも考えた献立にしてある。出来た嫁というのは夫の体調管理に気を配る事は当然だからな。

そして一夏は私の今日一番の自信作である唐揚げを頬張る。

もぐもぐもぐ………。

「おお、美味い！」

よしっ！ 私は平静を装いながらも心の中でガッツポーズをする。

前回のチャーハンで失敗している前例があるから、味見を怠らなかった。それにこの唐揚げは篠ノ之家直伝の味付けだ。

本当は二人きりの昼食を楽しみたかったが、今日はこれで良しとしよう。

一夏に「美味い」って言ってもらえたし、これで私が出来たお嫁さんに見える作戦は一応の成功を見た………そう思いたい。

そんな感じで楽しい昼食の時間は過ぎていった。

まあ、付け加えて言うと、セシリアのサンドイッチは一夏が頑張っ

て胃の中へと処分していた。

その日は放課後まで脂汗が止まらなかったみたいだが。

全く無理をするからだ、馬鹿者め。

【一夏side】

——放課後。第三アリーナ。

シャルルは寮の手続きがあるとかで別行動になったのだが、俺と箒に鈴はラウラ戦に向けて、セシリアとの特訓に付き合っていた。

ラウラは代表候補生としてだけではなく、軍人という環境での訓練経験もあり、かなりの強敵でもある。

セシリアへの課題としてはBT兵器使用時に思考制御に意識が集中してしまい、ライフル射撃が行えない事だ。

他にもブルー・ティアーズには操縦者の適正がA以上で、BT兵器稼働率が最高状態にある時に使用可能な能力、BT偏光制御射撃という事も出来るみたいなのだが、こちらはまだコツも掴めていないらしく現時点では無理という事だ。

そうすると、BT兵器使用時でもライフル射撃が行えるようにするための思考制御の向上だ。

「元々、ブルー・ティアーズは一対多数の戦闘を視野に入れて開発されたものなんでしょ？」

「ええ、そうですわ」

鈴の言葉を肯定するセシリア。

「それじゃあ、あたしと一夏を相手に模擬戦ね」

今日の筈は訓練機がなく、見学だ。

「そ、そんなの無茶ですわ」

「でも、ちまちま一対一の模擬戦やったって意味がないでしょ？
この模擬戦はBT兵器使用時でもライフル射撃を行うための思考制御ができるようにするための訓練なの」

まあ、鈴の言う事は理解できる。

一対一ではなく一対二。一人だけに集中してしまうと、もう一人から攻撃を受けてしまう。それを避けるためにはBT兵器もライフル

射撃も同時に行う必要がある。

しかし、時間がないとはいえ、荒療治といえば、荒療治なんだが、まあ現状ではこの訓練方法しかない。

「じゃあ、一夏。前衛はあんたに任せるから」

「了解」

「よし、三人とも準備できたな？ では、始め！——」

訓練機の無い筈の声を合図に模擬戦を開始する。

鈴は間合いを離す。そして甲龍の肩アーマーがスライドして開き、中心の球体が光った瞬間、目に見えない衝撃——〈龍砲〉を連続でセシリアに向けて放つ。

しかし、セシリアもイギリスの代表候補生だけあって、簡単には当たらない。

「へえ？ なかなかやるわね、セシリア」

「当たり前ですわ、わたくしはイギリス代表候補生なん——」

「よそ見している暇はないぞ」

セシリアの死角から横薙ぎの一閃を放つ。

「――くうっ！ いつの間に!？」

何とか体勢を変え、俺の斬撃を躲すも、既に距離を詰めていた鈴の斬撃にセシリアは吹き飛ばされる。

「どうしたの？ セシリア。まさか、これでお終いじゃないでしょうね？」

セシリアが吹き飛ばされた方角に視線を向けながらも鈴はセシリアを挑発する。

「――まだまだ、ですわ」

吹き飛ばされた衝撃に立ち込める煙の中からセシリアはその姿を現す。

「わたくしとブルー・ティアーズの本領はこれからですわっ！」

サイド・バインダーに装備している4基の射撃ビットを展開、そして俺と鈴に向け、射撃を行うが、やはり思考制御に気を取られているのだろう、ライフル射撃は来ない。

「セシリアッ！ ビットだけじゃ俺達を捉える事は出来ないぞ」

そしてビット射撃を躲し、セシリアに攻撃をする。

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．

さすがに一日目では足りないよな。BT兵器の思考制御に気を取られるあまり、セシリアはライフル射撃は出来なかった。しかし、金曜日の対ラウラ戦まで、まだ少しだけ時間はある。残された時間はセシリアの訓練に付き合うつもりだ。

俺を慕ってくれるセシリアが、俺の為にラウラに決闘を申し込んだんだ。

協力しないわけがない。

そして俺達はアリーナ使用時間限界までセシリアの訓練に付き合ったのだった。

Episode 18：思春期男子の苦悩（前書き）

何か今回の話はやらかしてしまったのではないか、と不安を覚えてしまう。

それでもいい方はどうぞ。

ちなみに相変わらず一夏は残念な主人公です。（笑）

Episode 18: 思春期男子の苦悩

【二夏side】

「じゃあ、これから宜しくな、シャルル」

「うん。こちらこそ宜しく、一夏」

セシリアとの訓練を終え、シャルルと合流してから夕食を済ませ、自室に戻ってきた。

基本、IS学園の寮は二人一部屋であるのだが、箒が引越してからは実質一人暮らしのようなものだった。男子が俺しかいなかったから当然そうなるのは仕方なかったのだが、今回シャルルが転校してきた事で俺と同室になったという事だ。

そして今は自室で食後の休憩という事で俺が入れた日本茶を飲んでいる。

やっぱり日本人なら食後のお茶は日本茶に限る。爺くさかろうがこれだけは譲れないのだ。

目の前のシャルルは日本茶は初めてなのだろう、たどたどしい手つきでお茶をその口に運ぶ。

しかし、両手を添えて、熱いお茶をふーふーしてから、飲むその様

はとても男って気がしない。可憐な雰囲気醸し出してるのだ。

何よりシャルルを初めて見た時、俺のおっぱいスカウターが反応しかけたのだ。

男を相手に．．．．。

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．

違う、違うぞ。俺は女の子が大好きな至ってノーマルな男の子の筈だ。

男を愛でる趣味なんかないんだーっ！

「急にどうしたの、一夏？」

「あっ、いや、なんでもないんだ．．．．．は、ははは」

急に頭を抱えだした俺を不思議に思ったのだろう、首を傾げるシャルル。うん、だから、そういう行為が男らしくないのだ。

一度、シャルルには『男の何たるか』を教え込まねばならないようだ。そうだな、教本には古い漫画だが『魁！クロマティ―高校』……じゃなかった、『魁！男塾』がいいだろう。うん、それでシャルルにはもっと男らしくなってもらおう。間違いが起こってもいけないしな。

「でも、この日本茶って美味しいね。紅茶とはずいぶん違うみたいだし、不思議な感じ」

「へ？ ああ、気に入ってもらえたようで何よりだ。それとシャルルって、まだ日本に慣れてないだろう？ 落ち着いたらさ、いろいろ案内するよ」

「本当？ 嬉しいなあ。ありがとう、一夏」

えへへ、と柔らかい笑みを浮かべるシャルルに、一瞬ドキツとしてしまう。

・・・・・・・・・・・・・・・・

・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・

・
・
・

おいしいおいしいおいしい、俺っ！　しっかりしろおおーっ！
っ！

俺は何だ？

おっばい戦士、織斑一夏だろおおーっ、三度の飯よりおっばいが好きな織斑一夏の筈だっ！

「えっと、一夏、本当に大丈夫？」

俺の様子がおかしかったのを察したのだろう、シャルルが俺を心配してくれる。

「あ、ああ。何でもない、何でもないんだ。ただ、ちょっと自分からなくなってるさ」

「???」

うん、意味が分からなかったんだろう。シャルルは首を傾げてしまうが。俺の混乱している原因がシャルルにある事は悟られたくない。平常心だ、平常心。織斑一夏。雑念を振り払うのだっ。

「そういえば一夏はいつも放課後にISの特訓をしてるって聞いたけど、そうなの？」

「ああ。俺はこの学園に入学してからISに初めて触れたし、他の皆より遅れてるからな。でも、今はセシリアの特訓に付き合ってるっていう方が、合ってるかな」

「そっか、今週の金曜日だもんね。ボーデヴィツヒさんとの決闘」

「決闘の要因になったのも何故か俺だからさ、協力してやりたくて……」

そう、今週の金曜日にセシリアはラウラと決闘をする。俺が原因で決闘するような事になってしまったのだ。だから俺の為に怒ってくれたセシリアの気持ちに俺は俺の出来る事で応えてやりたい。

「その特訓に僕も加わっていいかな? 専用機もあるから少しくら

いは役に立てると思うんだ」

「それはありがたいな。お願いできるか？」

「うん。任せて」

シャルルはいい奴だなあ。しかも専用機持ちという事だ、これは心強い味方が出来たな。

◇◇*◇*◇*◇*◇*

シャルルの専用機は『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』。第2世代型ではあるが、装備によって多様性役割切り替え《マルチロール・チェンジ》可能な汎用型で近接戦も遠距離戦も行える万能型だ。

俺の近接オンリーな白式とは全然違う。

思考制御に苦しむセシリアに色々アドバイスしている所を見ると、シャルルは連れてきて正解だったな、と心の底から思う。

ここにいるのはISにはまだ慣れてない俺に、『ずばーっとやっ
から、ずだだだ！』という感じた』という意味不明な事を言う筈に、
『何となくわかるでしょ？　こう来たらこう返すのよ。感覚よ感覚』
と野生の勘が物を言う鈴だ。

アドバイスにもなりやしねえ……。

シャルルのように誰にでも分かるように教える事は俺達には出来な
い。

しかし、銃器か。俺も一度でいいから撃つてみたいな。白式の武器
って雪片式型しかないもんな。いくら剣術をやったからと言って
も銃器に興味がない、というわけではない。

以前、千冬姉に教わったのだが、通常、ISには後付装備イコライザというも
のがあり、拡張領域バススロットが空いてれば出来る他の武装の量子変換インストールが出来
るらしいのだが、俺の白式は単一仕様能力に容量を使ってる為、拡張
領域バススロットに空きがないらしい。よって、俺の白式の武装は後にも先に
も雪片式型しかないのである。

「一夏もやってみる？」

そうやって俺に渡してきたのは、さっきまでシャルルが使っていた
五五口径アサルトライフル《ヴェント》だった。

「え？　他のISの装備って使えるのか？」

「大丈夫だよ。所有者が使用許諾アンロックすれば、登録してある人全員が使えるんだよ。——うん、今、一夏と白式に使用許諾を発行したから、試しに撃ってみて」

「お、おう」

生まれて初めての射撃訓練だ。銃を構える——うん、何か映画の主人公になったかのような錯覚を覚える。

そりゃ男なら一度は銃を撃つてみたいと思うだろ。いくら剣術ばかりやってきた俺でもそういう感覚はある。

俺が銃を構えると、シャルルが体を密着させて手取り足取り教えてくれる。

「えっと……脇を締めて。それと左腕はこっち。分かる？」

あつ、甘い匂いがする……。

……

……

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・

おいしいiiiiiiiiいつ、俺っ！　しっかりしろおおーっ！
っ！

もう何度目だよ、これ・ ・ ・ ・ ・。

「一夏？」

「い、いや、何でもない。うん、何でもないんだ」

さて、銃器を扱う際に必要な機能が白式にはなかった。

高速状態での射撃なので、当然ハイパーセンサーとの連携が必要になるのだが、白式には全くもってそのような機能が見当たらなかった。

「うーん、格闘専用の機体でも普通は入ってるんだけど・ ・ ・ ・ ・」

白式はどうも普通じゃないらしい。

「仕方ないから目測でやるしかないね」

初めての射撃なのに難易度が高い。まあ、仕方ない事だと割り切って、取り合えず撃ってみよう。

そして一発撃ってみる。

パン！ と鳴り響く乾いた音に驚いてしまう。いや、初めてだからさ。仕方ないよね。

「どう？」

「いやあ、初めての経験だからな。取り合えず『速い』っていう感想だ」

弾丸の速度はかなり速いというのは分かりきっている事なのだが、いざ自分で撃ってみるとそれがより実感できる。

俺がシャルルに銃器の扱いを聞いてると、アリーナにいた他の女子達が騒ぎ出した。

「ねえ、ちょっとアレ……………」

「ウソっ、ドイツの第三世代型だ」

「まだ本国でのトライアル段階だって聞いてたけど……………」

そこにいたのはもう一人の転校生で、今週の金曜日にセシリアと決闘する事になった、ドイツ代表候補生ラウラ・ボーデヴィッツだった。

「……………」

転校してきて以来、クラスの誰ともつるもうとしない、会話さえしない孤高の存在。輝くような銀髪に儚げな雰囲気美しいとも思えるのだが、いかんせん俺を敵視している。

セシリアに箒、それに鈴もシャルルもラウラを見る。

口を最初に開いたのは意外にもラウラからだった。

「おい、織斑一夏」

ISの開放回線オープン・チャンネルを使って声が飛んでくる。

「なんだ？」

「貴様も専用機持ちだそうだな。イギリスの代表候補生の次には貴様とやる。覚悟しておけよ？」

ラウラの言葉に反応したのは誰でもないセシリアだ。

「あら、もう勝ったつもりなのかしら？ おめでたい頭をしているのですね、あなたは」

「ふん、古いだけを取り柄の国の代表候補生如きが私に勝てると思ってるのか？」

交錯するセシリアとラウラの視線。

「セシリアは強い。お前こそセシリアを舐め過ぎじゃないか？」

「一夏様……………」

「ふん」

ラウラが俺を敵視する理由——ドイツ、千冬姉、と来たら思い付くのは一つだけ。第二回 I S 世界大会『モンド・グロッソ』の決勝戦での事だ。

俺自身、忘れない記憶でもあるが、一生忘れられないであろう忌々しい記憶。

俺はその日、誘拐された。謎の組織に。どう目的があったのか未だに不明なのだが、俺は拘束されて真っ暗な場所に閉じ込められた。この時の俺はまだ前世での記憶も経験もなく、弱かった。抵抗するも空しく、誘拐されてしまったのだ。

そんな俺を救い出したのが I S を装備した千冬姉だった。報せを受け、決勝戦会場から文字通り飛んできたらしい。

あの時の千冬姉の姿は今でも忘れない。

強く、凛々しく、美しく、そして俺を見付けた安堵感で表情が和らぐ千冬姉の姿を、俺は今でも忘れない。

ただ、決勝戦は千冬姉の不戦敗となり、大会二連覇を果たせなかった。

誰しもが千冬姉の優勝を確信していただけに、決勝戦棄権という事は大きな騒動を呼んだ。

俺の誘拐事件に関しては一切公表はされなかったが、事件発生時に独自の情報網から俺の監禁場所に関する情報を入手していたドイツ

軍関係者は全容を大体把握している。

そして千冬姉は俺を救助する際に手助けしてくれた『借り』があったために、大会終了後に一年ちよつとドイツ軍IS部隊で教官をしていた。

ラウラはその時に千冬姉の教えを受けたのだろう。

ラウラにとって千冬姉は絶対強者の存在であるように見える。だから、そんな千冬姉の強さを穢した俺の存在が認められない——そんなところか？

「織斑一夏。貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業を成し得ただろう事は容易に想像できる。だから、私は貴様を——貴様の存在を認めない」

やっぱりな。まあ、俺自身あれは黒歴史に相当する。ラウラの気持ちも分からなくはない、俺自身あの頃の無力な自分が許せないのだから。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ。あなたが認めなくても、このセシリア・オルコットは一夏様の存在を認めていますわ。世界中が一夏様の敵になろうとも、このわたくしは未来永劫、一夏様の味方なのですから」

「セシリアだけじゃなく、この凰鈴音もね」

「私だって、そうだぞ」

「一夏の存在を僕も認めるよ」

セシリア、鈴、箒、シャルルが俺の存在を肯定してくれる。

こんなに嬉しい事はない。誰かに必要とされるこの喜び。だから俺もこいつらには頭が上がらないし、こいつらが窮地に陥った時にはその身を挺して支えるつもりだ。

「本当におめでたい奴らだな。セシリア・オルコット．．．．．
といったか、先ずはお前から血祭に上げてやる。覚悟しておけよ？」

「ふん、覚悟するのはラウラ・ボーデヴィツヒ、あなたの方ですわ」

その一言を残し、ラウラはこの場を後にする。

【シャルル side】

一夏の存在を否定するドイツ代表候補生ラウラ・ボーデヴィツヒ。

何であそこまで一夏を敵視するかは知らないけど、この時、僕の心は良心に苛まされていた。一夏に隠し事をしている自分が許せなかった。

一夏は僕を優しく受け入れてくれる。でも、それは本当の自分ではないシャルル・デュノアである自分を、だ。

「今日はもうあがろっか。もうアリーナの閉館時間だし」

鳳さんの声に他の皆が賛同する。辺りを見回せば、既に陽が沈んでいる。

「そうだな。じゃあ、シャルル。戻ろっか」

「うん．．．．．じゃあ、先に着替えて戻ってて」

本当の自分を隠すためにも、一夏の前で着替えるのは死活問題だ。一夏に隠し事をしている自分に後ろめたさを感じるけど。

しかも同じ部屋だから、当然私的な時間を共有する事になるんだけど、この前も一夏はお風呂上りに上半身裸で下にバスタオル一枚羽織っただけの状態でシャワーから出てくる始末。

まあ、そりゃ公に自分の素性をバラすわけにもいかないから、同性だと思ってる一夏からしたら何の問題もないんだろうけど、僕も一応お年頃なのだ。

裸に近い一夏の姿に見惚れ——って、違ああ——うっ！

そりゃ確かに同年代の男の子からしてみても、結構引き締まった体してるし、顔も、その、好みのタイプだし、つつい涎が——って、何を考えてるんだ、僕はあっ！

これじゃまるで変態じゃないかっ！

違う！　僕は決して変態なんかじゃないっ！

うん、普段誰も知らない一夏の裸に近い状態の姿を僕だけが知ってるからって、優越感に浸ったりもしないし、そんな一夏に欲情——うわああああ——、また変な事考えてるっ！

落ち着け、落ち着くんた、シャルロット・デュノア。

僕は父から言われた通り、一夏のデータを探らなきゃいけないんだ。

デュノア社の未来の為に、父の為に、——例え、僕が妾の子だとしても僕を必要としてくれるなら、僕がこの世界に存在してもいいのなら、僕は——。

◇◇*◇*◇*◇*◇*

自室に戻ると、一夏の姿はなかった。

「先に戻ってると思ったんだけど．．．．．どこか出掛けたのかな？」

キョロキョロと辺りを見回すが、一夏の姿は見えない。

でも、此処に来てから、一夏と知り合って間もないけど、一夏の事を考えてるのが多いと思う。多分、一目惚れなのかな．．．．．と思う。

自分自身でも一目惚れなんて有り得ないと思ってたし、漫画や小説だけの話だと思ってた。

でも、気が付けば、一夏の事が気になり始めてる。素性を偽って接しなければならぬ自分にとっては、所詮叶わぬ恋。

しかも一夏を好きな子はたくさんいる。ほんの少し一緒にいただけでも分かる位の好意を向けられてる。

篠ノ之さんにオルコットさん、一組の女子だけでも結構慕われてるみたいだし、それに二組の凰さんまでも想いを寄せてるみたいだ。

「はあ．．．．．」

シャワーでもして気分を変えよう。今は一夏もないし。

このちよつとした気分転換のつもりでシャワーが自分の運命を変える事にこの時の僕は知る由もなかった。

【一夏side】

いやあ、遅くなっちゃったな。

更衣室で山田先生に呼ばれ、白式関連の書類を提出しなければならなかったらしく、さっきまで職員室にいたのだ。

もうシャルルも部屋に戻ってる頃だよな、とか考えながら、自室のドアノブを回し、部屋の中に入る。

「ただいまー。って、あれ？」

その場にいるであろう、シャルルが見当たらなかった。でも、シャルームの方から響く水音でシャルルがシャワー中だという事に気付いた。

あー、そういえば、昨日でボディーソープが切れてたよな。無いと

体を洗えないし、困ってるかもしれないから届けてやるか。

クローゼットから予備のボディソープを取り出す。

脱衣所に置いて声を掛けておけば問題ないだろう、と考えて、洗面所兼脱衣所に入るためにドアを開け中へ入る。

「おい、シャル——」

ガチャ。

シャルルに声を掛けようとした瞬間、シャワールームへと続くドアが開いた。多分、シャルルもボディソープがない事に気が付いて取りに出ようとしたのだろう。

「あっ、ちょうどよかった。これ、替えの——」

「い、い、いち……か……?」

シャワールームから出てくるのはシャルルだろう、と思っていたら、シャルルによく似た『女の子』がそこにいました。

何で『女の子』って気が付いたかって？

そりゃ、男にないはずのものがあふし、男にあるはずのものがあふ
んずもの。

ははは、当然じゃないか。

・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・

えええええええー！！ー！！ー！！ー！！

おば、おば、おばーいがあるー！！ー！！

おばーいだ！ おばーいだ！

そうかつ！ 今夜はおばーい祭りなのかつ！

（※現在、絶賛混乱中のため、一夏は正式な言語思考を伴っており
ません）

日本人女子の生裸体もまだ見た事もないのに、初めての女性の裸が

金髪碧眼のナイスプロポーションな可愛い女の子ときたら．．．．
きたら．．．．きたらっ！！

ブブウーーーーー！！

そのまま俺は自らの鼻から噴出した血が弧を描くのを見ながら、意識を手放した．．．．。

「へ？ 一夏？ 一夏ああー」

E p i s o d e 1 9 : : シ ャ ル ル の 告 白 (前 書 き)

最初は全編シリアスのつもりで書いてました。

ええ、書いてましたとも。

・ ・ ・ ・ ・
無理だと悟りました。

Episode 19：シャルルの告白

【シャルル side】

一夏に僕の素性が明らかになってしまった。決定的だ。一糸纏わぬ姿を見られたのだから。

一夏の鼻血は暫くして止まったのだが、未だに意識は戻らない。

一夏にバレたというのに、一夏が僕の姿を見て鼻血を出してくれたというのは女の子として見てくれた、という事なのか、一夏に女の子として見られた事を嬉しく思ったりした。

でも、一夏に僕が女である事がバレた以上、学園から出て行かないやいけない。だから一夏とは今日を最後に永遠のお別れ。

ただ、せめて一夏が目覚めますまでは此处にいさせて下さい。

——僕の最後の我儘。

——気になった男の子、織斑一夏の顔をずっと覚えておきたいから。

——僕の膝で寝息を立てる一夏の顔を時間が許す限り、見ていたかった。

一夏が目覚ましたら、全てを話して、学園を去るだけだ。

一夏を欺いていた事、一夏は僕を許してくれないかもしれない。当然だ。一夏に嫌われる、というのは胸が引き裂かれそうになる位に辛いものだけど、一夏を騙していたのだ。当然の報いとして受け入れるんだ。

例えば、一夏に嫌われても．．．．．想いを寄せるのだけは許してほしいかな。そう僕が勝手に恋焦がれるだけだから。

この恋は報われないのだから。一夏を膝枕しながら、その髪を優しく撫でる。一時の幸せに包まれながら。

僕を唯一愛してくれたのは亡くなった母だけ。

父に会った事も二回しかない。一度目は引き取られた際に。二度目は唯一の男性IS操縦者と白式のデータを盗むために日本に行くように命じられた日のたった二回だけ。

父の本妻にあたる人と父の間には子供がいなく、本妻の人には頬をぶたれ、憎々しい視線を向けられた。

所詮、僕は妾の子として、誰からも愛されない存在なのだ、と知った。

たった数日間だけだったけど、一夏の傍にいられたこの数日間、本当に幸せだった。

学園生活に、気になる男の子。夢にまで見た生活が確かにここにはあったのだから。

一夏、騙しててゴメンナサイ。

一夏、好きになり始めてゴメンナサイ。

一夏、こんな僕に優しくしてくれてアリガトウ。

「う．．．．．ぐす．．．．．ひっく．．．．．」

ダメだ。止まらない。涙がとめどなく流れてくる。

「．．．．．シャルル？」

「え？．．．．．あ、ごめん、ごめんね。起こしちゃった？」

「．．．．．泣いてたのか？」

「．．．．．」

一夏が体を起こし、僕の顔をじっと見てくる。ダメだ。泣くな、シャル・デュノア。

必死に涙を止めようとするも、僕の目からはとめどなく涙が流れる。

「あはは、ごめん、ごめんね。なんでもないんだよ。目にゴミが入っただけだから、ね。」

我ながらどうしようもない嘘だ。でも、一夏に僕が泣いてる姿を見せるわけにはいかない。

僕に泣く権利なんかないんだ。だから涙を早く止めなきゃ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

一夏は何も言わず、ただ、ただ、僕を優しく包んでくれた。

不意に香る一夏の優しい香り。それが僕の体を優しく包んでくれる。

「シャルル・・・・・・・・俺は事情を知らないから無責任な事は言えない。でもな、お前が泣いてるのを黙って見てられるほど、俺は情けない男じゃない」

僕の頭を優しく撫でながら、突然の出来事に困惑している僕にも理解できるように、ゆっくりと一言一言優しく語りかけてくる。

「お前が女の子でも、俺にとってはシャルルであって、シャルル以外の何物でもない」

「．．．．．うう．．．．．うえ．．．．．ひ
つく．．．．．ぐす．．．．．」

「泣きたければ、いつでも俺の胸を貸してやるさ。だから今は泣いていいんだぞ？」

「ぐすっ．．．．．ひっく．．．．．うわああああーん」

一夏の言葉に、僕の抑えてた感情が爆発した。

母が亡くなった日を最後にもう泣かないって決めていたのに。

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．

「ぐすっ……」

あれからどれくらい泣いてただろう？ 一夏に抱かれながら、一夏の胸で、思い切り泣いた。

「落ち着いたか？」

一夏の言葉に首を縦に振って肯定する。

落ち着いてくると、今の状況がとんでもない状況である事が分かる。今の状況を軽く言葉にすると、一夏に抱き締められているのだ。

その事を理解すると、顔がかあーっと熱くなるのを感じる。多分、耳まで真っ赤な筈だ。でも、悪くない。寧ろいつまでもこうして抱き締められていたい。

でも、一夏には全ての事情を話さなきゃいけない。

今まで騙してた償いをしなきゃいけない。こんな僕にでも優しくしてくれた一夏のためにも。例え、嫌われると分かっているけど。

——もう学園を去る決意をしたのだから。

「一夏、あのね。一夏に話さなきゃいけない事があるんだ……」

・
」

【一夏side】

俺の胸で一頻り泣いたシャルルは落ち着いたのか、全ての事情を話してくれた。

何で男の格好をしていたのか？ も含めて。

シャルルはデュノア社社長と愛人の子供であり、引き取られる二年前までは母と二人だけで生活していたらしい。

一応、生活資金などはデュノア社社長が振り込んでくれていたらしいが、その生活も母が亡くなった事で引き取られたらしい。

その過程で色々と検査をする中、IS適応が高い事が分かり、非公式であるもののデュノア社専属のテストパイロットを務める事になった。

それから暫くしてデュノア社は経営危機に陥る。いくら世界第三位のデュノア社でも主力ISは第二世代型。

世界は既に第三世代型の開発に取り掛かっており、欧州ではイギリス・ドイツ・イタリアがトライアルの段階にまで進んでいる。

フランスは未だに第三世代型の開発の目途も経っていない状況であ

り、一步も二歩も後れを取っているとの事らしい。

デュノア社でも第三世代型の開発に取り組むものの圧倒的にデータも時間も不足している状況であり、なかなか形にならない。そして遂に政府からの通達で予算が大幅にカットされる事態にまで落ち込んだ。

そして次のトライアルで選ばれなかった場合は援助を全面カット、その上でIS開発許可も剥奪されるって流れになったらしい。

焦ったデュノア社社長はシャルルを男装させ、先ずは注目を集めるための広告塔に仕立て上げた。そして同じ男子なら日本で登場した特異ケース、つまり俺と接触しやすい。可能ならその使用機体と本人のデータを取ってこい、というつまりスパイの真似事を実の娘にさせようとしたのだ。

その余りの身勝手な大人の思想とやらに、俺は苛立ちを覚えた。

俺も千冬姉も親に捨てられた。

大人の理不尽な都合に振り回されたのだ。

今までのシャルルの話し振りから、シャルル自身も父親に対して、いい感情を持っていないのだろう。あれは父親ではなく、他人なのだ、自らの中で区別するために。

「まあ、こんなところかな。でも、一夏にばれちゃったし、きっと僕は本国に呼び戻されるだろうね。デュノア社は、まあ、……潰れるか他企業の傘下に入るか、どのみち今までのようにはいか

ないだろうけど、僕にはどうでもいい事かな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「一夏、今まで騙してて、ごめんね。でも安心して。今日で僕はなくなる、から・・・・・・・・」

「・・・・・・・・のか？」

「え？」

「それでいいのか？ いい筈ないだろ。親は関係ない。シャルル・デュノア。お前はどうしたいんだ？」

「え・・・・・・・・い、一夏」

「俺はお前に聞いてるんだ。どんな事情があれば、俺はシャルルの味方だ。俺はシャルルのしたい事を心から応援する。親とか関係ない。親が何を言おうが子供の将来まで奪う、そんな事は認められないっ！」

シャルルは俺の言葉を咄嗟に理解できなかったのだろう。困惑した

表情を浮かべる。

でも、俺も自分の感情を抑えきれない。

親だから？ 親だから子供の未来を奪っていい？ そんな事あったまるかつ！

親には親の、子供には子供の、未来を決める権利は自分にしかないのだから。

「親がいなけりゃ子供は生まれない。だけどな、親が子供に何をしてもいいなんて、そんな馬鹿な事が許されてたまるか！ 生き方を選ぶ権利は誰にだってあるんだ。それを親に邪魔されていいなんて事はないんだ！」

俺も親に捨てられたから、シャルルの境遇は理解できる。だからこそ、シャルルには自分で自分の生き方を選んでほしかった。

「い、いち、か………？」

「俺もさ、俺と千冬姉なんだけど——両親に捨てられたから」

この世界では両親に捨てられ、前の世界では親は幼い頃に事故死している。でも、誰からも愛されなかったわけじゃない。

この世界では千冬姉に、前の世界では俺の剣術の師匠でも祖父に、愛を注がれ育った。だから、自分が不幸だなんて思った事はないし、幸せだと感じていた。

「シャルル、お前はどうしたいんだ？」

「でも、どうしようもないよ。フランス政府がこの真相を知ったら黙ってないだろうし、僕は代表候補生を降ろされて、よくて牢屋とかじゃないかな」

「なら、ここにいろ」

「え？」

IS学園には日本国内にある学園だが、何処の国の法律も干渉できない特記事項というものがある。それを利用すれば、三年間は大丈夫なはずだ。

「——つまり、この学園にいれば、少なくとも三年間は大丈夫なはずだ。それだけ時間があれば、何とかする方法だって見付けられる。それに学園を卒業してもシャルルは俺が守るさ」

「えっ!？」

「ん？ 何かおかしい事言ったか、俺」

「そ、その．．．．．僕を守るって．．．．．」

「ああ、当たり前だろ。誰もシャルルの存在を認めてくれないなら俺が認める。シャルル・デュノアが存在を織斑一夏が認める。だから、ここにいろ」

「．．．．．」

シャルルが固まってる。あれ？ 俺、変な事言ったか？ 言ってないよな？

おっ、ふるふる震え始めた。

「一夏ああーっ！」

「へぶうううーっ！」

シャルルが体当たりしてきた。しかも諸に鳩尾に入り、俺はガクブルですよ。

「へ？ ああー、ごめん、ごめんね。一夏。あまりに嬉しくて、
つい……」

「い、いや、まあ、気にするな……」

「えへへへ」

ぎゅーっと俺を抱く腕の力が強くなる。離れない、といった感じに
強く強く。く、苦しい……。

「あのお、シャルル？ ちょっと腕の力を弱めてくれるかな？」

「シャルロット」

「へ？」

「シャルロット・デュノア。僕の本当の名前。二人きりの時はシャル
ロットって呼んでほしいな。ダメ？」

「いや、構わないけど」

「じゃあ、呼んで」

「? シャルロット?」

「もう一度」

「シャルロット」

「えへへへ」

ギュー――。

さらに強くなる腕の力。く、苦しい。しかも尻餅をついた状態の俺に覆いかぶさるように抱き締めてくるシャルロット。まるで襲われてるような状況だな、これ……。

猫のように頭をすりすりしながら甘えてくるようなシャルロットの頭を撫でると、不意に襟元からわずかに見えた胸の谷間に一瞬意識が飛びそうになってしまう。

ヤバイヤバイヤバイヤバイ。

ヤバいつてエエエエエーっ!!

こんな体が密着してる状態で……俺の暴れん坊將軍が覚醒してしまつたら……。

主人公という立場から一転、ただの変態キャラという不名誉な烙印が押されてしまうだろう。

それだけは避けねばならない!

主人公という立場だけは守らねばっ!!

さりげなく、そう、さりげなくだ。シャルロットにはれないように体の位置をズラせば大丈夫だ。俺ならやれる。やってやるんだっ!!

「一夏? どうしたの?」

はい、バレたああああーっ!!

「いや、ちよつと……」

そんな俺の視線を追うようにシャルロットは自分のはだけた胸元を見下ろす。

一瞬の静寂。

かあっと頬を赤らめるシャルロット。

いたたまれない空気に俺は明日から変態という名の汚名を被らされる事を覚悟した。

「一夏の・・・・・・・・えっち」

「はうあー!!」

グサツと来ました。会心の一撃です。ええ、もう瀕死ですよ、俺。

「えっと・・・・・・・・見たいの？」

「はぁ〜終わった、終わったよ、俺の平和な学園生活・・・・・・・・って、へ？」

「一夏は僕の、その、胸・・・・・・・・見たいの？」

最初、シャルロットが何を言っているのか理解できなかった。

「一夏ならいいよ．．．．．僕の全てを、一夏に捧げても．．．」

「シャル、ロッ、ト．．．．．？」

上着のジッパーをゆっくり下していく。

え？ え？ 何この状況？

しかもブラしてねええー。見えそうで見えないこのチラリズムに俺の本能が刺激される。

そして、そのまま上着に手を掛け――

ドンドン。

「「!？」」

「一夏あ、いるんでしょ？ ご飯まだなんでしょ？ 一緒に行くわよ」

ヤバイ、鈴だ。このままでは有無を言わず部屋に突入してくる。今この状況を見られたらシャルロットが女だってバレるだけでなく、間違いなく俺の命もヤバイ。確実に殺られる。

「シャルロット、隠れろ！」

「う、うん！」

小声でシャルロットをベッドの中に押し込めたと同時にドアが開く音がした。

「何やってんの、あんた」

「いや、シャルロッ……、じゃなくシャルルが体調が悪いらしくてな、看病してたんだよ」

部屋の中に入ってきたのは鈴、それにセシリアに箒までもいた。うん、確実にあの場面を見られてたら死んでたな、俺。間一髪だ。

「大丈夫なんですか？」

「ああ、大丈夫大丈夫。熱はないみたいだし、軽い貧血だと思うからさ。暫く横になってれば直ると思うってさ。だから今日の夕食はいらぬいみたいなんだ」

「う、うん、ごめんね」

セシリアの心配の声に俺が嘘を並べ立てると、布団の中からシャルロットがくぐもった声で謝罪する。

「それなら仕方あるまい。私達も夕食はまだだから一夏だけでも一緒に行くか？」

箒はそう言っていると、俺の腕に自分の腕を絡めてくる。逃がさないぞ、というような感じだ。しかし、さっきのシャルロットのおっぱいの事もあって、箒の核弾頭級おっぱいの感触が直に伝わってくるのは色んな意味でいつもより刺激が強い。

「何をやっていますの、箒さん？」

そう言いながら箒とは逆の腕にセシリアは自分の腕を絡ませてくる。今度は美麗おっぱいの感触が――以下省略。

「あんた等！ 何してんのよ！」

今度は鈴が背中から覆いかぶさってくる。鈴は鈴で大きくはないが確かに主張してくるおっぱいの弾力が俺の背中を刺激する。

つまり今の状況——とてつもなく歩きにくい。

「それではデュノアさん、お大事に」

【シャルロットside】

ボタン。ドアの閉まる音が聞こえる。

「ふう」

ガバツと布団を押しわけ、体を起こす。ふと視線を降ろすと、ジッパ―全開の上着。

はわわわわわわわ。

僕、もしかして、物凄く、恥ずかしい事をしたんじゃない。——思い出すのは、ついさっきまでの光景。一夏に、僕の存在を認めてくれた一夏がとても愛おしくて、全てを捧げようと思ってしまった。

今までの人生で僕を愛してくれたのは母だけ。それ以外の人達から

は道具としてしか見られた事がなかった。

だから僕の存在を肯定してくれた一夏がとても愛おしく思えた。

この学園に来てから今日まで一夏の事を異性としていいな、と思った事はあった。でも、ここまで強く愛おしいと思ったのは今日が初めてだ。

「一夏、一夏……、一夏……」

今まで性別を偽って騙していたようなものののに、それでも受け入れてくれる一夏。

嬉しかった――。

誰かに必要とされる事が。

長らく忘れていた感覚。

今この瞬間、シャルロット・デュノアの全てが織斑一夏という存在に染められた。

そこでハッと気付く。咄嗟に隠れた場所が一夏のベッドであるという事に。

一夏の匂いがするベッドにいる。――つまり、一夏に抱き締められてるかのような錯覚を覚える。だから少しでも一夏に包まれている気分になり、ベッドに潜り込む。

「えへへへへへ．．．．．一夏、一夏あ。好き。大好き．．．．．」

もぞもぞと一夏の匂いのする布団にくるまれながら僕は決心する。

如何なる事があっても一夏が望む限り、傍にいたい。ううん、寧ろ傍にいてやるんだ。

僕の中で織斑一夏という存在が大きくなっていく。僕の全て——かけがえのない愛おいしい人。

一夏へ想いを馳せながら、僕は夢の中へと落ちていく——。

Episode 19：シャルルの告白（後書き）

次回はセシリアVSラウラ戦になる予定です。

あくまで予定は予定です。

E p i s o d e 2 0 : 激突！セシリアVSラウラ（前書き）

今回はいつもより真面目な展開かな、と。

Episode 20.. 激突! セシリアVSラウラ

【一夏side】

金曜日の放課後、セシリアとラウラの決闘の日。――第三アリーナAピットにはセシリアを囲むように、俺、箒、鈴、シャルロットがいた。

決闘が決まってから前日まで四人でセシリアを特訓したのだが、結局、BT兵器使用時でもライフル射撃を行うための思考制御はうまく出来なかった。これがよくある物語なら決闘の前日にもものにする事もできたのだろうが、現実はそう甘くはなかったって事だ。

「絶対に勝ちなさいよ、セシリア」

「ええ、鈴さん」

鈴の激励にセシリアは首を縦に振る。そして箒にシャルロットもセシリアに声を掛けていくのを俺は黙って見ていた。

俺の存在を否定してきたラウラに真っ向からぶつかっていったセシリア。

「一夏様.....」

「・・・・・・・・セシリア、お前なら大丈夫。勝てるさ」

セシリアが俺に視線を向けてくる。

相手はあのラウラ・ボーデヴィツヒ。その実力は未知数ではあるが、ドイツ代表候補生でもあり、専用ISまでも所持している。恐らく強敵だろう事は容易に想像できる。

しかし、セシリアの目は自信があるかのように、その視線は強い。

今のセシリアには、俺がいる。

箒が、鈴が、シャルロットが、セシリアの勝利を信じている。

初めて対峙した日は、女尊男卑を地で行くような高飛車な性格をした女の子だった。

クラス代表決定戦の時までは――。

俺の勝利で終わったクラス代表決定戦の後は、何かと俺に構ってく
るようになり、旦那様発言まで飛び出す始末。

それでも、セシリアが傍にいる事を迷惑に思った事はないし、俺に
想いを寄せてくれる大事な存在の一人だ。まあ、箒も鈴もシャルロ
ットもそうなんだけどな。

だから俺はセシリアを信じる。

そう、セシリアの勝利を。

「セシリアなら勝てる。俺はそう信じてる」

「――はいっ！」

俺の言葉が嬉しかったのか、抱き着いてくるセシリア。

うむ、今日も美麗。^{エレガント} I S スーツだからおっぱいの感触がいつもよりダイレクトに伝わるわ、セシリアの甘い香りに俺の心臓は高鳴っていく。

しかし、このままでは俺が暴走してしまう。名残惜しいがこのままでいたら殺意の波動に身を包む三人に殺される…………。

「わたくし、一夏様の信頼に絶対に応えてみせますわ。だから、その…………… 確実に勝てる為にも勇気をくださいまし」

そう言いながら目を閉じ、顔を近づけてくるセシリア。

えっと……………？ ん？ これって……………？

あの、セシリアさん。ここに箒も鈴もシャルロットもいる事を忘れてませんか？

「「「い　ち　か　？」」」

そして俺とセシリアを離すかのように差し込まれる〈双天牙月〉。
ISを部分展開させた鈴に表情はなかった。そう無表情というやつだ。

そして俺の首筋にあてられる箒の刀。

あれえー、それって銃刀法違反じゃ．．．．．って、ここがIS学園という治外法権だから帯刀が許されるというのか!?

シャルロットはシャルロットで笑顔だけど目が笑ってない。しかも俺を見る目が「アトデオ話ガアルカラ」と物語っているように感じる．．．．．。っていうか、男装してるんだから女だってばれる様なことは控えないといけないんじゃないか?

「もう！　今日くらい、いいじゃありませんかっ！」

「ダメに決まってるっ！」

「早く行きなさいよね！」

セシリアの抗議に箒が声を上げ、鈴は早くアリーナへ向かえと急か

す。シャルロットは未だに笑顔でした……………。

セシリアはそのままブツブツ文句を言いながらもISを展開装着し、ピットから飛び立っていく。

残されたのは、殺意の波動に身を包む箒に鈴、そしてシャルロットだ。

「と、と、と、取り合えず、管制室にでも、い、行こうぜ？ あそこからの方がよく見えるし、な……………」

冷や汗が止まらない。

だって、誰も俺の言葉に返事しないどころか、俺ににじり寄ってくるその様が怖いんだ。

「……………え、冤罪を、主張する……………」

「「却下」」

そのまま俺は箒と鈴に両腕を取られ、引きずられていく。何も悪い事していないのに……………。そして俺を見るシャルロットの目が……………恐かった……………。

【セシリア side】

アリーナには既にラウラ・ボーデヴィツヒが専用ISである『シュヴァルツェア・レーゲン』を展開・装着して待っていた。ドイツの開発した第三世代型であり、近接から遠距離射撃までこなす万能型である事は知っている。

「——来たか。先ずはセシリア・オルコット。貴様を血祭に上げてやる」

不敵な笑みでわたくしを挑発してくる。その表情は自分の勝利を微塵も疑っていない。

「わたくしにそう簡単に勝てると思わないでくださいな。勝利を手にするのは、このわたくし、セシリア・オルコットですわ」

「いいだろう。夢見心地な貴様に現実を——教えてやるっ！」

試合開始の合図とばかりに、ラウラ・ボーデヴィツヒは一夏様と同じ瞬間加速を行い、突撃を仕掛けてくる。
イグニッション・ブースト

「そう簡単にやらせませんわっ」

クロス・グリッド・ターン
三次元躍動旋回を使い、突撃を躲し、一夏様に教わった瞬間加速で
即座に距離を取る。

わたくしの得意分野である遠距離からの射撃という利点を生かすために距離を取るしかない。

サイド・バインダーに装備している4基の射撃ビットを展開し、相手が回避するであろう先を予想しながら、連続でビットによる視界外射撃を行っていく。

しかし流石はドイツ代表候補生といったところか、なかなか当たらない。

「ふん、理論値最大稼働のブルー・ティアーズならいざ知らず、この程度の仕上がりで第三世代型兵器とは笑わせる」

「くっ！」

そしてラウラ・ボーデヴィツヒは腕を左右同時に突き出し、交差させた腕の先で目に見えない何かに掴まれたかのようにビットがその動きを停止させられる。

AIC。シュヴァルツェア・レーゲンの第三世代型兵器、アクティブ・イナーシャル・キャンセラーの略称であり、慣性停止能力を有

する停止結界がわたくしの攻撃を阻む。

厄介なものを開発したものですわ、でも――

「動きが止まりましたわね！」

好機と見たわたくしは六七口径特殊レーザーライフルヘスターライ
ト・mk?でラウラ・ボーデヴィツヒをロックオンする。

「貴様もな」

そのまま狙い澄ました狙撃を、事もあるうにラウラ・ボーデヴィツ
ヒは大型カノンによる砲撃で相殺する。

「っ!？　なんて非常識なっ！」

射撃を射撃で相殺する、なんてそうそうできるものではない。しか
し、目の前のラウラ・ボーデヴィツヒは苦も無く実行するだけの力
がある。

認めざるを得ない、かなりの実力者である事を。

目の前で対峙する強者に畏怖の念を抱き生まれた――そう、一瞬
の油断――。

ブルー・ティアーズの思考制御が中断されてしまった一瞬の隙をラウラ・ボーデヴィツヒは見逃す筈もなく、イグニッション・ブースト瞬時加速により、一瞬のうちに距離を詰めてくる。

「——っ!!」

ブルー・ティアーズの唯一の近接武器であるヘインターセプターを展開しようにも未だに慣れない近接武器の展開が遅れてしまった。

「遅い——」

両手に展開されたプラズマ手刀、そしてワイヤーブレードによる波状攻撃に襲われる。連続で切り刻むその衝撃にわたくしは為す術もなくブルー・ティアーズの装甲を切り刻まれ、そのまま右足を2本のワイヤーブレードが拘束し、回転を加えながら、壁へと叩き付けた。

【二夏side】

「セシリアっ!」

管制室にあるリアルタイムモニターで試合の様子を見ていた俺は思わず声を張り上げてしまう。

俺の為にその身を挺して、俺という存在を肯定してくれたセシリアが、傷付いていく。その様子を見ているだけというのは本当に辛い。

でも、俺は信じている。セシリアなら、今のセシリアなら――と。確証があるわけでもないし、対峙するラウラの技量は高い。

恐らく技量だけで言えば、ラウラに軍配が上がるのも事実だ。

でも、それだけじゃないんだ。技量だけで勝ち負けが決まる訳ではない。

箒も鈴もシャルロットも、ただモニターを凝視している。しかし、その胸の内はセシリアの勝利を信じてる。セシリアは決して俺達の信頼を裏切らない。

だから俺が今すべき事はセシリアを信じて、この決闘の行く末を見守るだけなんだから。

「強いですね、ボーデヴィツヒさん……………」

管制を担当している山田先生も認めるラウラの能力。しかし千冬姉は違う事を考えているようで、山田先生とは違った見解をしていた。

「ふん．．．．．。あいつは変わらない．．．．．。ドイツであいつを特訓した頃からずっと．．．．．。強さを攻撃力と同一とだけ見ている．．．．．。一夏はどう見る？」

「今のあいつになら簡単には負けないさ——今、あそこで対峙しているセシリアが本当の強さを教えてくれる」

「ふむ、そうだな。オルコットも大分強くなったみたいだな．．．．」

千冬姉は俺の答えに納得したのか、その視線をモニターに向ける。

442

【セシリア side】

壁に叩きつけられた衝撃は相殺しきれず、体を突き抜け、意識が一瞬遮断された。

「くうっ！」

わたくしの想い人でもある一夏様が見守る前で無様な醜態を晒して

しまった。でも、ここで挫けるわけにはいかない。

ラウラ・ボーデヴィツヒはわたくしの想い人でもある織斑一夏という存在を穢したのだから。――許せる筈がない。それにこのまま倒れては特訓に付き合ってくれた箒さん、鈴さん、デュノアさんにも申し訳が立たない。

だから、わたくしは震える脚を両手で押さえ、立ち上がる。

「ふん、やはりお前では私の敵にもならんな」

「・・・・・・・・ 黙りなさい」

声を出すのも辛い。でも、ここで倒れるわけにはいかない。

「お前がその程度では織斑一夏も底が知れるな」

今、この女は何を言った？

「下らん種馬に現を抜かすような雌に、この私が負けるものか」

この女は言ってはならない事を言った。

わたくしの大事な存在を侮辱した。

大事な存在を穢される事を許すのか、セシリア・オルコット。

いいえ、許せるものではありませんわ。

「もうこのような茶番は終わりにしてやる。——止めを刺してやろう」

——敵ISの大型レール砲カノンの安全装置解除を確認、初弾装填——

——警告！ ロックオンを確認——

巨大なりボルバーの回転音が轟き、照準がこちらに向けられ、その砲口から対ISアーマー用特殊徹甲弾が打ち出される。一発でも命中すれば、それだけで勝負の決着が付いてしまう程の威力を有する砲撃。

だが、不思議と焦りはない。あるのは冷えた感情と愛する者を穢したラウラ・ボーデヴィツヒに対する敵意だけ。

——応えなさい、ブルー・ティアーズ！

その想いに応えるようにスラスタフルバーストによる全開出力による回避行動

で空中を舞う。

「なんだとっ！」

避けられるとは思っていなかったのだろう、ラウラの表情に驚きの色が出る。

「ラウラ・ボーデヴィツヒッ！ あなただけは、許すわけにはいきませんわっ！ 行きなさい、ブルー・ティアーズ！」

腰に備えてあった二つの円筒状パーツから一発ずつ、2基のミサイルビットを射出する。

「無駄だっ！」

右手を突き出し、アクティブ・イナージェナル・キャンセラ A I Cを展開させ、2基のミサイルビットの動きを停止させる。

「何度やっても結果は——」

もちろん、アクティブ・イナージェナル・キャンセラ わたくも A I Cを展開される事は予想済み。

「もちろん、その行動も予想済みですわ」

「スターライト・mk?」の照準を2基のミサイルビットに合わせる。

「でも、爆発の衝撃までは防げないでしょう?」

そのまま停止させられた2基のミサイルビット目掛けて、レーザー射撃を行い、ラウラの目の前で爆発させる。

「——くうううっ!」

そのまま四方から4基のレーザービットを展開、アクティブ・イナージェル・キャンセラーAICの展開を解いたラウラにビット射撃を連続で畳み掛ける。

「調子に乗るなああ——!」

そのままワイヤーブレードを展開し、4基のレーザービットを切り払おうとするも、思考制御を駆使し、斬撃を躲していく。

「わたくしの誇りを、一夏様を、……………穢した罪は重いです

わ

そのままビットを展開させながら、ライフル射撃でラウラを的確に射抜いていく。

「き、貴様ああっ！」

今までになかったブルー・ティアーズとの一体感をその身に感じる。わたくしの勝ちたいという想いにブルー・ティアーズが応えてくれる。

例えば、この状況でアクティブ・イナードナル・キャンセラA I Cを展開させたとしても四次元という攻撃を両の手だけでは捌き切れない。

ワイヤーブレードを展開しても、レーザービット、ミサイルビットに撃ち落とされてしまう。

ビット射撃だけではなくライフル射撃による同時攻撃にラウラのシールドエネルギーは確実に奪われていく。

このままでは負ける。

そう、ラウラが確信した瞬間、異変が起きた。

【ラウラ side】

確かにセシリア・オルコットは強かった。力を見誤ったのは私のミスだ。

しかし、負けたくない。

私は最強でいなければならないのだ。

存在を認めさせるために最強でいるしかなかった私は強さだけを求めた。

だからこそ、負けるわけにはいかなかった。

だから、私は求める。

私が最強でいられる力を――。

誰も負けない最強の力を――。

そのためには力が欲しい――！

そう願った瞬間、私の中で何かがうごめくを感じた。そしてソレ
は私に問いかけてくる。

『――願うか．．．．？ 汝、自らの変革を望むか．．．．
．？ より強い力を欲するか．．．．？』

その問いかけに私は肯定する。

——比類なき最強を、唯一無二の絶対を——私によこせ、と。

次の瞬間、私の意識は闇に支配された。

——Valkyrie Trance System
boot——

E p i s o d e 2 1 : ヴァルキリー・トランス・システム（前書き）

今回、いつもより短いのですが、視点変更が多かったため、区切りのいい所で一旦、話を切りました。

Episode 21: ヴァルキリー・トランス・システム

【??? side】

ある施設にてディスプレイに映る映像を眺める二人の男女。

そのディスプレイに映るのは、IS学園で決闘を行っているセシリアとラウラの姿であった。

「へえ、BT兵器というものなかなか馬鹿にはできないわね」

女は感心していた。セシリアのブルー・ティアーズはBT兵器の実働データをサンプリングすることを目的とした試用機である事は知っていたが、試作段階であるため、まだ実用化できるレベルでもなかった。

しかし、ディスプレイに映るセシリアの四次元攻撃は敵を仕留めるのに実に効果的な攻撃方法である。現に対するラウラは為す術もなく、その攻撃を受けるだけである。

「ねえ、あなたならあの攻撃に対処できる?」

「ふん、当たり前だろ」

女の問いかけに男はさも当然であるかのように吐き捨てる。

「だが、俺の目的はあの女じゃない。織斑一夏だ」

「ふふふ、そうね……。ただ、あなた、この前、抹殺対象ターゲットに会いに行ったでしょう？ ダメよ、勝手な事しちゃ」

「別にいいだろ？ 何もしていないさ。それに一度見ておきたかったからな」

この男は前に織斑一夏に会いに行った。もちろん、遠くから眺めるだけだったが、溢れ出る殺気を抑えられなかった。

「まだ時期じゃないわ。それに――」

「それに？」

「あなたの専用ISの開発もまだ済んでないわ」

新たにディスプレイに展開されたウィンドウに表示される、名を黒こく耀ようと表示されたISのデータ。

男はそれを一瞥するだけに留める。まだ完成していないのだから、データだけを見ても仕方ないと思ったのだろう。女もその様子を見て、先ほどまでの決闘を映すウィンドウをフルスクリーンに切り替え、表示する。

「まあ、今はこの決闘の観戦を楽しむだけにしましょう」

「……………仕掛けたのか？」

「もちろん」

女が仕掛けたギミック——それはディスプレイに映るラウラの専用IS、シュヴァルツェア・レーゲンにあった。ドイツの研究所に研究員として忍び込み、開発されたヴァルキリー・トランス・システムをシュヴァルツェア・レーゲンに密かに設定・欺瞞した。機体の損害と操縦者の負の感情と最大限に達した時に発動するように。

「しかし……………、何だ、あれ？　ヴァルキリー・トレース・システムのようで、違うような……………？」

「あら、よく気が付いたわね。そうよ、あれはヴァルキリー・トレース・システムじゃない。——ヴァルキリー・トランス・システム——」

「ヴァルキリー・トランス・システム？」

「そうよ、ヴァルキリー・トレース・システムが過去のモンド・グロッソの戦闘方法をデータ化し、そのまま再現・実行するシステムで、国際条約違反になるシロモノだというのは知ってるでしょ？」

男は黙って首を縦に振り、肯定する。早く説明しろ、と目で物語りながら。

「ふふ、焦らないの。ヴァルキリー・トランス・システム——これは再現・実行するシステムではなく、過去のモンド・グロッソの戦闘方法だけでなく、自身が経験した戦闘データまでもデータ化し、操縦者に最も適したデータ^{トレース}を最も適した形^{トランス}として提供するもの。だから、複写^{トレース}じゃなく変形」

「ふーん………」

男はよく理解できなかったのか首を傾げる。女はそんな男の様子に笑みを浮かべ、ディスプレイに視線を映す。

「まあ、聞くよりも見た方が理解できると思うわ」

女の言葉を受け、男も視線をディスプレイに向けた。

◇◇*◇*◇*◇*◇*

【千冬side】

「あああああっ！！！」

リアルタイムモニターからラウラの身を裂かんばかりの絶叫が響き渡る。

そしてラウラのシュヴァルツェア・レーゲンの装甲をかたどっていた線は全てぐにやりと溶け、どろどろのものになって、ラウラの全身を包んでいく。

ISはその原則として、変形はしない。厳密にはできなかった筈なのだ。

私の知識でISが形状を変えるのは、『スタートアップ・フィッティング初期操縦者適応』と『フォーム形態移行』の二つだけだ。

パッケージ装備による多少の部分変化はあっても、基礎の形状が変化することはまずないのだ。

しかし、モニターに映るラウラのIS、シュヴァルツェア・レーゲンはその形状を変えようとしている。

ラウラの全身を包み込んだアレは、徐々にその形を露わにしていく。

再度、姿を露わにしたラウラは既に表情は虚ろであり、眼帯に隠れていた越界の瞳も露わになっている。
ヴォーダン・オージェ

その視線も既に色はなく、感情のない人形のようにも見える。

装甲は黒い重騎士の鎧といった感じに装甲は重々しいものに変わっており、右肩に装備されていた大型レールカノン背部に位置を変え、肩部は両肩共に肥大化している。スラストも腰部・脚部共に肥大化を果たしており、出力が上がっているのが目視でも分かる位だ。

何だ？ 何なのだ、アレは？

見た事もない現状に私は思考を巡らせるものの答えが見つからない。そう、知らないから答えは当然、見付かる筈もない。

しかし、考えを放棄する訳にはいかない。

先ずはこの場の対処が先決だ。

「山田先生！ 非常事態発令だ！ 状況をレベルDと認定、今すぐアリーナ観客席にいる生徒を避難させ、遮断シールドをレベル4に設定！ 直ちに教員による鎮圧部隊を編成、鎮圧に向かわせるんだ！」

「わ、わ、わ、わかりましたっ！」

山田先生も目の前の現状に困惑していたのだろうが、直ぐに行動を起こす。

うむ、さすが山田先生、普段は頼りないものの、こういう緊急時に直ぐに対処できるという所が優秀であるが所以だ。

頼りになる相棒パートナーでもある。

「織斑先生！」

「何だ？ 今はお前に構っている暇はないのだが」

忙しくなく状況の対応を指示していた私に声を掛けてきたのは、一夏だった。

「——俺に行かせてくれ」

「却下だ」

一夏の申し出を一言で断ち切る。前回のゴーレム出撃の際はその場にいた一夏に対処させたが、今あの場に一夏はいない。

どんな状況下も把握しきれていない、危険な場所に唯一の肉親である、大事な一夏を放り込むような真似はできない。

「分かっている筈だ。このまま鎮圧したら、アイツに、ラウラに本当の強さを教えてやれない」

「お前なら出来るというのか？」

「ああ」

「自惚れか？」

分かってくれ、一夏。お前を危険な場所に行かせたくないという姉である、私の気持ちを。しかし、一夏の視線は動じる事無く、強い意志を持って私を射抜く。

「自惚れなんかじゃない。それにセシリアもあの場にいる。セシリ

アを、大事な存在を守るのは男として当然だろ？　もし、あそこにいるのが千冬姉でも箒でも鈴でもシャルロット、……シャルでも俺は何が何でも行動する。大事な存在を守る為に」

あの一夏に”大事な存在”といわしめるか……。私以外の女を大事な存在という一夏の言葉が私の胸を刺す。

篠ノ之、凰、デュノアは顔を赤くしながら私達の会話を見守っている。奴らは奴らで一夏の気持ち嬉しいのだろう。まあ、まだやるつもりはないがな。

確かに一夏は強い。特にIS学園に来てからの成長も著しい。それが前世の記憶と経験を継承しているといっても、だ。”現在”の一夏自身も成長しているのは姉であるから分かる。

「俺が無理だと思ったら鎮圧部隊を送り込んでくれてもいい。俺に少しでも時間をくれないか？」

「……………」

「頼む、俺に行かせてくれ」

考え込む私に一夏は強い視線を送る。考えてる時間はない。

「――無理だと判断したら即座に鎮圧部隊を送る。いいな？」

私はこの場を仕切る責任者として間違った判断をしているのだろう。しかし、目の前の一夏を、弟である一夏を、私にとって一番大事な存在の一夏を、信じる事にした。

「ああ！ 構わないさ。じゃあ、いつてくる」

【一夏side】

千冬姉の許可を取った俺は直ぐに管制室から出ようと走り出す瞬間、箒に鈴にシャルロットと視線が合う。

「一夏っ！ あたしも行くわ」

「僕も専用機があるから、きっと役に立てると思う」

箒は箒で専用機がないため、悔しそうに顔を俯かせていたが、専用機持ちの鈴やシャルルは自分も連れて行ってくれ、と志願してくる。でも、二人を危険な場所に行かせたくない。

「俺の我儘かもしれないけどさ、お前達を危険な目に合わせたくないし、千冬姉の教え子のラウラの目を覚まさせてやるのは、アイツが憧れた千冬姉の弟である俺の役目だと思うんだ。傲慢な考えかもしれない、けどさ。アイツの目を覚ましてやるのは俺の役目だと思うんだ。だから俺に任せてくれないか？　それとも俺が信じられないか？」

「……っ！　そんな事、言われたら……… 信じる、に決まってる、じゃない」

「ありがとな、鈴。信じてくれて」

途切れ途切れの言葉だったが、俺の事を信じてくれる鈴。

「ズルいよ、一夏。そんな事言われたら………。だったら、約束して。絶対に勝ってくるって」

「もちろんだ。ここで勝つのが男だろ？」

確かにズルい言い方だったかもしれない。でもそんな俺でも信じてくれるシャルロット。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

無言で俺を見つめる箒。その目には不安の色しかなかった。だからそんな箒を少しでも安心させてやるかのように、頭を撫でる。

「あっ・・・・・・・・」

「俺を信じてくれ、箒。絶対に勝ってくるさ、な」

「分かった・・・・・・・・。絶対に死ぬな」

「当たり前だろ」

箒の不安を少しでもなくしてやるために俺は笑顔で答える。箒の頭を撫でる様を見つめる鈴とシャルルの視線が物凄く痛い・・・・・・・・。

さて、早く行かなきゃな。

セシリアのもとに――。

セシリア、無事でいてくれよ――。

Episode 21: ヴァルキリー・トランス・システム（後書き）

実は今回のヴァルキリー・トランス・システムですが、誤字でした。
（笑）

前話の最後の表記が、TraceなのにTranceって書いてちゃって。感想で指摘され見直してみたら間違えてる事に気付いて、直そうと思ったのですが、このまま話を書き直した方が面白いかなと思って、そのままにしました。

変形。本来ならトランスフォームなのですが、当作品のヴァルキリー・トランス・システムは複写ではなく、過去の戦闘データを基にISを変形させるシステムです。

過去の戦闘データなので、過去のモンド・グロッソの戦闘だけでなく、自身の戦闘データ、つまりシュヴァルツェア・レーゲンでの戦闘データをも取り込み、変形となります。

だから原作やアニメのような全身装甲ではなく、ISの形を変え、ラウラの姿も露出しています。

さて、本来であれば、対ラウラ戦は二話で終わらせるつもりでしたが、誤字から始まったプロット変更に伴い、三話にまたがる事になりました。

なので真面目な話が後一話続きます。（笑）

後、最近感想が増えてきて凄くうれしいです。投稿した際の閲覧人数も回を重ねる毎に増えてきますし、自分の書いたものに対し

て反応があるのはとても嬉しい事です。

基本的に支持してくれてる方の感想は嬉しいものです。批判してくる方の感想はテンションが下がってしまいますが。（笑）

まあ、でも自分の書いたものに誰も反応してくれないよりは全然いいですし、今後も感想をお願いします。ただ極力、批判するのだけは避けてほしいです。

そんなに心は強くないので。

まあ、つまらなかった、自分に合わないと思ったら、そこで回れ右してもらって構いません。

ただ、指摘する箇所があったら指摘してもらって構いません。自分で気付かない、おかしい点もあるかと思っていますので。

尚、一夏の前世の記憶と経験の継承に関しては、現時点ではあくまで強化ツールとだけしか考えていません。

記憶も継承したのは、あくまで剣術の技術という記憶を継承させるためのものです。

それに前世の記憶があるのは一夏だけですので、前世の記憶云々で話が展開する事ありません。

もしそういうのが嫌だ、と感じたなら当作品は合わないと思います。長くなりましたが、こんな作品でよければ今後もお付き合いいただけると嬉しいです。

E p i s o d e 2 2 .. 決着! (前書き)

前回、短かったので今回は若干長めです。

しかし、シリアスは向いてない事が分かりました。

ギャグならすいすい書けるのに、シリアスになると．．．．．ど
うしても遅くなってしまう．．．．．。

Episode 2..決着!

【セシリア side】

「あああああっ!!!」

目の前でラウラ・ボーデヴィツヒが身を裂かんばかりの絶叫を上げたかと思っただけに起こった出来事にわたくしは言葉を無くした。訳が分からなかった。ブルー・ティアーズの全ビットとライフルによる同時攻撃でラウラ・ボーデヴィツヒを追い詰めていた筈なのに……。

シュヴァルツェア・レーゲンの装甲をかたどっていた線は全てぐちゃりと溶け、どろどろのものになって、ラウラ・ボーデヴィツヒの身を取り込んだかと思えば、徐々にまたその粘土細工のようなものは形を成していく。

再度、姿を露わにしたラウラ・ボーデヴィツヒに表情はなく、眼帯に隠れていた目も露わになっている。しかも色が金——いわゆるオッドアイというやつだろうか、初めて目にする。

そして先程までのISの形はなく、シュヴァルツェア・レーゲンがさらに重装甲になったような印象を受ける。

セカンド・シフト
二次移行……？

でも、二次移行であるのなら、何故ラウラ・ボーデヴィツヒは無表情なのだろうか？ その表情には生気も感じられない。

分からない。何が起きているのか。

『オルコット、聞こえるか？ 緊急事態発生だ。試合は中止だ。今すぐアリーナから脱出しろ』

「え？ あ、はい」

織斑先生からの指示に従い、場を離れようとした瞬間――

――警告！ 敵ISからのロックオンを確認――

突然の目の前に展開されたウィンドウで警告画面が表示される。そして四方からのビット射撃に襲われる。

「っ!？」

咄嗟の事で反応が遅れてしまい、致命傷ではないが攻撃を受けてしまう。そしてどこから攻撃を受けたのか視界を巡らせ、驚愕した。

わたくしを襲う黒いレーザービットが4基展開されていたのだ。

BT兵器の開発・そして実働させているのは我がイギリスだけの筈だ。なのに何故、ドイツのISがBT兵器を展開させているのか。――さらに肩部からもレーザービットを4基展開させる。現在展開されているものと合わせても計8基。数だけで言えば、ブルー・ティアーズの2倍の数のレーザービットを展開させている事になる。

そのまま計8基のビット射撃を出来る限り躲していくも、躲しきれるものではなくシールドエネルギーは削られていく。

わたくしは、わたくしはっ！

こんな所で負けるわけにはいきませんの！

このままでは逃げられないというのであれば、反撃あるのみ。

シールドエネルギーの残量は心許ないが何もせずに捌り殺しになるのだけは嫌だから。

そのままビットを展開。先ずはこの厄介なBT兵器を全て叩き潰すだけ。

「行きなさい、ブルー・ティアーズ！ 紛い物は所詮、紛い物である事を証明してみせます！」

ビット射撃にヘスターライト・mk?によるライフル射撃を同時に展開、8基のビットを撃ち落とす。敵は動かない――つまり、8基ものビット操作による思考制御に手いっぱいなのだろう。

初めてビットを操作する敵に負けるわけにはいかない。

「このわたくしとブルー・ティアーズの前ではこれくらいの攻撃、何ともありませんわっ」

1基、2基……展開された半分のビット4基を撃ち落としていく。

しかし、相も変わらず、ラウラ・ボーデヴィツヒの表情は変わらない。ただただ、こちらを見つめるだけ。

「——敵ハ殲滅スルノミ……」

残ったビットを操作しながらのイグニッション・ブースト瞬時加速。敵は動けない、そう思っていたからこそその油断だった。

「なっ!!」

右手に展開された近接ブレードは親愛なる一夏様の雪片式型に酷似している赤白いエネルギー状の刃を形成している。

一瞬のうちに至近距離にまで詰められ、上段からの一閃——咄嗟に構えたヘスターライト・mk?が両断される。

「くうっ！」

そして体制を崩したわたくしは敵のビット射撃に晒される。そのままシールドエネルギーも削られ、絶対防御を超え、相殺しきれなかった衝撃が体を襲う。

それでもラウラ・ボーデヴィツヒは攻撃の手を緩めない。弾道型ビット2基も合わせての無慈悲なビット射撃による攻撃を繰り返す。

地表に叩きつけられたわたくしの機体は既に強制解除された。見下ろすラウラ・ボーデヴィツヒの目には何も映っていないかのように虚ろだ。

そしてわたくしに止めを刺すように近接ブレードを構え、突撃してくる。

——わたくしの生涯ただ一人の想い人、一夏様……………

——あなたにもう一度逢いたかった……………

——あなたに抱き締めてほしかった……………

だからなのか、気が付けば声を出して叫んだ。自身の想い人であ

る、その人の名前を。

「一夏様あっ！」

最後の瞬間が恐くて必死に目を瞑ってた。だから気付かなかった。

「セシリア、悪い。——待たせたな」

自身の想い人である一夏様が敵の攻撃を防いでいた。

【一夏side】

危なかった。

セシリアの機体は既に強制解除にまで追い込まれていた。後少しでも遅かったら、セシリアは——。

最悪の瞬間が頭をよぎる。恐かった。

いつも傍にいてくれたセシリアがいなくなる事が……。。だから許せない。目の前の敵を。

「……………許さねえ……………セシリアを……………よく
もよくもおおお」

相手の近接ブレードを力押しで跳ね除け、続け様に斬撃の雨を降らせる。

「鈴！ シャルル！」

敵が一瞬ひるんだ隙に何だかんだで付いてきていた鈴とシャルルにセシリアの回収を頼む。

「任せなさいっ！」

二人は即座にISを展開・装着し、鈴が負傷したセシリアを担ぎ上げ、アリーナから脱出するため、出口に向かう。迫るビットはシャルロットが迎撃しながら鈴の逃走の殿を務める。

「一夏、絶対に勝って」

「分かってるっ！」

まだ不安を残すシャルルの言葉に俺は首を縦に振り肯定し、目の前のラウラと対峙する。

「織斑一夏……敵ト認定——殲滅スル」

対峙したラウラは無表情でその視線は虚ろ。

正気でない事が一目で分かる。せめてラウラが正気の時に決着を付けたかったが今はそうも言ってられない。

「来いよ、ラウラ。俺が目覚まさせてやる」

「織斑一夏ハ敵——殲滅スル」

ラウラの感情の無い声を合図にビットが展開される。セシリアが半分ほど撃墜したが、それでも4基のレーザービットが残っている。

そのまま背部に装備されていた大型レールカノンが反転し、俺に照準を合わせてくる。そして巨大な撃鉄音との後に実弾による砲撃が俺を狙う。

「あたるかよっ」

旋回して、その砲撃を躲し、スラスターを吹かし、イグニッション・ブースト瞬時加速で一直線にラウラに迫る——も、ラウラも読んでいたようで右手を突き出し、A I Cを展開しようとする。アクティブ・イナーシャル・キャンセラー

しかし、こちらにはバリアー無効化攻撃が出来る単一仕様能力、ワンオフ・アビリティ零れい迅雷光がある。じんらいこう

点による攻撃、つまり突きによる一点攻撃であれば、アクティブ・イナーシャル・キャンセラーA I Cを無効化する事ができるはずだ。

——白式、応えろ。

——単一仕様能力、零迅雷光、発動——

瞬間、俺を包む白式の肩部、腕部、脚部、胸部、スラスターの各装甲が展開し、露出した内部装甲が赤く発光し出し、雪片式型のエネルギー状の刃も赤白く発光する。

「はあああああああつ!!」

アクティブ・イナーシャル・キャンセラー雪片式型がA I Cに触れた瞬間、その刃は停止する事無く、結界を突き破り、ラウラの肥大化した肩部アーマーを斬り裂いた。

「まだまだ——、っ!？」

続けて追撃を行おうとするも、展開されたビット射撃に阻まれる。
間一髪で回避に成功するも、今度はワイヤーブレードを展開してくる。

「おいおい、マジかよ．．．．．」

レーザービットに弾道型^{ミサイル}ビットによる射撃とワイヤーブレードの追撃の雨を振り切りながら距離を取る。

唯でさえ、厄介なのに、何故かブルー・ティアーズのBT兵器までも使用してくるのは流石に厄介だ。

『織斑、ラウラのヘッドギアを破壊しろ。あのヘッドギアがあのシステムの基盤になっている事が分かった』

突如、俺の頭に千冬姉の声が聞こえてくる。どうやらラウラのISの状況が解析できたらしい。しかし――

「ヘッドギアだけを斬れ、と．．．．．?」

なんつー無茶苦茶な。下手すれば、ラウラの頭までザックリいつて

しまいかねない。

『大丈夫だ。斬撃による軌道修正は白式に補助させろ。それに、お前は言ったな。俺に任せろ——』と』

「ああ、言ったな。そうだな、やってやるさ」

『一夏、お前なら出来る。ラウラを助けてやれる——私はお前を信じているぞ』

此処で織斑ではなく、“一夏”と呼んでくれるという事は、俺を、弟である俺を信じてくれる姉の信頼の証。

「任せてくれ、千冬姉。あいつの目を今覚まさしてやるさ」

世界一の称号を持つ姉に信頼される。これだけ心強い事はない。その信頼に応えなきゃな。

俺に必要なのは速度と鋭さ。素早く振り抜くだけ。

後は白式に任せる。ヘッドギアだけを斬り裂けるように。

——頼むぜ、相棒。

俺の想いに呼応するかのように白式の露出した内部装甲の発光が一際強くなっていく。

雪片式型を鞘に収めるような形で腰に添え、居合いの構えでラウラを見据える。

目を閉じ、呼吸を整え、意識を集中させる。

暗い闇の中、一筋の光が差し込むイメージを頭に描く。そのイメージをさらに細く、鋭く、尖らせていく。

勝負は一閃、御剣一刀流抜刀術で決める。

「お前の仮初の強さ、俺が一刀のもとに斬り伏せてみせるっ！」

迫るビット射撃にワイヤーブレードによる追撃を躲し、ラウラへと向かう。近づく俺を迎撃しようと近接ブレードを振り下ろすも、その斬撃は俺に届かない。

ラウラの斬撃を躲し、隙の出来たラウラの正面に迫る。

そのまま鞘から抜き放つかのようにその刃をラウラのヘッドギア目掛けて一閃。ラウラの仮初の強さを断ち切る。

白式の補助もあり、ラウラのヘッドギアは断ち切られ、ラウラの身を包んでいたISに紫電が走り、強制解除される。

空中に投げ出されるような形になったラウラをそのまま優しく抱き留める瞬間、ラウラと一瞬目が合った。その目はまるで捨てられた子犬のような眼差しに見え、愛情を欲しているかのような印象を受けた。

しかし、それも一瞬の事でラウラはそのまま目を閉じ、気を失う。

「・・・・・・・・千冬姉が教えたのはこんな強さじゃないんだぞ、ラウラ」

聞こえてるかも分からなかったが、俺はただそう呟いた。今度こそ強さをはき違えないように。

【ラウラ side】

『一つ忠告しておくぞ。あいつに会う事があれば、心を強く持て。あいつはまだ半人前ではあるが、妙に女を刺激する。油断していると惚れてしまうぞ?』

私が尊敬する教官の言葉。あの時はただただ許せなかった。鬼のように厳しくも凛々しい、私が尊敬する唯一無二の存在であり、私が追い求める理想の存在、織斑千冬。

憧れる存在である彼女が弟の事を語る時は妙に女という印象を受けてしまう。

だから織斑一夏という存在を許せなかった。

憧れの存在をも女にしてしまう織斑一夏という存在が。

しかし、IS学園に来て、対峙した織斑一夏という存在は私にとって強烈だった。

IS技術云々で言えば、大した事はないのだろうが、心の強さが違った。

そんな織斑一夏を慕うセシリア・オルコット。最初は下らん種馬に現を抜かす雌だと中傷した相手は私よりも強かった。

劣勢だった状況を跳ね除けるほどの心の強さ。私はそんな強さがある事を知らなかった。

先程まで私を包み込んでいた闇ももう感じない。

沈んでいた意識が浮き上がるかのように、私は重い瞼を開ける。

「よお。やっと目を覚ましたな」

声が出た方向に視線を向ければ、織斑一夏が椅子に腰かけていた。

「……どうして、お前がここにいる？ それにここは……」

「ん？ ここは医務室だ。俺がいるのは、まあ、その何だ。心配だったからな」

ははは、と照れ笑いを浮かべる織斑一夏。自分の存在を否定していた相手までも包み込む優しさに不思議と鬱陶しさを感じない。

「セシリアは強かったろ？」

「そうだな……。私の完敗だ。それに——お前も強かった」

「覚えてるのか？」

私が闇に支配された後の事はうる覚えながら覚えてる。私なのに私じゃない感覚。まるで目の前の出来事を映画のように客観的に見ていた自分。

「一応、さっきお前のISに起きた事は極秘事項なんだけどな。千冬姉が言うにはお前のISに暴走プログラムのようなのが組み込

まれてたらしいんだよ」

「暴走プログラム………？」

「ああ、誰も知らないような技術が使われてたらしいんだ。機体の蓄積ダメージ、そして操縦者の願望とかが発動条件になってたらしいんだよ」

「願望………つまり私自身の心の弱さが招いた惨事だったというわけか………」

強いと思っていた自分自身の心が弱かった故に招いてしまった暴走。悔しさにぎゅうつとシーツを握りしめた。

俯く私の頭に手がぼんと乗せられ、私の髪を優しく撫でていく。

突然の事に私は思考が停止する。こいつは何をしてるんだ？

「俺だって、まだまだ弱い。人間誰しも強いわけじゃねえんだしさ、そこはほら、一緒に強くなっていけばいいんじゃないか？　せっかくIS学園に来たんだ。時間はある。三年間という時間でどれだけ強くなれるかなんて分からないけどさ」

さらに私が強いといった織斑一夏は自分が弱いと言う。訳が分から

なかった。

「訳分らないって顔してるな。まあ、俺自身強いなんて自惚れちゃいないさ。上には上がいるしな……ははは……」

自嘲気味に笑う織斑一夏の顔が何故かおかしかった。だからだろう、ここにきて、いや、生を受けて初めてかもしれない、私はそんな織斑一夏の姿がおかしかった。

「ぷっ」

「おい、笑うなんてひどいじゃないか。仕方ないだろ。あの化け物じみた千冬姉がいるんだしさ」

「ふふ、笑って悪かったな。しかし、おかしくてな……くく」

「まあ、でもそうやって笑ってる方がいいよ。お前、可愛いんだし」

は？　可愛い？　誰が？

あまりの出来事に私はぽかんとしてしまう。

「ん？ 何かおかしい事言ったか、俺」

「か、か、か、可愛いつて、だ、だ、だ、誰が？」

「ラウラが」

ボン！ 顔が熱くなるのを感じる。こいつは何なのだ。馬鹿なのか？

「これから一緒に強くなっていこうぜ、ラウラ」

仲直りの握手とばかりに右手を差し出す織斑一夏の手をそっと握る。

胸の高鳴りが収まらない。何だ、これは？ 初めての感覚に教官の言葉を思い出す。

『油断していると惚れてしまうぞ？』

これがそうなのか？ そうだということのか？

「取り合えず、お前も目を覚ましたし、セシリアの様子も見に行かなきゃいけないから、ここらで退散するわ。ただ、全身に無理な負

荷がかかった事で筋肉疲労と打撲があるから暫くはまともに動けないだろうって事だ。だから、無理するなよ」

そう言って、織斑一夏は医務室から出て行く。

私はただただ呆然とそれを見送っていた。あまりの展開に脳の処理速度が追い付かない。

私はどうすればいいのだ？

こんな時に相談できる相手……そうだ、我が隊の副官ならば対処法が分かるかもしれない。

【クラリッサ side】

私の名前はクラリッサ・ハルフォーフ。ドイツのIS配備特殊部隊「シュヴァルツェ・ハーゼ」副隊長であり、階級は大尉である。

今日も愛しのラウラ隊長の写真（※遠くから撮影された盗撮写真）を愛でながら、執務処理に追われていた。

隊長は今頃、夕食を取っている時間だろうか、と想いを馳せながら午後の書類整理に取り掛かっている時だった。携帯端末から着信音が鳴り響く。

誰だ？　　と思い、着信画面を見ると、見ると、見るとおおおお
ー、ラウラ隊長からであった。

すぐさま姿勢を正し、咳払いをし、声の調子確かめる。

ん！　　んん！　　あー、あー、よし！

『ク、クラリツサ、クラリツサ・ハルフォーフ大尉。聞こえるか？
ラ、ラウラ・ボーデヴィツヒだ』

「こちらクラリツサ・ハルフォーフ大尉、受諾しました。ラウラ・
ボーデヴィツヒ隊長、如何なさいましたか？」

気のせいか、隊長の声が上擦っているかのように感じる。どうした
のだ？

あの冷たい殺気を放つかのような隊長の雰囲気^{つわもの}が微塵も感じられな
い。

『そ、そのだな．．．．．　　気、気になる異性がで、できた場合、
どうすればいい？』

は？　　気になる異性？　　あの誰をも寄せ付けない冷たさを持つあの
隊長を落とした兵^{つわもの}がいるというのか？

「誰か気になる異性でもできたのでしょうか？　しかし隊長が通う
IS 学園に男は——」

言いかけて思い出す、世界でただ一人の男性 IS 操縦者の事を。

「織斑一夏……ですか？」

『はうっ！』

B I N G O ☆

しかし、隊長は織斑一夏を敵視していた筈では……？

『隊長、先ずは状況把握をしない事には何も始まりません。状況を
一から事細かに、一語一句違わずにお願いできませんか？』

「う、うむ。そ、それもそうだな……」

——状況説明中——

『なるほど。状況を把握いたしました。つまり隊長は織斑一夏を好
きになってしまった、そういう事ですね？』

『うっ、う、うむ』

何？ この可愛い生き物。今までの厳格な隊長のイメージがガラガラと音を立て崩れていく。そして再構築されていく。

も、萌ええええええー！

今、私の胸は早鐘のようにドクンドクンと心臓の鼓動が早くなるのを感じる。気を抜けば気絶してしまいそうな萌えシチュエーション☆

『分かりました、隊長。このクラリッサ・ハルフォーフ、我が命を賭してでも隊長の願いを成就させるつもりです。では、先ず――』

そして私が知る限りの萌え知識を隊長に伝授していった。

『すまなかったな、クラリッサ・ハルフォーフ大尉。これから頼りにさせてもらうぞ』

そして通話は終了する。

コンコン。

クラリツサの執務室のドアをノックする音。

「ハルフォーフ大尉、失礼します。ここの書類の事で相談が——
って、大尉!？」

ノックの後、返答が無かったため、しばらく悩んだが急ぎの用事と
いう事もあり、声を掛けドアを開ける「シュヴァルツェ・ハーゼ」
隊員が目にしたのは、鼻血を流しながら気絶しているクラリツサの
姿であった。……。

Episode 22.. 決着! (後書き)

※ちなみにラウラの変形したシュヴァルツエア・レーゲンのイメージは量産型キュベレイです。あれを角ばった感じでイメージしても
らえれば。

Episode 23..それぞれの大事な存在（前書き）

本当は昨日のうちに書き上げてたんですが、修正をしてたら更新が遅くなってしまいました。

でも、その分、話は長くなりました。

シャルロットが痴女になってる気もしますが.....気にしない方は読んでみて下さい。

Episode 23..それぞれの大事な存在

【千冬side】

今回のセシリアとラウラとの戦闘で起きた異常事態。

『スタートアップ・フィッティング初期操縦者適応』と『フォーム・シフト形態移行』のどちらでもない形状変化をしたラウラのシュヴァルツェア・レーゲン。

解析した結果、その原因となったシステムが見付かった。――ヴァルキリー・トランス・システム。聞いた事もないシステムだ。

直ぐにシュヴァルツェア・レーゲンを開発したドイツの研究機関を問い詰めたが、向こうはそのようなシステムを組み込んだ覚えがないという。勿論、嘘を付いてるのかもしれないと探りも入れてみたが、どうやら向こうは本当に知らないとの事であった。

ここで考えられるのは、前回の無人機襲撃の件も含め、アイツしか思い浮かばない。

1人でISの基礎理論を考案、実証し、全てのISのコアを造った自他共に認める「天才」科学者。ISを開発したことから政府の監視下に置かれていたが、3年前に突如行方をくらませるものの、アイツの連絡手段は知っている。

連絡を取ろうと思えば、取れるのだが……アイツのペースには基本的についていけない。話すのも億劫なのだが、今はそうも

言っていられないか……。

携帯端末からアイツの番号を検索し、通話ボタンを押す。

ぱらりろぱらりらぺろ♪ ゴッド・ファーザーのテーマが暫く鳴り響いた後、アイツの声が聞こえてきた。

『も、もすもす？ 終日？』
ひねもす

「……………」

ぷつつ。どうやら電話する相手を間違えたようだ。

通話を切った直後、慌てたかのようにアイツから着信が来る。

「ふざけるのも大概にしろ」

『もう！ つれないよ、ちーちゃん！』

「その名で呼ぶな」

『おっけい、ちーちゃん！』

コイツには日本語が通じないのか、会話が成立しない。やれやれ頭が痛くなってきた……。

私と篠ノ之束、その出会いは小学生の頃から始まる。以来ずっと同じ学校同じクラスだった。もちろん束がそう仕組んでいたのだが。

そして高校生の時に束はISを発表し、以降数年間はIS開発に操縦者として私も協力してきた。誰よりも早い時期からISに慣れ親しんだおかげで他の操縦者に比べ、ISに対する理解力は束に次いで深い。だからこそ、第一回IS世界大会『モンド・グロッソ』で優勝するのも必然であったと言える。

「……………はあ。まあいい。今日は聞きたいことがある」

『ヴァルキリー・トランス・システムのことかな？』

「っ！？ お前、何故それを……………？」

『ふふふ、ちーちゃん。私を舐めないでほしいな。私は全てのISのコアを造った完璧にして十全な篠ノ之束だよ？ もちろん、事態は把握してるよ』

どうやら、ISに関わるものに関して、何処かでモニターしてるのかもしれない、束は既に事態を把握していた。

「…………お前は今回の件に一枚噛んでるのか？」

『うふふ、あんな不細工なシロモノ、この束さんが作ると思う？——ちーちゃんも気付いてるんじゃないかな？』

「奴らか？」

奴ら。——亡国企業。ファントム・タスク裏の世界で暗躍する秘密結社であり、組織の目的や存在理由、規模などの詳細が一切不明の謎が多い組織。一夏の誘拐事件に関わっていた事も既に調べがついている。私にとって忌むべき存在である。

『最近、私の近辺を嗅ぎ回ってるみたいなんだよねえ』

「…………奴らの狙いはやはり……………」

『うん、いっくんだろうねえ』

奴らは何故、一夏を狙うのか未だに理由は分からないが、一夏を狙うというのなら、この私が全力を持って斬り伏せるっ！

『もちろん、この束さんも奴らにいくんを渡すつもりはないから』

篠ノ之束が心を開く相手は少ない。妹の箒と私、そして一夏だけだ。束にとっても一夏は大事な存在である。たまに一夏を見る目が獲物を狙う獣の目に見えるから、あの姉妹は私にとって敵でもあるのだ。がな。ふふふ、私の目が黒い内は一夏は誰にも渡さん。

「まあいい。何か分かったら直ぐに教えろ」

「了解だよ、ちーちゃん！」

◇◇*◇*◇*◇*◇*

【一夏side】

時間はラウラとの決闘から既に二時間以上は経過していた。ベッドの上では打撲の治療を受けて包帯を巻いたセシリアがおり、その周りには箒、鈴、シャルロットがいた。

ラウラとは別々にといい配慮からか、セシリアは保健室にいた。

保健室のドアを開けた俺に突き刺さるのは四人の視線。世間一般的に言うところのジト目というやつだ。

「……………どこにいましたの？」

「え？　えっと、ラウラの様子を見に……………」

セシリアはむすっと頬を膨らませ、そっぽ向く。まあ、何というか……………怪我人である自分を放っておいたのが気に障ったのか？

でも、先程の戦場でラウラを医務室に運んで、すぐにセシリアのもとに駆け付けた時は凄くうれしそうな顔してたのに。ちょっと席を外したら、この状況だ。

「ええ、ええ、そうでしょうとも。妻であるわたくしをほったらかしにして余所の女に手を出すのですね」

「えっと……………セシリアさん？」

「これが俗にいう倦怠期というやつですね……………」

よよよと泣き真似をするセシリア。いや、そもそもまだ付き合っていないし．．．．．。でも、その言葉を発すれば、余計に事態が混乱するのが分かるので黙っておこう。

「この女誑しめ」

箒さん、誑し込んだ記憶はないよ？

「浮気？　ねえ、浮気？」

俺の裾を掴んで、レイプ目で浮気かどうかを問いただす鈴さん。浮気も何もまだ俺達の関係は幼馴染の筈だが？

「．．．．．ふふふ、一夏。今後、浮気しないように調教しなきゃね。一夏は僕物だって証明しなきゃ．．．．．ふふふ」

シャルロットさんの表情には陰が差しており、ぶつぶつ何かを言っている。うん、聞こえない聞こえない。

ドドドドドツ．．．．．！

何だ？　何の音だ？

地鳴りのように聞こえる音が廊下から響いてきている。しかもだんだんと近付いてきているように思えるのは気のせいだろうか？

バアーーン！ と豪快に保健室のドアが吹き飛ぶ。

「織斑君！」

「デュノア君！」

豪快に保健室のドアを吹き飛ばし、雪崩れ込んできたのは、清香さん他数十名の女子生徒達。しかもその視線は獲物を狩るハンターのように鋭い。

そんなハンター達は俺とシャルロットを逃がさないとばかりに回り込んでくる。

「な、な、なんだなんだ！？」

「ど、どうしたの、みんな……ちょ、ちょっと落ち着いて」

状況が飲み込めない俺達を逃がさないとばかりに距離を詰めてくる。そして困惑してる俺とシャルロットに全員がある一枚の紙を差し出してくる。

「」「これ！」「」

差し出された紙を一枚手に取り、見てみる。

「えっと……」 『今月開催される学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦を行うため、二人一組での参加を必須とする。ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする——』

「ああ、そこまででいいから！ とにかくっ！ 一夏君は私と組んでっ！」

そう言って、俺に手を差し伸べてきたのは清香さんだ。つい最近、名前で呼び合う事になったんだが。いつも俺を見る視線に殺気めいたものを感じるんだよな、何故か…… ははは。

「ずーるーいー。織斑君は私と組むの！」

そんな清香さんの行動に触発されたのか他の女子数名も俺に手を差し伸べてくる。

「じゃあ、デュノア君は私が――」

「何ですよ！ デュノア君は私と組むんだよっ」

ふと視線を横に向けるとシャルロットもどう対応していいのかわからず、困惑してる。実際、シャルロットはまだ男装をしてるわけで、女の子だというのは俺しか知らない。

だから事情を知らない女子達はこの機会に、より親密になろうとしてるのか、シャルロットにペアを組むように言い寄っている。

「え、えっと……………」

シャルロットは困ったような視線を俺に向けてくる。ふむ、確かに事情を知らない俺以外とペアを組むのはマズイよな。何かの拍子で女の子だという事がバレてしまうかもしれないし。

「みんな、ごめん。俺はシャルロッ……………、じゃなくて、シャルルと組むから諦めてくれ！」

やっぱり、シャルロットの事情を考えると、シャルロットとペアを組むのは俺の方がいいだろう。皆にも聞こえるように出来るだけ大きな声で宣言した。

しーしーん……………。

一瞬の静寂。

「まあ、そういう事なら……………」

「他の女子と組まれるよりはいいし……………」

「……………くっ！ 密かに二人っきりの練習の後……………アリーナ備え付けのシャワールームで汗を流す一夏君に、偶然を装って突撃する作戦があああ……………」

おいおい。最後の台詞は誰だ？

取り合えず事態は收拾する事ができたようで、落ち着きを取り戻した女子達は退散していく。最後まで俺に対して視線を送る清香さんの雰囲気は鬼気迫るものがあつたが……………。

「あ、あの、一夏——」

「「一夏（様）っ！」「」」

他の女子達が皆いなくなったところでシャルロットが声を掛けようとしたところで、箒にセシリア、鈴が俺に詰め寄ってくる。

「一夏っ！ 何故、私と組まないのだ!？」

「あ、あたしと組みなさいよ！ 幼馴染でしょうが！」

「妻であるわたくしを差し置いて、どういう事ですか!？」

ちなみにセシリアは怪我人のはずじゃないのか？ それにISの損傷もひどそうだし、そもそも学年別トーナメントに出れるとは思えないんだが？

「そもそもセシリアは無理なんじゃ……?」

「大丈夫ですよ」

俺の疑問に答えたのはセシリアではなく、山田先生だった。いつの間保健室に来たんだ？

「織斑君も言ってたように、セシリアさんのISの状態はひどかつ

たのですが、トーナメントまでには修復も完了するでしょうから参加できますよ。だから――」

「それなら何も問題はありませんわよね？　一夏様」

山田先生の言葉を遮るかのようにずっと顔を近づけてくるセシリアの甘い香りに一瞬、トリップしそうになる……………。

「ちょっと待ちなさいよ、あんた！　一夏はあたしと組むの！」

「ふん、馬鹿も休み休み言え。一夏と組むのは一番最初の幼馴染でもある、この私だっ！」

むうー！　といった感じで三人は視線で互いを威嚇し合う。

こんな混沌とした状況を収めるのは教師である山田先生しかない！

山田先生、ヘルプッ！

「シクシク……………。いいんですよ、いいんですよ、どうせ誰も私の話を聞いてくれないんだ……………」

ちよっとおおおおおー！

唯一、この場を収めなきゃいけない教師が床にへたり込んで、の字を書いてるんですかあああーっ！

確かに山田先生は守ってあげたくなるような存在だけでも！

今は俺を守ってエエエエエーっ！

「セシリアも箒も鈴も落ち着け、な。ここは男同士、シャルルと・
・・・」

「「あ？」」

ひい！ な、な、なんなんだ、あの人を視線だけでも殺せるような目付きは！？

「一夏は僕と組むんだよ！」

シャルロットも参戦。いやいや、少しは落ち着け。っていうか落ち着いてください。頼むから。

そこから全員を落ち着かせるのに一時間以上もかかり、結局同性同士なら仕方ないという事でシャルロットとペアを組む事になった。まあ、他の三人もまさかシャルロットが女の子っていうのは知らないからな。

◇◇*◇*◇*◇*◇*

【シャルロットside】

あれから四人で夕食を取った後、一夏と僕は自室に戻って、くつろいでいた。

結局、一夏のペアは僕という事で決まった。揉めに揉めたけど・・・。一応、同性という事で納得してもらったのだ。実際は女の子なんだけどさ・・・。

あの三人を騙してるような気がして、心が苦しかった。

「はあ・・・。」

「どうした？ シャルロット」

つい、溜息が口から洩れてしまった。一夏が僕を心配してくれる。

「うん、あのね。篠ノ之さんやオルコットさんに凰さんを騙してるような気がして……さ。でも、一夏が保健室で助けてくれたのは本当に嬉しかった。ありがとう」

あの三人を思うと、心苦しいのも確かだけど、一夏とペアになれたのは本当に嬉しかった。だから笑顔を浮かべ、一夏に感謝の意を告げる。

「おう。まあ気にするな。事情を知ってるのは今のところ、俺だけだし、サポートするのは当然だろ」

そう、僕が女の子であるという事はまだ一夏しか知らない。でも、僕は心の中で決めている。この学年別トーナメントが終わって落ち着いたら、事情を話すつもりだ。

もしかしたら、もうここにいらなくなるかもしれない。

ここにいらなくなるという事は一夏の傍にいらなくなる。そんな事を考えると、心が張り裂けそうになる。

「ぐす……」

「へ？ シャルロット？」

一夏の傍にいられない、と考えて、つい涙ぐんでしまった。そんな僕を見て、一夏がわたわたしてる。

「あ、ごめん。ごめんね。何でもないんだ」

「そうなのか？ 何かあるなら何でも言えよ。ほら、前にも言ったろ？ お前は俺が守ってやるって」

心臓の鼓動が早くなるのを感じる。照れ笑いを浮かべながらも僕を守ってくれると約束する一夏。

今日の管制室での織斑先生とのやり取りでも僕を”大事な存在”と言ってくれた。あの言葉を聞いた瞬間、頭が真っ白になった。まあ、篠ノ之さんやオルコットさんに凰さん”も”って事だったけど。

でも、想い人に大事な存在と言われるのは嬉しい。だから愛おしくなる。

一夏が欲しい。

一夏の全てが欲しい。

「じゃあ……………あのね、一夏……………お願いがあるんだけど……………」

「おう！ 何でも言えよ」

「い、一夏に、その……、だ、だ、抱い……」

うううー、うまく言葉が紡げない。前は勢いに乗じて迫る事ができたけど……やっぱり恥ずかしい。

「どうした？」

「ううん、何でもない……何でもないよ……ははは……」

僕のバカアアアー！

抱いてほしいのに、勇気が出ない。

「何かお願いがあったんじゃないのか？ 何かあるなら遠慮なく言っているぞ？」

「ほ、本当に？ 本当に、本当に？」

「あ、ああ・・・・・・・・」

でも、いざ言葉にするのは恥ずかしい。そもそも女の子から「抱いてほしい」というのは、はしたない女の子と思われてしまいそうな気がする。

でも、もしかしたら今後、離れ離れになるかもしれない。

一夏に触れる事ができなくなるかもしれない。

なら、せめて一夏のものでいいから、何か欲しい。

そんな事を考えてた僕はおかしかったのかもしれない。つい言ってしまった。

「あのね、一夏。僕、一夏のシャツが欲しい・・・・・・・・」

「へ？ 俺のシャツ？」

「・・・・・・・・ うん」

「何でまた、そんなものを？」

「あの、ね。うっかり寝間着とか全部、洗濯しちゃって・・・・・・・・」

ダメかな？」

「いや、構わないが……替えもいくつかあるしな。一着でいいのか？」

そういつて、クローゼットからシャツを取り出す一夏。

「じゃあ、二着で！」

今、着る用と替え用で二着だ。

「分かった。ほら」

クローゼットからシャツを取り出し、僕に手渡してくれた。受け取る際にそのシャツから一夏の匂いがする。

「ありがとう、一夏。えへへ」

「まあ、そんなものでよければ。じゃあ、そろそろ着替えて寝るか」

僕と一夏はまだ制服を着たままだ。だから寝る為には着替える必要

がある。

「じゃあ、俺、外に出てるな」

「え？ どうして？」

「いや、だって俺がいたら着替えられないだろ？ 仮にも男と女なんだし」

「気にしないでいいよ。一夏に悪いし……その……僕には気にしないから……。それに、男同士なのに着替え中に部屋の外に出たりしたら、変に思われちゃうでしょ？」

「それは確かに……。なら、洗面所で――」

「だから、そんなに気にしなくてもいいってば。ほら、普通にしておて。一夏も着替えなないといけないでしょ？ ね」

着替えるのに出て行こうとする一夏を何とか説き伏せるのに成功。女の子って意識してもらうのは嬉しいけど、やっぱり一夏に抱いてほしいと思う。

ただ、女の僕から言うのは、どうしても恥ずかしいので襲えるよう

な状況を作り、一夏から迫ってもらう。名付けて、ロストバージン大作戦。まあ、そのまんまな気もするけど、そこは気にしないで。

「じゃあ、俺も着替える事にするよ」

「うん！」

一夏が制服を脱いで半裸になる。その姿をじーっと見てしまう。やっぱ一夏は日々トレーニングをしてるだけあって、引き締まった体をしてる。………つつい、涎が………。

「どうした？」

「へ？ な、な、な、何でもないよ」

「俺の勘違いだったら悪いんだが、もしかして、こっちを見てないか？」

ドキッ！ 一夏の言葉に僕の心臓は跳ね上がるかのように、心音を大きくしていく。

どきどきどきどき………。

「そ、そんな事はないよ!？」

「そ、そうか」

一夏に変な女と思われぬように全力で否定する。

そんなやり取りをしながら、僕も制服を脱いで、今は下着だけしか身に着けてない。高鳴る胸を抑え、一夏のシャツを手取る。確か、日本では裸の上にシャツを羽織った方がいいんだよね？

取り合えず、僕は寝る時はブラはいつも外してるので、今日もブラを外し、シャツを羽織る。

やっぱり男の子だ。羽織ったシャツのサイズが大きいせいか、ぶかぶかだ。ボタンは真ん中のボタンだけでもいいかな。その方が一夏もドキドキしてくれるかもしれないし。

さて、問題は下の方だ。脱いだ方がいいのだろうか？ シャツが大きいせいで、動かなければ隠れるけど……。

「おーい、着替えは終わったか？」

「ひゃい!？ う、うん。終わったよ……。」

下はさすがに脱げなかった。でも、する事になったら、脱いじゃえばいいんだから問題ないよね。

くるっと後ろを振り向くと、寝間着に着替えた一夏がいた。

「シャル、ロツ、ト．．．．．」

今の僕の姿は下着は下だけで、一夏のシャツを羽織り、真ん中のボタンだけを留めてるような状態だ。

「どうしたの？ 一夏」

「い、いやっ、何でもない、何でもないぞ」

激しく狼狽する一夏の声に、僕は嬉しさが込み上げてくる。だって、一夏が僕に女を感じてくれるから。

「本当に？」

ずいっと一夏に迫る。

「見えちゃう！ 見えちゃうから！」

見える？ ふと、下を見れば、大きく開いた胸元。

「一夏のえっち」

まあ、一夏が見たいって言えば、見せるつもりだけど．．．．．
やっぱり男の方から迫ってほしいと思うのは女の性だ。

「仕方ないだろ！ あーもう、ボタンは全て留めなさい！」

そう言って、シャツのボタンを全て留めていく一夏。

「えーー」

「えーー、じゃない！」

一夏は襲うどころか、僕のシャツのボタンを全て留めてしまった。

むすつと頬を膨らませる僕を尻目に「ほら寝るぞ」と一夏はさつさとベッドに潜り込んでしまった。

今日の作戦はどうやら失敗らしい。でも、いいんだ。同室だから、

まだチャンスはあるはず。そう思いながら僕もベッドに潜り込む。

「おやすみ、一夏……」

一夏の匂いのするシャツに身を包まれ、悶絶しながら、僕は長い長い夜を過ごしたのだった。

Episode 23..それぞれの大事な存在（後書き）

学年別トーナメント、一夏は原作通り、シャルロットと組みますが、それ以外は全員変えるつもりです。

誰と誰が組むのか予想してみてください。

次回以降で明らかにするつもりです。

Episode 24 :: 関白宣言 (前書き)

仕事が忙しく、なかなか更新できませんでした。

待っていてくれた方々、申し訳ないです。

ちなみに今回の表現・・・セーフ・・・だよね？

Episode 24：関白宣言

【二夏side】

「そ、それは本当ですよ!？」

「う、嘘ついてないでしょうね!？」

セシリアとラウラの決闘から明けて、月曜の朝、教室に向かっていた俺とシャルロットは廊下にまで聞こえる声に目を瞬かせる。

「何かあったのか？」

「さあ？」

取り合えず、教室にまで行けば、騒ぎの原因が分かるかな、と扉に手を掛けた時に聞こえてきた言葉に俺の表情は固まった。

「本当だってば! この噂、学園中で持ちきりなのよ? 月末の学年別トーナメントで優勝したら織斑君の貞操を捧げてもらった上に交際できるって」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

なんだ、その噂あああああつ！

頭を抱え、しゃがみ込む俺に赤面するシャルロット。

「そ、そうなんだ……。ゆ、優勝したら、一夏と……」

ふと見られてるかのような感覚を覚え、視線を上にと上げると獲物を狙うかのようなシャルロットの視線。

ひいっ！ 表情は笑顔そのものだが目が笑ってない。獲物を狙う^{ハンター}狩者の目をしている。

「どうしたの、一夏？ 早く教室に入ろうよ」

ニコニコ笑顔のシャルロットに若干恐怖しながらも教室に入ると、全員が俺をロックオンしたかのように視線を向ける。いや、一人だけ机に突っ伏してるのがいるな。箒か………。

あれか？ 前に言われた箒の「抱いてほしい」宣言が原因なのか？

確かにあの時の声は大きかったからなあ、聞かれても不思議じゃないが。もしかして、ここ最近、明らかに視線を感じる事が多くなったのは、それが原因だったのか？

取り合えず、いつまでも教室の扉の前でへたり込んでいるわけにはいかない。

いつその事、これを機に童貞卒業………。いや、このままでは初体験が襲われる形で迎えてしまう。それだけは避けたい。

やっぱり、初めての○○○は、思い出にも残るものだし、俺も女体を堪能したい！

そもそもこういうのは男がリードするものじゃないのか！

奪われるのではなく、奪いたいのだっ！ 純潔をつ！

やはり日本男子たるもの女性の尻に敷かれるわけにはいかないからな。

よし、ここは俺が優勝すれば、問題ないわけだ。うん、そう考えた

ら気が楽になってきた。

俺の貞操を守る為に！

そして、純潔を奪うその日まで！

俺は、俺はあ、我が貞操のためにも負けるわけにはいかないのだっ！

「……………えっと、一夏？ 教室に入らないの？」

はっ！ ついつい、いつものように夢の世界へトリップしちゃった
ぜ☆

「ははは、俺は負けないぜ。勝ち続けてみせるっ！」

「…………ペアが僕だって事、忘れてるのかな？ まあ、優勝したら
一夏の初めては僕のもの…………ふふふ…………」

「何か言ったか？」

「う、ううん、なんでもない。なんでもないよ。あははは」

俺の言葉に慌てたように反応するシャルロットを横目に教室の扉に

手を掛ける。

ガラッ！ 教室の扉を開くと一斉に俺に集まる視線、視線、視線。

「あ、い、一夏。おはよ。じゃ、じゃあ、あたし、自分のクラスに戻るから！」

「そ、そうですわね！ わたくしも自分の席につきませんと。おほほほ」

俺に噂の話を悟られないように装う鈴にセシリア、そして他の女子も余所余所しい様子で自分のクラス・席に戻っていかうとする。

ふふふ、俺が知らないとも思ってるのだろうが、お前達の目論見は全て白日の下に晒されているのだ。

それに俺は負けない。今月末の学年別トーナメント、必ず優勝してみせるっ！

そんな決意を胸に俺も自分の席につこうとした瞬間、教室に新たな訪問者が現れた。ラウラ・ボーデヴィツヒだ。

「よう、ラウラ。もう怪我はいいのか？」

「う、うむ、問題ない」

俺の挨拶に赤面しながらも返答を返してくれるラウラ。転校初日に比べれば、大分馴染みやすい印象を受ける。

そして、とことこ俺の席まで歩いてくる。俄然、表情は赤いままだが……。風邪でもひいたのだろうか？

「……………織斑、一夏」

「ん？ どした？」

何かを言い淀んでるかのように俺の前でモジモジしてるラウラ。いつもの軍人といった雰囲気は全く無く、年頃の女子みたいな感じを受ける。

しかし何かを決意したかのように目を見開き、声を張り上げる。

「織斑一夏！」

「お、おう？」

突然大きな声を上げるもんだから、一瞬身構えてしまう。そして教室中にいる女子達が俺とラウラを凝視してるみたいで、物凄い視線

を感じる。

しかしそんな事はお構いなしのように、目の前のラウラにいきなり胸ぐらを掴まれ、ぐいっと引き寄せられ、――唇を奪われた。

「!?!?!?!?!」

突然の事で何が起こったのか理解できなかった。

いきなり唇を割って入ろうとしてくるラウラの舌が俺の舌に絡ませてくる。俺の唇を舐めるように舌を這わせ、俺の舌を舐めるかのよう
に舌を絡ませてくるのだ。これには俺も思考が停止してしまう。

「う……………んむう……………」

ただただ熱心にラウラは俺の唇を堪能するかのよう。

俺のファーストキスは唇を合わせるだけのキスではなく、舌と舌を絡ませる大人のキスになってしまった。

ついさっきまで貞操を奪われないように、と思ったのに……………
さっそく奪われてしまった……………。

でも、これが大人のキスか……………気持ちいいな、これ。その
気持ちよさに身も心も蕩けてしまいそうになる。そして唇を離すと
透明な糸状なものが見えた。

これって何かいやらしいな、という考えを浮かべながらも惚ける俺とラウラを、箒に鈴、セシリア、シャルロット、そして教室にいた女子全員がただ呆然と信じられないものを見たといった感じに固まっていた。

「ふむ、これがクラリッサの言う誓いの口づけか。いいものだな」

「え、えっと、ラ、ラウラ．．．．．さん？」

「織斑一夏、お前の存在を私は認める。今の口づけは誓いの口づけだ！ お、お前を私の嫁にする！ これは決定事項だ！ 異論は認めん！」

「へ？ ．．．．．嫁？」

色々つつこみたい事があるが、突然の出来事に俺の口がうまく動かない。

「日本では気に入った相手を『嫁にする』というのが一般的な習わしだと聞いた。故に、お前を私の嫁にする」

ビシッ！ と俺を指さしながら得意気に宣言するラウラ。

何かえっへん！　　というかのように胸を張ってるが、それ間違ってるぞ？

「そしてセシリア・オルコット！」

「へ？　　あ、はい！」

セシリアも混乱してるようで、思考が上手く回らないのだろう。返事がたどたどしい。

「この前の非礼を謝罪したい。すまなかった」

そう言って頭を下げるラウラにセシリアも戸惑っているようだ。

「それはもういいのですけど．．．．．」

「セシリア・オルコット。お前は強かった。これから一緒に強くなっていきたい」

「それは構わないのですけど．．．．．いえ、そんな事よりも――」

セシリアが何かを言おうとした瞬間、鈴が我慢しきれなかったのだろう。――吠えた。

「あっ、あっ、あ．．．．．！ アンタねえええっ！」

鈴は顔を真っ赤にして怒りを露わにしていた。しかもその怒りの矛先は俺のようで、俺に向かってきた。これは俺の死亡フラグだろうか？

でも、このままむざむざ殺されたくはない。しかも今回の件はどっちかというと、俺は被害者サイドなのだ。

「ま、待て！ 俺は悪くない！ どちらかというと被害者――むぐっ！？」

ダンッ！ と机を蹴り、俺にダイブするかのように突撃してきた鈴だが何を思ったか、そのまま抱き着き、唇を重ねてきた。

「!?!?!?!?!」

しかもラウラ同様、大人のキスだ。唇をこじ開け、舌を差し込んでくる。

「んむっ．．．．．ん．．．．．はふ．．．．．」

くちやぴちやと唾液を交わらせ、俺の唇を味わうかのように唇を這わせてくる。その様子に原因を作ったラウラも固まった。そして唇を離すと、顔を真っ赤にしながらも鈴はラウラに視線を向け、勝ち誇ったかのように指さす。

「ふふん、一夏はあたしのものよ」

「ほほう？」

ピキピキとラウラのこめかみに青筋が浮かんでののが見える。

鈴はラウラに堂々と宣戦布告する。そして二人がお互いに牽制し合っている中、俺は肩を叩かれたので振り向くと―――殺意の波動に目覚めてる筈、セシリア、シャルロットに、他の女子達に囲まれていた。

「あの、俺はあくまで．．．．．被害者．．．．．は、ははは．．．．．」

．．．．．

・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・

・
・
・

その後、箒には恨み言を呟かれながら首を絞められ、セシリアからは往復ビンタに説教の嵐、シャルロットには「今晚は寝かさないからね、ふふふ」と恐ろしい事を告げられる始末。

クラスメイトにも詰め寄られる事になり、ショートホームルームSHRが始まる頃には精根尽き果てたかのように机に突っ伏してるところを千冬姉の出席簿アタックを見舞われる、という散々な一日になったのだった。

◇◇*◇*◇*◇*◇*◇*◇*

【清香side】

くうー、また恋敵^{ライバル}が増えたー！

名前で呼び合えるのを喜んでいたのが遠い昔のように感じるわ。

一夏君の唇が、唇がああーっ！

ボーデヴィツヒさんに凰さんにまで奪われるなんてエエエーっ！

でもでも、確かにキスという前菜^{オードブル}は奪われてしまったけど、まだ一夏君との○○○という主菜^{メインディッシュ}が奪われたわけじゃないっ。

諦めるにはまだ早いわ、清香。

フアイト、清香っ！

でも、学年別トーナメントを優勝しなきゃいけないというハードルの高い条件を如何にクリアするか、問題はこれに絞られる。

これまで私は時間の許す限り、ISの個人特訓をしているが、やはり個人では限界がある。

学年別トーナメントを優勝するためにも専用機持ちと組んだ方が断然、有利なのは目に見えて明らかなのだ。

そこで重要になってくるのがペアを組む相手。

ちなみに私が狙っているのはボーデヴィツヒさんだったりする。

この前の試合を見て思ったのだが、勝負には負けたが、セシリアとはそこまで差があるとは思えないし、何しろ軍人さんだ。強くなるための特訓とかに詳しいはず。

だから私が狙うのはボーデヴィツヒさん。

私の生涯の恋敵ライバルののほほんさんこと布仏本音は当てがあるらしく、放課後のHRホームルームが終わるや否や早々に教室を出て行った。

誰を連れてくるか分からないけど、ボーデヴィツヒさんと組めれば問題はないはず！

さてさて、ボーデヴィツヒさんはどこにいるかなあつきよろきよろと教室内を見渡すと自分の席にいるボーデヴィツヒさんを見付ける。

「おーーい、ボーデヴィツヒさあーん」

「ん？　なんだ？」

私の存在に気付き視線を向けてくる。

「私の名前は相川清香。ボーデヴィツヒさん、まだトーナメントに出るためのペア、決まってないよね？」

「うむ、まだ決めていないが」

「単刀直入に言うね。私と組んでほしいの」

「ふむ。何故、私と？」

「私ね、まだISに乗り始めて間もないんだけど、今度のトーナメントは絶対に優勝したいの。その為にもボーデヴィツヒさんにいるISの事を教えてほしいし、ボーデヴィツヒさんとなら優勝も可能だと思うの」

「ほう？　しかし、それならセシリアもいるじゃないか」

「確かにセシリアもいるけど、私はボーデヴィツヒさんに教えてもらった方が強くなれると思うんだ。ボーデヴィツヒさんとはまだ知り合って間もないけど、ISに対する姿勢とか考え方は勉強になると思うから」

釣り上げた魚を逃がさないように、視線は真剣に、心は下心満載に、私は熱く語る。

「ふむ。そこまで言われるとな．．．．．」

よし！ 後もうひと押しだ！

「お願い！ ボーデヴィツヒさん。私と組んで優勝を目指そう！」

「ふむ．．．．．まあ、いいだろう．．．．．。但し、トーナメントまでそう日数も残っていないだろう？ 特訓は厳しくやるが、それでもいいんだな？」

「望むところ！」

全ては一夏君との〇〇〇のため！

そして握手を交わす私とボーデヴィツヒさん。

「私の事はラウラでいい。これからよろしく頼む」

「私の事も清香でいいよ。これからよろしくね」

ここに無敵の龍、相川清香とドイツ代表候補生ラウラ・ボーデヴィツヒのペアが誕生したのであった。

Episode 25.. ラウラと愉快な仲間たち (前書き)

変態は書きやすい。

自重という言葉は自分の辞書にはありません。

Episode 25.. ラウラと愉快な仲間たち

【クラリツサ side】

ある日の昼下がり。私、クラリツサ・ハルフォーフはドイツのIS配備特殊部隊「シュヴァルツェ・ハーゼ」に与えられた部屋で隊員全員とISデータをまとめていた。

ドイツは欧州連合の統合防衛計画『イグニッション・プラン』に参加しており、国防という名目のもと、第三世代型ISの実用化に向けて躍起となっているのだ。

現在の主力ISとして、日本が開発した打鉄、そしてフランスのデュノア社が開発したラファール・リヴァイブ等があるが、そのどれもが第二世代型である。

今やISは世界で最も性能の高い主力兵器となる。

第三世代型の開発・実用化を果たした国は未だに存在しないが、もしもこれが実現すれば、それだけで他の国に対して、アドバンテージが取れる。

世間的には平等を謳っても、国のお偉方はその心の内は自国が世界の中で一番を取る事しか考えていない。

まあ、私も愛国心というやつか、ドイツで生を受けた以上、ドイツが世界のトップの国となる事を望んでいたたりもする。

それに、そのお蔭で隊長のような存在が誕生する事になったのだ。

「シュヴァルツェ・ハーゼ」、ドイツでも精鋭中の精鋭のみが所属を許されるIS配備特殊部隊。私は自身の成績と優秀さで副隊長という座に就いている。そして私は出逢ったのだ。

運命の出逢い？ そんな陳腐な言葉だけでは言い表せない出逢いを果たしたのだ。

ラウラ・ボーデヴィツヒ、煌めく銀髪をたなびかせるオッドアイの少女を一目見た瞬間、私は言葉を無くし、髪は逆立ち、涙し、そして鼻から純潔Ⅱ赤いものを垂れ流した。

ああ、神よ。私はあなたに感謝する。愛すべき存在を見付けられたこの幸運に私は身を震わせた。

私の中での隊長は強く、美しく、愛らしく。

常識を知らない、強さだけを追い求める様な人だった。

そんな隊長が遠い異国の地で恋に落ちた。

初めての経験に電話越しにあたふたしながらも一生懸命に私に助言を求めるラウラ隊長。

可愛かった。

近くにいたら、きっと襲ってしまっていただろう。振り返ちにされと思うが。

それでもよかった。それくらいにあの時の隊長は可愛かったのだ。
だから私は全力で隊長を支援する。

私の心をこうまで驚掴みにして離さない隊長が憎い。そして愛おしい。相反する二つの感情に私の鼻は限界知らずのように純潔を撒き散らす。

「ハルフォーフ大尉、純潔が垂れてます……………」

「む？ すまない。エルゼ中尉。隊長の事を考えると、どうしてもな……………」

「ふふ、分かります。私なんか濡れちゃいますもの」

「あはははは」といつもの光景。「シュヴァルツェ・ハーゼ」に所属する隊員全員がラウラ隊長を愛している。

エルゼ中尉。肩くらいの長さの赤髪でまだ幼さを残す容姿をしている彼女だが、年齢は20歳を超えている。体の発育具合は顔に似合わず、胸はそれなりにある方だ。まあ、私には負けるがな。

ちなみに隊員全員の机には隊長の写真（※主に盗撮もの）なり、デスクトップPCの壁紙にアップデートした隊長の写真（※これも盗撮もの）がある。

「シュヴァルツェ・ハーゼ」は別名、「ラウラ・ボーデヴィツヒを

愛でる会」でもある。会長はこの私、クラリツサ・ハルフォーフである。

エルゼ中尉いつもの様に隊長の話にしていると、軽快なメロディーが鳴り響く。

~~~~~♪~~~~~♪~~~~~♪

はうあ！ この音はあつ！

私は隊長からの着信音だけ変更している。直ぐに分かるようにするためだ。

「エルゼ中尉、今すぐ記録の準備をっ！」

「了解っ！」

そして私の指示のもと、エルゼ中尉を始めとした隊員が全員ヘッドセットを頭に付け、これから始まる会話の一語一句を聞き漏らさぬようにしながら、会話の記録を取るため、準備を始める。

それを見届けた私は直ぐに携帯端末を自分のPCに繋ぎ、会話を記録できるように準備をする。

あー、うー、ごほん、ごほん。

うむ、声帯調整良し！

ここまでかかった時間、五秒。

『クラリツサ、私だ！』

「受諾。こちらクラリツサ・ハルフォーフ大尉です。で、どうでしたか？ 誓いの口づけは無事に済まされましたか？」

久し振りの隊長の声に身悶えてる隊員が数名いる。ふふふ、仕方のない奴らめ。まあ、気持ちには分らんでもないがな。私自身、声は平静を保ってはいるが、「ピーー」が「ピーー」状態だ。

『うむ。まあ、誓いの口づけはうまくいった。あれはいいものだな』

む、キスは上手く言っただけだが、言い淀んだという事は何かあったのだろうか？

「どうしました？ 何かありましたか？」

『いやな……、誓いの口づけをした後に中国の代表候補生だったか』

「中国の代表候補生で今、IS学園に通っているという事は・・・  
・・鳳鈴音ですか？」

『ああ、そいつだ。そいつも一夏を狙ってるらしく、一夏に誓いの  
口づけをしていた・・・』

悔しかったのだろう、最後の方は声のトーンが沈んでいる。ここは  
私が励まさねば。

「隊長、ご安心ください。隊長には私が、そして部隊の皆が付いて  
おります。何を怖れる事があるでしょうか？」

『っ！ あ、ああっ！ そうだなそうだな。私には皆がいるのだな』

そう。隊長の冷徹な表情もいいが、年頃の少女のような表情をして  
いるだろう隊長を想像するのもいいものだ。それだけで私は生きて  
いける。

「それに次なる作戦も既に用意してます。ご安心ください」

『本当か!?!』



「この作戦で織斑一夏を撃ち落としてみせるのですっ！」

『で、できるだろうか？ この私に』

「できますとも！ 隊長には私達がついているのですから！」

『そ、そうだな。すまない、大尉。どうやら私は弱気になってしまったようだ。それで、その作戦というのは？』

「その作戦というのは——」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

ふう。隊長との通話を終え、私は一息つく。

先程までの会話を脳内再生する。ああ、今日の隊長の慌てた声もよかった。先程から私は鼻から純潔の垂れ流しだ。

ふと室内を見回すと、全員が全員、身悶えてるようだ。それもそうだろう。基本的にあの隊長の冷徹な部分しか知らなかったのだから、このギャップはくるだろう。

隊長、あなたには私達「シュヴァルツェ・ハーゼ」がついております。

今回の作戦が上手くいけば、あの織斑一夏を見事落としてくれるでしょう。

\*◇\*◇\*◇\*◇\*◇\*◇\*

## 【一夏side】

自室。もう時刻は夜も半ばだ。寮暮らしの生徒達は皆、自室でくつろいでる事だろう。

さて、今、俺が何をしているか、という事だが……正座し

ております。目の前には悪鬼と化したシャルロットさんがおります。何でこんな状況になってるのか？　だって、それは今日あったラウラや鈴とのキスの件らしい。

その件で箒もセシリアに女子達は皆、殺気立っていた。

シャルロットは男装しているので表だって怒る事ができず、二人きりになるまで怒りを胸の内に溜め込んでいたみたいだ。そのおかげで先程から説教されているわけである。

「ちょっと！　聞ってるの、一夏！」

「はい！　聞いてます！」

俺のほっぺを抓りながら、恨みつらみを並べる。うう、既に正座を始めて二時間……足が限界です。

むうつと頬を膨らませ、俺の真正面で涙目交じりに説教するシャルロット。不謹慎ながらも可愛いと思えてしまう。

ちなみに今はプライベートな時間なので、シャルロットは俺が前にあげたシャツを着ている。しかも何故かノーブラで。

くっ、正座も辛い、ノーブラは止めてほしい。我慢が出来ん。

唯でさえ、シャルロットのおっぱいは黄金星闘士クラスなのに！  
ゴールドセイント

慌てて視線を逸らす俺の顔を、シャルロットは両手を使って自身の方へ戻す。

「いーちーかあー？」

シャルロットは怒っているようにむすつとしてる。

「……………ずるいよ。ラウラや鈴ばかり。僕だって、したいのに……………」

「シャルロット？」

えっと……………何かやばい雰囲気だ。

表情に陰を落とし、俯きながらブツブツ何か囁いているシャルロットに危機感を覚える。ここにはマズイ——本能がそう告げている。

取り合えず、逃げよう。

「シャルロット、そろそろ……………」

退散しようと思い、立ち上がろうとするが、長時間の正座が効いたのか、上手く立ち上がれない。

立ち上がるのに悪戦苦闘していると、両肩をシャルロットに掴まれる。

マズイマズイマズイ。

「何処に行くの、一夏。僕ね、いい事思い付いたんだ」

「そ、そうなんだ？ 取り合えず、トイレに行きたいから離してほしいなあゝ．．．．．」

別にトイレに行きたい訳ではないのだが、ただこの場を離れたくて出た言い訳だ。しかし、目の前のシャルロットは目が据わっており、いわゆるレイプ目というやつで俺を見る。

ひいひいひいっ！

「逃がさないよ」

そう言って、徐々に近付いてくるシャルロットの顔。

「待っ——むぐっ!？」

「うむう……はむっ……むぐう……」

俺の肩を引き寄せ、そのまま唇を撫でまわしたかと思えば、その下を口内にねじ込んでくる。くちやぴちやと水音を立て、口内の歯茎をなぞるように舐め、そのまま舌を絡めてきた。

俺の唇を堪能したシャルロットは一度、俺の口から離れる。

「えへへ、一夏がファーストキスじゃないのがちよつと癪だけど、これって僕のファーストキスなんだよ」

あまりの事に俺は思考回路が止まる。

今日で何回目だよ……襲われるの……。あれだけ襲われないように、と思ってたのが遠い昔のように感じる。

「今日はこれくらいで勘弁してあげる。でもね、あんまり他の子といちやいちやしないほしいな。僕って何気に嫉妬深いみたい……」

俺はコクコクと首を縦に振るしかできなかった。

「じゃあ、今日はもう寝よう？ 明日もあるしね」

「あ、ああ。そうだな．．．．．」

そのまま、それぞれ自分のベッドに潜り込む。

今日は本当に色々あった．．．．．。

ラウラに鈴に、最後はシャルロットにまで唇を奪われてしまった。

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．

ダメだろっ！ 俺は奪われる側じゃないっ！ 奪う側なんだっ！

俺は誇り高きおっぱい戦士なんだっ！

明日からは絶対に負けないっ！

そんな決意を胸に、俺は夢の世界へと旅立っていった。．．．．。

\*◇\*◇\*◇\*◇\*◇\*◇\*

窓の外、カーテンの隙間から朝陽が差し込んできているを感じる。

「ん．．．．．」

もう少しだけ．．．．．。もう少しだけ．．．．．。

朝のまどろみの中、まだ眠りたいと思う欲求には逆らえず、ベッドの中で惰眠を貪る。

ふに。

．．．．．？

ふにふに。

腕の中に納まっているであろう、何かの感触を感じる。何だろう？



このすべすべしてて柔らかい物体は？

まあ、抱き締めていると気持ちいいものだし、問題でもないだろう。  
ふにふにゆ。

「ん．．．．．」

抱き締めているであろう何かしらの物体から声が聞こえた。

んー、まあ関係ないや。気のせい気のせい．．．．．。

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．

ちょっと待ってエエエエエーっ！

え？ 何、今の明らかな女性の声。

この作品、とうとう越えちゃった？ 越えちゃいけない線、越えちゃった？

最近、そろそろ危ないかなあ〜って思ってたのに……、主人公自ら越えちゃった？

目を開けるのが怖い……。しかし確かめねばなるまい。恐る恐る瞼を開けると眩いばかりの銀髪が視界に映り、すやすやと眠るラウラの顔が目の前にあった。

そして恐る恐る布団をめくってみると……

裸じゃー！ー！ー！ーん！

何も纏ってないよ、この娘っ！

え？ 俺、襲っちゃった？

昨夜寝る前に、確かに奪われる前に襲ってしまえとか思っちゃったけどさ、まだ何かした記憶もないよ、俺っ！

「ふぁ。おはよー、一夏。今日も——」

隣のベッドで寝ていたシャルロットが起きたみたいだ。朝の挨拶の途中で言葉が途切れる。

ああ、この光景を見てしまったんですね……。

ベッドの中ではまだ夢の中なのだろう、すやすやと眠る一糸纏わぬ  
ラウラがいる。つまり何も隠しちやいない姿を見られた訳で……。

「二夏」

「……………」

恐くて返事もできない状態。

「二夏」

「――と、取り合えず、ラウラが、お、起きる前に、胸、か、隠  
した方が……………」

「……………正座」

「……………はい」

日本では悪い事をした罰則として正座をさせる事があるが、どうし  
てフランス人のシャルロットが知っているんだろう？

暫くすると制服姿になったシャルロットがラウラを起こす。

「ん．．．．．。なんだ．．．．．？ 朝か．．．．．？」

目をこすりながら、起きるラウラ。ははは、可愛いじゃないか。

「取り合えず、服を着て。ボーデヴィツヒさん」

「ん？ デュノアだったか．．．．．。ふむ、いくら一夏のルームメイトとはいえ、夫婦の営みを邪魔するのはただけだな．．．．」

ビキッ！ 笑顔のシャルロットだが、口元は引き攣り、こめかみには青筋が浮かんでる。

「ははは。まあ、いいから服を着なさい」

「う、うむ．．．．．」

シャルロットの醸し出すオーラに気圧されたのか、あのラウラが渋々といった感じに服を着る。

どうやら俺のベッドに忍び込む際に服をその場で脱ぎ捨てたようだ。

「よし、じゃあ、ラウラも一夏と同じように正座して」

「正座？　そもそも一夏は何をしてるんだ？　床に座って」

ラウラは俺の横にきて、ちょこんと座る。もちろん、正座で。

時刻はまだ7時前なので、まだ時間的には余裕がある。つまり説教される時間があるという事だ。はあゝ・・・・・・・・・・。

「じゃあ、ボーデヴィツヒさん。一夏のベッドに何で裸でいたのかな？」

「夫婦というものは包み隠さぬものだと言いたぞ」

「へえゝ、その間違った知識は誰から？」

「我が自慢の副官、クラリツサだ。だから間違いはない」

横で聞いている俺からすれば、間違えてると突っ込みたい。しかし、

これまでのラウラの突拍子の無い行動の原因を作っているのはクラリッサさんというのか．．．．．これは話し合う必要があるな。その後、箒やセシリア、鈴が呼びに来るまで説教は続いた。

最後の方、さすがのラウラも正座は厳しかったのか、立ち上がった瞬間、足元がおぼつかなかったが。

\*◇\*◇\*◇\*◇\*◇\*◇\*

### 【ラウラ side】

「クラリッサ．．．．．私だ．．．．．」

『受諾。こちらクラリッサ・ハルフォーフ大尉。どうしました、隊長？ 声に覇気が感じられませんが．．．．．』

私の声を聞いただけで、いつもの調子でない事を悟られてしまう。さすがだな。

「――すまない。作戦は失敗した」

『なんですって!?! 隊長の魅力が織斑一夏に通用しなかったのですか?』

「いや、ルームメイトのフランス代表候補生に注意されてしまった……」

クラリッサから聞いた話によると、日本では夫婦というものは常に同じベッドで裸のまま眠るらしい。そこでクラリッサは作戦として誓いの口づけを済ませたのであれば、今度は同じベッドで裸で添い寝をしてあげればいいというものだった。

しかし作戦はシャルル・デュノアの介入により中断されてしまったのだ。

『隊長、ご安心ください。隊長には我々がついていきます』

「そうだな。私にはお前達がいるからな」

『ええ。それでは作戦をプランBに移行させたいと思います』

「——という事は一夏のシャワータイムを狙って突入という事だな？」

『その通りです。裸と裸の付き合い。これで間違いなく落ちる筈です』

私は今日ほどクラリッサが頼もしく思えた事はない。私は運がいい。こんなに優秀な副官が、そして「シュヴァルツェ・ハーゼ」隊員全員が私を支援してくれている。

私は想いに応えねばならない。

今度の作戦で一夏を撃ち落としてみせるっ！



## **E p i s o d e 2 6 .. おっぱい魔人と英国痴女（前書き）**

前回から大分、時間が空いてしまいました。

忙しく、なかなか更新できませんでした。

待っていてくれた方々、本当に申し訳ないです。

## Episode 26.. おっぱい魔人と英国痴女

### 【Side】

ラウラと鈴のキス騒動から開けて数日たった日の早朝、篠ノ之箒は寮の裏、ときおり簡単な集会の場としても使われるようなぼっかりと空いたような場所でもやややした心情を晴らすかのように真剣による素振りの鍛錬を行っていた。

もやややした心情の要因はもちろん自身の想い人である一夏の事だ。

その一夏のファーストキスをラウラに、そしてあまつさえセカンドキスさえも鈴に奪われる形となってしまったのだ。もちろん、サードキスまで奪われている事は箒は知らない事なのだが。

一夏のファーストキスは自分が、と信じて疑わなかった箒はラウラと鈴のキス騒動の一件はとても受け入れ難い事実であった。

ここ最近ではラウラと鈴のキス騒動が頭から離れず、ベッドの中へ潜り込んでも眠れぬ始末——気が付けば、小鳥のさえずりが聞こえるような時間まで眠れない事もあった。

もうどれくらい振っていただろう.....何百回と行ってきた素振りに息も切れ、汗がしたり落ちてくる。ただ、これだけ鍛錬に打ち込んでも一向に晴れないもやややとした気持ちに自然と溜息が出る。

「はあ……一夏……」

気が付けば、想い人の名前を口にする。

現時点で一夏を狙う女生徒は多い。今や自分だけのアドバンテージだった”幼馴染”というポジションも鈴もいる時点であり利点はないようにも思える。

ましてや、その同じポジションである鈴は既に一夏とキスまでしている。しかも大人がするようなハードなキスを……。

だから考えてしまう。一夏が自分じゃない誰かに取られてしまうんじゃないか、と。

私は一夏に”大事な存在”と言われた。まあ、それは鈴やセシリアもだが。でも、言われたあの時、私の胸は幸せでいっぱいになった。

だからこそ私は一夏の”一番大事な存在”になりたいと強く願う。その為には今月末の学年別トーナメントの優勝は必要不可欠なのだ。

絶対に優勝して、一夏に初めてを捧げたい。

その為には自身が強くならねばならない。

ただ、問題もある。未だにパートナーを決めかねているのだ。

今回の学年別トーナメントはタッグ戦である。優勝するには自身が強いだけでなくパートナーが強ければ優勝する可能性は上がる。だからこそ強いパートナーが必要になる。

現時点で候補に挙がるのはセシリアか鈴だ。ただ、鈴は既にキスマで奪われたので、鈴と組むのは癪だ。

なら、同じ立場のセシリアが一番の有力候補だ。しかもセシリアは一夏との特訓と一緒に付き合ってた事もあり、セシリアと組んで一夏と対峙した事もあったため、コンビプレイの経験はある。

そしてお互いの不得手をカバーするかのように、セシリアの苦手な近接戦は私が得意とする距離で、逆に私が苦手とする遠距離戦をセシリアは得意とする。

しかもセシリアの方でも未だにパートナーを決めかねているようで、誰とも組んでいない。

パートナーとして、これほど問題の無い相手はそうはいない。

ただ、問題が一つあるとすれば、セシリアも一夏を狙っているという事だ。だからこそ今日まで一緒に組む事を躊躇ってしまっていた。しかし学年別トーナメントは今月末に開催されるので、早めにペアを組んで連携の練習をしたいのが本音だ。

だから迷っている時間はないのだ。

分かっている……そう分かっているのだが……、優勝したら、あの英国痴女は間違いなく一夏に処女を捧げようとするだろう。

むう、どうすればいい……。

しかし優勝するには一夏のパートナーにならない以上はセシリアが適任だという事は自分でもよく分かっている。

さて、考え込んでても仕方がない。取り合えずシャワーでも浴びて、学園に向かう準備でもするか……。

ただ、まだ時間的には早朝であるため、ルームメイトはまだ夢の中だろう。そんなルームメイトの眠りを妨げるのも申し訳ないという思いで部活棟のシャワールームへと向かう。

部活棟を管理している先生に挨拶を済ませ、脱衣所へと向かう。ただ、誰もいない。

そう、実は朝練をする生徒達よりも箒は早めに起き、誰にも鉢合わせないように一人黙々と真剣を振るっていたのだ。それは何故か――胴着をはだけさせ、窮屈そうなブラに包まれたたわわで張りのある乳房が原因だった。

この年頃で箒の胸のサイズは傍目から見てもでかい。いや、巨乳<sup>デカ</sup>い。

異性の目だけでなく同性の目さえも惹きつけるほどのサイズなのだ。箒は恥ずかしさからか、あまりジロジロ見られるのは好きではない。だから誰もいない時間帯を狙って、一人、練習に励むのが朝の日課でもあった。

脱衣所で胴着と下着を全て脱ぎ、シャワーを全身に浴びる。まとわりつく汗をきれいに洗い流すように全身に浴びながら、視線をふと下に向けてみる。

自身の胸を凝視すれば、同年代ではそういないであろうサイズの乳房が視線に映る。

そして自分で胸を揉んでみる。

もにゅもにゅもにゅもにゅ。

はあゝ．．．．．また大きくなったんじゃないだろうか．．．．．

巨乳というものは女からすれば重いわ肩が凝るわで邪魔にしか思えない。大きければ大きいほど負担も大きくなる。

もにゅもにゅもにゅもにゅ。

何度揉んでみても、大きい。自分でさえもそう思えてしまう。

しかし、箒はその大きすぎる胸をそんなに嫌ってもいなかった。一夏と再会するまでは小さくなればいい、もしくは無くなってしまえばいいとまで思っていたものだが、一夏と再会してから、一夏の視線が度々自身の胸に向けられている事に気付いていたのだ。

一夏は胸の大きな女子を好むのだろうか？

同室になった初日、一夏は確かに私の胸に視線を向けていた。つまり興味があるという事だ。

一夏が望むなら、私はこの胸でな、何でもしてやるつもりだ。揉まれようが、吸われようが、舐め回されようが、．．．．．挟んでほしいというなら．．．．．挟もうが．．．．．。

ボン！　そこまで考えて顔が熱くなるのを感じ、思考を中断する。

わ、私は、な、何を考えてるんだ、何を。

で、でも、一夏は確かに私を異性として意識している事を感じるし、それが嬉しかった。

あれだけいる恋敵ライバルの中でも私の胸のサイズに勝る女子はいない。なら、私はこの胸を使って、一夏を落とせばいいのではないか？

ふふふ、それもアリだな。

これならセシリアをパートナーにしても自分にも勝機があるのではないか。

「よしっ！　一夏との初体験のためにもセシリアにパートナーになつてもらおう！」

一夏との初体験のためには学年別トーナメントで優勝しなければならぬ。そして優勝するには自身が強くなるのは最低条件として、パートナーも強い方がいい。

しかし、一夏の事を想いながら、胸を揉んでいると、何か変な気分になってくる。しかし嫌な気分ではない。

何だろう？　この気分は？

大事な所が熱くなってくるのを感じる。

私は夜から続いたもやもやとした気分とは別のもやもやした気分を感じながら、シャワールームを出たのであった。

### 【セシリア side】

「はあゝ・・・・・・・・一夏様・・・・・・・・」

寮から学園までいつもは愛する一夏と一夏を想う箒や鈴、最近はシヤルルと登校をしているセシリアだったが、最近は一人になりたかったため、一人での登校が続いていた。

一人になりたい理由――それはラウラと鈴のキス騒動の一件である。

想い人である一夏のキスを他人に奪われている様を見せつけられて、いい気持ちはしなかった。

願わくば、自分と――。そんな想いがあの日から頭を離れない。

唯一の男子である織斑一夏。そんな一夏を狙う女子は多い。そんな彼を巡る争奪戦はかなりのデッドヒートが予想される。

それでもセシリアには勝算もあった。



ラウラとの決闘の際、暴走したラウラを相手に窮地に陥った自分を救い出してくれたのは他でもない一夏様でしたわ。

白馬ならぬ白いISを纏ったわたくしだけの王子様。ちょっとエッチな所はありますが、それに関してはウエルカムなので問題はないですし、寧ろ迫ってきてほしいくらいですわ。

だからこそ一夏様の貞操は他の女子に渡したくない。

一夏様の貞操はこのわたくしが――。

そのためにも今月末に予定される学年別トーナメントの優勝は必要不可欠。自身が強くならなければいけないのは当たり前としても、今月末のトーナメントはタッグ戦となるので、ペアになるパートナーも出来れば、強い者が好ましい。

だからこそパートナー選びに慎重になる。

しかし、セシリアに勝てるほどの実力を有している一夏はシャルル・デュノアと、ラウラに関しては相川清香に奪われてしまった。

鈴さんは……問題外ですわね……。

自身を差し置いて、一夏とキスを済ませた鈴とペアを組むのは、自身がまだキスを済ませていない事もあって、許容できないものだった。

確かに鈴は強い。しかし、鈴と組むとなると、同じ相手を想う者同士であり、キスをしたしてないで考えると、有利なのは鈴だ。それ

は女としての自尊心プライドが許さない。

そうなってくると、次に思い当たるのがおっぱい魔人——篠ノ之  
箒だ。

彼女も一夏を想い、狙っている一人だが、自身と同じでキスをして  
いない。つまり立場は同じなのである。しかも最近の彼女は専用機  
は持っていないが、類稀なるセンスを生かして、同学年の中でもメ  
キメキと成長しているのが分かる。

もともと剣道をやっていた事もあり、同学年の中で専用機持ちを外  
せば、強い部類に入る。

さらには放課後、一夏との特訓に最初の方から二人で参加していた  
ため、何度かコンビを組んで一夏と対峙した事もあったので、コン  
ビプレイに不安はない。

迷っている時間はない。少しでも早くペアを決め、連携の練習に時  
間を使いたいのが本音だ。

やはり、ここは箒さんとペアを組んだ方が優勝の可能性があります  
わね。

優勝した暁には、一夏の貞操を巡って、改めて箒と対峙する事にな  
るだろうが負ける気はしない。

「そうですわね。わたくしの記念すべき華やかな初体験を演出する  
ためにも、箒さんに協力してもらおうとしましょう。ふふふふふ」

知らず知らずのうちにぐっと拳を握りしめ、自身のクラスの教室の扉を開ける。――そこでセシリアを待っていたのは未だにペアを決めていないセシリアをパートナーにしようと画策する女子達であった。

「セシリア、おはよ。今度の学年別トーナメントのパートナーって、もう決めた？」

「セシリア。私と組も？」

「一緒に組んで！ お願い！」

彼女達も一夏様を狙っているのでしょうか。皆、必死な顔でわたくしにパートナーになってほしいと願い出てくる。

考えてみれば、自分は専用機を持っており、ましてや前回の決闘でラウラさんが暴走するまで、押していたのは自分だった。だから、自分達が優勝するには少しでも強いパートナーが必要という事でわたくしにパートナーになってほしいという願い出をしてくるのでしょうか。

あの決闘の日からパートナーの申し出は毎日続いている。

どうしても決めかねていたので時間はかかってしまいましたが、わたくしはパートナーとするべき相手を既に今日決めましたので、こ

こは断っておくべきですわね。

「ごめんなさい、みなさん。わたくし、既にパートナーにする方は決めましたの」

「そうなんだあゝ．．．．．残念」

「ああ．．．．．私の優勝の可能性が．．．．．織斑君との初体験の可能性が．．．．．消えていくう．．．．．」

わたくしの返答に肩を落として散っていくクラスメイト達。

そして、わたくしはパートナーとすべき相手の机に向かう。そう、  
箒さんの所へ。

「箒さん。今よろしいかしら？」

「構わない。ちょうど私もセシリアに話があったからな」

「そうなのですか？」

「ああ。ところで私に話があったのではないか？」

「そうでしたわね。今月末に予定されている学年別トーナメント・・・まだペアを決めていませんわよね？」

「ああ、まだ決めてない」

「——わたくしとペアを組みませんか？」

わたくしの言葉が意外だったのか、少し目を丸くしていた箒さんでしたが、直ぐに表情を戻す。

「そうか。私もちょうどセシリアにお願いしようかと思っていたところだったんだ。うむ、それなら話が早いな。私とペアを組んでくれるか、セシリア」

お互いにお互いがペアにしようとしていたらしいですわね。思わぬ偶然でしたが願ってもいない事。わたくしは了承の意を示すため、手を差し出すと、箒さんも手を差し出し、固い握手を交わす。

\*◇\*◇\*◇\*◇\*◇\*◇\*

## 【一夏side】

放課後。

箒とセシリアは一緒に組む事にしてみたいでHRが終わると早々に二人で特訓に向かった。あの二人が組むんだ。これは手ごわいかな。セシリアは前回の決闘の後からBT兵器の思考制御能力が向上したおかげでメキメキと実力を伸ばしてきている。

そして箒自身、専用機を持っていないが、もともとの剣道での鍛錬が生かされ、ISでの近接戦に関しては実力は高い方だ。

ラウラは清香さんを鍛えてるらしく、こちらも早々に教室を後にしている。こちらの特訓は非常に厳しいらしく、組んだ翌日に清香さんは筋肉痛でまともに動いていなかったが、日に日に実力を上げてきているとラウラが前に話してくれた。

鈴はルームメイトのティナ・ハミルトンという女子と組んだみたいだ。ペアを組んだ相手の事はよく知らないが、鈴曰く実力は高いとの事だ。

そして、一番の問題が実はのほほんさんだったりする。四組の専用機持ちとペアを組んだらしい。

最初は断られていたらしいのだが、何度も何度も四組まで出向き、説得に説得を試みたらしい。

幼馴染らしいのだが、どんな子かは知らない。何せ四組の子とはあんまり絡んだりした事がないし、知り合いがいるわけでもないからな。

まあ、何はともあれ、俺は誰にも負けるわけにはいかない。

何せ優勝を逃がしたら俺の貞操が……奪われてしまうのだっ！

男からしたら女に襲われるなんて夢のようなシチュエーションだと思われるかもしれない。

一夏もげろ、とか言われるかもしれない。

だが、これだけは言わせていただくっ！

俺は狩られる側ではなく、狩る側……つまり狩<sup>ハンター</sup>獵者なのだ！

だから記念すべき初体験を逆レ○プのような形で奪われるのは、伝説のおっぱい戦士として許されぬ事なのだっ！

「俺は絶対に優勝してみせるっ！ さあ、シャルロ………じやなくて、シャルル！ 今から特訓に行こうぜ！」

「うん、絶対に優勝しようね、一夏♪（一夏の貞操は誰にも渡さないよ。キスは三番目になったけど、一夏の初めては僕が奪ってみせるんだから）」

そして今日も俺は学年別トーナメントで優勝するために、シャルロットと連携の特訓に励んだのであった。



## **Episode 26. 5: 学年別トーナメントに向けて―おまけ― (前書き)**

今回から学年別トーナメントが開催されると思って、待っていてくれた方には申し訳ない。

どうしても鈴中心の話が書きたかったんです。

時系列的には25話のすぐ後といった感じですが。

## Episode 26. 5: 学年別トーナメントに向けて―おまけ―

\*◇\*◇\*◇\*◇\*◇\*◇\*

――話は遡る事、ラウラと鈴のキス騒動後となる。

鈴は浮かれていた。想い人である一夏とキスをしたのだ。まあ、一夏にとってはセカンドキスだというのが癪であったが、鈴にとってはファーストキスである。

一生の思い出となるファーストキス、それを中学時代からずっと想いを寄せていた一夏としたのだ。浮かれないわけがない。

しかも未だに鈴の舌は一夏の唇を堪能した感触が残っている。

（あたしの舌と一夏の舌が絡み合って、お互いの唇を貪るように舐め回すいわゆるハードなキス．．．．．気持ちよかったなあ．．．．．）

いつも放課後は一夏との特訓に付き合っていた鈴だが、学年別トーナメントまではペアを決めた者同士の特訓を優先しようという事で個別に行っていた。

「ふんふんふーん♪」

鼻歌交じりにアリーナから自室を目指す鈴。いつもなら長く感じる距離も今日に限っては全く気にならない。途中、何度か学園の生徒とすれ違い、妙に浮かれている鈴を訝しげな視線で見つめてくるが、鈴は全く気にならなかった。

一夏を狙う恋敵ライバルは多い。その中で鈴は先日的一件で他の恋敵に差を付ける事に成功した。これ程、喜ばしい事はない。

ただ、まだ油断が出来ない事も鈴は理解している。

今月末に開催される学年別トーナメントの優勝者には一夏との初夜が贈呈されるのだ。

鈴は自分の処女は一夏に捧げると中学時代から心に決めていたりもする。だからこそ負けられない。

（優勝するには強いパートナーが必要よね？ 他の専用機持ちで可能性があるのはセシリアだけど．．．．．さすがに一步リードした私とは組もうとしないはず．．．．．それなら専用機持ちじゃなくても実力の高いパートナーが必要不可欠ね．．．．．）

鈴はもちろん、学年別トーナメントに参加するつもりなのだが、未だにパートナーが決まっていなかった。

ただ、優勝を狙う以上は強いパートナーが必要となる。

現時点でパートナーが決まっていない実力者は専用機持ちではセシ

リア、専用機持ち以外では箒、そしてルームメイトのティナ・ハミルトンがいる。

ただ、鈴にとってセシリアに箒は一夏を狙う恋敵である。

その二人を出し抜き、キスまでした鈴と組もうとしない事は容易に想像できたりする。

彼女達も一夏を本気で想うが故に、自分が一番でいたいという願望が強い。

だから、この二人は自然にパートナー候補から外す。

残るはルームメイトのティナ・ハミルトンだが、彼女は専用機こそ持っていないが、実力は高い。しかもティナ・ハミルトンは一夏に對して、世界で一人だけの男性IS操縦者としての興味は持っているが、一人の男性として好意を持っているわけではない。

つまり、ティナ・ハミルトンは鈴にとっても都合がいいパートナー候補だったりするわけである。

（よしっ！ ティナを誘おう）

そして自室の前に戻った鈴は勢いよくドアをバンツ！ と開け放ち、部屋の中にいるであろうティナに帰宅の挨拶をする。

「たっだいまぁ！」

突然の大声に吃驚するのは当然だろう。

ベッドの上で寝転がっていたルームメイトは鈴の元気が有り余った大声に目を丸くしていた。

手に持っているのは薄い漫画本。

ページ数は普通の単行本よりも全然少ないのだが、値段はジャ○プコミックスよりも高い。——そう日本の文化とも言える、所謂、同人誌というものであり、ティナが手にしていたのは悪魔が執事をしている漫画をもとにしたBL本である。

そう、ティナ・ハミルトンは日本に来て早々に腐女子化したのだ。

初めて触れるアニメや漫画といった二次元文化に心奪われ、色んなグッズを買い漁っていたりもする。

「また、あんたはそんな漫画ばかり読んで」

「いいでしょ、別に。好きなものは好きなんだから」

鈴から見てもティナ・ハミルトンは美人だ。口惜しい事に胸も大きいし、その上、腰もくびれている。いわゆる出るところは出て、引っ込むところは引っ込んでる、ナイスプロポーションの持ち主だ。

しかも金髪碧眼で可愛いというよりも美人といった印象を受ける彼女なのだが、いかんせん趣味が腐っているので、現実の男に興味を持つ事もない。

勿体ない……とも思える人物なのだが、二次元にしか萌えないからこそ今回は都合が良かったりもする。

「ねえ、ティナ。今月末の学年別トーナメントのパートナー、まだ決めてなかったでしょ？」

「まだ決めてないわね」

「よかったら、あたしと組んでほしいの！　お願い！」

パンツ！　と手を合わせ、ティナにお願いする鈴。

「そうねー、どうしようかしら？　もともと自由参加だし、めんどくさいかなあって思ってたんだよね」

そう、ティナ・ハミルトンはめんどくさがりでもある。だから、今回の学年別トーナメントは不参加でもいいか、と考えていた。

「優勝できたら……ティナの好きな同人グッズ5個買って

あげる！」

ピクッ。鈴の言葉にティナは少しだけ反応する。

その反応を鈴は見逃さなかった。

「それなら6個でどうだ！」

ピクピク。ティナは迷っていた。トーナメント参加はめんどくさいが、同人関係のアイテムがただで手に入るのはティナにとってもメリットがある。

「10個……これは譲れないわ」

「~~~~！ まあ、いいわ…… 10個で手を打ちましょう」

「OK。契約成立ね」

お互いに握手を交わす鈴とティナ。

鈴は一夏との初体験のために、ティナは目当ての同人関係のアイテム収集のために、今この時、二人の利害が一致し、タッグを組む事になったのである。

【ティナ side】

ふふふ、ただで同人グッズが手に入るなんて．．．．．嬉しい誤算だわ。

学年別トーナメントに出場するのはめんどくさいけど、まあ同人グッズゲットのためにも頑張りますか。

「そういえば、学年別トーナメントに参加する人って、どれくらいいるの？ 一組の専用機持ちの人達は皆、参加するのかしら？」

一応、ライバルになりそうな人がどれくらいいるかはチェックしておかないとね。優勝しなきゃ目当ての同人グッズが手に入らないからね。

「そうね、一組の専用機持ちは皆、参加するはずよ」

「四組の専用機持ちは？」

「え？ 四組にも専用機持ちっていたの？！」



あ、あんたねえ。仮にも代表候補生のくせに他の専用機持ちの情報が少ないって、どういう事よ……。呆れて溜息しか出ないわ。

「まあ、大丈夫よ。あたし、そんな簡単に負けるつもりもないし」

鈴は自信満々のようだ。確かに鈴の實力は同年代においては専用機もあるという事を差し引いても高かったりする。

「取り合えず、これからトーナメントまでは放課後は毎日、特訓だからね」

「えー、めんどくさい……。でも、まあ、優勝のためにも仕方ないかあ……。」

優勝しなければ、同人グッズが手に入らない。だから何が何でも勝ちに行く。

考えられる限り、要注意人物なのが、織斑一夏。

彼は、あの世界屈指の實力を持つ伝説的IS操縦者『ブリュンヒルデ』織斑千冬の弟であり、世界唯一の男性IS適合者だ。

IS学園で初めてISに触れたにも関わらず、一組のクラス代表決定戦で入学試験の座学主席で、実技試験では教官を倒して合格したイギリスの代表候補生、セシリア・オルコットを下し、クラス対抗戦では目の前にいる中国代表候補生の鈴と互角以上の勝負をしていた。未確認ISの乱入さえなければ、勝っていたのは織斑一夏の方かもしれないと思えるくらいに強かった。

さらには前に一組と合同で行われたIS実習では元日本代表候補生である山田先生と互角に渡り合っている。

間違いなく彼は強い。だからIS操縦者として興味はある。

まあ、見た目も整ってるし、かなりの女子が熱を上げているが、正直、私は三次元には興味がなから男として見ているわけではないけど。

セ○スチャンみたいな感じだったら、コロツといっちゃうかもしれないけどねー。

他にも一組にはフランス代表候補生のシャルル・デュノアやドイツ代表候補生のラウラ・ボーデヴィツヒとタレント揃いでもある。

苦戦は必至だ。

でも、私には負けられない戦いがある。

ふふふ、絶対に優勝してみせるわ。そして夏の新作を大量にゲットしてみせるっ！

## **Episode 26. 5: 学年別トーナメントに向けて―おまけ― (後書き)**

次回は確実に学年別トーナメント開催となります。

**E p i s o d e 2 6 . 7 5 .. 未だに主人公の出番はない. . . . .**

**(笑)**――

待たせてしまった上に再度、番外編でごめんなさい。

鈴とかティナを出したから、トーナメント開催前に簪も出しちゃおうと思って、書きちゃいました。

尚、番外編にも関わらず、ギャグがほぼありません。

一夏が登場しないから番外編扱いです。

\*◇\*◇\*◇\*◇\*◇\*◇\*

月末に学年別トーナメント開催を控えたある日の放課後、学生寮のとある一室で、一人の少女が作業にいそしんでいた。最新式の空間投影式のキーボードを自在に操り、次々にデータを処理していく。

長方形のレンズの眼鏡の奥の瞳はどこか虚ろ気で、ディスプレイに映し出されるデータを見詰めるその様はどこか人を寄せ付けない雰囲気を出している。

少女の名前は更識簪<sup>さらしきかんざし</sup>。1年4組の専用機持ちであり、日本代表候補生である。

彼女が取り組んでいるのは自身に与えられた専用IS〈打鉄式〉の組み立てである。

本来、ISの製造は企業が行うものであるが、彼女の場合、製造元である倉持技研が世界で一人だけのIS操縦者である織斑一夏の専用IS〈白式〉の開発を優先させた所為で彼女の専用IS〈打鉄式〉の開発は滞ってしまった。

つまり、専用機持ちにも関わらず、現在まで専用機がないのである。

その事もあって、彼女は織斑一夏に対して、いい感情は持っていない

い。寧ろ恨んでいるくらいである。

そして少女が一人で専用ISを用意するもう一つの要因として、彼女の姉、更識楯無さらしきたてなしの存在があった。

彼女の姉はIS学園の2年生であり、生徒会長でもある。そして学園唯一の代表IS操縦者である。

姉は昔から優秀だった。幼い頃から姉の背を見ながら生きてきた。勉強、武道はもちろんのこと、IS作成までやってのけてしまった。そんな姉を周囲は褒め称えた。何をしても優秀な姉、そんな姉の周りには人が集まっていた。

姉を陽とすれば、少女は陰のような存在。

更識楯無という燦然と光り輝くものが周りにいれば、その光は身近なものに色濃い影を作り出した。

更識簪の周りには、姉の光によっていつも影ができていた。

更識簪という名を覆い隠す、”更識楯無の妹”という影が――。

だから少女はその強い劣等感を消したいがために自身のISを独力で開発しようとしていた。

誰の手も借りずに――。

たった一人で――。

## 【簪side】

——私は、一人でもやれる。

これまで誰も”更識簪”という私を見てくれなかった。

いつも遙か先をいく姉に追いつこうとして必死に努力しても、這いつくばっても諦めずに進んでも、誰も私を、”更識簪”という私を見てくれなかった。

——流石は楯無さんの妹ね——

かけられる言葉はそんな言葉ばかり。誰もが私を、”更識楯無の妹”として見ていた。

どれだけ努力しても、日本代表候補生になった今も、いつまで経っても私はあの人の妹という付属品としてだけしか見られなかった。

それがこの先も続いていく、そう思うと悔しくて堪らなかった。

ただ、私は褒め称えてほしかったわけじゃない、ただ私を、私という存在を周囲に認めさせたかった。

そんな時である。自身のISの開発が遅れていると聞いたのは。

チャンスだ、と思った。

姉が自身のISを開発したように、私も自分の手でISを完成させれば、私を認めさせられるかもしれない——そう思ったのだ。

だから製造元である倉持技研に問い合わせ、自身のISへ打鉄式式を自身の手で完成させる事にしたのだ。

ISを自身の手で組み上げる——言葉にするのは簡単だが、実際に成し遂げるのは難しい事だ。

それでも私は諦めたくなかった。

——これを成し遂げて、私は漸く”更識簪”になれる。

私は姉のような天才ではない。でも、いつまでも”更識楯無の妹”としてしか見られない現実に耐えられなかった。だから、私は必死にへ打鉄式式を一人で完成させる。

”更識簪”としての存在を確立させるために——。

私は高速で流れるデータの羅列に目を通していると、いつの間にやら、外の景色はすでに暗闇に包まれていた。

集中していると時間が経つのは本当に早い。作業を始めたのは3時くらいだったのに、既に窓から覗く外の景色は暗闇に包まれていたのだ。



ふと机の片隅に置かれた時計に視線を向けると、時計の針は8時を指していた。

晩御飯どうしようかな．．．．．そう思っていると、ドアがコンコンとノックされた。

「誰？」

「かんちゃん、入ってもいい？」

この間延びた声は布仏本音だ。私の幼馴染であり、私専属の付き人である。どうせ、この子も姉の差し金で私に近付いているに過ぎない。だから普段は突き放した態度を取り、遠ざけようとしているのだが、凝りもせず毎日のように私につきまとっている。

最近では、一緒に月末に開催される学年別トーナメントに参加しようとして誘ってくるのだ。

基本、私はまだ専用機が用意できていないという理由で今回のトーナメントに出場する気はない、と彼女の誘いを断っているのだが、彼女はどうかやらまだ諦めていないらしい。

——今日こそ、はっきりと断ろう。

そう思い、彼女が部屋に入るのを了承する。

「・・・・・・・・どうぞ」

私の声に反応して、部屋に入ってくる布仏本音。彼女はもう既に制服からいつのものの着ぐるみに着替えている。

いつも思うが、ふざけた格好だ。しかし、こんなふざけた格好をしている彼女だが、実は巨乳だ。着ぐるみの上からでもふっくらとした胸の膨らみを見ると、自身の胸の貧弱さに劣等感を感じる。

今、目の前にいる彼女にしても、姉や姉に付き従っている彼女の姉、のほとけうつほ布仏虚も皆、巨乳である。

しかし、目の前の彼女、布仏本音はそんな事もお構いなしに私に対して、ニコニコ笑顔を振りまいてくる。

「かんちゃん、晩御飯まだでしょ？ 学食でおにぎりとか買ってきたから一緒に食べよ？」

そう言って目の前におにぎりやおかず数点にお茶が差し出される。

「・・・・・・・・ありがとう」

「いえいえ、どういたしまして」

お昼から何も食べていなかったから、取り合えず受け取る事にした。私は黙々と食事を続けるが、本音は終始ニコニコしている。彼女はいつもこのような表情をしているので何を考えているのか分からない。

「ところでトーナメントの件、考えてくれたかな？」

まだ本音は諦めていなかったらしい。私にトーナメント参加を促してくる。

「まだISが完成していないから無理……」

「でもでも、もうほとんどできてる状態でしょう？」

そう、本音が言うように〈打鉄式〉は既にほぼ組み上がっている状態だ。

従来の安定した性能を誇る防御型である打鉄と違い、機動性を重視した仕様に組み上げられており、スカートアーマーは機動性を重視した独立ウィングスカートに換装され、腕部装甲もよりスマートなラインへと変化していて、格闘戦における運動性を活かす構造になっている。

肩部ユニットはシールドではなく、大型のウィングスラスターが一つに、小型の補佐ジェットブースターが前後2基搭載する事により、第三世代にも劣らぬ機体速度を有している。

装備面においても、八連装ミサイルポッド〈山嵐〉、速射荷電粒子砲〈春雷〉が2門、近接武装として対複合装甲用超振動薙刀〈夢現〉とリヴァイヴの汎用性を参考に全距離対応型に組み上げられている。

ただ、ほとんど一人で仕上げた為に調整が未だに甘く、まだまだ改良の余地がある。

「それなら、私が手伝って――」

「うん」

本音が手伝いを申し出る前に私はその言葉を遮った。

本音の手を借りたくない。

これは私一人が成し遂げる事が重要なのだ。

「そっか……………」

断られたのがショックだったのか、目に見えて肩を落とす本音に悪い気がするが、このISは自分一人だけの力で組み上げたかった。それだけは譲れない。

「これは私一人だけで成し遂げたいの。だから、ごめんなさい」

「ううん、気にしないで」

「……でも、どうして毎日のように私にトーナメント参加を促してくるの？ 私は断ったはず」

そう、本音は毎日のようにトーナメント参加を私に促してくるのだ。何度も断っているのに、毎日毎日、私にトーナメント参加の話を持ち掛けてくる。

「うん、かんちゃん存在を、認めさせるチャンスなんだもん」

本音の言った言葉が一瞬、理解できなかった。

「かんちゃん、ずっと悩んでるみたいけど、私にとって、かんちゃんはかんちゃんだから。生徒会長の妹かもしれないけど、更識簪は更識簪。だから今度のトーナメントで、かんちゃんがここまでやれるんだって、皆にも証明したいの」

物心つく頃から一緒だった本音。

でも、私にとって本音は布仏家の次女で代々更識家に使えている家系の出。だから姉の差し金で私に付きまといっているものだと思っていた。

でも、本音は私の悩みを、誰にも言えなかった私の陰を、理解していた。

「かんちゃん、トーナメントに出ようよ。で、皆をあつと言わしちゃう？」

目の前にはニコニコ笑顔を振りまいてくる本音が私の手を取る。

その笑顔に私はもう観念するしかなかった。

確かに本音が言うように今回のトーナメント出場は、”更識簪”としての存在を周囲に認めさせるいい機会かもしれない。

トーナメントは月末だ。それまでに〈打鉄式〉の調整は終わらせられる。

「……………分かった。出る」

「おおー、じゃあ、一緒に優勝目指して頑張ろうね」

\*◇\*◇\*◇\*◇\*◇\*◇\*

「全学年、トーナメント出場者が決定しました」

『生徒会室』とプレートを掲げられた扉の奥、薄暗い部屋の中で三人の女がテーブルを囲んでいる。二人が席に着き、中央の一人は立っていた。

テーブルの上には出場者の資料が置かれている。その内の二枚の資料を中央に立つ少女が手に取る。

「織斑一夏に、更識簪……あの子も出場するのね」

「はい、簪お嬢様の専用機もほぼ完成しているそうです」

「そう……」

窓の外を眺めながら席に着く一人の少女からの報告を聞いていた中央に立つ少女は、くるりと身を翻す。

「ふふふ、今年の学年別トーナメントは面白い事になりそうね」

振り返った少女の笑みを浮かべる。冷徹なる女王のように、見るものを魅了して止まない、そんな笑みを浮かべていた。

その笑みを見た二人の少女は心の中である事を思っていた。

——また生徒会長の悪い癖が出た、と。

二人の少女の前に立つ生徒会長、更識楯無は裏工作を実行する暗部に対する対暗部用暗部「更識家」の十七代目当主であり、明瞭快活で文武両道。さらにはIS学園の生徒でありながら自由国籍権を持ち、在学生で唯一の現役の代表者である。

肉弾戦・IS戦の双方ともに自他共に認める学園最強の存在なのだ。

そんな完璧超人のような更識楯無だが、困った事に容赦なく他者を振り回しつつ飄々とした言動で周囲の人間を自分のペースに引き込むという悪い癖を持っている。

この悪い癖がなければ、完璧なのに——と思う二人だが、決して口には出さない。

何故なら口にしたら最後——、めんどくさい展開になるからだ。



二人は確信する。

今年の学年別トーナメントはひどい事になる、と――。

**Episode 26. 75.. 未だに主人公の出番はない..... (笑)――**

次回いよいよタッグトーナメント開催！（※嘘じゃなく）

狩る者（一夏以外の女子、但し一部除く）と狩られる者（一夏）の  
欲望蠢くこの大会の勝者は果たして誰なのか!？

そして優勝しても貞操が危険な事に一夏はいつ気付くのか（笑）  
次回より遂に激戦（?）が始まる！  
乞うご期待！

でもやっぱり一夏はもげろ！

## **Episode 27..欲望蠢く学年別トーナメント開催(前書き)**

やっと本編開始、トーナメント開催です。

そして久し振りの一夏は本当に残念極まりない。(笑)

かっこいい主人公が書けなくて、本当に申し訳ない。(笑)

## Episode 27: 欲望轟く学年別トーナメント開催

### 【二夏side】

皆様、お久しぶりでございます。

この作品の主人公、そう主人公である織斑一夏です。

約1ヶ月・・・そう、約1ヶ月間、俺の出番が無かったわけ  
で・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

どういうことだ！！

さて、ここで皆様にも『主人公』という立場の定義を説明しておこ  
うと思う。

そう、主人公とは、ストーリーの中心となり物語を牽引していく人物・キャラクター。主人公の役割を演じる者は主役と呼ばれる。

(※某フリー百科事典参照)

そう、物語を牽引する重要な立場であるはずの主人公が、約1ヶ月間も放置!?

おかしいだろ?      なあ、おかしいだろオ?

何で、俺無しでおまけが2回もあんの!?

1回にしろよオオオー!!

ただでさえ、残念とか言われてんだからさアアア!!

そりゃ、ところどころでおっぱいスカウターとかさ、伝説のおっぱい戦士だ、とかぬかしちゃったけどさ、さすがに1ヶ月間も出番が無い主人公って、どうよ!?

別にセルの自爆に巻き込まれてもないし、某ハンター漫画みたいに作品自体が休載してるわけじゃないじゃないかアアッ!

「.....か。.....ちかっ! 一夏っ!」

ふと、自分を呼ぶ声に気付き、後ろを振り返ると、むすっと頬を膨らませたシャルロットがいた。

「もうっ！　どうしたの、一夏。　さっきからぼーっとして？」

「ああ、悪い。　ちよつと．．．．．自分の存在理由について、考え事をしてたんだ．．．．．」

「?????」

俺の言った事がいまいち理解できなかったんだろう、目の前のシャルロットは首を傾けている。

しかし、何だ。

目の前のシャルロットが女の子と分かっているせいで、こういう何気ない仕草が女の子らしくて、たまにドキツとする。

「?　どうしたの?　何か顔、赤いけど?」

「い、いや!　な、何でもないっ!」

さて、今、俺とシャルロットはアリーナの更衣室でISスーツを着て待機している状態だ。

そう、今日から六月も最終週に入り、IS学園は月曜から三日間、

学年別トーナメントが予定されている。今日がその初日なのである。

五月にあったクラス対抗戦も各国のお偉方が集まった大規模なイベントであったが、学年別トーナメントは全学年別で行われるため、クラス対抗戦が比較にならないくらいに慌ただしく、全生徒が雑務や会場の整理、来賓の誘導に駆り出されていた。

特に今年は新入生に専用機持ちが多い事もあって、各国の注目度が半端なく高いのだ。

ここ最近山田先生はもちろんの事、千冬姉も準備に大忙しといった感じだった。

更衣室のモニターから観客席の様子を伺う事ができたので見てみたのだが、見渡す限り、人・人・人の群れである。

まるでワールドカップのような盛り上がりだ。

そして観客席に映る顔ぶれがまた凄かったりする。テレビでしか見た事のない海外の大統領に各国政府関係者、研究所員、企業エージェント、その他諸々の顔ぶれが一堂に会しているのだ。驚くなどいうのが無理な話だ。

「三年にはスカウト、二年には一年間の成果の確認にそれぞれ人が来ているからね。一年には今のところ関係ないみたいだけど、それでもトーナメント上位入賞者にはさっそくチェックが入ると思うよ」

ほえー、本当凄いな。しかし、このトーナメントで俺は優勝しなければならぬ。

何故なら、俺の貞操が一大事だからだ！

大事なところだから、もう一度言おう……

俺の貞操が一大事なんだっ！

しかし、今回のトーナメントは強敵揃いである。しかし、俺には心強いパートナーがいるっ！

「シャルロット、絶対に優勝しような」

「もちろんだよっ！（一夏の初めては僕が頂くからね♪）」

シャルロットとも何度か模擬戦をした事があるが、本当に強いのだ。

シャルロットの得意技でもある高速切替——ラビット・スイッチ——バスショット大容量拡張領域を使って、通常1〜2秒かかる量子構成をほとんど一瞬で、それも照準を合わせるのと同じに行う、この技に俺も苦戦した。

敵にすると厄介だが、味方にとこれほど心強いパートナーはそうはいない。

「さて、そろそろ行くか」



「そうだね」

お互いにISスーツへの着替えは済んでいる。俺はIS装着前の最終チェック、シャルロットは男装用スーツの確認をそれぞれ終えた。

「そろそろ対戦表が発表されてるから見に行こうよ」

「そうだな」

俺達は二人でトーナメントの対戦表が発表される待合室に向かうため、更衣室のドアを開けると、何故かそこには一人の女生徒がいた。制服のリボンの色から二年という事が分かる。何故か片手に扇子を持って、やたら笑顔な美人さんがいた。

さらに俺のおっぱいスカウターが反応している……………目の前にいる先輩のおっぱいが制服を着ても分かる位にその双丘は立派にその存在を主張している……………。

ゴクツ……………。

ただ、本能が告げているのだ。

今すぐにでもむしゃぶりつきたいおっぱいの持ち主が目の前にいるが、本能で目の前の先輩が危険である、と――。

「あら？ あらあら？」

口端をニヤリと吊り上げ、腕を組む、すると、どうだろう。唯でさえ、立派に自己の存在を主張していた双丘がさらに強調されているじゃないですか！？

ヤバイ。

目の前の人物に対して、危険だと本能が告げている。危険を回避するためにも直ぐにこの場から立ち去らないといけないのに、目の前のおっぱいから、目が………目が離せないのだっ！

「……………一夏……………」

ゾクゾクゾク。

俺の直ぐ後ろにいたシャルロットさんから絶対零度の視線を送られる。まさしくこの状況は、前門の虎、後門の狼といった感じではなかろうか？

いかん！ おっぱいに見惚れてる場合じゃないぞ、織斑一夏っ！

ここは少しでもこの状況から脱しなければ！

「ねえ、君が織斑一夏君でしょ？」

状況を脱するための策を思案していたら、目の前にいた先輩が俺に声をかけてきた。

「ええ、そうですけど．．．．．先輩は？」

「私はこの学園の生徒会長、更識楯無。よろしくね。で、そっちの子がフランスの代表候補生で．．．．．」今は「シャルル・デュノアって名乗ってるんだっけ？」

”今は”——！？

——この先輩、シャルロットの正体に気付いてるっ！？

シャルロットも正体がバレていると思ったのか、顔面蒼白に肩を震わせている。

俺は直ぐにシャルロットを後ろに隠し、先輩と対峙する。

「先輩、何が目的だ？」

ありったけの敵意を視線に込め、目の前の先輩を睨みつける。シャルロットは俺が守る、と誓った。いくら目の前の先輩が美人だろうが、シャルロットに害が及ぶなら全力で排除する。

「大丈夫。私はあなた達の敵じゃないし、後ろのシャルル君でいいのかな、今は。正体をバラすつもりもないから安心して」

先輩はシャルルの正体に100%気付いている。でも、何故バレたんだ？ まだこの学園で知っているのは俺だけなはず。

「何で気付いたのか、気になる？」

首を縦に振り、疑問を肯定する。

「まあ、裏工作を実行する暗部に対する対暗部用暗部、更識家の当主として、そして生徒会長として、学園に入る新入生のデータはチェックしているしね」

IS学園には毎年、全世界から生徒が集まる。

いくらIS学園があらゆる国家機関に属さず、いかなる国家や組織

であろうと学園の関係者に対して一切の干渉が許されないという国際規約があろうとも、入ってくる生徒の中にはよからぬ思惑を胸に秘めている者もいるのだろう事は予想できる。

だからこそ、この学園には先輩のような存在が必要になるのか？

「それじゃあ、先輩は何の用でここに？」

「それは織斑一夏君を一目見ておきたかったからだよ。本当はもっと早くに会いに来たかったんだけど、つい最近まで忙しくてね」

「そうなんですか。じゃあ、俺達はこれで」

シュタツ！ と手を上げ、目の前の危険から退避すべく、撤退を開始する。

敵意がないのは分かったが、それでも直感で目の前の人物が危険だと感じるのだ。

「あらら、つれないわね」

後ろからそんな声が聞こえたが、俺はシャルロットの手をひいて、逃げたのであった。

【楯無side】

私から逃げるように去っていく織斑一夏とシャルロット・デュノアを眺めながら思う。――織斑一夏、彼は間違いなく強者の部類だ。

彼はなかなかに見所がありそうだ。弄ったら、どんな反応をしてくれるんだろう？

既に最初のやり取りで彼女の尻に敷かれてるような気もしたけど……。

シャルロット・デュノアの誰も知らないはずの事情を仄めかしてみたら、彼は彼女を守るように敵意を剥き出しにしてきた。

多くの女生徒が、そして各国の代表候補生が彼を慕っている、と報告を受けている。まだ軽く話した段階でしかないが、スケベである事は間違いない――私の胸を凝視していたし。

でも、それでも尚、芯が通っているというか、彼女を守るという意思が私にも伝わってきたし、彼女からすれば、あれ程頼もしい存在もない。

だからこそ、彼が慕われる理由は分かる気がする。

「織斑一夏……か」

もしかしたら、彼なら、”あの子”の心の闇も取り払ってくれるかもしれない。

ドイツ代表候補生ラウラ・ボーデヴィツヒを変えてしまった彼ならば――。

そして彼ならば、この私をも超える存在になるかもしれない――  
そう期待してしまう。

IS学園の生徒会長は最強でなければならない。その称号に負けないように、私は最強であり続けた。

更識家の当主として――

IS学園の生徒会長として――

学園唯一のロシア代表として――

私は寄せられる期待に応え続けた。

普段の私を知る者は飄々としてとらえどころのない人物として私を見る。

誰も本当の私を知らない。

私だって、まだ年相応の少女でいたい、たまには誰かに甘えてみたい、と思う事がある。でも、それは許されない。本音を漏らし

てしまえば、敵対する者に付け入る隙を与えてしまう。だから、私は常に気を張り続ける。いつもの態度はそれを周囲に悟らせないため。

そんな毎日だったある日、世界を騒然させたあのニュース――世界の常識を変えてしまったIS、これまでは女性しか扱えなかったものを、一人の男の子が動かしたというのだ。

私は直ぐに彼を調査した。

彼は、あの世界最強であるブリュンヒルデの称号を持つ織斑千冬のだ弟ではあったが、それ以外に特筆すべきものは見当たらなかった。

この世界の常識で、女性は早くからISに触れるが、男性はISに触れる事すらない。

それは織斑一夏も例外ではない。

彼もあのニュースになった日までISに触れた事が無かったその他大勢の男性と変わらなかったはずだ。

なのに、彼はIS学園に入学してから、先ずイギリス代表候補生であるセシリア・オルコットを負かし、クラス対抗戦では中国代表候補生の凰鈴音を圧倒し、乱入してきた敵をも退けてしまった。

先月もドイツ代表候補生であるラウラ・ボーデヴィツヒの暴走の鎮圧に一役買っている。

これだけで彼が異常だという事が分かる。



IS学園に入学するまで、ISに触れた事もなかった初心者が各国の代表候補生といい勝負をするどころか負かしてしまう。

ブリュンヒルデの称号を持つ織斑千冬の弟といっても、IS初心者が、エリートとも言える国の代表候補生と勝負して勝ってしまうなど、有り得ない事なのだ。

しかも彼は既に単一仕様能力<sup>ワンオフ・アビリティ</sup>までも発動させたばかりか、”進化”させた。

発動すら滅多にない事なのに、”進化”させるなんて聞いた事もない。

あの織斑千冬でさえ、単一仕様能力<sup>ワンオフ・アビリティ</sup>を進化させる、なんて非常識極まりない事はしていない。

ISには謎が多く、全容は明らかにされていない。特に心臓部であるコアの情報は自己進化の設定以外は一切開示されておらず、完全なブラックボックスとなっているのだ。

ISを開発した篠ノ之束博士は言っていた。——ISは進化する——だからといって誰でも出来る事ではないし、ましてや単一仕様能力<sup>ワンオフ・アビリティ</sup>までも進化させるなんて聞いた事もなかった。

これまでの常識を覆してしまった存在である織斑一夏。だからこそ、彼に対する私の興味は尽きない。

「織斑一夏……ね。彼なら私を——」

そんな期待を胸に私は彼が走り去っていった方角を見つめていた――。

\*◇\*◇\*◇\*◇\*◇\*◇\*

### 【一夏side】

「ねえ、一夏？ さっき、あの人の胸ばかり見てたでしょ？」

「な、な、な、何を言ってるんだ！ そ、そ、そんなわけないだろ」

「そうだもんね、一夏は。大きい胸の女性がいたら、直ぐに見惚れちゃうもんね」

対戦表が発表される待合室に向かう道中、隣のシャルロットはジト目という視線を俺に向けながらも、さっきの事で俺を責めてくる。

ただ、俺は確かに無類のおっぱい好きだが、大きいおっぱいじゃない

く小さいおっぱいも愛せる伝説のおっぱい戦士だ。　そこは否定させてもらおうっ！

「そんな事はないぞ！　小さいおっぱいでも俺は愛せるっ！　巨乳しか愛さないなんて、そんな二流がやる事、俺がするわけないだろ」

「はあゝ．．．．．」

俺の言葉にシャルロットは大きな溜息を吐く。　俺、何かおかしい事言った？

「．．．．．　なんで、こういう時は堂々とスケベな発言するくせに、何でいざとなったら逃げちゃうんだろ？　一夏のいくじなし．．．．．」

何かシャルロットがさらにジト目でブツブツ文句を言ってるようだ。　あまりに小さい声なので聞き取れなかったが．．．．．。

そんなやり取りを繰り返してたら、待合室に到着した。

中には既に出場する女生徒で溢れ返っているような状況だった。

見渡す限り、女・女・女．．．．．。

何も知らない男が今の俺を見たら、一夏もげろとか言われるかもし

れないが、女性しかない環境というのは本当に大変なのである。  
同性がいないから、気の休まる暇もないし。まさに針の筵とはこの事だ。

「見て見て。 織斑君とデュノア君よ」

「え!?! どこどこ?」

「きゃー、IS学園で男×男のカップリングが見れるなんてえ」

「織斑君はかっこいいし、デュノア君はかわいいしね♪」

ふむ。 後半、不遜な言葉が聞こえてきたが、敢えて気にしないで  
おこう。 気にしたら負けだと思うんだ。

後、一応言っておくが、俺は女にしか興味がない。

「一夏にデュノア、遅かったな」

「筈か。 もう対戦表は発表されたのか?」

先に来ていた箒にセシリアのペアが俺達を見付け、声を掛けてきた。  
どうやら、既に対戦表が発表されているみたいだ。

「箒とセシリアはどここのブロックなんだ？」

「わたくし達はCブロック三組目になりますわ」

今回の学年別トーナメントは全学年全てが参加する。よって、第一アリーナを三年が。第二アリーナを二年が。第三アリーナを一年が使用する事になっており、一年の部だけで総勢三十二組が出場する事になっている。そして、八組ずつブロック分けをし、トーナメントが行われる。

これだけの参加数なので当然、長丁場で行われる予定であり、月曜日がA・Bブロックの一回戦を一日かけて行い、火曜日にC・Dブロックの一回戦を行う。ちなみに一回戦の対戦時間制限は三十分となっている。

水曜日にA・Bブロックの二回戦、木曜日にC・Dブロックの二回戦、対戦時間制限は一時間で行われる。

金曜日に各ブロックの三回戦、こちらも対戦時間制限は一時間で行われる。

そして最終日の土曜日の午前にA・Bブロックの勝者との対戦、C・Dブロックの勝者との対戦、対戦時間制限は一時間で行われ、午後決勝戦、時間無制限で行われる。

「すると箒達は試合は明日からになるのか」

「そうだな、一夏達はどこのブロックになったんだ？」

「えっと……………」

トーナメント表を映しているモニターに視線を向け、自分達の名前を探す。

「一夏、あったよ。僕達、Aブロックの四組目みたい。最初の  
対戦相手は……………谷本さんと夜竹さんみたいだね」

谷本癒子と夜竹さゆか、この二人はのほほんさんと常に一緒にいる  
同じクラスメイトだ。何回か一緒に学食でご飯も食べた事はある  
し、そこそこ仲がいいクラスメイトだ。

谷本さんは髪を二つに結んでる、結構明るい子で親しみやすい印象  
を持てる女の子だ。

対して夜竹さんは黒髪を腰の辺りまで伸ばしていて、たまに自分で  
料理を作って弁当を用意したりしている家庭的な子だ。前に一口  
食べさせてもらった事もあるが、目の前にいるセシリアの壊滅的な  
料理とは月とすっぽんくらい差があったりする。

「どうかされましたか？　一夏様」

「イエ、ナンデモゴザイマセン」

セシリアはきょとんとしているが、セシリアが作る手料理を思い出すと背筋に冷や汗を掻いてしまう。いつまでたっても消えないあの思い出の味――あれは俺にとってトラウマになった。

「一夏、おはよう」

「一夏君、おはよー」

声を掛けられたので後ろを振り向くと、ラウラに清香さんがいた。

「おー、おはよ。　もう対戦表は確認したのか？」

「ああ、私達はDブロック二組目になる。　だから一夏と当たるために決勝戦になるな」

「あら、もう勝った気でいるのかしら？」

ラウラの発言に反応したのはCブロックのセシリアだ。この二組は順当に勝ち上がって行けば、土曜日に行われる四回戦で当たる事になるからだ。決勝戦で俺達と当たるにはこの四回戦で勝たなければならぬ。

「ふむ。前は後れを取ったが今度はそうはいかん。私と清香でお前達に勝ってみせる」

「今度もわたくしが勝ちますわ。 箒さんと一緒に」

この二人、前回の決闘でお互いを認め合っているが、お互いに負けず嫌いな気がある。お互いのペア同士、視線を絡ませ合い火花を飛ばし合ってる。

さて、他の気になるペアはどこにいるのかな？

トーナメント表を映すモニターに視線を向けると、のほほんさんと四組の代表候補生がBブロック四組目だった。

後、気になるペアと言ったら、鈴のところかな。

「一夏、おはよう。 あたし達も一夏と同じAブロックになったからよろしくね」



「鈴、おはよ。　そっか、鈴もAブロックか」

「ええ、あたし達はAブロックの七組目。　順当にお互い勝ち上がって行けば、金曜日の三回戦目で当たる事になるわね」

「そっか、負けないからな（俺の貞操を守る為にも！）」

「あたしこそ負けないわよ（一夏の初めてはあたしのもの！）」

「一夏のペアは僕だからね。　負けないよ（キスまで先に奪われたんだから、一夏の貞操は僕が絶対にもらうっ！）」

ふふふ、と笑顔で、三人が三人、火花を散らす。

ん？　三人？

「あれ？　鈴のペアの子はどこにいるんだ？」

「え？　さっきまで一緒にいたんだけど？」

鈴のパートナーは確か、同じルームメイトのティナ・ハミルトンさ

んだっけ？　その子が見当たらない。

鈴もキヨロキヨロと視線を彷徨わせ、自分のパートナーを探している。

「あー、見付けたっ！」と鈴がある一角を指さしたので視線を向けると、壁にもたれかかりながら薄い本をめくる金髪碧眼のナイスバディーな少女がいた。

ん？　薄い本？　本の表紙がチラツと見えたので見てると、二次元な美少年が二人、裸で抱き締めあっている表紙が視界に映る。

所謂、同人誌というやつか。

しかもBL…………。

で、俺達の前に鈴に首根っこを掴まれ、ずるずる引き摺られてくるティナ・ハミルトンさん。　何か色んな意味で残念だ…………。

「はじめまして。ティナ・ハミルトンです」

「はじめまして。俺は織斑一夏です。で、この子は俺のパートナーの——」

「シャルル・デュノアです。はじめまして」

軽い自己紹介を済ませる。

目の前にいる少女、ティナ・ハミルトンは長い金髪を腰まで伸ばしており、さらに出るところは出てるのに腰のくびれが半端ない。容姿も可愛いというよりも大人びた綺麗さを感じる。

外見だけ見れば、完璧超人だ。

しかもISスーツだからおっぱいの主張が半端ない………箒以上か………。

確か前に鈴に聞いた時、ルームメイトはアメリカ人といっていたが………ええーい、アメリカ人の女性は化け物かつ！

くっ！ 直視できない！ なんなんだ、この外見だけ完璧超人は！

手に持つのが、二次元な美少年が二人、裸で抱き締めあっている表紙の同人誌というのが本当に本当に残念極まりないが！

「……………一夏？」

シャルロットと鈴の俺を見る目がかなり冷たい気がする。

「ははは、何でもない、何でもないから」

取り合えず、対戦表は確認したし、トーナメントに集中しないと！  
俺の貞操が奪われかねないからな。

## **Episode 27: 欲望轟く学年別トーナメント開催（後書き）**

ちなみにこの作品にレビューが書き込まれました！

初めてのレビューに感激しました。

残念な作品だと自分でも思いますが、これからも宜しくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5519v/>

---

織斑一夏の無限の可能性

2011年10月21日08時05分発行